平成 17 年度

名古屋大学附属図書館外部評価報告書

自己点検評価報告書（平成 12 年度～16 年度）

平成 18 年 3 月

名古屋大学附属図書館

は　じ　め　に

名古屋大学附属図書館は、これまで平成４、７、12 年度に、３回の自己点検評価を実施してきました。平成 13 年度については、平成 12 年度に作成しました自己点検評価報告書を基礎資料にして外部評価も実施し、その結果を公表しています。今回、平成 12 年度から平成 16 年度を対象として、自己点検評価と、それを基礎資料として外部評価を実施し、この冊子にまとめました。

国立大学は、平成 16 年４月に国立大学法人として法人格を持つようになり、６年を一期とする中期目標・中期計画を策定し、かつ、年度計画も毎年たて、その報告も行うようになっています。その報告は、国立大学法人評価委員会によって評価されています。大学評価・学位授与機構による部門別の外部評価と７年に一度の大学全体の認証評価も受けることになっています。毎年の年度計画に対する報告は、非常に多くの項目ごとの自己点検評価ともなっています。このような状況で、今回の自己点検評価は、附属図書館独自の従来の自己点検評価と国立大学法人評価委員会などにも対応する必要がありました。そのため、今回の自己点検評価は、従来の自己点検評価と法人化後の形式の定められた自己点検評価の両者を併せた性格を持っています。なお、附属図書館は既に中期目標・中期計画に従って業務を行っているため、平成 17 年度の業務の一部についても、この報告書は含んでいます。

また、毎年の年度報告ではできない、まとまった自己点検評価とするため、新しい大学図書館の評価指標を使って、学内構成員を対象としたアンケートを行い、利用者が考えている理想と図書館の現状との差も明らかにして、今後の業務に活かせるようにしています。

今回の外部評価は、形式の定まった国立大学法人評価委員会や大学評価・学位授与機構の評価とは違い、図書館関係者だけでなく、一般市民の方にも入っていただき、附属図書館の教育・研究支援だけでなく、社会貢献事業についても自由にご意見をいただきました。附属図書館の業務は、既に中期目標・中期計画に従って行っており、いただいた意見を最大限今後の業務に活かして行きたいと考えています。また、口頭で中期目標・中期計画の内容を越える事項についても意見をいただいていますが、これについては、次期の中期目標・中期計画の中で活かされるようにしたいと思っています。

自己点検評価報告書の作成に努力いただいた商議員と図書館職員及びアンケートにご協力いただいた大学構成員の方々に厚くお礼申し上げます。また、外部評価委員の方々には、大部の自己点検評価報告書をお読みいただくとともに、図書館においでいただき、実地視察とヒアリングを行っていただき、貴重な外部評価報告書を作成いただきましたことに、厚くお礼申し上げます。

平成 18 年３月

名古屋大学附属図書館長
教授　伊　藤　義　人

平成17年度名古屋大学附属図書館外部評価報告書・自己点検評価報告書

目　　次

はじめに　i
目次　iii
第1編　平成17年度名古屋大学附属図書館外部評価報告書
1　名古屋大学附属図書館外部評価委員会報告　1
2　平成17年度名古屋大学附属図書館外部評価委員会委員　5
3　平成17年度名古屋大学附属図書館外部評価委員会　6
（1）外部評価委員会　6
（2）名古屋大学附属図書館の現状と課題　9
（3）平成17年度名古屋大学附属図書館外部評価実施要領　16

第2編　自己点検評価報告書（平成12年度～16年度）
はじめに
目次
1　附属図書館自己点検評価報告　1
（1）評価点　1
（2）評価についてのコメントの概要　1
（3）自己評価票のコメント　3
（4）自己評価票の形式　9
2　附属図書館自己評価実施委員会委員　11
（1）平成17年度附属図書館自己評価実施委員会　11
（2）附属図書館自己点検評価WG　11
3　附属図書館自己点検･評価の活動記録　12
（1）附属図書館自己評価実施委員会　12
（2）附属図書館自己点検評価WG　12

附属図書館自己点検評価資料
第1部　附属図書館の活動の概況
Ⅰ　附属図書館の概況　13
1　特徴　13
2　目標・計画　14
3　管理運営　15
4　事務組織・職員　17

５　施設・設備 …… 18
６　予算・経費 …… 19
７　情報資源・資料 …… 19
８　サービス …… 20
９　地域連携・社会貢献 …… 21
10　自己点検評価・外部評価 …… 23
Ⅱ　電子図書館的機能の概況 …… 24
１　目録情報・資料の電子化 …… 24
２　学術デジタル・コンテンツの整備 …… 25
Ⅲ　研究開発室の概況 …… 27
１　管理運営 …… 27
２　研究開発 …… 29
３　教育・プロジェクト・社会貢献活動 …… 33
４　研究成果 …… 35
参考資料　研究開発室の軌跡　2002－04＋ …… 55
Ⅳ　改善の歩み（平成 12～16 年度） …… 60

第２部　基礎データ・評価指標
Ⅰ　基礎データ・定量的評価指標 …… 63
１　資源（蔵書数、収集活動） …… 63
1.1　蔵書数 …… 63
1.2　収集活動 …… 64
２　管理運営（職員、施設・設備、開館状況） …… 67
2.1　職員 …… 67
2.2　施設・設備 …… 71
2.3　開館状況 …… 72
３　サービス（図書館アクセス、貸出、参考調査、ILL） …… 74
3.1　図書館アクセス …… 74
3.2　貸出 …… 78
3.3　参考調査 …… 80
3.4　ILL …… 81
４　経費（全般、図書館運営費、図書館資料費） …… 84
4.1　全般 …… 84
4.2　図書館運営費 …… 85
4.3　図書館資料費 …… 88
５　図書館活動（教育支援活動、企画展示活動、広報活動） …… 93
5.1　教育支援活動 …… 93
5.2　企画展示活動 …… 93

5.3　広報活動 …… 93
Ⅱ　電子図書館サービス関係評価指標 …… 94
１　資源（ローカルなデジタル・コンテンツ、電子ジャーナル、電子レファレンス） …… 94
1.1　ローカルなデジタル・コンテンツ …… 94
1.2　電子ジャーナル …… 94
1.3　電子レファレンス …… 96
２　管理運営（図書館コンピュータ端末） …… 97
2.1　図書館コンピュータ端末 …… 97
３　サービス（各種サービス利用度） …… 100
3.1　各種サービス利用度 …… 100
４　経費（資料購入費、電子ジャーナル等経費） …… 109
4.1　資料購入費 …… 109
4.2　電子ジャーナル等経費 …… 110

第３部　附属図書館利用者アンケート
１　附属図書館利用者アンケートの概要 …… 113
２　基本調査 …… 115
３　図書館の品質調査 …… 116
3.1　全体 …… 116
3.2　施設・設備について …… 121
3.3　資料・情報について …… 124
3.4　職員・サービスについて …… 127
４　利用者アンケート（日本語版ホームページ） …… 130

第４部　資料編
１　図書館組織機構図 …… 137
２　附属図書館の諸委員会一覧 …… 138
３　附属図書館の中期目標・中期計画 …… 139
４　名古屋大学附属図書館関連重要文書一覧 …… 145

平成 17 年度名古屋大学附属図書館外部評価報告書

平成 18 年 3 月

名古屋大学附属図書館

１．名古屋大学附属図書館外部評価委員会報告

平成 18 年 2 月 17 日

（1）概評

名古屋大学は、平成 17 年度から国の大学制度改革に伴い、他の国立大学とともに国立大学法人名古屋大学となり、附属図書館も組織・機構及び管理運営の全てに亘って新体制に移行した。この法人化に伴い、現在、他大学同様、図書館経営上の様ざまな課題を抱えているが、とりわけ最大の課題は、全学の新しい財務体制の中での学内の教育・研究活動を支える図書館資料購入費を中心とする図書館運営財源の確保である。名古屋大学附属図書館では、この課題の解決へ向けての取組みをはじめとして、図書館の管理運営全般に亘って、附属図書館長をはじめ全館の教職員の総力を結集した取組みによって、以下の個別評価で述べるような、他大学図書館の模範ともなる様ざまな改革を実践していることは、高く評価できるものである。

（2）個別評価

1）目標・計画

① 国立大学法人化に伴って、その新制度に相応しい中・長期目標となるミッションとヴィジョンを明確な形で示されたことは誠に望ましいことである。とりわけ、電子媒体と紙媒体両方の資料、情報の提供を行うという、「ハイブリッド図書館」を構築するという目標は、時代の要請に即応した妥当なものであると評価される。

② また、名古屋大学だけに止まらない東海地区全体へのサービス提供等に見られる地域との連携・協力や、国立大学図書館協会等、全国的な協会組織や委員会等における学術情報基盤整備に関わる中心的な役割の遂行は、特筆に値する。

2）機構・組織

① 附属図書館の中に、図書館、学術情報、教育支援等に関わる研究開発を行うための組織として研究開発室という独自の組織が存在することは高く評価される。欧米においては図書館が研究開発機能を持つことは当然とされ、我が国においても各種委員会等の答申で「研究開発機能」の重視を唱われたことはあるが、大学図書館における組織として位置づけられ、専任の教員を配置し、実際に活動している例は極めて少数に止まっている。

また、研究開発室が主導している伊藤圭介文庫や高木家文書のデジタル化は、単純な貴重書のデジタル化だけでなく、それら資料を使った研究成果が期待できるという意味でも興味深い。そこでは、「図書館機能の高度化」と「学術情報資源の研究開発」が車の両輪のように追求されている。この同時性が大切である。昨今、他機関においては、「業務の電子化」と称しながら、面接サービスを排除したり、機能強化を内容抜きに自己目的化する傾向も目立つが、ぜひ今後とも、この車の両輪がバランスを保って進展していくことを期待したい。

② 情報連携基盤センターを中心とする学内情報化への貢献に関して、あくまで図書館としての役割を超えない範囲で関わっていきたい（たとえば e-learning を中心的に行うことはしな

い）という立場を堅持していることは、現状としては当然であろう。今後は、授業で使う教科書の電子図書としての出版など、図書館ならではの発想に基づく、より高度なサービス展開にも期待したい。

③　学術機関リポジトリの構築・運営に関して、差し当たり NII から受託した CSI 事業の範囲で展開するとのことであるが、本格的に展開しようとすれば学内での調整等さまざまな問題が出てくると考えられる。名古屋大学附属図書館が、学術機関リポジトリを、今後全体の目標や計画の中でどのように位置づけていくのかは、多くの大学図書館にとっても参考になるものであろう。

３）経営管理、予算

①　図書館経営にとって基幹的な経費である「図書充実費」及び「図書館運営費」は、法人化によって、国から大学に対して配分される「運営費交付金」の学内配分によって賄われることになったが、所要額を確保するためには、「総長裁量経費」などの臨時的・補足的な経費にも依存せざるを得ない現状である。

　それにも拘らず、附属図書館長の強力なリーダーシップの下で、全学の予算が逼迫しているなかから、積極的なサービス展開を実施するための経費を確保していることは評価に値するが、学術図書館における研究支援の根幹となる電子ジャーナルの予算が外部資金に基づく間接経費に依存していることは、組織の予算としてはその安定性の観点から大いに問題である。

②　予算の枠組みは附属図書館だけで変えられるものではないが、図書館のような永続する組織にとって予算の安定性を確保することは不可欠の条件である。それ故、現在の附属図書館長の個人的なリーダーシップに依存しているだけでは、将来に禍根を残すことになりかねず、是非とも全学的な重要課題として、その改善策を策定されることが望まれる。

４）施設・設備

①　附属図書館の建物は古いものではあるが、内部の施設・設備の整備は計画的に進められており、館内照明の改善やトイレの改修等、利用者の目線に立ったメリハリのある改善がなされている。

②　私立大学に比べると、書庫や、学生用・教員用両方のキャレルともまだ余裕があるように見受けられる。なお、目録カードが設置されているスペースに関しては、目録の電子化が完了するまで動かせないのかもしれないが、そろそろ用途変更を考慮してもいいのではないかと思われる。

③　名古屋大学の場合、他の部局において十分な PC 環境が提供されているから現状で十分なのかもしれないが、学生の勉学の中心の場として図書館を位置づけるなら、現在４階にある PC サテライトラボの拡充が図られてもいいのではないか。また、セキュリティの問題はあるが、閲覧室に設置されている利用者用端末も基本的には OPAC 専用ではなく、インターネットへの接続、各種ソフトウェアの利用など、汎用的に使える方が望ましいのではないかと思われる。

④　視聴覚資料の利用のための施設・設備は、例えば DVD などの情報資源とそのコンテンツを

充実するなど、今後何らかの改善・充実が必要と思われる。

５）資料、サービス

① 研究支援としての電子ジャーナルの積極的な整備は、全国的に見てもトップクラスであり、高く評価される。冊子体での購読外国雑誌数が減少していく中で、今後、過去のデータも含めて永続的なアーカイブ機能に関して、中長期的な計画の策定を期待したい。

② 視聴覚資料は教育用資料としても重要であると考えるが、現在はあまり重視されていないように見える。他の部局が提供しているのかもしれないが、附属図書館としての方針を明確にすることが必要である。

③ パスファインダーは、新たなレファレンスサービスの一つとして興味深い試みであり、教員と図書館員の連携という意味でも意義があると考える。ただ、多くの分野、多数のトピックに関して展開していくためには、今後はよりシステマティックな、またデータの更新・維持に関しては自動化したシステムを構築していかれることを期待したい。

④ 図書館ガイダンスを図書館員が直接新入生等に行うのではなく、大学院生を指導して、その院生が新入生等を指導するというシステムはユニークな試みである。今後はパスファインダーだけでなく、総合的なWebチュートリアルの展開などにも期待したい。

⑤ 教員が蔵書整備アドバイザーとして、教育用蔵書に関してチェックを行うというのも、本来の蔵書管理として大変意義あることと考える。
また、蔵書目録情報の電子化（遡及入力）は図書館の資料提供の根幹を支えるものであり、１日も早い実現が望まれる。

６）社会貢献、連携

① 大学図書館における地域貢献や社会貢献は、附属図書館のミッションの中に明記されており、大学のミッション「文化の継承と社会への貢献」に連なる重要な業務であり、各種の事業に積極的に取組んでいることは評価できる。
その中で、従来からの研究用図書の市民への貸出サービスの実施につづいて、新年からは試行とはいえ、約20万冊の学習用図書の一般市民への貸出にも踏み切られたことは高く評価したい。今後は、更なる情報内容の充実と整備された情報コンテンツの利用促進を一般の市民にも理解を得て、社会参加型の地域貢献を促進していくとともに、他大学図書館や公立図書館との情報交換を密にし、各図書館資源の効率かつ効果的な運用をも目指してもらいたい。

② その際、特に配慮すべきことは、いわゆる骨董的価値のない近世農漁村史料の破棄・散逸が急速に進行している社会情勢の中にあって、これらの近世文書の保管・処分に苦慮している旧家から、既に大量の近世文書を収蔵している、蓬左文庫、鶴舞中央図書館、愛知県図書館などと連携し、当該史料を譲り受けるなどして、事実上の“近世文書館”を構成するなど、地域文化の継承策の一翼を担うことであり、そのような社会貢献にも積極的に取り組むことを期待したい。

③ また、「附属図書館友の会」というのは、大学図書館としてはユニークな試みであり、今後の多様な展開を期待したい。

７）自己点検評価

① 定期的な自己点検がなされているのは重要なことである。学内の委員会の報告書だけでなく、2002 年に国立大学図書館協議会のプロジェクトの一つとして、館長自ら主査としてとりまとめた「大学図書館における評価指標報告書（Version 0)」を使って業務点検を行っていることや、利用者アンケート調査を LibQUAL+の手法で行っている点は高く評価したい。今後も定期的に継続して行っていくことを望みたい。ただ、部局図書室に関して、同じ項目での調査が必要であるかどうかは再考の余地があるように思われる。

② 評価指標そのものについても、「職員規模の妥当性を示す指標」や「図書館財政規模の適正さを示す指標」などについては、学内各館の数値を表示しているだけであるが、例え他大学との比較によるベンチマーキングを行ったとしても、これらの数値から「妥当性」や「適正さ」を判断することは困難であろうと思われる。その意味で、今後は「Version ０」の考え方を超えた評価も追求する必要があるのではないかと考える。

③ また、点検・評価は専門知識のない学内外の利用者や関係者にも理解してもらう目的もあることを考慮するならば、報告書の作成に当たっては、図書館内部の職員だけにしか通用しない専門用語はできるだけ避け、代替語がない場合は注釈を付けるなどの工夫をすることが肝心である。いずれにしても、日本の多くの大学図書館では業務分析や点検・評価が実施されていない現状から考えると、このような分析・評価が積極的に行われることに意義があり、今後その成果が更なる業務改善につながることを期待したい。

２．平成 17 年度名古屋大学附属図書館外部評価委員会委員

（五十音順）

委員長	雨　森　弘　行	（名古屋女子大学常務理事・総務部長）
	石　黒　廣　昭	（一般市民）
	亀　岡　孝　治	（国立大学法人三重大学理事（附属図書館長））
	倉　田　敬　子	（慶應義塾大学文学部教授）
	野　村　英　一	（名古屋市鶴舞中央図書館長）
	村　井　喜　一	（一般市民）

３．平成 17 年度名古屋大学附属図書館外部評価委員会

（１）外部評価委員会

１）日　時 ：平成 17 年 11 月 29 日（火）11:00～16:30

２）場　所 ：名古屋大学附属図書館 5 階多目的室

３）出席者 ：（外部評価委員）

雨　森　弘　行　（委員長）
石　黒　廣　昭
亀　岡　孝　治
倉　田　敬　子
野　村　英　一
村　井　喜　一

（名古屋大学附属図書館）

伊　藤　義　人　　附属図書館長
早　瀬　　均　　附属図書館事務部長
牧　村　正　史　　附属図書館情報管理課長
臼　井　克　巳　　附属図書館情報サービス課長
郡　司　　久　　附属図書館情報システム課長
逸　村　　裕　　附属図書館研究開発室助教授
西　尾　哲　也　　附属図書館情報管理課庶務掛長

４）日　程 ：

11:00～11:20　・開会
・出席者紹介
・委員長選出
・日程及び資料確認
11:20～12:20　・名古屋大学附属図書館の現状と課題
12:20～13:10　・昼食　（小会議室）
13:10～13:30　・外部評価委員ヒアリング打合せ
13:30～14:45　・外部評価委員ヒアリング
14:45～15:00　・休憩
15:00～15:40　・中央図書館実地視察
15:40～16:00　・電子情報サービス・デモンストレーション
16:00～16:20　・補足的な質疑応答、及び今後の予定の確認等
16:20～16:30　・外部評価委員打合せ
16:30　・閉会

５）配付資料

① 名古屋大学附属図書館外部評価委員会出席者名簿

② 平成１７年度名古屋大学附属図書館外部評価実施要領

③ 平成１７年度名古屋大学附属図書館外部評価委員会日程

④ 名古屋大学附属図書館の現状と課題

【名古屋大学の概要】

⑤ 名古屋大学プロフィール 2005（資料編）

【名古屋大学附属図書館及び研究開発室の概要】

⑥ 名古屋大学附属図書館概要 2005-2006

⑦ 名古屋大学附属図書館［概要］

⑧ 名古屋大学附属図書館研究開発室［概要］

⑨ 中央図書館利用案内 2005

⑩ 名古屋大学附属図書館ホームページ（ハードコピー）

【名古屋大学附属図書館及び研究開発室の活動状況】

⑪ 平成１６年度　附属図書館年度計画

⑫ 平成１７年度　附属図書館年度計画

⑬ 平成１６事業年度に係る業務の実績に関する報告書

⑭ 名古屋大学附属図書館報　館燈 No.155

⑮ 名古屋大学附属図書館報　館燈 No.156

⑯ 名古屋大学附属図書館報　館燈 No.157

⑰ 名古屋大学附属図書館研究開発室　LIBST Newsletter No.6

⑱ 名古屋大学附属図書館研究開発室年次報告　第３号（2004 年版）

⑲ 名古屋大学附属図書館研究年報　第３号（2004 年版）

⑳ 名古屋大学附属図書館 2005 年春季特別展「地域環境史を考える～所蔵資料とエコ（環境共生）コレクション・データベースでみる自然・災害・社会～」

㉑ 名古屋大学附属図書館 2005 年企画展「説話（はなし）の書物～小林文庫本を中心に～」

㉒ 名古屋大学附属図書館 2005 年秋季特別展「知の万華鏡～書物からみた 18 世紀の西洋と東洋～」図録ガイド

㉓ IADLC（The International Advanced Digital Library Conference；名古屋大学電子図書館国際会議）

㉔ IADLC2005：Proceedings of The International Advanced Digital Library Conference in Nagoya

㉕ IADLC2005（Supplement）：Proceedings of The International Advanced Digital Library Conference in Nagoya

【自己点検評価報告書】

㉖ 自己点検評価報告書（平成 12 年度～16 年度）

外部評価委員による
ヒアリング

伊藤館長の説明

中央図書館実地視察

中央図書館実地視察

（2）名古屋大学附属図書館の現状と課題

名古屋大学附属図書館の現状と課題

外部評価委員会資料
平成17年11月29日

名古屋大学附属図書館長
伊藤　義人

報告の予定

11:20～12:20

0. 大学図書館をめぐる最近の状況
1. 名古屋大学附属図書館の現状
2. 今後の課題
3. 質疑応答（約20分）

新しい時代の背景 大学図書館の現状の環境 その1

情報化社会（図書館の歴史的転換点）
デジタル化とインターネット
– 「インターネット爆発」以降の高度情報ネットワーク社会（媒体の均質性、ボーダーレス、自律的ネットワーク、コスト不明瞭などを特徴とする）
➔ 図書館機能の変革要求
■デジタル情報と紙媒体情報の有機的結合活用
■電子図書館機能と従来型図書館機能の融合

新しい時代の背景 大学図書館の現状の環境 その2

大学の環境の劇的変化（パラダイム転換）
20世紀型社会から21世紀型社会
価値観：経済第1主義➔環境・人間中心

例えば
融合型学問領域（人文社会系と自然科学の融合）
生涯学習，NPO．NGOなどの市民の要求の多様化

新しい時代の背景 大学図書館の現状の環境 その3

日本における行財政改革

■国立大学の法人化（2004年4月）
競争と連携　　何とか対処，戦略はまだ
■定員削減（法人化後の自立的なもの含む）
■予算システムの変更（基盤校費，競争的資金）
■図書館予算の減少
私立大学図書館，公共図書館も同様

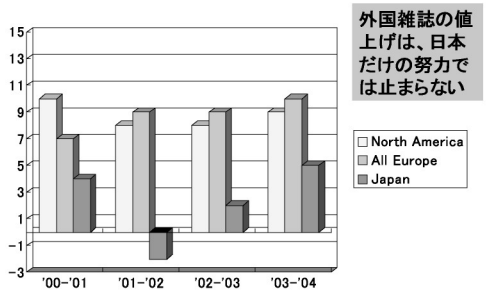
大学の知を一定方向に効果的にという外圧
➔受け身で対応せず，自発性，多様性の尊重

新しい時代の背景 大学図書館の現状の環境 その4

紙媒体とデジタル媒体資料収集の困難性

学術雑誌の危機と電子ジャーナル
- 学術雑誌の危機
  – 雑誌数の激増、価格の高騰
  – 図書館購入予算の低迷
  – 価格の高騰→購読中止→価格の高騰の悪循環
  – 雑誌価格高騰の諸要因
  商業学術出版社の寡占体制
  ➔毎年平均9%の値上げ

外国雑誌値上がり率の推移



大学改革の方向と図書館の対応

学生（ユーザー）の視点 ➔ 学習空間・学習基盤整備
滞在時間の長期化（開館時間）

個性ある大学 ➔ 個性ある大学を支える図書館
新しい融合領域，新しい研究手法の支援
個性ある図書館

部局の集合から大学中心 ➔ 図書館は大学の顔

国際化，社会に開かれた ➔ 図書館の連携，社会貢献

大学の経営 ➔ 図書館の経営，業務改革，責任体制

IT武装化 ➔ 図書館は大学の情報戦略の中心に

報告の予定

11:20～12:20

0．大学図書館をめぐる最近の状況
1．名古屋大学附属図書館の現状
2．今後の課題
3．質疑応答（約20分）

名古屋大学のミッションとヴィジョン

ミッション：

1．人文・社会・自然の学問の壁を越えた研究のコミュニティを創出し、世界屈指の知的成果を産み出す。
2．基幹的総合大学にふさわしい学術と文化の薫り高きキャンパスを実現し、豊かな人間性を持つ、勇気ある知識人の育成に努める。
3．先端的および多面的な学術研究活動と、国内外で指導的役割を果たしうる人材の養成を通じて、地域および産業の発展に貢献する。
4．国際的な学術連携および留学生教育の一層の充実を図り、世界とりわけアジア諸国との交流に貢献する。

ヴィジョン：

名古屋大学は、20年を長期目標の期間として、研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知的成果の創成と勇気ある知識人を育成することを目指す。

名古屋大学附属図書館のミッションとヴィジョン

ミッション：

1．附属図書館は，「名古屋大学学術憲章」に基づく名古屋大学の教育研究活動が必要とする学術情報の利用提供を担う中心機関として機能し，その活動の支援を行う。
2．急速に進む学術情報の電子化に対応する学術情報基盤としてハイブリッド図書館化を推進すると共に，名古屋大学の教育研究成果の発信機関として機能し，教育研究活動の支援を行う。
3．高度に情報化された21世紀社会と緊密な交流を持ち，文化の継承と社会への貢献の役割を果たすため，広く自由に開かれた学術情報の利用提供を行う。
4．学術情報の国際的な受信・発信を推進すると共に，その利用提供の中心的機関として機能し，広く世界の学術活動に奉仕する

ヴィジョン：附属図書館は，名古屋大学の今後20年を見渡す教育研究の長期ヴィジョンを実現するため，学術情報の利用提供と発信を担う強力な支援機関としての機能を果たすことを目指す。

附属図書館の組織と機能

附属図書館

- 中央図書館：全学の学習図書館機能＋研究図書館機能＋保存図書館機能＋サービス・業務の総合的図書館機能蔵書数約100万冊、閲覧座席数1,123席
- 医学部分館：医学系研究科、医学部医学科、保健学科、病院を主な対象とする図書館（鶴舞・大幸キャンパス）蔵書数約20万冊
- 部局図書室：学部・研究科、研究所など各部局ごとにある約30の図書室約160万冊の蔵書を有し、専門図書館として研究者、大学院生、学部学生にサービス

平成17年度予算概要　その1

1．共通経費　　＊新規
　図書充実費及び図書館運営費
2．間接経費
　①Web of Science継続経費
　②遡及入力経費
　③電子ジャーナル継続導入経費
＊④電子ジャーナル導入に係る購読規模維持のための補填経費
＊⑤電子ジャーナル・バックファイル導入経費
＊⑥研究用大型資料の収集事業

平成17年度予算概要　その2

3．総長裁量経費　　＊は新規
　①大学所蔵学術資産の保存対策プロジェクト
＊②名古屋大学電子図書館国際会議(IADLC)
＊③名古屋大学学術機関リポジトリサーバ及び登録経費
　④電子ブック（全学問分野）
　⑤地域貢献特別支援経費（木曽三川流域の歴史情報資源の高度活用）
4．その他の外部資金
　①科学研究費補助金（エココレクションデータベース）
　②赤﨑記念研究奨励事業
　③国立情報学研究所の最先端学術情報基盤（CSI)構築推進委託事業費
　④電子図書館国際会議（栢森財団等）
　⑤留学生支援関係図書（栄ライオンズクラブ）
　⑥就職支援関係図書（名古屋大学全学同窓会）

中期目標・中期計画・年度計画

平成１６年度附属図書館年度計画の実施概要

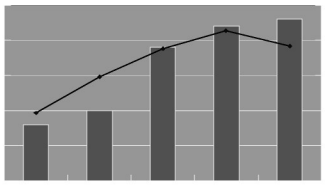
中期計画の区分	項目数	重点的計画
Ⅰ　大学の教育研究等の質の向上	49	①学習用図書の整備（予算の確保、蔵書整備アドバイザー制度の充実、推薦図書制度） ②電子図書館の整備（電子ジャーナル、電子ブック、データベース、電子目録、PC利用環境の整備） ③図書館情報リテラシー指導の実施 ④地域連携、地域貢献事業の充実（市民開放、展示会・講演会、地域資料の調査研究、電子化公開）
Ⅱ　業務運営の改善及び効率化	15	①図書館電算機システムの改善 （部局図書室の貸出電算化、大学ポータルとの連携、財務会計システムとの連携）
Ⅲ　財務内容の改善	7	①学習用図書予算の確保 ②間接経費の確保（電子ジャーナル、データベース、目録遡及入力） ③外部資金の確保（エココレクション、留学生用資料整備、電子図書館国際会議）
Ⅳ　自己点検・評価及び情報提供	3	①自己点検評価（評価指標の検討、基礎データの収集） ②図書館業務分析の実施
Ⅴ　その他の業務に関する重要事項	9	①図書館施設整備 （部局図書室の改修、中央図書館利用環境整備）

附属図書館における教育研究支援等の活動状況

Ⅰ　教育支援
Ⅱ　研究支援・学術情報基盤の整備
Ⅲ　社会貢献・社会連携
Ⅳ　業務運営・財務内容の改善
Ⅴ　研究開発室

Ⅰ　教育支援　その1

1）図書館アクセスの拡大
○　開館日数（棒：左軸）、開館時間（線：右軸）の増加



※　平成16年度は、台風による臨時休館が数回あった。

Ⅰ　教育支援　その2

2）学習用図書の整備
○　シラバス掲載図書の全点整備
○　蔵書整備アドバイザー（全学の教員）による学習用図書の点検・整備

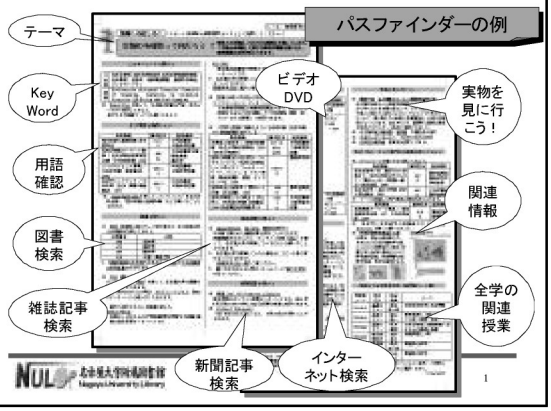
蔵書整備アドバイザー制度による更新
図書の貸出回転率は全体平均の6倍

分類(NDC)	対象図書数(A)	貸出回数(B)	回転率(＝B/A) ( )内は学習用全体
総　記　000	15	56	3.7 (0.6)
哲　学　100	64	139	2.2 (0.5)
歴　史　200	38	33	0.9 (0.4)
社会科学　300	134	316	2.4 (0.5)
自然科学　400	1,351	5,958	4.4 (1.0)
工　学　500	314	1,010	3.2 (0.9)
産　業　600	17	38	2.2 (0.4)
芸　術　700	17	11	0.6 (0.4)
語　学　800	53	268	5.1 (1.0)
文　学　900	89	180	2.0 (0.3)
全分野	2,092	8,009	**3.8 (0.6)**

Ⅰ　教育支援　　その3

3）情報リテラシー教育支援

○ 図書館ガイダンス ⇒ 全学60回以上
○ TA（約150名）へのガイダンス
○ パスファインダーの構築
　各テーマに関係する情報を調べたい時や、レポート・論文を書くために必要な情報収集の役にたつ「道しるべ」
　⇒ 26テーマ提供中、4テーマ準備中
　⇒ 文科省・学術審議会WGにも報告

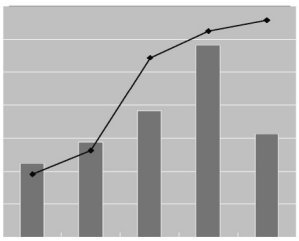


Ⅰ　教育支援　　その4

4）利用環境整備　快適空間の創成（5年越しの懸案事項）

1. 照明器具の更新　300ルクスから800ルクス
　B1：12台　1F：6台　2F：207台　3F：209台　4F：105台
2. 利用窓口周辺の2階の整備
　カーペットの更新，階段床シート更新，滑り止め更新
　壁紙の更新
3. 人感センサーによる自動点灯・消灯（1F，4F）
4. 洋式トイレの洗浄式化、2階と3階トイレの全面改装
5. カーペット更新，天井塗装など（世界の窓，ブラウジングルーム）

学内で最も快適な空間の提供（学習の場）
➔ 学生厚生経費の要求など



※ 平成16年度、学年暦の変更により9月入館者が特段に減少したが、貸出冊数は減少しなかった

Ⅱ　研究支援・学術情報基盤の整備　　その1

1）学術デジタルコンテンツの整備

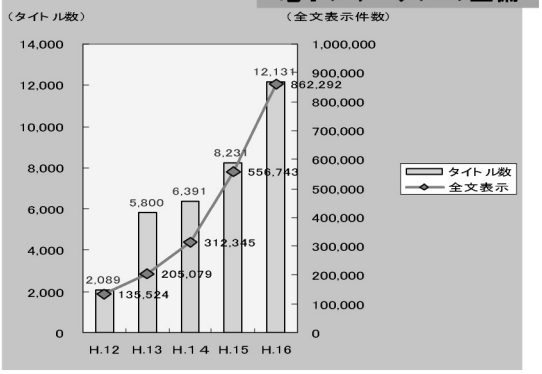
○国立大学図書館協会・電子ジャーナルタスクフォースの活動
○電子ジャーナルの整備
　⇒ 12,000タイトルの維持
　⇒ バックファイルの整備
○電子ブックの導入・整備
　⇒ 3,700タイトル(H16)→4,000(H17)

大学の特記事項として評価

2）資料の電子化・データベース化

○科研費(H16,17合計3,700万円)によるエココレクション・データベース構築
　⇒伊藤圭介文庫・高木家文書DB化

電子ジャーナルの整備



電子ブック（e-Book, Online Book）

最近の外国の動き

netLibrary, Safari Books,XanEdu, Jones e-global library,Ebrary

10億ドル市場：またしても日本は遅れを？
料金徴収，著作権など問題も多い

日本の大学図書館の役割の可能性

教科書（著者，利用者，サービス：学内，大学間連携）
WebCT, e-Learningとの連携

大学出版会との連携

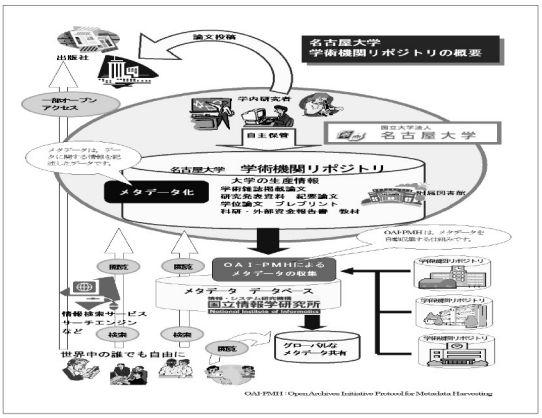
東大も導入（4000タイトル，400万円） 本と同じ扱い
名古屋大学（3800タイトル）➔平成17年度も増強．外部からの利用

Ⅱ 研究支援・学術情報基盤の整備 その2

3）学術機関リポジトリ

大学の情報発信

○ 大学の知名度の向上、
あるいは社会に対する説明責任の履行、
また大学の研究成果の広範な流通のため、
研究者の研究成果等と大学として蓄積・保存し、社会にむけて情報発信する学術機関リポジトリを推進

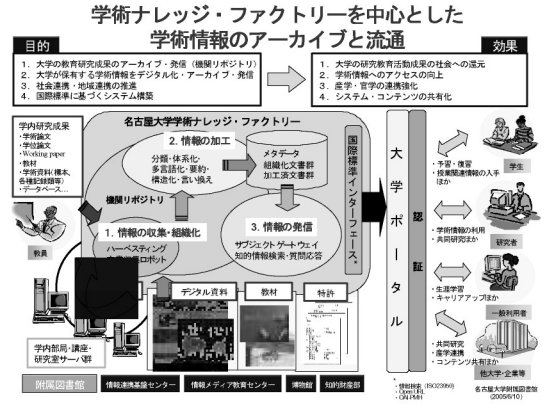


Ⅱ 研究支援・学術情報基盤の整備 その3

4）学術ナレッジ・ファクトリー計画の推進

○ 情報連携基盤センター、情報メディア教育センター等と協力した学術ナレッジ・ファクトリー計画の推進

⇒ 国立情報学研究所の最先端学術情報基盤（CSI）構築推進委託事業
- H17～19年度の3年計画
- H17年度21,123千円



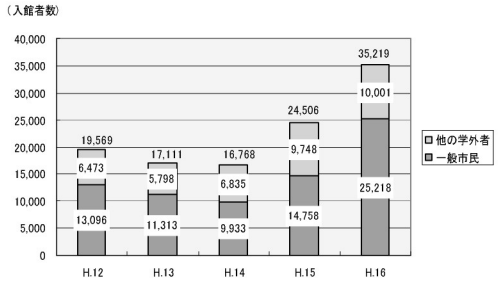
Ⅲ　社会貢献・社会連携　その1

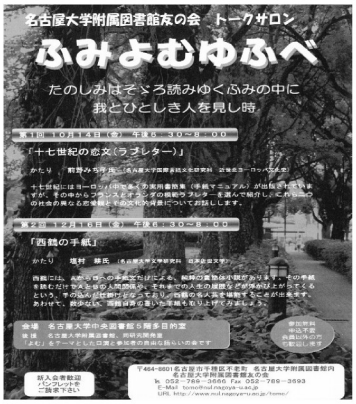
1）図書館の開放
　一般市民の利用大幅増
2）資料展示会、講演会の実施（年2回開催）
3）図書館友の会(H16～)
　○附属図書館と市民の交流
　⇒　活動の活性化（トークサロン）

Ⅲ　社会貢献・社会連携　その2

4）図書館連携
・東海地区図書館協議会(H16～)　会長館
○東海地区4県の大学図書館と公共図書館の協力組織
⇒　相互協力67館参加
・東海地区大学図書館協議会　会長館
○東海地区の国公私立大学の図書館82館の協力組織
・国立大学図書館協会
副会長、理事館（総務、学術情報担当）
・国公私立大学図書館協力委員会　委員館
ほか

学外者・一般市民の入館者の伸び





友の会トークサロン

ふみよむゆふべ

Ⅳ　業務運営・財務内容の改善　その1

1）大学図書館業務分析
　○民間シンクタンクとの共同研究
　　⇒　図書館業務運営の改善検討
2）事務改善・合理化
　○平成17年1月実施　　3項目
　○平成17年4月実施　　7項目
　○平成18年4月実施予定　15項目
3）図書館職員の組織一元化の検討

Ⅳ　業務運営・財務内容の改善　その2

4）点検・評価
　⇒ 自己点検評価の実施（H17．10）
　⇒ 学識経験者と一般市民参加による外部評価の実施（H17．12）
5）外部資金の導入
　○エココレクションDB構築のための科研費補助金の継続申請
　○委任経理金
　　⇒　名古屋栄ライオンズクラブ、他5件
　○図書館活動への学外支援の呼びかけ

Ⅴ　研究開発室

○　2名の専任教員と9名の兼任教員で構成

○　ハイブリッド・ライブラリー機能の強化及び図書館サービスの高度化に関する研究開発の推進

＜＜ 主 要 活 動 ＞＞

①情報リテラシー教育・研究
②資料展示会・講演会の開催（年2回）
③資料電子化（エココレクション及び古典籍DB構築）
④学術ナレッジ・ファクトリー計画推進
⑤学術資料・標本類の保存環境に関する研究
⑥電子図書館国際会議

附属図書館研究開発室の構成

平成17年度

室　長	教　授	伊藤義人	（附属図書館長）
専任室員	助教授	逸村　裕	
専任室員	助　手	秋山晶則	
兼任室員	教　授	杉山寛行	（文学研究科）
兼任室員	教　授	長尾伸一	（経済学研究科）
兼任室員	教　授	山内一信	（医学研究科）
兼任室員	教　授	溝口常俊	（環境学研究科）
兼任室員	教　授	吉川正俊	（情報科学研究科）
兼任室員	助教授	松原茂樹	（情報連携基盤センター）
兼任室員	助　手	津田知子	（情報連携基盤センター）
兼任室員	助教授	平野　靖	（情報連携基盤センター）
兼任室員	教　授	塩村　耕	（文学研究科）

➔成果を全国へ，世界へ

課題：全国レベルでの研究開発の連携

報告の予定

11:20～12:20

0．大学図書館をめぐる最近の状況
1．名古屋大学附属図書館の現状
2．今後の課題
3．質疑応答（約20分）

今後の課題

①学術デジタルコンテンツの充実（電子版参考図書等）
②研究用大型資料の充実
③国立情報学研究所の最先端学術情報基盤（CSI)構築推進委託事業として、学術ナレッジ・ファクトリー計画・学術機関リポジトリを推進・展開しコンテンツの充実・拡大を図る
④一般市民に対し学習用図書の貸出しサービスを行うなど図書館開放の拡大
⑤学術デジタルコンテンツ整備のための財政基盤の強化
⑥図書館業務の合理化・効率化の推進
⑦附属図書館の一体的運営と組織の一元化

報告の予定

11:20～12:20

0．大学図書館をめぐる最近の状況
1．名古屋大学附属図書館の現状
2．今後の課題
3．質疑応答（約20分）

（3）平成17年度名古屋大学附属図書館外部評価実施要領

平成17年9月27日

1　目的

教育研究活動を支援するために学術情報の利用提供を担い、社会への貢献と広く世界の学術活動に奉仕することを目標とする附属図書館における管理・運営、利用者サービス、社会貢献等の諸活動について、学外有識者等による評価を実施し、もって附属図書館の諸活動の改善・向上計画の立案に資する。

2　実施方法

外部評価は、以下の方法により実施する。

①　附属図書館の自己点検・評価に関する関係資料に基づく評価
②　附属図書館の諸活動に関するヒアリングによる評価
③　実地視察による評価

3　外部評価項目

外部評価項目は、以下のとおりとする。

①	管理・運営	目標・計画、管理・運営、職員、施設・設備
②	予算・経費	運営費、資料費
③	資源	資料、情報
④	サービス	アクセス、サービス、利用支援
⑤	図書館活動	企画展示、広報、地域連携・社会貢献、研究開発
⑥	点検評価	自己点検評価、外部評価

4　外部評価委員

外部評価委員は、国立大学法人・公私立大学の図書館関係者、中部地区の公共図書館関係者、図書館・情報学関係者等及び一般市民から数名に委嘱する。

5　外部評価日程

外部評価は、以下の日程により実施する。

① 委員の委嘱	平成17年10月
② 委員への事前資料配布	平成17年10月
③ 外部評価委員会（ヒアリング及び実地視察）	平成17年11月
④ 評価結果の提出	平成18年 1月
⑤ 外部評価報告書作成	平成18年 2月

自己点検評価報告書（平成 12 年度～16 年度）

平成 17 年 10 月 10 日

名古屋大学附属図書館
自己評価実施委員会

は　じ　め　に

名古屋大学附属図書館は、平成４年度に最初の自己点検評価を行い、その後、引き続いて平成 7 年度と平成 12 年度に実施した。今回の自己点検評価期間は、平成 12 年度から平成 16 年度であり、この間に大学の法人化という大きな転換点が含まれている。

各国立大学は、平成 16 年度から国立大学法人化され、１期６年の中期目標・中期計画を策定、実施し、その達成状況の評価を受ける国立大学法人評価制度の適用を受けることになった。各年度においても、年度計画を策定し、年度末に実績報告を行い、国立大学法人評価委員会から評価を受ける枠組みになっている。附属図書館では、かねてから実施してきた自己点検評価及び外部評価委員による外部評価を、大学の Plan-Do-Check-Action 型管理運営の枠組みの中へどう組み込むかを検討した。しかし、７年に１度、法的に義務化されているもう一つの自己評価の機会となる認証評価機関による大学機関別認証評価を受けるプロセスは、本学としてまだ明らかになっていないこともあり、法人化に完全に対応した附属図書館の自己評価プロセスを設定することはできなかった。上述の通り、今回の評価対象期間は、国立大学時代の４年（平成 12～15 年度）と国立大学法人時代の１年（平成 16 年度）に跨ることから、従来の自己点検評価方法を継承しつつ新しい試みも行っている。

例えば、附属図書館の活動に関する各種統計では、通常の基礎データだけでなく 2002 年に国立大学図書館協議会「法人格取得問題に関する附属図書館懇談会」図書館評価指標ＷＧ（主査：伊藤義人）が取りまとめた「大学図書館における評価指標報告書（Version 0)」に準拠した評価指標を採用した。今後他大学等で採用されれば、他機関との比較も可能となる。また、今回実施した利用者アンケートにおいては、サービスの質を測定するための方法として世界的に実施されつつある SERVQUAL や LibQUAL+の手法を取り入れて利用者のサービスに対する期待度と実感度のギャップを測定した。

なお、本学の平成 16 年度業務実績報告に対する国立大学法人評価委員会による評価結果のなかで、「附属図書館において、電子ジャーナルの整備に積極的に取り組んでいる」ことが、平成 16 年度の注目される事項に挙げられたことも報告しておきたい。

附属図書館は、既に平成１７年度の年度計画を作成し、それに基づく活動を行っており、本報告書の中でも、一部は触れているが、研究支援・学術情報基盤整備の関連では、電子ジャーナルバックファイルの整備、電子ブックコンテンツの拡大、学術機関リポジトリの試験運用、国立情報学研究所の委託事業による学術ナレッジ・ファクトリの構築及び学内措置による大型コレクションの整備、社会連携・社会貢献においては、東海地区図書館協議会による最初の活動としての相互貸借サービスの開始や図書館友の会の独自事業の開始等々これまでの成果を踏まえた活動を推進しているところである。

最後に、今回の自己点検評価の実施及びアンケート調査にご協力いただいた関係者各位に感謝を申し上げる。

名古屋大学附属図書館自己評価実施委員会委員長
名古屋大学附属図書館長　伊　　藤　　義　　人

目　　次

はじめに

1　附属図書館自己点検評価報告 …… 1
（1）評価点 …… 1
（2）評価についてのコメントの概要 …… 1
（3）自己評価票のコメント …… 3
（4）自己評価票の形式 …… 9

2　附属図書館自己評価実施委員会委員 …… 11
（1）平成１７年度附属図書館自己評価実施委員会 …… 11
（2）附属図書館自己点検評価ＷＧ …… 11

3　附属図書館自己点検・評価の活動記録 …… 12
（1）附属図書館自己評価実施委員会 …… 12
（2）附属図書館自己点検評価ＷＧ …… 12

―― 附属図書館自己点検評価資料 ――

第１部　附属図書館の活動の概況
Ⅰ　附属図書館の概況 …… 13
1　特徴 …… 13
2　目標・計画 …… 14
3　管理運営 …… 15
4　事務組織・職員 …… 17
5　施設・設備 …… 18
6　予算・経費 …… 19
7　情報資源・資料 …… 19
8　サービス …… 20
9　地域連携・社会貢献 …… 21
10　自己点検評価・外部評価 …… 23
Ⅱ　電子図書館的機能の概況 …… 24
1　目録情報・資料の電子化 …… 24

２　学術デジタル・コンテンツの整備 …… 25
Ⅲ　研究開発室の概況 …… 27
１　管理運営 …… 27
２　研究開発 …… 29
３　教育・プロジェクト・社会貢献活動 …… 33
４　研究成果 …… 35
参考資料　研究開発室の軌跡　2002－04＋ …… 55
Ⅳ　改善の歩み（平成 12～16 年度） …… 60

第２部　基礎データ・評価指標
Ⅰ　基礎データ・定量的評価指標 …… 63
１　資源（蔵書数、収集活動） …… 63
２　管理運営（職員、施設・設備、開館状況） …… 67
３　サービス（図書館アクセス、貸出、参考調査、ILL） …… 74
４　経費（全般、図書館運営費、図書館資料費） …… 84
５　図書館活動（教育支援活動、企画展示活動、広報活動） …… 93
Ⅱ　電子図書館サービス関係評価指標 …… 94
１　資源（ローカルなデジタル・コンテンツ、電子ジャーナル、
電子レファレンス） …… 94
２　管理運営（図書館コンピュータ端末） …… 97
３　サービス（各種サービス利用度） …… 100
４　経費（資料購入費、電子ジャーナル等経費） …… 109

第３部　附属図書館利用者アンケート
１　附属図書館利用者アンケートの概要 …… 113
２　基本調査 …… 115
３　図書館の品質調査 …… 116
４　利用者アンケート（日本語版ホームページ） …… 130

第４部　資料編
１　図書館組織機構図 …… 137
２　附属図書館の諸委員会一覧 …… 138
３　附属図書館の中期目標・中期計画 …… 139
４　名古屋大学附属図書館関連重要文書一覧 …… 145

１．附属図書館自己点検評価報告

自己評価は、自己点検評価資料を参考に、自己評価実施委員が「自己評価票」（（４）参照）に記入するかたちで行った。評価項目としては、「管理運営」、「予算・経費」、「情報資源・資料」、「サービス」、「図書館活動」、「成果評価」及び「研究開発室」の 7 項目を設定し、それぞれについて、評価点及びコメントを記入した。以下に、評価結果を示す。

（1） 評価点

自己点検評価資料に基づき、自己評価実施委員 11 名の各自己評価項目についての評価点は次表のとおりであった。「十分に良い」を４、「おおむね良い」を３、「ある程度良い」を２、「不十分」を１と数値化して評価点をつけ、平均したところ、情報資源・資料、図書館活動、研究開発室で 3.5 以上の高評価を得、低いものでも 3.09、全体平均は、3.4 であった。

表１　自己評価実施委員の評価点

評価項目	十分良い	おおむね良い	ある程度良い	不十分	評価点	評価平均
管理運営	4	7	0	0	37	3.36
予算・経費	4	5	2	0	35	3.18
情報資源・資料	6	5	0	0	39	3.55
サービス	5	6	0	0	38	3.45
図書館活動	6	5	0	0	39	3.55
成果評価	1	10	0	0	34	3.09
研究開発室	7	4	0	0	40	3.64
計	33	42	2	0	262	3.40

（2） 評価についてのコメントの概要

各評価項目の評価点が高かったことから、コメントについても良い評価がくだされている。以下は、コメントの要約である。全てのコメントについては、（3）をご覧いただきたい。

１）管理運営

国立大学図書館協会や東海地区の図書館連携における基幹大学図書館・館長としての主導的な活動、管理運営における館長の指導力や学内関連部署との連携、毎年事業計画を策定して確実に事業を進めていることやサテライトラボの設置や照明、トイレの改修などの施設整備面で評価されている。

一方、学術情報のデジタル・コンテンツ化の進展に伴う全学的な学術情報整備の審議組織の確立、更なる集中化や事務組織の一元化、学内でのバランスの取れた効率的な図書館・職員配置と運営体制の統合、専門職員の不足と人材育成、サービス機能の最適化、事務改善合理化にあわせた図書館業務の改善、利用者の意見の掘り起こし、そして情報利用環境の更なる整備などの点で課題を指摘するコメントがあった。

２）予算・経費

経常経費以外に科研費や間接経費、総長裁量経費などを獲得、情報資源の整備、利用環境の改

善等を図っていることが評価されている反面、経費の安定性について危惧されている。特に電子ジャーナル等の学術デジタル・コンテンツの整備の財源の安定的、継続的な確保方策（経常経費化）の必要性が指摘された。

３）情報資源・資料

蔵書整備アドバイザー制度や大型コレクションに替わる学内経費の獲得などが評価された反面、専門図書の充実に対する期待度が高いこと、古典籍など研究資料の充実について指摘があった。学生用図書については１人当たりの購入冊数が少ないこと、更に選書体制の充実や、学生用図書と研究用図書の区分や配架についても見直し、円滑な資料・情報の共同利用システムの構築が必要などの指摘もあった。

学術デジタル・コンテンツについては高く評価されているが、やはり電子ブック、Web サービス、学術機関リポジトリなど新分野での取組みの更なる拡充の必要性が指摘されている。〈名大システム〉古典籍内容記述的データベースについては画期的と評価され、その継続的な発展充実が期待されている。

４）サービス

特に開館日、開館時間の拡大を積極的に進めていることに、高い評価を得ている。電子ジャーナルの利用の拡大やパスファインダーの作成などの取組みも評価されているが、利用者の意見を反映する制度の充実や障害者への配慮、情報リテラシー教育支援や広報の強化、Web サービスの整備、レファレンスサービスの電子的な手法を活用した高度化、電子的情報へのナビゲーションの効率化などについて指摘があった。

５）図書館活動

学外者への図書館開放や定期的な資料の企画展示、図書館友の会の結成などの取組みが大幅な改善として評価されている。更に図書館を新たな文化発信の場として機能させる取り組み、地域連携の推進、図書館活動の輪の広がりが期待されている。広報については、多様な目的に沿った刊行物を作成していることが評価されている反面、学生に対する広報の強化やその評価の必要性が指摘されている。

６）成果評価

新たな評価指標を採用するなどの評価手法には一定の評価を得たが、より客観的に的確な比較や多角的な分析ができるよう、継続的なデータ採取が必要であることなどの指摘があった。

７）研究開発室

プロジェクトや社会貢献活動など広範な活動、非常に多くの研究成果発表などに高い評価を得た。強力な研究開発体制の維持なども評価されているが、大学図書館における継続的な研究開発の必要性、ハイブリッド図書館の研究開発、地域の文書館・資料館としての大学図書館の役割への貢献など今後の期待も大きく、研究開発室教員の専門性の更なる活用、安定的・継続的な研究開発体制の確立が期待されている。

（３）自己評価票のコメント

１）管理運営

《特徴》

○　国立大学図書館協会や東海地区の図書館関連組織の中で名古屋大学附属図書館が主導的に活動し、電子化の促進や図書館間連携において一定の成果を上げたことは評価できる。

○　東海地区を代表する基幹大学の附属図書館として、多大な貢献を全国、地域に対して行っている。

《目標・計画》

○　ハイブリッド図書館としての位置付けが明確。

○　教育研究支援にかなり貢献。

○　十分に練れている

○　毎年詳細な図書館独自の年度計画を策定し、事業を進めていることは評価できる。

○　大学、学内情報関連組織との連携など緊密な関係が保持されている。

《管理運営》

○　館長の図書館についての見識と指導力（評価した点）

○　学術情報の電子化が進展していると共に、電子ジャーナルのように、情報提供範囲が館内に限らず学内各所にも拡大している中で、蔵書整備委員会が規程上は中央館のみの学術情報を対象とした組織であり、今後は特に全学的な資料整備の審議・決定が必要なため、改めて附属図書館全体の情報資源･資料の整備方針を審議する組織へと明確化を図るべきである。

○　利用者への説明責任など十分果たしている

○　利用者アンケートでは、学生・職員の意見を反映する制度が必要とする意見が強いが、学生との懇談会「館長と語ろう！」やご意見箱など、利用者の意見を図書館運営に反映させるメカニズムはいくつかあるので､むしろそのようなメカニズムについての広報や積極的な参加への呼びかけ等を強化すべきである。

○　ABC（活動基準原価計算）手法による業務分析を実施し、客観的データに基づき業務改善を進めようとしていることは、評価できる。また、全学の事務改善合理化に合わせて図書館業務の改善を進めているが､それぞれの改善事項について確実に実績を上げていく必要がある。

○　さらに集中化・一元化を進めることが必要である。

○　商議員会、委員会がほとんど機能していない。

○　分散化がいいのか？他図書館との連携はよく図れている

《事務組織・職員》

○　一元化は完全でないかもしれないが、着実に進行。

○　中央図書館は、全学の総合図書館機能、教育・研究支援図書館機能、保存図書館機能、電子図書館機能を果たしているが、定員職員が極端に少なく、臨時職員が多すぎる。大学の図書館事務組織を一元化し、バランスの取れた図書館・職員配置と運営体制の統合を図る必要がある。

○　専門職員の不足（改善すべき点）

○　限られた職員で図書館サービス全体の向上を図るためには､全学の図書館職員の組織一元化を含め、効率的な職員配置とサービス機能の最適化を図る必要がある。

○　平成 12 年度までに組織・図書館機能の集中化・一元化を志向することになったが、定員削減などが進行していることに鑑み、早期に具体的な道筋や業務遂行面での改定策が策定或いは実施されるべきであり、早急な対応が必要な事項と位置付けられる。
○　研究開発室が中心となっている展示会の企画・運営に、研究開発室とともに全学の図書館職員が積極的に関わり、あわせて人材育成の場として活用する必要がある。

《施設・設備》

○　PC コーナー、サテラボ設置など積極的に取りいれている。
○　情報連携基盤センターと連携して、中央図書館の IT 化をさらに進める必要がある。
○　照明の改善やトイレの改修など、設備について懸案の問題点が改善され、使いやすくなった。
○　確実に整備されつつある
○　サテライトラボの整備や利用者端末の増加も図られているが、学術情報の電子情報化が進展していくことを考慮すれば、利用者の情報環境のさらなる整備が求められる。（研究個室へのネットワーク環境整備など）
○　とくに、部局図書室についてはまだ施設や設備が古く、狭くて、不十分と思われる。
○　利用者アンケートの自由記述では、施設に関する部分が 59 件と最も多くなっており、そのうち複写機に関するものが 20 件ほどある。中央図書館では平成 18 年度から校費・私費の別を解消することになっているが、部局でも複写環境を改善する必要がある。
○　施設の点で、増築の計画について、触れる必要はありませんか。
○　現在の開架式の配架方式や研究用図書・学習用図書の区分について、見直しが必要である。

2）予算・経費

○　積極的に資金を獲得しようとしており、結果も出ている。
○　限られた予算内で、良く運営している、という意味。
○　科研費取得、総長裁量経費取得など評価できるが、裁量経費は安定性がないかもしれない。
○　いま館長のご努力によって支えられている経費がたくさんあると思います。その点で、少し将来において不安があり、経常的な予算として確保できると良いと思います。
○　安定的な図書予算の確保（改善すべき点）
○　特に、電子ジャーナルや電子ブックの導入等、学内の理解を得て図書館の電子化に間接経費等の配分を受け、時宜を得た学術情報の提供が実現できていることは評価できる。今後の継続的な財源確保を期待する。
○　経常経費以外に、積極的に間接経費、総長裁量経費、外部資金の導入を図っていることは評価できる。電子ジャーナル経費については、現在の部局拠出方式が限界に達しており、大学全体として財源確保する方策を策定する必要がある。
○　電子ジャーナルの導入や遡及入力、安全で快適な施設整備など必要な事項に確保されている状況は望ましい。
○　大学全体の学術情報基盤となっている電子ジャーナル・データベース等の学術デジタル・コンテンツを安定的に維持・提供するため、基盤経費として経常経費化（共通経費化）する必要がある。
○　部局での図書購入予算が圧迫されている。
○　外部資金の導入、特に寄附金の受け入れについて、体制を整備する必要がある。

３）情報資源・資料

《情報資源・資料》

○　明確な情報戦略とその進捗（評価した点）

○　蔵書整備アドバイザー制度を設立し、学習用図書の点検・更新方策を確立したことは評価できる。

○　教員との連携し図書館職員がもっと蔵書構築に参加できる体制を強化する必要がある。

○　貸出冊数などが順調に伸びていることに鑑み、さらに充実した資料の収集に努力すべきである。特に、学生のための学習用図書については、蔵書整備アドバイザー制度などを活用し、教員との連携を密にして充実すべきである。

○　学生用図書は、毎年学生１人あたり 0.5 冊と少なく、学生から新しい本が少ないという声がある。特に学生用図書の充実を図る必要がある。

○　研究用図書について、部局にある資料を中央館に移管する措置が必要である。

○　利用者アンケートでは、教員・大学院生の専門図書の充実に対する期待度が高いにもかかわらず、実際には必ずしも十分ではないという評価である。この場合の「専門図書」は、大型の研究用コレクションのようなものかあるいは個々の研究用図書なのか、具体的にニーズを把握し、対応する必要がある。

○　法人化後、文部科学省からの大型コレクション経費の配分の目処が無くなったが、学内で間接経費を財源にある程度の道筋がついたことは評価できる。

○　古典籍資料や古い研究資料といった文化資産の蓄積がやや乏しく、今後の充実が必要である。

○　これまでに努力して得られた資源・情報の意

○　外国雑誌調達に問題点を抱えているが、大学共通の問題でもある。

○　図書館の品質調査では、部局図書室の資料・情報についての教員、大学院生の評価が意外にも中央図書館より低い。必要なものが購入されている筈なのだが、研究室に入り込んだりして、有効な利用ができなくなっているのではないか。だとすれば、もっと附属図書館機能を活用して、円滑な資料・情報の共同利用システムを構築すべきである。

《学術デジタル・コンテンツ》

○　電子ジャーナルの充実が図られていることは評価できる。今後は、学術文献データベースを含め、大学としての整備方策の策定が必要である。

○　国立大学では日本で有数のコンテンツを有しており、たいへんよい。

○　電子ブック、Web サービス、学術機関レポジトリについては今後の発展を期待。

○　電子情報サービス（目録情報の電子化、資料の電子化、電子ジャーナルのタイトル数の多さ）など高い評価ができる。

《目録情報》

○　平成 20 年までに遡及入力が完了する計画が策定され、計画的に整備が進められていることは評価できる。

○　平成 16 年度国立情報学研究所との共同事業「学術機関リポジトリ構築ソフトウエア実装実験プロジェクト」に参加し、大学の研究成果を蓄積・保存・発信する新しい大学図書館の役割にいち早く取り組んだことは、評価できる。

○　新たに公開された〈名大システム〉古典籍内容記述的データベースは、図書館による同種情報の発信として画期的なもので、日本の書物文化の見直しに大きなインパクトを与えることが期待される。今後の継続的な発展充実が望まれる。

4）サービス

《サービス》

○　開館時間の増加や電子情報サービスの充実、展示会・講演会の開催など評価できる。

○　開館時間の拡大、中央館開架率の高さ、Web上での貸出予約やILL申込の実現、情報リテラシー教育への取組みなどは評価に値する。

○　いずれのサービスも非常によい。

《図書館アクセス・開館状況》

○　開館日と時間は十分に確保されている。

○　開館日及び開館時間の拡大を積極的に進めているのは評価できる。ただし、さらに拡大を望む声もあり、実際の利用状況も含めて検討する必要がある。また、貴重資料を除いて殆どの資料が開架されていることは利用者の利便性の向上に資しており、評価できる。

○　特に中央図書館の開館日数、開館時間数は順調に拡大してきている。学年暦の変更により、平成16年度の入館者数は減少したが、貸出冊数は増加を続けている。この傾向を維持し、且つ一般市民への貸出サービスを拡充して更に資料の有効利用を図ると良い。

○　開館状況が、ずいぶん改善されたと思います。文書の中で、できれば、外来語を少なくしてほしいです。外来語を使用する場合は、訳を括弧に入れて分かりやすくしてほしいです。それもサービスの一端かと思います。

《電子情報サービス》

○　図書館Webサイトへの訪問や電子ジャーナルの利用は確実に増えており、遡及入力の加速、個人サービスの拡充など、Webを基軸としたサービスの整備を図る必要がある。

○　電子情報資源の提供については、整備が進んでいるが、学術ポータル構築についてさらに整備を推進する必要がある。

《利用支援》

○　学生・教員の意見を反映する制度の充実や障害者への配慮が望まれる。

○　利用者アンケートでは、学生等の図書館職員に対する期待度が低いが、一方で、「必要な資料を自力で見つけられる」は高い。このことは、図書館では情報リテラシー教育及びパスファインダーなど利用者支援サービスを強化しているにもかかわらず、そのようなサービスが必ずしも十分理解ないし認知されていないためとも思われる。教員と連携し、授業に直接参加するなどして、情報リテラシー教育を強化するとともに、学生や教員に対する広報を強化すべき。

○　電子的な手段を用いたレファレンスサービスの高度化や電子的情報へのナビゲーション効率化など、今後、向上させるべきサービスもあると考える。

○　通常のガイダンス、説明会に加えて、TAを対象としたガイダンスやpathfinderの作成等新しい試みを実施していることは、評価できる。

5）図書館活動

《地域連携・社会貢献》

○　活発に連携している

○　東海地区図書館協議会でのリーダシップ、学外者への図書館開放、定期的企画展示、友の

会結成など評価できる。友の会のさらなる発展が望まれる。

○ 東海地区図書館協議会活動や図書館友の会との活動連携等は、地域連携、地域貢献を推進する取組みとして評価できる。また、学外者に対する貸出サービスの実施等、地域住民に対するサービスの拡大を進めていることも評価できる。
○ 以前と比較の問題。その限りにおいて、年々良くなっているように感ずるので、十分良い。
○ 学外者への開放は大幅に改善されている。
○ 学外者への図書館開放は着実に進み、一般市民の利用も格段に増加している。企画展示活動や、友の会の活動など多様な取組みの成果でもあり、大いに評価できる。今後は、研究開発室教員を核に、更に部局の教員や図書資料、研究成果を活用して内容の拡充を図るなど図書館活動の輪が広がることに期待する。
○ 企画展示活動や附属図書館友の会を評価
○ 展示及びギャラリートークの開催に積極的に取り組んでおり、内容も意欲的である。
○ 年２回の資料展示会及び講演会の開催は、本学の貴重資料等を紹介する機会として、市民の生涯学習支援として有効であり、評価できる。
○ 館長と語る会や「友の会」の活動は、大きな意味があると思います。来館者に、一般の市民が多くなったことも、評価できることと思います。
○ 友の会の発足は、市民をより積極的に図書館へ誘引する取組みで、図書館を新たな文化発信の場として機能させようとしている。

《広報活動》

○ 広報活動の強化。「館報」のメール配信など、特に学生に対する図書館サービスの直接的な広報が必要。
○ 多様な目的に沿った刊行物を作成していることは高く評価される。「館燈」など、出版物がどの程度の効果をあげているのか、何らかの評価をすべき時期にあると思われる。

６）成果評価

《自己点検評価》

○ 継続的に自己点検評価を実施し、業務・サービスの改善に努めていることは評価できる。
○ 自己評価案の文章全体について、あまりにも外来語が多すぎます。
○ 国際規格に合わせた評価指標の採用は評価できる。今後は他大学との比較による評価も望まれる。
○ 評価手法に最新のものを利用するなど、新たな取組みに対して評価したい。
○ より客観的な評価指標を使うことを目指したが、的確な比較、分析には継続したデータ採取が必要と思われる。
○ 利用統計や各種のデータの相関的な分析など、さらなる多角的な分析が利用者サービスを効率化する上で必要な部分もあると考える。
○ 第Ｉ部を読ませていただきました。今後解決すべき点、あるいは現在の問題点を書かなくても良いのでしょうか。この点を書いておく方が、今後の展望につながるような気がいたします。

《利用者調査・利用者評価》

○ 中央図書館については評価が高いが、部局図書館については評価が低いことがあげられる。
○ 常に良くなるように努力してきたのだから、以前より年々新しい、立派な成果を上げているのだから、多少いたらない点があっても十分に良い。

7）研究開発室

《管理運営》

○ 室長１名、専任教員２名、兼任教員９名という構成と学内共通経費等の予算配分によって強力な研究開発体制が維持されていることは評価できる。

○ 研究資金と人的体制が不足している。

○ 図書館のサービス・運営は、固定的なものではなく、社会環境等により常に変化・発展していくものであるため、継続的な開発研究が必要。したがって、研究開発室の研究が安定的・継続的に実施できる体制を確立することが必要。

○ 古文書や古典籍をはじめとする文化資産は、自然な保存が困難となって来つつある。その点、地域の「文書館・資料館」として、今後大学図書館が果たすべき役割は大きく、開発室はその体制を構築する必要がある。

○ 兼任教員の附属図書館との関わり方に関し、一部の教員はかなり密接な関係を築いている。しかしながら多くの教員がオープンレクチャーなどで関連性が若干あるものの、特に附属図書館の事業との関係性においては、各教員の専門性を生かしたさらなる連携強化を図るべき部分もある。

《研究開発》

○ 今後、大学の情報戦略が鮮明になるにしたがって、その中でのハイブリッド図書館の位置と役割を明示する研究成果を期待する。

○ ハイブリッド図書館の研究開発、図書館所蔵資料（高木家文書、伊藤圭介文庫、神宮皇學館文庫等の古典資料、西洋近代思想資料等）の調査、データベース化を着実に進めていることは評価できる。

《教育・プロジェクト・社会貢献活動》

○ たくさんの活動をしていることを知りました。

○ プロジェクトや社会貢献、国際連携活動などでの精力的な取組みは評価できる。

○ 展示及びギャラリートークの開催に積極的に取り組んでおり、内容も意欲的である。

○ 毎年２回の展示会・講演会の企画・実施において、大きな成果を上げていることは高く評価できる。

○ 地域の古文書をはじめとする文化資産の維持保存について、協力貢献している。

○ 地域に関わる古文書を図書館に受け入れて活用を図っている。

《研究成果》

○ 非常に多くの研究成果を発表されており、十分な研究開発成果を上げていると評価できる。

○ 幅広い領域をカバーする室員、ハイブリッド図書館機能の開発、活発な展示会･研究会、社会貢献活動、充実した研究成果発表など、高い評価ができる。

○ 研究開発の成果は、毎年２回開催される資料展示会・講演会やオープンレクチャー等の機会あるいはLibstや研究年報等の刊行物を通して積極的に社会に公表されており、評価できる。

（４）自己評価票の形式

自己評価票

（自己評価実施委員名：　　）

項番	評価項目	評　　価
1	管理運営	□ 十分良い　□ おおむね良い　□ ある程度良い　□ 不十分
		評価についてのコメント
		《特徴》１部Ⅰ１ 《目標・計画》１部Ⅰ２、４部３ 《管理運営》１部Ⅰ３、４部１＆２ 《事務組織・職員》１部Ⅰ４、２部Ⅰ２ 《施設・設備》１部Ⅰ５、２部Ⅰ２、２部Ⅱ２、３部３．２
2	予算・経費	□ 十分良い　□ おおむね良い　□ ある程度良い　□ 不十分
		評価についてのコメント
		《予算・経費》１部Ⅰ６、２部Ⅰ４、２部Ⅱ４
3	情報資源・資料	□ 十分良い　□ おおむね良い　□ ある程度良い　□ 不十分
		評価についてのコメント
		《情報資源・資料》１部Ⅰ７、２部Ⅰ１、３部３．３ 《学術デジタル・コンテンツ》１部Ⅱ２、２部Ⅱ１ 《目録情報》１部Ⅱ１
4	サービス	□ 十分良い　□ おおむね良い　□ ある程度良い　□ 不十分
		評価についてのコメント
		《サービス》１部Ⅰ８、２部Ⅰ３、３部３．４ 《図書館アクセス・開館状況》１部Ⅰ８、２部Ⅰ２、２部Ⅰ３ 《来館者サービス》１部Ⅰ８ 《電子情報サービス》１部Ⅰ８、２部Ⅱ３ 《利用支援》１部Ⅰ８、２部Ⅰ５
5	図書館活動	□ 十分良い　□ おおむね良い　□ ある程度良い　□ 不十分
		評価についてのコメント
		《地域連携・社会貢献》１部Ⅰ９、２部Ⅰ５ 《広報活動》２部Ⅰ５ 《研究開発》→７研究開発
6	成果評価	□ 十分良い　□ おおむね良い　□ ある程度良い　□ 不十分
		評価についてのコメント
		《自己点検評価》１部Ⅰ10 《利用者調査・利用者評価》３部
7	研究開発室	□ 十分良い　□ おおむね良い　□ ある程度良い　□ 不十分
		評価についてのコメント
		《管理運営》１部Ⅲ１ 《研究開発》１部Ⅲ２ 《教育・プロジェクト・社会貢献活動》１部Ⅲ３ 《研究成果》１部Ⅲ４

【記入要領】

1　「評価」の欄には、項番１～７の評価項目について、「十分良い」から「不十分」までの４段階で評価を付けて下さい。この４段階は、大学評価・学位授与機構が使用する評語を参考に、以下のような判断基準とします。

「十分良い」は、十分な活動がなされている。

「おおむね良い」は、改善の余地がある。

「ある程度良い」は、改善の必要がある。

「不十分」は、大幅な改善の余地がある。

2　「評価についてのコメント欄」には、評価した点、改善すべき点の指摘、助言、あるいは新たな取組みの提言などを記入して下さい。なお、評価項目を《》で中項目分けし、自己点検評価資料の関連部分を指示してありますので、ご参照ください。

この部分は、自己点検評価の本体となる部分ですので、できるだけご記入ください。

【今後の取扱い】

1　この自己評価票は、自己評価実施委員会委員にメールで配布しますので、平成 17 年 10 月 14 日（金）までに、記入の上、ご返信ください。

2　各委員の評価票は、集計・集約し、「評価」については平均点を、「評価についてのコメント」は集約する形で取りまとめさせていただき、自己点検評価報告書として公表しますが、各委員の評価票については、公表いたしません。

２．附属図書館自己評価実施委員会委員

（１） 平成 17 年度　附属図書館自己評価実施委員会（平成 17 年４月 18 日商議員会決定）

伊　藤　義　人	附属図書館長（委員長）
山　内　一　信	附属図書館医学部分館長
塩　村　　耕	附属図書館商議員（文学研究科）
和　田　　肇	附属図書館商議員（法学研究科）
沓　名　宗　春	附属図書館商議員（工学研究科）
前　多　敬一郎	附属図書館商議員（生命農学研究科）
中　井　政　喜	附属図書館商議員（国際言語文化研究科）
松　原　輝　男	附属図書館商議員（環境学研究科）
早　瀬　　均	附属図書館事務部長
牧　村　正　史	附属図書館情報管理課長
臼　井　克　巳	附属図書館情報サービス課長
郡　司　　久	附属図書館情報システム課長

（２） 附属図書館自己点検評価ＷＧ

臼　井　克　巳	附属図書館情報サービス課長（主査）
山　本　利　幸	附属図書館情報管理課資料管理掛長
蒲　生　英　博	附属図書館情報システム課課長補佐
岡　本　正　貴	附属図書館医学部分館情報サービス掛長
渡　邉　通　江	文学部・文学研究科図書掛
堀　　茂	情報・言語合同図書室図書掛長
澤　田　さとみ	工学部・工学研究科図書掛
森　　由　香	生命農学研究科・農学部図書掛

３．　属図書館自己点検・評価の活動記録

（１）附属図書館自己評価実施委員会

17．5．9	附属図書館自己評価実施委員会（第１７－１回） １）平成 17 年度附属図書館自己評価の実施について
17．7.15	附属図書館自己評価実施委員会（第１７－２回） １）評価指標（各種統計）について ２）利用者アンケートについて
17．9.21	附属図書館自己評価実施委員会（第１７－３回） １）附属図書館自己点検評価資料について ２）附属図書館自己評価について
17.10.14	自己評価票回収
17.11.10	自己点検評価報告書承認

（２）附属図書館自己点検評価ＷＧ

16.11．4	附属図書館自己点検評価ＷＧ（第１６－１回） （ＷＧの目標及び活動内容の確認）
16.11.18	附属図書館自己点検評価ＷＧ（第１６－２回） （スケジュールについて検討）
16.11.26	附属図書館自己点検評価ＷＧ（第１６－３回） （スケジュール及び作業分担の決定）
17．1．6	附属図書館自己点検評価ＷＧ（第１６－４回） （評価指標の検討）
17．2．8	附属図書館自己点検評価ＷＧ（第１６－５回） （データ収集及び調査項目の検討）
17．3.10	附属図書館自己点検評価ＷＧ（第１６－６回） （中間報告（案）の検討）
17．4.14	附属図書館自己点検評価ＷＧ（第１７－１回）開催 （中間報告の評価と作業分担の変更）
17．5.13- 5.31	自己点検評価に係る部局調査の実施（以後、集計、分析）
17．6.20- 7．8	利用者アンケートの実施（以後、集計、分析）
17．7.21	附属図書館自己点検評価ＷＧ（第１７－２回）開催 （自己点検評価報告書のまとめについて）
17．8.29	附属図書館自己点検評価ＷＧ（第１７－３回）開催 （自己点検評価報告書のまとめについて　続）

第１部 附属図書館の活動の概況

Ⅰ　附属図書館の概況

本自己点検評価の対象期間となる平成12～16年度において、平成16年度の国立大学法人化は、附属図書館の活動にも大きな影響を与えた。先立つ平成12年2月15日に、名古屋大学は、学問の府として、大学固有の役割とその歴史的、社会的使命を確認し、その学術活動の基本理念を「名古屋大学学術憲章」として定めた。同時に、研究と教育、社会的貢献の基本目標、研究教育体制及び大学運営の基本方針を定め、それに基づく諸施策を実施し、基幹的総合大学としての責務を持続的に果たすこととした。そこには、「世界の知的伝統の中で培われた知的資産を正しく継承し発展させる教育体制を整備し、高度で革新的な教育活動を推進」、「活発な情報発信と人的交流、および国内外の諸機関との連携によって学術文化の国際的拠点を形成」という附属図書館の果たすべき役割に係る方針も示されている。

国立大学法人化に伴い、それまでの理念・目的や将来構想・計画は、1期6年（平成16～21年度）の中期目標・中期計画の中に包含、継承され、各年度計画の実施、点検、評価という、いわゆるPlan-Do-Check-Action型管理運営の枠組みに移行しつつある。附属図書館でも、後述するように部局としての中期目標・中期計画、年度計画とその実績報告、評価を行うようになった。

この制度移行に伴い、例えば、①資産継承に関連して、重複本などの資産（蔵書）の見直しが行われた結果、平成15年度に蔵書冊数が減少したこと、②平成16年度以後は非常勤職員が契約職員とパートタイム勤務職員となるなど、職員数の計数基準が変更になったこと、③平成16年度から学年暦が変更され、前期試験が9月から7月になったこと、など平成15年度を境にいくつかの要因による影響が統計値に出ることとなった。これらの個別事項については、第２部の各項目で記述することとし、ここでは附属図書館の全般的な概況について点検する。

１　特徴

【大学・図書館規模】昭和14年、本学が国内7番目の帝国大学として創設されて以来、その附属図書館としての歴史を積み重ねてきた。東山、鶴舞、大幸の市内3キャンパスの他、豊川等県内外にも多くの施設を有し、東山地区の中央図書館、鶴舞地区の医学部分館の他、各学部・研究科、学科、附置研究所、附属学校、関連施設等に図書室を持つ、図書館機能が分散した多館システムとなっている。文部科学省の「大学図書館実態調査」では、8学部以上を擁するＡ規模16大学の中に区分され、大規模大学の附属図書館として位置付けられている。

【図書館連携】そのような東海地区を代表する基幹大学の附属図書館として、国立大学図書館協会（以下「国大図協」という。）や東海地区大学図書館協議会など種々の図書館連携の場で主導的な役割を担ってきた。特に平成12年度、伊藤附属図書館長が主査となり国大図協に設置された電子ジャーナル・タスクフォースの働きは、全国の国立大学附属図書館への電子ジャーナル導入を画期的に促進し、その後も維持、拡大に向けて精力的な活動が続けられている。図書館連携での役割は、平成17年度現在次のようである。

① 国立大学図書館協会　副会長、理事館（総務、学術情報担当）
② 国公私立大学図書館協力委員会　委員館
③ 日本図書館協会　評議員館
④ 東海地区図書館協議会　会長館
⑤ 東海地区大学図書館協議会　会長館
⑥ 愛知図書館協会　常務理事館

特に④については、９地域連携・社会貢献でも触れるが、東海4県の各公共図書館の協議会と東海地区大学図書館協議会に加盟する図書館で構成する協議会で、地域の連携協力事業を具現化し、推進するために、平成16年度に伊藤附属図書館長の呼びかけで発足したものである。

２　目標・計画

【ハイブリッド図書館】当館には伝統的に“良く連絡調整された分散主義”という理念があったが、平成11年から12年にかけてまとめられた附属図書館将来構想の第一次案及び第二次案により、集中化・一元化へと転換することになった。急速な情報革命、大学院重点化等の大学改革、定員削減、厳しい財政事情、書庫の狭隘化など、学内外の状況の変化に対応して、従来の紙媒体をベースとした図書館機能を維持しつつ、電子的情報資源をシームレスに提供する高度に情報化された「ハイブリッド図書館」の構築を理念に掲げ、中央図書館を核とする全学図書館システムの集中化と高機能化を基本方針の一つとして位置付けた。

【中期目標】国立大学法人化に伴い、大学としての中期目標が定められ、基本的な目標として４つのミッションとヴィジョン（長期的な目標）が掲げられた。４つのミッションは以下のようになっている。

① 人文・社会・自然の学問の壁を越えた研究のコミュニティを創出し、世界屈指の知的成果を生み出す。
② 基幹的総合大学にふさわしい学術と文化の薫り高きキャンパスを実現し、豊かな人間性を持つ、勇気ある知識人の育成に努める。
③ 先端的および多面的な学術研究活動と、国内外で指導的役割を果たしうる人材の養成を通じて、地域および産業の発展に貢献する。
④ 国際的な学術連携および留学生教育の一層の充実を図り、世界とりわけアジア諸国との交流に貢献する。

この大学のミッションに呼応し、平成 15 年 8 月に策定した附属図書館の中期目標・中期計画(2004-2009)（参照→第４部３）には、大学の附属図書館として担う使命を、「教育・研究への支援」、「学術情報基盤の高度化」、「社会との連携と貢献」、「国際協力と情報発信」という４つの柱に整理し、その発展を 20 年程度の長期的展望に立つ附属図書館のミッションとヴィジョンとして公表した。そこには、学術情報の収集と提供による教育研究支援と学術コミュニティへの奉仕という附属図書館の普遍的な使命に、法人化で社会的に独立した大学にこれまで以上に求められる社会連携・社会貢献を、大学の顔ともいうべき図書館が広く担うことなどを掲げている。

【中期計画・年度計画】中期目標と同時に定めた附属図書館の中期計画は 83 項目にわ

たり、項目別には以下のようになっている。

Ⅰ　部局の教育研究等の質の向上に関する計画（49 項目）

Ⅱ　業務運営の改善及び効率化に関する計画（15 項目）

Ⅲ　財務内容の改善に関する計画（7 項目）

Ⅳ　自己点検・評価及び情報提供に関する計画（3 項目）

Ⅴ　その他の業務運営に関する重要事項に関する計画（9 項目）

また、中期計画遂行のための年度計画でも、大学の年度計画180項目の中で特に深く関係する部分、教育支援機能の充実、学術情報基盤の整備、地域文化の振興、国立大学間の連携強力推進、の４つの項目で積極的な計画を立案、実施した。平成16年度については平成16年6月商議員会で承認され、平成17年3月にその実績報告と平成17年度の年度計画が承認されている。平成17年度計画の主要な事項は、以下のようになっている。

1）教育支援

①　電子版参考図書の導入を図る。

②　パスファインダー(Pathfinder)の開発による学内の教育プログラム支援機能の強化を図る。

2）研究支援

①　名古屋大学電子図書館国際会議を開催する。

②　電子ジャーナルのカレント版タイトル数を維持し、バックファイルを導入する。

③　名古屋大学学術機関リポジトリ(Repository)（仮称）の試験運用を行う。

3）学術情報基盤の整備

①　情報戦略に関する学内の議論に参加し、積極的な活動を行う。

②　学生等のPC利用環境を強化するため、附属図書館として120台以上のPCを整備する。

③　図書資料の電子的目録化率を85%以上にする。

4）業務運営の改善

①　図書館職員の組織一元化に向けた検討を行う。

②　自己点検評価・第三者評価を行う。

5）財政内容の改善

①　エコ（環境共生）コレクション・データベースの作成計画の継続申請（科学研究費）を行う。

②　学外からの図書館活動への支援の呼びかけを広く行う。

３　管理運営

【組織】名古屋大学附属図書館規程により、附属図書館は、中央図書館、医学部分館と21の部局図書室をもって組織され、附属図書館長、医学部分館長が置かれることになっている。重要事項を審議するための商議員会もここで規定され、商議員会には内規により図書館システム検討委員会（図書館システム全般に関わる事項を審議）、中央図書館蔵書整備委員会（中央図書館の蔵書整備及び運用に関わる事項を審議）、電子図書館推進委員会（電子図書館化の推進に関する専門的事項を審議）が設けられている。

中央図書館蔵書整備委員会には、官報・議会資料・法判例、地方史文献、東洋学文献、

教職教育研究図書の各コーナー小委員会及び外国文学セクション小委員会が置かれ、研究用図書の一部である各コーナーに特化した資料整備を行っているほか、館長の下に和漢古典籍整理専門委員会が設置され、和古書・漢籍の整理事業を継続（参照→第１部Ⅱ１）している。また、定期的に自己点検評価を実施する際には、自己評価実施委員会（参照→第１部Ⅰ10）が置かれることになっている。

なお、平成13年4月に、学内共通基盤施設として附属図書館に研究開発室が設置され、現在では、室長1人、専任教員2人、兼任教員9人という国内でも屈指の強力な布陣で研究開発に当たっている（参照→第１部Ⅲ）。

【図書館利用者への説明責任】図書館の現状と課題を経営的観点から図書館利用者に説明し、理解を得ること、あるいは職員や利用者の意見を聞くことは説明責任を果たすだけでなく、直接利用者の声を聞き、図書館経営に反映させる課題を得る貴重な機会でもある。平成12年度から毎年館長が職員に対し館内状況を説明する会を設けている他、平成15年度からは学生、院生の利用者と館長の懇談会「館長と語ろう！」を開催し、出された意見にも可能なものは迅速に対処している。

【学内情報関連組織の連携】平成 14 年 4 月、前回の自己点検評価報告書では概算要求中として挙げられていた情報連携基盤センターが、大学における諸活動の情報化支援とそのための基盤環境の整備・運用を伴うセンターとして設置され、附属図書館の事務の一掛が、同センター学術電子情報掛として組織された。要求の当初計画から附属図書館も深く関与しており、同センターは、情報処理資源については附属図書館と、教育コンテンツについては情報メディア教育センターと連携することになっている。

同センターの学術情報開発研究部門の教員は、附属図書館研究開発室の兼任教員となり、また、情報連携基盤センターの大学ポータル専門委員会、学術情報開発専門委員会や関係ワーキンググループに研究開発室教員や附属図書館事務部から委員として加わるなど連携を密にしている。なお、平成 17 年 3 月同センターのシステム更新に伴い、中央図書館 2 階 PC コーナーに端末 17 台を設置するなどの連携も実現している。

情報メディア教育センターとの連携は、平成 12 年 5 月に、同センターの PC コーナー（20 台に対応できる無線 LAN アクセスポイント）を中央図書館 2 階に設置したのを始め、平成 15 年度には、PC サテライトラボ（端末 22 台）を中央図書館 4 階演習室に設置している。また、法人化に伴い本部の財務会計システムが運用され始めたのを契機に、図書館業務システムとのデータ受渡しの連携が図られた。

【学内情報戦略】大学の情報戦略の理念と展望に裏打ちされた学術情報全般に関わる IT 環境の整備、その推進が、大学にとって焦眉の課題になっている。大学の情報戦略とは、教育・研究・学務・管理・事務・広報等における情報通信技術の活用方針でもある。学内の教育研究・学習コミュニティに張り巡らせた最新で堅牢な情報ネットワーク基盤、高度にセキュリティが確保された情報環境を整備すると共に、学内研究成果を始めとする学術情報、授業内容や履修状況などの教育・学習情報、関連する様々な大学情報を発信、大学ポータルの構築などにより効率的で活発な流通を促進させ、学術コミュニティにおける教育研究・学習活動の活性化や関連業務の効率化を図る必要がある。

附属図書館は、これまで学内で生産される研究成果の情報発信を核とした学術情報コラボレーションシステムの構築、それを発展させた学術ナレッジ・ファクトリー

(Academic Knowledge Factory)の構築を提案、パイロット的な事業も実施してきている（参照→第 1 部Ⅲ２）が、情報投資の効率化や人材の育成、セキュリティやコンプライアンス(Compliance)の確保などを含めた大学規模の戦略策定、統括が必要であり、現在、大学の計画・評価委員会に作られた情報戦略に関する検討 WG と平成 17 年度新たに設置された情報戦略組織 FS(Feasibility Study)室により、平成 18 年度の全学的情報戦略組織発足に向けた検討が進められており、附属図書館も執行組織の１つとして積極的に参画している。

４　事務組織・職員

【事務組織】附属図書館事務組織（参照→第４部１）は、この間にも幾つかの組織の見直しが行われた。平成 12 年 4 月、情報管理課図書受入掛と情報システム課目録情報掛の業務の見直しを行い、図書の発注・目録業務を統合、それに伴い、図書受入掛は資料管理掛に、目録情報掛は図書情報掛となった。部局では、医療技術短期大学部の廃止と、医学部保健学科の設置に伴い、医療技術短期大学部図書掛が医学部分館に統合され、保健学情報掛となった。

平成14年4月、情報連携基盤センターの創設に伴い、情報システム課システム管理掛を同センター学術電子情報掛に組織変更し、工学部では学科の図書系職員を工学部中央図書室に集め、業務を集中化した。

なお、中央図書館では平成15、17年に定員削減を実施し、漸減し続ける正職員数は21名となり、定員状況は厳しさを増している。また、法人化に伴い平成15年度までの非常勤職員は、契約職員とパートタイム勤務職員に区分され、パートタイム勤務職員には、それまで計数されていなかった会計雇用職員が含まれるようになったため、フルタイム換算職員数が増加することになった。。

【業務分析】平成17年1月に図書館業務電算機システムを更新し、Web上で図書の貸出状況の照会や、図書館間の文献複写業務（Inter-Library Loan、以下ILLという。）の申込みができ、またモバイル対応にもなるなど機能の拡張が図られた。図書館業務の電算処理化は昭和50年代半ば以降、図書館業務、学内ネットワーク業務、図書館間のネットワーク連携業務を支える基盤として成長、進化しつづけているが、業務を強力に支援し、経営の観点からも役立つ情報システムの構築は、業務効率化の根幹に係る最重要な課題の１つである。平成16年度後半から当館の情報システムに最も詳しい企業との共同研究という形で、附属図書館の全ての業務を時間と経費及び職員の意識について網羅的に分析した。日本の大学図書館としては初めての試みであるが、今後、この成果を経営の観点から、組織改編も含むより良い業務改革につなげていくのが今後の課題になっている。

【事務改善合理化】事務改善合理化に関する本学での取り組みは、平成10年以降、事務改善合理化推進調査・研究会などで検討されてきたが、平成16年事務改善合理化委員会の下に総務、財務、研究・国際、施設、学務、図書の各事務専門委員会が設けられ、実施時期を3段階に区分した改善日程を設定、またそれぞれの専門委員会に関係の総長補佐がタイアップし、図書については図書館システム検討委員会で了解を得ることになっている。

図書業務については、第1段階（平成17年1月実施目標）で附属図書館電子計算機業務

システムの更新に伴う部局図書室における閲覧システムの稼動、図書自動貸出機の導入、ILLにおける電子ジャーナルの活用、第2段階（平成17年4月実施目標）では、Web・メールを活用した購入希望の受付、貸出状況の確認、予約やILLの依頼受付、資産台帳データベースの活用などを開始し、第3段階（平成18年4月実施目標）に向けては、ほか10数項目について検討を継続している。今後、事務組織の見直し、アウトソーシングなども含めた具体策が提案される可能性がある。

【職員養成】図書館職員としての資質の向上を図るために実施、協力している研修には、図書系職員研修会、図書系初任者研修、国立情報学研究所（以下、NIIという。）目録システム地域講習会、東海地区大学図書館協議会研修会がある。また、NIIが行う教育研修事業や大学図書館職員講習会、大学図書館職員長期研修、著作権実務講習会、漢籍整理研修、西洋社会科学古典資料講習などの他、情報システム統一研修、放送大学キャリアアップ研修などにも大学を通じて参加させ、職員のスキルアップ等を図っている。

そのような中、「和漢古典籍に関する知識と技術の継承プロジェクトグループ」の活動が高く評価され、平成15年度国立大学図書館協議会賞を受賞（平成15年7月）したことは特筆すべき事柄であった。これは、杉山寛行、塩村耕両教授の指導の下、図書館職員有志が自発的に取り組んできた古典籍の取扱いを実践的に学ぶ書誌学勉強会の成果として開催された平成14年度企画展示「古書は語る」の実績とそこに至る研鑽努力に対する評価であった。このことは大学本部からも評価され、図書館職員6名が海外4カ国の図書館等を訪問し、さらなる研修の機会を得た。後日、報告会を開催し、また図書館報「館燈」にも報告を掲載した。

５　施設・設備

【建物関係】平成13年度には、医学部分館が耐震、内装、空調を主とした改修工事を行い、また医学部保健学科の保健学情報資料室は、建物改修に伴い新たな場所を得て移転、新装オープンした。平成14年度からは、文系部局の大規模改修工事が始まり、文、教育、法、経済の各部局の図書室も順次改修された他、工学部の学科図書室、多元数理科学研究科でも移転や部分改修が行われた。

【情報設備】平成 12 年 5 月、中央図書館 2 階の閲覧スペースに PC コーナーを設置した。これにより、利用者は各自が持ち込んだ PC を無線 LAN 経由で情報メディア教育センターに接続し、Web 情報資源を活用できるようになった。また、平成 15 年度には、中央図書館 4 階演習室に情報メディア教育センターの PC サテライトラボを併設し、特に学生の情報環境を整備することができた。ここの端末は、稼働率約 60%と利用が非常に高いものとなっており、情報機器利用スペースの拡充をさらに図る必要がある。

また、平成15年4月には、留学生経費により2階OPACコーナーに4台の留学生用（多言語対応）パソコンを導入し、平成17年3月には、情報連携基盤センターのシステム更新に伴い、2階PCコーナーに端末17台を新たに設置した。

【資料保存】平成14年、中央図書館5階に高木家文書室を整備し、それまで貴重書室・準貴重書室にあった高木家文書を移動した。

【利用環境】平成16年度末、全館的な照明設備の改善、階段壁紙や2階ホールのタイルカーペットの更新などを行い、机上など各所を基準照度の500ルクス以上に上げるなど利

用環境の整備を行った。同時に、1階と4階の書架灯を人感センサー式にするなど省電力化を図った。

６　予算・経費

法人化に伴い、文部科学省から附属図書館指定の予算交付が無くなり、運営費交付金として大学に一括配分されている。附属図書館の経常的経費は、大学予算の管理運営経費中の全学共通経費、その一般共通経費中の「図書充実費及び図書館運営費」として配分され、事項名どおり図書充実費では、学生用図書、参考図書、外国雑誌、研究用図書の購入、整理に充て、図書館運営費は庁費、建物等維持費、光熱水料、研究開発室運営費等に充当されている。

競争的資金による間接経費や総長裁量経費などの学内配分も、経常的経費だけでは不足する特別な事業や図書館活動を行うために必要であり、特に平成12年以降の電子ジャーナル、Web of Science、電子ブックの導入・維持及び目録情報の電子化事業の推進に不可欠となっている。また、平成13年度以降継続的に措置されている留学生経費も、多言語対応パソコンの導入や館内サインの改善、留学生用資料の補充などの貴重な財源となっている。

平成9～12年度に引き続き、平成16年度の科学研究費補助金を獲得し、エコ（環境共生）コレクションをデータベース化、平成13年度には田嶋記念大学図書館振興財団からの助成金で劣化マイクロフィルムの複製、修復を行い、平成15年には栄ライオンズクラブからの寄贈で、中央図書館3階に設置された留学生コーナーは、平成16年度も継続して寄付金を得るなど外部資金の導入も積極的に図っているところであるが、附属図書館の主な活動である情報資源・資料の拡充や、安全で快適な利用環境整備は、学内構成員全体の利用者に還元される公益事業であることに理解を得る必要がある。

７　情報資源・資料

大学における教育・研究のための図書館資料の整備と提供という附属図書館の役割は普遍的ともいえる。中央図書館は、４年一貫教育支援の学習図書館機能を果たすと同時に、研究図書館として学術雑誌や研究図書の提供及び全学の保存図書館機能をも担っている。

学部学生等に図書、雑誌、AV 資料等を提供する学習図書館機能の向上は、全学の要請となっており、シラバスの活用や教員推薦図書制度、蔵書整備アドバイザー制度などを活用して、授業との連携を密にし、教育・学習支援の強化に努めて全学教育に貢献している。とくに、蔵書整備アドバイザー制度は、平成 13 年度蔵書整備委員会の決定で設けられた制度で、教員のアドバイザー数十名に中央図書館の学習用図書をチェックしてもらい、その補充、更新など適切な蔵書構築を行うためのアドバイスをもらうためのものである。

研究用資料の整備では、部局での経費減で研究用図書、学術雑誌の収集力が低下しているが、中央図書館としては、研究用図書コーナー、外国文学セクションなどコレクション資料の充実を継続して進めている。文部科学省の「大型コレクション」制度の廃止により大規模な資料収集が経費的に不可能になっているが、とくに人文・社会科学系の

高額図書資料を収集する学内経費の措置を求める方針を立てている。実際、平成 17 年度には、本部の間接経費の配分により、大型コレクションの一部の収集に対する予算が手当てされることになった。

また、大学の附属図書館として、学内研究者の研究成果としての著作物、特に図書を収集することは、学生に学内研究成果を知らせると同時にその研究活動を顕彰、支援することにもつながるため、中央図書館 3 階に教官著作コーナーを設置（平成 12 年）し、継続的に図書を受贈して、展示・提供している。また、平成 16 年度には、原爆資料に特色のある飯島宗一元学長の蔵書を受贈し、その一部を中央図書館 4 階ホールの一角に展示した。名古屋大学出版会からも刊行資料の寄贈を受けており、あらゆる機会を活用して資料の収集に努める必要がある。

一方、外国雑誌経費、特にその値上がり対策は、電子ジャーナル経費とも関連して、重要な課題となっている。大学本部の間接経費などで多くの支援を得ているが、これは学術情報基盤整備の重要な要素、コンテンツ整備でもあり、その財源確保については、新たなルール作りが必要となっている。（電子資料については、参照→第１部Ⅱ２）

８　サービス

【開館日・開館時間】昭和 56 年、現中央図書館が新営され、旧教養部の学習図書館機能と合体する形で古川図書館（現古川記念館）から移転した時に採用された「全館自由接架方式」により、中央図書館の開架図書率は 80%を超え、Ａ規模大学附属図書館（本館）の平均 30%未満と比べ非常に高くなっている。開架図書率が高いということは、資料へのアクセスが簡便である反面、配架の乱れの整理が大きな負担となるが、原則月に 1 日の書架整理のための休館日を設けながらも年間開館日数・開館時間が、Ａ規模大学附属図書館（本館）の中でトップクラスになっている。

平成 12 年 11 月、朝の開館時間を 9 時から授業開始時間である 8 時 45 分に早め、平成 13 年 9 月には夜間開館を 20 時から 22 時まで延長した。平成 14 年 8 月には、夏季期間の土日開館を始め、平成 15 年 8 月には平日夜間開館を実施（22 時まで）した。さらに平成 16 年 2 月から蔵書点検期間の休館を廃止し、また平成 16 年度からの学年暦変更に合わせ, 年末の開館を 12 月 27 日まで 1 日延長するなど、来館利用に対するサービス向上に努めている。

【資料・情報の入手のし易さ】資料の探し易さ、使い易さは、開架図書率が高いこと、あるいは書架整理だけでは不充分である。特に多量の蔵書を有する当館では、何が何処にあるか、今使われているのか、いないのか、資料の目録所在情報や貸出情報などを的確に提供することが利用支援として重要になっている。そのため、本学では図書総合目録を電子化する（遡及入力）事業を平成 9 年度から開始、現在では学内に所蔵する図書資料の 80%以上が検索可能になっている。

さらに、利用者が直接図書館へ来館しなくても、資料や情報を入手できる手段を提供するために、図書館ホームページ（Web サイト）からの情報発信が有効かつ重要になっている（参照→第１部Ⅱ２）。

【図書館情報リテラシー支援】新入生や、留学生の入学に合わせて行っている図書館ガイダンスは、図書館へ来館しての利用を主な対象にしているが、電子ジャーナルや電

子ブックなど電子情報資源の整備が進む中、その方面での有効な利用を促進するための図書館情報リテラシー教育への支援が附属図書館に強く求められている。中央図書館、部局図書室では、多様な規模、内容の利用講習会や Web 上での利用ツールの提供などを進め、以下のようなプログラムを実施し、拡充に努めている。

① 新入生や留学生に対する図書館ガイダンスの実施
② TA (Teaching Assistant) ガイダンスの実施　※授業「基礎セミナーA」の 1 コマで、受講生に文献探索法を教える TA に対するインストラクション
③ 電子ジャーナル・データベース利用説明会
④ パスファインダーなどホームページにおける情報リテラシー支援機能の強化

研究開発室教員が担当する全学教育科目「基礎セミナー」では、「図書館情報リテラシーを身につける」を授業目的に、情報リテラシー教育とプレゼンテーション指導が行われている。そこでは、図書館の担当係が、レファレンス資料や情報検索用データベースの説明など演習の支援をしているほか、医学部では既に 20 年近く情報リテラシー教育を目的とした科目の文献検索で協力してきており、また農学部でも、平成 15 年度から情報メディアの授業の中で図書館職員が演習の支援を行っている。

【個別サービスメニュー：貸出・複写・ILL・その他】

平成14年4月には休日開館での貸出サービスを開始、平成17年1月には利用者が自身で図書を借り出すことができる図書自動貸出機を導入するなど貸出サービス環境を改善してきている。

館内複写のサービス環境についても、平成14年1月にコイン式複写機を設置、平成15年12月には中央図書館地階に私費用複写機を増設するなどの改善をしてきている。しかし、校費や私費の別によって使用できる複写機が異なるなど改善すべき点も残っており、複写機の再配置を18年度から実施の予定で検討している。

ILLについては、国大図協等国内外の機関が協力して進めているGIF（Global ILL Framework）プロジェクトの日米ILL/DD(Inter-Library Loan/Document Delivery)や日韓ILL/DDに参加し、海外からの文献情報入手にも積極的に対応してきている。最近、特に課題となっているNACSIS-CAT/ILLの品質管理や、ILLの互恵精神に反することのないよう、また複雑化している著作権の遵守にも留意しながら正確で迅速なサービスに努める必要がある。

その他、平成11年度から始めた海外衛星放送「世界の窓」で、CNNjと放送大学授業の視聴開始（平成15年）するなど海外の時事情報、1,000人を超える留学生には母国情報の提供にも配慮している。

９　地域連携・社会貢献

【東海地区図書館協議会】地域連携の活動として、特筆すべきは公共図書館と大学図書館との連携協力に関する事項である。平成 16 年 1 月 14 日東海地区公共図書館・大学図書館館長懇談会が開かれ、東海 4 県の公共図書館と大学図書館との連携の推進について協議され、その具体案作成のため連携協力検討部会が設置された。同年 11 月 1 日再び同懇談会が開催され、東海地区図書館協議会が設置された。平行して、連携協力検討部会での検討が、平成 16 年に 3 回、平成 17 年には 2 回行われた。

まず、お互いに所蔵する資料の相互利用に関する連携を強化するため、「資料相互利用に関する協定」を結び（平成 17 年 5 月）、実施していくこととなった。相互利用に関

《企画展示活動一覧》

年　　度	展示会・講演会	会　　期
平成12年度	附属図書館所蔵貴重資料展示会 （平成12年度春季）	平成12年5月29日～6月2日
	「川とともに生きてきた　―高木家文書に見る木曽三川流域の歴史・環境・技術―」 ◎記念講演会 （秋山晶則、羽賀祥二、大熊孝）	平成13年3月1日～3月10日 平成13年3月2日
平成13年度	附属図書館所蔵貴重資料展示会 （平成13年度春季）	平成13年4月5日～4月27日
	伊藤圭介没後100年記念シンポジウム「江戸から明治の自然科学を拓いた人」 （遠藤正治、山内一信、岩崎鐵志、西川輝昭、土井康弘、山口隆男、岸野俊彦、大場秀章、杉山寛行）	平成13年9月16日 【名古屋市博物館】で共催
平成14年度	「古書は語る　―館蔵の江戸文学資料を中心に―」 ◎ギャラリートーク	平成14年10月16日～10月31日 平成14年10月26日
	「川とともに生きてきたⅡ　―新発見史料・北高木家関係文書に見る木曽三川流域の歴史・環境・技術―」 ◎講演会「地域資料の高度活用に向けて」 （秋山晶則、溝口常俊、逸村裕）	平成15年3月7日～3月16日 平成15年3月8日
平成15年度	伊藤圭介生誕200年記念展示会「錦窠図譜の世界　―幕末・明治の博物誌―」 ◎講演会「博物誌の時代と伊藤圭介」	平成15年10月17日～30日 平成15年10月18日
	2004年春季特別展「和歌（うた）の書物―新古今和歌集とその周辺―」 ◎ギャラリートーク「新古今和歌集とその時代」（田中喜美春、島田修三、大井田晴彦）	平成16年3月23日～4月21日 平成16年4月17日
平成16年度	2004年秋季特別展「川とともに生きてきたⅢ―東高木家文書にみる木曽三川流域の歴史・環境・技術―」（文部科学省地域貢献特別支援事業成果報告） ◎講演会「宝暦治水の」虚像と実像（秋山晶則、内倉昭文、羽賀祥二） ◎古文書講座（秋山晶則）	平成16年10月29日～11月12日 平成16年10月30日 平成16年11月6日
平成17年度	2005年春季特別展「地球環境史を考える―所蔵資料とエコ（環境共生）コレクション・データベースでみる自然・災害・社会―」 ◎講演会（溝口常俊、伊藤安男、大浦由美） ◎資料講座（秋山晶則）	平成17年4月4日～27日 平成17年4月9日 平成17年4月16日
	2005年企画展「説話（はなし）の書物　―小林文庫本を中心に―」 ◎ギャラリートーク「説話集、その豊穣なる世界」（渡辺信和、阿部泰郎）	平成17年6月17日～7月8日 平成17年7月2日

しては、料金の精算や搬送など今後の改善点も考えられ、また、高度な資質獲得のための職員研修やデジタル・レファレンス(Digital Reference Service)業務面での連携など検討課題は多くあり、今後の継続的課題になっている。

その他、愛知淑徳大学からの依頼により、図書館情報学科の学生に対する図書館実習の場を提供、例年 5 日間程度 5～10 名の学生を受入れ、講義や実習を行っている。

【学外者への図書館開放】学外者への図書館開放も進められている。平成14年7月には他大学等からの来館利用者について、紹介状の持参条件を廃止し、平成14年10月には学外者への貸出サービスを正式に開始した。平成16年4月には、学外利用者を「一般の者」として利用資格に加え、手続きを簡素化した。これは、国立大学法人化され、適用される情報公開法が「行政機関」から「独立行政法人等」のものに変更となる際に、改めて附属図書館が保有する図書館資料を「行政文書」の対象外とするための指定を総務大臣から受ける措置でもあった。

また、平成17年7月29日から施行された「文字・活字文化振興法」でも、大学等の図書館の一般公衆への開放など、地域における文字・活字文化の振興に貢献する活動を促進するよう努めることが規定されており、今後益々一般公衆に対する図書館の開放措置を講ずる必要がある。

【企画展示活動】かねてより、一般市民への生涯学習支援の観点から、保有する知的資産を広く社会に還元することが社会貢献として求められてきた。そのような知的資産と一般市民が接触する絶好の機会として、資料や研究成果を公開し、説明する展示会や講演会などの行事は有効である。平成12年に4階のファカルティラウンジ（教官談話室）を展示室に模様替えし、平成13年6月から常設展示を開始し、平成14年度からは春秋年2回、中央図書館で定期的に開催するようになった。平成12年度以降に実施した展示会・講演会は、左頁の表《企画展示活動一覧》のようになっている。これらには、研究開発室の教員のみならず、文学研究科を始めとする関係研究者の協力が大きな力となっている。

元来、学外からの入館者は本学の卒業者や他の教育研究機関の所属者がその多くを占めていたが、平成15、16年度では一般市民の入館が格段に増えた。このような取り組みの効果といえる。

【附属図書館友の会】また、平成16年10月には、「附属図書館友の会」を発足させた。これは附属図書館に集う人達が、単に図書館を利用するだけでなく、相互交流や情報交換できる場を設け、そこに参加してもらうことから始め、いずれ主体的に参画してもらえるようにと考えられたもので、現在約200人の会員が登録されている。友の会会員は、館外貸出可能な中央図書館利用証の発行を受ける他、学外への文献複写依頼も申込むことができる。また、附属図書館や研究開発室の広報誌、「館燈」「Libst Newsletter」が送られるほか、附属図書館で開催される春秋の展示会や研究開発室のオープンレクチャーへの招待も受けられるようになっている。現在、友の会自体のイベントも検討されており、今後の育成が課題となっている。

10　自己点検評価・外部評価

附属図書館の自己点検活動は、必要に応じて自己評価実施委員会を立ち上げ、平成4年度の第1回、平成7年度の第2回に引き続き、第3回を平成12年度に行い、その報告書を平

成13年11月に作成した。翌月には、4名の外部評価委員による初めての外部評価を実施し、その報告書を平成14年2月に刊行した。なお、第2、3回の自己点検評価では、利用者アンケートの実施も行われ、その調査結果も報告書に含まれている。

その後、数年の間に評価手法も進化し、海外ではLibQUAL+プロジェクトが取り組まれており、我が国でも、国際規格ISO11620:1998を基にしたJIS規格X0812:2002「図書館パフォーマンス指標」が制定されるなど標準化が進められている。国立大学図書館協議会（現協会）のボランティア組織である「法人格取得問題に関する附属図書館懇談会」、これは伊藤附属図書館長が世話人を務め、主導的な役割を果たしたものであるが、その下に置かれた「図書館評価指標WG」が、国立大学法人化を契機に、評価を受けることを前提とした目標・計画の項目を設定するために重要な評価項目と評価指標について検討した結果を「大学図書館における評価指標報告書(Version0)」(2002)としてまとめている。

今回、第４回目の自己点検評価を行うに当たっては、上記「Version0」を参考にした評価指標を採用し、また、LibQUAL+の手法を用いた利用者アンケートを実施するなど新たな試みをしている。統計数を指標化することで、他機関等でも同様な指標を用いた場合に比較し易くなることや、単なる意識調査ではなく、サービス品質測定、利用者満足度調査を意識したものとなっている。

Ⅱ　電子図書館的機能の概況

印刷体、マイクロ形態、AV 資料など物理的な資料、施設・設備を基盤とする従来型図書館機能に加え、ハイブリッド図書館を構成する情報機器、情報ネットワークを基盤とするもう１つの電子図書館的機能について特記する必要がある。

前回の自己点検評価の時点では、ホームページの機能や構成、情報利用環境の他、コンテンツとしては、平成９年度からの目録情報の電子化事業（遡及入力）、CD-ROM データベースを中心とした二次情報の提供、伊藤圭介文庫や紀要の画像データベースなどが主で、電子ジャーナルについては、OCLC FirstSearch ECO、SD-21 の導入が記述されている程度だった。その後、先に触れた国大図協に置かれた電子ジャーナル・タスクフォースの獅子奮迅の活躍により、全国の国立大学への電子ジャーナル導入が格段に進展することとなった。この活動で、名古屋大学附属図書館が大きく貢献したことは特筆に値する。

電子図書館的機能の充実・強化の方策も、目録や資料の電子化、学術デジタル・コンテンツの整備などから学術機関リポジトリ構築へと進化しつつある。学内の研究成果を機関として保存し、情報発信する学術機関リポジトリについては、平成 16 年度国立情報学研究所と 6 国立大学附属図書館との共同事業「学術機関リポジトリソフトウェア実装実験プロジェクト」に参加し、プロトタイプシステムの構築を行い、平成 17 年度からは試験運用を開始した。

１　目録情報・資料の電子化

【目録情報の電子化】目録業務の電算化に伴い、原則昭和 62 年度以降に受入れた図書資料は目録情報が電子化されている。それ以前に受入れられた資料についても、遡って目録情報を電子化する、いわゆる遡及入力事業を平成 9 年度から、総長裁量経費や科学研究費を得て開始した。平成 13 年度からは、間接経費の配分を受け、平成 20 年度末に

終了する 8 年計画で事業を継続している。

また、これまで和漢古典籍整理専門委員会が中心となって行ってきた和漢古典籍整理事業の一つの成果として＜名大システム＞古典籍内容記述的データベースを平成 15 年に作成、平成 17 年 4 月から公開した。これは、従来の和古書目録の簡略さに比べ、内容や書誌が適切に判るように踏込んだ内容の記述が図られており、資料に記された人名や印記などについて、検索を駆使することによって、資料間の有機的なつながりが発見できるなど、新たな可能性が期待されている。

【資料の電子化】平成 16 年度に科学研究費・研究成果公開促進費を得て、高木家文書を電子化、高木家文書デジタルライブラリーを作成、以前の伊藤圭介文庫の画像コレクション・データベースも機能を向上させ、併せて「エコ（環境共生）コレクション・データベース」を構築した。今後さらに、自然災害史関係のデータベースを加えて完成させる予定になっている。

2　学術デジタル・コンテンツの整備

【電子ジャーナル】平成 12 年 1 月に 2 千タイトルを導入したのを皮切りに、積極的に拡充を図り、現在 1 万 2 千タイトル以上の学術雑誌を、いつでも、学内のどこからでもオンラインで利用できる状況になっている。実際、全文表示をしての利用件数も、平成 12 年度の約 14 万件から平成 16 年度の約 86 万件へと約 6 倍になっている。

これは、先にも触れたように電子ジャーナル・タスクフォースの主査館として、全国の国立大学における電子ジャーナル導入のために、世界的に見ても有数の大規模コンソーシアムを国立大学附属図書館人の力で形成した結果と言える。また、この活動が文部科学省に評価され、平成 13～15 年度に電子ジャーナル導入経費が措置され、多くの国立大学で電子ジャーナル元年を迎えることができた。しかし、依然外国学術雑誌の価格は上昇し続けており、厳しい財政事情から購読中止を余儀なくされている状況がある。購読中止は、特に全タイトルアクセス（出版社が発行するすべての電子ジャーナルを利用できる契約）モデルの条件に関わり、購読規模の維持を困難にする要素でもある。電子ジャーナル・タスクフォースは、年平均約 9%値上げされてきた外国学術雑誌価格を 5%以下に抑えるキャップ制を出版社に認めさせるなど、出版社協議により、できるだけ有利な条件で導入、維持できるよう貢献してきたが、今後の安定的な学術デジタル・コンテンツの整備の観点から、契約モデルの見直し、各大学での財源確保など、商業出版社に依存しないオープンアクセスや学術機関リポジトリなどの動きを注視しつつ難しい舵取りが求められている。

【電子レファレンス・電子ブック】索引誌、抄録誌などの二次資料や辞書・事典類などの参考図書（レファレンスブック）も電子出版化が進んでいる。代表的な二次情報データベースである Web of Science を始め、CD-ROM 版を含めて約 30 タイトルを導入しているが、その利用（検索）件数は年間約 11 万件になっている。

また、平成 16 年度には新たに電子ブック（NetLibrary, Gale Virtual Reference Library）約 4,000 タイトルを導入し、e-learning など新たな活用方策への対応を始めている。いずれも、主だったものは、間接経費や総長裁量経費で導入されており、学術デジタル・コンテンツ収集の大きな原動力になっている。

【Web サービス】電子ジャーナルなど学術デジタル・コンテンツの収集、提供は、学内における教育研究活動の糧であり、活発な利用から、新たな研究成果の生産へと還流させなければならない。そのために、利用支援、とりわけ、附属図書館サイトから利用できる種々の学術デジタル・コンテンツについて、利用者の判り易さ、アクセスのし易さ、利用のし易さという観点に立った Web サービスの提供は、図書館ができることであり、またなすべきことであろう。利用の窓口（ポータル）機能を提供する「名古屋大学電子ジャーナル・アクセスサービス」は、各出版社やアグリゲータ(Aggregator:電子ジャーナル提供業者)が提供する電子ジャーナルを、利用者に統合的に案内し、主題やタイトルでも探せるよう工夫した試みになっている他、関係掛と各部局図書室等の電子ジャーナル連絡会担当者が障害窓口になるなどの作業を行っている。

貸出や複写、ILL、参考調査などの通常業務でも、カウンターでの対面サービスだけでなく、今後は Web を経由したサービスの伸長が想定され、対面と Web、複数の窓口に対応した処理体制とそれに合致した附属図書館サイト（ホームページ）の提供が課題になりつつあり、図書館情報リテラシー支援の他、Web サービスの障害対応を含めた高度化を志向する必要がある。

【学術機関リポジトリ】外国雑誌価格の高騰に象徴される、商業出版社が独占する学術出版・流通体制への対抗として出てきた「オープンアクセス化」や SPARC（Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition）の活動と共に、大学などの機関で生み出された研究成果を収集、保存（セルフ・アーカイビング）し、情報発信することにより大学の知名度を高め、かつ社会に対する大学の教育研究活動の説明責任を保証しようという学術機関リポジトリの動きが加速しつつある。

当館でも、科学研究費により学内紀要の一部を画像データベース化した「紀要情報照会システム」を作成、また国立情報学研究所（NII）の CiNii（学術雑誌公開支援事業）へ学内紀要論文の提供などを行ってきた。これらのコンテンツを手始めに、平成 17 年度計画にもある名古屋大学機関リポジトリ（仮称）の試験運用の作業を進めている。

Ⅲ　研究開発室の概況

１　管理運営

【設置目的】今日の学術情報をめぐる環境は、インターネットと電子ジャーナルの普及、学術出版の商業化と寡占状況、オープンアクセス運動や機関リポジトリの構築など、かつてない規模と速度で激変している。その環境激変の中で、大学全体として高度な教育と研究を実践し、社会的貢献を果たしていくには、学術情報基盤を支える大学図書館機能の高度化、とりわけ学術情報の収集・組織化・発信機能の強化が喫緊の課題となっている。

こうした課題に応えるため，平成 4 年以来設けられていた調査研究室を改組・拡充し、平成 13 年 4 月、学内共通基盤施設として附属図書館研究開発室が設置された（開設記念式典・講演会は平成 14 年 1 月 24 日）。以後、急速に進む学術情報の電子化に対応すべく、大学における学術情報の収集・保存・提供等、教育研究支援活動の高度化にむけた研究開発を行うとともに、ユーザーの視点を踏まえた図書館情報リテラシー教育を進めている。

その柱となるのが、従来型図書館機能と電子図書館機能の融合による高度な学術情報サービスを可能とするハイブリッド図書館の研究開発である。このハイブリッド図書館構想は、本学の教育・研究活動の活性化、及びその成果発信・返戻（フィードバック）による社会貢献や新たなシーズの創成等の前提となる学術情報環境の抜本的強化のため、附属図書館の中期目標・中期計画における重要なミッションとして実現をめざすものである。研究開発室は、このハイブリッド図書館の研究開発を通じて、全学的な学術情報サービスの高度化に貢献するとともに、その成果を広く社会に還元することを目的としている。

【組織】設置当初は、室長 1、専任教官 2（助教授 1、助手 1）、兼任教官 1 名の 4 人体制であったが、翌平成 14 年には関係教官 3 名と情報連携基盤センター学術情報開発研究部門の教官 4 名の兼任教官を加え 11 名体制に、平成 15 年 4 月には、さらに 1 名の兼任教官を加え、現在 12 名の教員体制に強化されている。

〔室員名簿〕

室　　長

伊藤義人(2001年4月～)	附属図書館長、工学研究科教授（構造工学・環境システム工学）

室　　員

逸村　裕(2002年1月～)	附属図書館研究開発室専任助教授（図書館情報学）
秋山晶則(2001年8月～)	附属図書館研究開発室専任助手（日本史学）
杉山寛行(2001年6月～)	文学研究科教授（中国文学・中国思想史学）
塩村　耕(2003年4月～)	文学研究科教授（日本文学）
長尾伸一(2002年4月～)	経済学研究科教授（社会思想・経済思想・政治経済学）
山内一信(2002年4月～)	医学系研究科教授（医療管理情報学）
溝口常俊(2002年4月～)	環境学研究科教授（歴史地理学）
吉川正俊(2002年6月～)	情報連携基盤センター教授（データ工学）
松原茂樹(2002年4月～)	情報連携基盤センター助教授（知能情報学）

津田知子(2002年4月～)　　情報連携基盤センター助手（計算機性能評価）
平野　靖(2002年5月～)　　情報連携基盤センター助教授（画像処理工学）

なお、欧米では、大学図書館に教員が配置されているのが常態であり、わが国でも文部科学省学術審議会学術情報部会の報告（平成 5 年）以来、徐々に整備されつつある。しかし、国立大学図書館協議会の図書館組織・機構特別委員会が出した「大学図書館の組織・機構及び業務の改善に関するアンケート調査（平成 11 年 5 月）」によれば、図書館内に研究開発のための組織があるのは 17 大学であり、専任教官を配置しているところは２大学にとどまる。本学は、兼任を含めた室員数でも最大規模であり、専任及び兼任室員の緊密な協力のもとに進められる活動は、他大学の注目するところとなっている。

【目標・計画】附属図書館の中期目標・中期計画において、研究に関する目標・計画のうち、研究開発室に関するミッションとして「ハイブリッド図書館を実現するための技術とシステムの開発研究を行う」を挙げている。そこでは、研究開発室の組織と人材の充実、専任教員２名以上の確保と兼任教員の整備、そして学内の学術情報連携部局と連携した研究とハイブリッド図書館構築にむけた開発研究の推進が謳われている。実施状況の詳細は、２研究開発、４研究成果で触れる。

【管理運営】研究開発室の人事・財政等の重要事項は、全学の部局代表者からなる附属図書館商議員会で審議・決定されるが、研究開発に必要な個別事項等については、室員全員が参加する教官会（平成 16 年度以降 FM（Faculty Meeting）と改称。）で協議している。平成 13 年度は 3 回、平成 14 年度以降は年 10～11 回（原則月 1 回）を開き、①プロジェクトや情報連携基盤センターとの連携など組織運営、②予算要求や執行状況、③研究・教育内容、④展示会や講演会の企画等を含めた社会連携、図書館連携、国際連携、⑤研究成果の広報等について検討した。

また、平成 14 年 12 月以来、懇談会（第 12 回からオープンレクチャーと改称。）を 16 回実施してきた。当初は、研究開発室員のそれぞれの研究内容について、室員及び附属図書館職員にレクチャーしてきたが、平成 16 年度以降は「友の会」会員へも案内を拡げるなど、社会貢献、公開講座的な色彩を帯びてきている。

【予算・経費】附属図書館研究開発室の運営・研究のための予算は、大学予算の全学共通経費からの配分及び教育研究費をベースとしているが、新規プロジェクトやハイブリッド図書館システムの研究開発には、学内外の競争的資金を得ることが不可欠となっている。

この間、総長裁量経費（教育研究改善プロジェクト経費、平成 13-16）の配分をうけて伊藤圭介文庫の画像データベース高度化や「大学所蔵学術資料・標本類の緊急保存対策プロジェクト」を実施したほか、赤﨑記念研究奨励事業（平成 15-16）として「ネットワークコラボレーション機能による地域社会像の探求」に取り組んできた。また、地域貢献特別支援事業費（文部科学省、平成 14-16）により、岐阜県上石津町及び愛知県と連携して「北高木家関係古文書の整理・研究」及びそれを発展させた「木曽三川流域の歴史情報資源の研究と活用」の各プロジェクトを進めるとともに、科学研究費補助金（研究成果公開促進費、平成 15-16）「エコ・コレクションデータベースの構築」を得て、これらのプロジェクト成果を Web 上でも公開している。このほか、河川環境管理財団等から奨学寄付金の受入れも行っているが、今後の研究展開には、科学研究費補助金（基盤

研究ほか）などの獲得も課題となる。

2　研究開発

(1)ハイブリッド図書館の研究開発

〔平成 13-14 年度〕

学術情報の発信強化を課題とする大学図書館機能の高度化＝ハイブリッド図書館実現のため、平成 13 年度にコアプラン「名古屋大学学術情報コラボレーションシステム計画」をたちあげ、その第一フェーズとして、ダブリンコア形式によるメタデータ付与と蓄積システムの運用を行った。対象資料は、高木家文書及び新たに発見された北高木家文書に含まれる治水関係資料であり、13,000 件のメタデータと 1,800 件の画像データを搭載したプロトタイプシステムを構築し、平成 15 年 3 月 7～16 日の展示会「川とともに生きてきたⅡ」にて試験公開を行っている。

その研究成果として、情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん）2002（PNC Annual Conference and Joint Meetings 2002- PNC/ECAI/IPSJ-SIGCH/EBTI、2002.9.21）にて「名古屋大学学術情報コラボレーションシステム構想」を発表した。

〔平成 15-16 年度〕

平成 15 年度には、コラボレーションシステム構想を発展させ、大学ポータルシステムを活用した環境整備の進捗にあわせ、その成果を学術的な情報としてフィードバックさせるとともに、大学における教育研究環境の高度化につなげる相互作用的な情報循環系として「学術ナレッジ・ファクトリー（AKF: Academic Knowledge Factory）構想」を提案し、Nagoya University Digital Library Workshop(2004.3.8)にてその骨子を講演するなど、具体化にむけた研究を開始した。

なお、本構想における技術的課題については、兼任室員の協力のもと、情報連携基盤センターとも連携して、XML データベースや検索エンジンの開発、デジタル文書の検索・自動分類・要約、コンテンツの自動アーカイビング、安全な電子認証基盤の実現といったテーマの研究開発を行っており、大学構成員の研究成果データベースシステムの構築、名古屋大学ドメイン内の Web コンテンツアーカイビング、全学認証基盤の運用などで確実な進展をみせている。

また、以下に触れるように、学術情報流通をめぐっては、電子ジャーナルのほか、e-Learning や電子ブック、機関リポジトリ、デジタル・レファレンス・サービスなどへの対応も迫られており、電子図書館機能の再構築にむけた検討を開始し、学内外にて活動を行っている。

関連して、専任助教授はじめ複数の室員は、附属図書館が進める「学術機関リポジトリ」構想に参画するとともに、学内の「学術情報開発専門委員会」、「大学ポータル専門委員会」にも委員として参加するなど、本学の学術情報戦略に対し重い責任を担っている。

一方、コンテンツ分野でも、専任・兼任室員の協力のもと、古文書や和漢古典籍、西洋近代思想資料を中心に、附属図書館所蔵資料の整理・研究がさらに進展しており（内容詳細→（5））、AKF 構想の一翼を担うデジタル・コンテンツとして整備されつつある。

伊藤圭介文庫については、17,389 件の画像データベースを公開してきたが、高度活用にむけて 5,000 点余のメタデータ付与とシステム拡張を行い、平成 15 年 10 月から「錦窠図譜の世界」と題したデジタルライブラリーを構築・公開した。この過程で得られた知見をもとに、研究発表「電子図書館化を通じての伊藤圭介文庫世界の再構成」（第 51 回日本図書館情報学会研究大会）及び「近代科学黎明期における学術情報の共有化とその限界－伊藤圭介文庫資料を中心に－」（2003 年度三田図書館・情報学会研究大会）を行った。

和漢古典籍については、神宮皇学館文庫の和古書や青木文庫などの漢籍を対象とする悉皆調査の成果の一部として、「名大システム・古典籍内容記述的データベース」を構築し、平成 15 年度から ID 認証による限定公開を開始している（平成 17 年 4 月から一般公開、レコード数：2,382 件）。

さらに、高木家文書については、コンテンツと検索機能の拡張を行ったうえで、2004 年秋季特別展では、58,665 件のメタデータ及び文書画像や高精細画像を搭載した「高木家文書デジタルライブラリー」を構築・試験公開したほか、平成 16 年度科学研究費補助金・研究成果公開促進費「エコ（環境共生）コレクション・データベースの構築」をうけ、伊藤圭介文庫や自然災害情報を組み込んだ統合データベースとして本格運用する準備を行った（平成 17 年 4 月からインターネット公開）。

なお、平成 15 年 3 月からは、岐阜県上石津町及び愛知県教育委員会と連携して、コラボレーション環境構築に向けた協議を開始するとともに、兼任室員の研究成果をもとに GIS（地理情報システム）の開発・実装を進めるなど、地域貢献に役立つ電子図書館機能の一層の強化を図っている。公開される統合データベースは、こうした大学と地域自治体の連携に加え、学外の資料所蔵者（個人）も含めた協力により構築されるもので、他例をみない意欲的な取り組みとして注目されている。

(2) 情報技術と図書館

図書館を取り巻く情報技術とネットワークの進展には著しいものがあり、図書館機能の高度化には、臨場的な調査活動をふまえた研究開発が不可欠である。以下では、専任助教授による活動を例示する。

平成 14 年度は、「文部科学省委託事業：情報化に対応した公共図書館職員の研修の在り方」に参加し、調査研究委員として活動を行った。ここでは，海外事例調査、文献調査に加え、全国の公共図書館員 1,000 名を対象とした、研修歴調査及び今後の研修に望むこと、特に e-Learning での可能性についての質問紙票調査を行っている。また、全国 10 都道県 17 名の公共図書館員からもヒアリング調査を実施した。この結果は、『情報化に対応した公共図書館職員の研修の在り方に関する調査（平成 15 年 3 月）』として刊行されている。

また、科学研究費補助金（基盤研究（A））「情報専門職の養成にむけた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究（平成 15-17 年度）」に研究協力者として参加し、調査結果をふまえ学会発表を行った。さらに科学研究費補助金（基盤研究(B)）「電子環境下における大学図書館機能の再検討（平成 16-18 年度）に研究分担者として参加し、調査活動と海外での発表を含めた活動を行っている。

(3) 学術情報流通のマネージメント

国立大学図書館での本格的な電子図書館機能の開発は、平成 8 年の学術審議会「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について（建議）」に前後して、いくつかの大学において「先導的電子図書館プロジェクト」の形で電子図書館機能の実験が行われたことに始まる。その事業には、多大な予算がつぎこまれてきたが、今日の目からすると、十全な成果を挙げているとは言い難い。その原因には、電子図書館化を進めた大学図書館の多くが、大学全体の教育研究活動との直接的な連携に欠けたこと、電子化対象資料が一部に偏ったこと、メタデータ付与の不十分さ、検索機能の弱さなど、インターネット時代の電子情報の長所を活かしきれていないことなどが挙げられ、結果として、本来、電子図書館が持つべき機能を十分備えるに至らなかったのである。他方で、電子ジャーナルの急速な普及、欧米における e-Learning の浸透、さらには電子ブックの大学教育への影響など、学術情報をめぐる多様な動きが展開されていった。

研究開発室では、こうした内外の動向に対し、より有効な電子図書館的機能の強化のため、デジタル・レファレンス・サービスのような新しい人的図書館サービス機能の拡充も視野に入れつつ、実地調査と文献調査を行い、ハイブリッド図書館機能の強化にむけた検討を行っている。さらに、附属図書館への電子ブック導入への協力、情報連携基盤センターとの連携によるネットワークとコンテンツの活用についての計画立案、情報メディアセンター、情報連携基盤センター及び関連部局との連携協力による名古屋大学 OCW（Open Course Ware）発足のための準備活動にも従事している。また、電子教材の活用の実施に関連し、名古屋大学出版会との協力を模索するなどの活動を行っている。

加えて、新しい情報技術が、どのように学生に影響を与え、どのような情報探索行動として表れているのか、その実態についても調査研究を行い、学会報告を行っている。

(4) 図書館と情報専門職の将来像

電子ジャーナルの急速な普及とネットワーク情報源の急増、サーチエンジンの一般への普及と図書館を巡る情報環境の変化とともに、そこにおける図書館員及び情報専門職の役割、あり方も大きく変化しつつある。国際的にも英国図書館・情報専門家協会(CILIP)での「専門職知識の実体（Body of Professional Knowledge）」、米国での「新世紀当初の図書館情報学/情報科学研究の枠組(Broad Groupings of LIS/IS Research at the Beginning of the New Century)」等において議論が活発に行われている。日本においても同様な複数の研究活動が行われており、名古屋大学附属図書館研究開発室室員もその一部を担い、調査研究活動を進めている。これらは上記(2)における調査及び学術図書館員の専門職としての現状と可能性のテーマと併せ、学会等で中間報告を示したところである。

(5) 附属図書館所蔵資料及び関連資料の整理・研究

ハイブリッド図書館の構築及び学術情報発信機能を強化するには、その情報内容となる学術情報資源（コンテンツ）の研究開発がきわめて重要である。附属図書館研究開発室では、これまで全学的に進められてきた成果もふまえながら、ハイブリッド図書館構築の一環として、貴重資料及び関連資料のコンテンツ開発（資料の整理・研究、デジタルアーカイブズ構築などでの活用）を進めている。以下では、（1）で触れたデジタル活用を除く、資料の整理・研究について述べる。

なお、高木家文書はじめ附属図書館が所蔵する資料は、単に歴史学などの人文学個別

分野にとどまるものではなく、政治・経済・教育・文化・科学・技術・環境など、広範囲にわたって高い学術的価値を有する文化情報資源である。こうした貴重な資料の全容を把握し、それぞれの資料としての特性や保存状況に応じて分類整理を行い、その学術情報を教育研究に活用できるよう整備・公開するとともに、将来にわたって適切に保存・管理していくことは、学術的要請であるとともに大学に課せられた社会的責務であり、個性ある大学及び大学図書館を創る上でも重要な課題となる。

古文書関係では、平成 14 年度は、附属図書館所蔵高木家（西高木）文書とともに、新たに岐阜県内で発見された北高木家関係文書の整理・研究を行った。整理できたのは、西高木家文書が 760 点、北高木家文書が 2,400 点である。

北高木家関係文書は、附属図書館所蔵高木家文書とは密接不可分の関係にあることから、高木家屋敷遺構等の保存・活用を進めてきた岐阜県上石津町とも連携し、歴史情報資源の保存と地域研究の活性化にむけた取り組みを進めている。その成果を広く公開するため、平成 15 年 3 月 7 日から 10 日間の日程で、「川とともに生きてきたⅡ－新発見史料・北高木家文書にみる木曽三川流域の歴史・環境・技術－」と題する展示会及び講演会を開催した。

平成 15 年度は、西高木文書 780 点、北高木家文書 1,600 点の整理・研究を実施するとともに、未調査史料であり、附属図書館所蔵高木家文書と同規模の治水文書を有する東高木家文書（個人蔵）についても約 3,000 点の概要調査を行い、貴重な河川絵図などの発見をみた。また、伊藤圭介文庫についても、文庫資料の本格的な調査を開始し、博物誌をめぐる情報世界の探求をとおして 2003 年秋季特別展を企画し、学会発表を行ったほか、関連する牧野富太郎文庫所蔵資料の調査を行った。

なお、伊藤圭介については、兼任室員による伊藤圭介日記の解読作業、尾張本草学や医学思想の検証等が継続的に行われており、その蓄積は、伊藤圭介文庫資料の内在的理解にたったコンテンツ開発に大きく貢献している。

平成 16 年度は、附属図書館所蔵高木家文書と密接に関わる関連史料群（いずれも個人蔵）や附属図書館所蔵岡田家文書の整理・研究を重点的に行った。うち北高木家文書は、4,500 点の悉皆調査を終え、目録刊行にむけたデータ整備を行ったほか、東高木家文書については、総数 6,000 点にのぼる治水史料の調査・研究成果として、2004 年秋季特別展「川とともに生きてきたⅢ－東高木家文書にみる木曽三川流域の歴史・環境・技術」を開催するとともに、講演会「宝暦治水の虚像と実像」及び特別展古文書講座を企画・実施した。また、尾張地域における貴重な新田開発資料となる岡田家文書（推定 15,000 点）についても、内容調査に着手するなど、悉皆調査にむけた準備を開始している（2005 年春季特別展で成果公開）。

関連して、平成 16 年度から科学研究費補助金（基盤研究(C)）「近世中期における自然災害と地域社会」の交付をうけ、災害と地域文化の関連について研究を開始したほか、河川環境管理財団からも平成 16 年度河川整備基金の助成をうけ、「木曽三川流域における水害と地域社会の対応」について研究を進めている。

和漢古典籍については、附属図書館和漢古典籍整理委員会と協力し、神宮皇学館文庫の古典籍や青木正児文庫をはじめとする漢籍の悉皆調査及びデータベース化を継続実施している。

ホッブズコレクションをはじめとする西洋近代思想資料についても、中央図書館はじめ各部局図書室の資料調査を実施し、データベース化をめざした総合目録の作成、資料の利用方法改善にむけた検討を開始しており、その成果の一部は、2005 年秋季特別展で公開される予定である。

このような資料研究や成果公開とあわせて考えなければならないのが、資料の保存と管理の問題である。平成 16 年度から、研究開発室を中心に、総長裁量経費による「大学所蔵学術資料・標本類の緊急保存対策プロジェクト」をたちあげ、人為的・物理的・生物的な被害を引き起こさないための、多様な防除手段を複合した保存管理システム構築にむけた基礎的調査・研究を進めている。

今後は、こうした諸成果をふまえ、関係自治体や資料所蔵者とも連携し、保存問題にも配慮しながら、さらなる学術情報資源の掘り起こしと特色ある資料の受入れ、学術ナレッジ・ファクトリーと融合したデジタルアーカイブズによる公開を進め、附属図書館が担う文化の継承と社会への貢献の役割を強力に推進していくことが課題となる。

(6) 主題知識を持った図書館情報リテラシー教育

研究開発室が課題とする主題知識を持った図書館員(Subject Librarian)養成にむけた図書館情報リテラシー教育の一環として、室員が、東海地区図書館協議会での講演や愛知淑徳大学図書館実習生への講義を担当したほか、図書館職員による古典籍取り扱い能力の向上のための勉強会「古書の会」にも室員が参加し、助言協力した。さらに、図書雑誌から電子情報源をも含むコレクション構築や、利用者への情報支援を行うデジタル・レファレンス・サービスなどについても、業務改善にむけた調査及び研究開発を行っている。

3　教育・プロジェクト・社会貢献活動

【教育】専任教員のうち、助教授は以下の授業を担当している。

大学院人間情報学研究科	電子社会システム論特論（後期）（平成 14～15 年度）
教養教育院	基礎セミナーB（後期）（平成 15 年度）
教養教育院	基礎セミナーA（前期）（平成 16 年度）
大学院文学研究科	図書館情報学（後期）（平成 16 年度）

また、助手の担当は以下の通りである。

文学部	日本史学演習（通年）（平成 14～16 年度）
教養教育院（全学教育科目）	情報公開と文書資料（分担）（平成 14～16 年度）

【プロジェクト】平成 14 年度には「新発見史料・北高木家文書の整理・研究」が、平成 15～16 年度には「木曽三川流域の歴史情報資源の研究と活用」が地域貢献特別支援事業のプロジェクトとして認められた。それぞれの成果は、特別展として公開され、展示図録も刊行している。平成 15 年度には「ネットワークコラボレーション機能による地域社会像の探求」が赤﨑記念研究奨励事業として認められ、また、平成 16 年度には、教育研究改革・改善プロジェクト経費（総長裁量経費）を得て、「大学所蔵学術資料・標本類の緊急保存対策プロジェクト」を行った他、科学研究費・研究成果公開促進費を得て「エコ（環境共生）コレクション・データベース」を構築した。これは、伊藤圭介文庫の画像コレクション・データベースと高木家文書デジタルライブラリー等から成ってお

り、今後さらに自然災害資料等のコンテンツを増強し、学術ナレッジ・ファクトリーの構成要素として発展させていく計画である。

【社会貢献活動】貴重資料の整理・保存・研究を含めたハイブリッド図書館の研究開発において生まれた成果の一部は、図録などに集約され、企画展示（参照→第 1 部Ｉ９）などで配布されているほか、併設される講演会などでも一般参加者に対して発表され、研究成果を社会に還元する社会貢献の役割を果たしているが、研究開発室は、展示内容や講演会の準備など、こうした活動を実質的に企画する重責も担っている。

また、学外では政府機関や関係団体などの委員を務めるほか、学協会や地域での研究発表、講演などの活動（→4.研究成果）を行っている。具体例をあげれば、室長（図書館長）は、「科学技術・学術審議会　研究計画・評価分科会　情報科学技術委員会デジタル研究情報基盤ワーキンググループ」の委員として平成 14 年 3 月「学術情報の流通基盤の充実について（審議のまとめ）」に携わったほか、平成 17 年１月からは、「科学技術・学術審議会 学術分科会 学術研究推進部会　学術情報基盤作業部会　大学図書館･学術資料ワーキンググループ」委員となり、体系的な資料所在情報の整備、相互利用の促進等による図書館資源の効果的･効率的活用、情報の受・発信機能等大学図書館の新たな役割、電子ジャーナル化の進展及び電子ジャーナル経費等資料費増大への対応について答申の準備を行っている。

また、専任助教授は、平成 14 年 4 月より、文部科学省研究振興局学術調査官を務めており、主として国立大学図書館の情報システム、電子図書館機能についての学術調査、学術情報流通についての専門知識の提供等を担当している。この間、平成 15 年 3 月には『学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善について（文部科学省研究振興局情報課）』の調査・編集に携わったほか、平成 17 年１月からは「科学技術・学術審議会 学術分科会 学術研究推進部会　学術情報基盤作業部会」及びその下部組織である「大学図書館･学術資料ワーキンググループ」及び「学術情報発信ワーキンググループ」の委員を務めている。ここでは日本の学術研究の国際競争力を維持向上、持続可能な仕組みの構築、利活用の促進、学術情報流通機能の戦略的強化、国立大学の法人化・大学財政の緊縮化への対応等をテーマとして答申の取りまとめにあたっている。このほか、岐阜県図書館協議会委員（平成 14 年 7 月より）も務めており、新 AV コーナーの施設整備及び運営の在り方についての答申（平成 15 年）などを行っている。

さらに、コンテンツ分野に関連して、専任助手が、愛知県史編纂委員会調査執筆委員として、県史編纂にむけた県内外での史料調査・研究に協力しており、各兼任室員も、愛知県史や名古屋市史、藤岡町史などの自治体史編纂事業に従事するほか、西尾市岩瀬文庫所蔵古典籍の悉皆調査・データベース化及び展示・講演会への協力を行うなど、文化資源活用にむけた地域連携のため、積極的な活動を展開している。

【国際連携活動】国内のみならず、外国の研究者と連携した活動も積極的に行っている。平成 14 年 12 月 11 日には、Yi-Tzuu Chien 博士の講演会を情報連携基盤センターと共催したほか、平成 16 年３月８日には「名古屋大学電子図書館国際ワークショップ」を開催し、ニュージーランド、タイ、中国そして日本の電子図書館研究者４名が講演、議論を行った。そして、平成 17 年 8 月 25～26 日には、180 名（海外から 15 名の参加を含む。）が出席した名古屋大学電子図書館国際会議を開催した。

【広報・刊行物】次のリストのとおり、広報誌 Libst Newsletter の他、各年度の研究成果や活動成果を報告するための年次報告、研究開発室の研究成果とあわせ、広く大学図書館機能に関する開発研究成果を全国から募集・発信する媒体として研究年報を定期的に刊行している。

① Libst Newsletter No.1(2002.9.1)－No.6(2005.6.1)＋
② 名古屋大学附属図書館研究年報第１号(2002)－第３号(2004)＋
③ 名古屋大学附属図書館研究開発室年次報告第１号(2002)－第３号(2004)＋
④ 研究開発室パンフレット（和文：2001.1，2005.4，英文：2005.8）

４ 研究成果

【著書】

1) 伊藤義人．電子図書館と電子ジャーナル．東京，丸善， 2004，p.51-78.
2) 逸村裕．ＩＴ時代の公共図書館：地域情報拠点としての付加価値サービス実現に向けて．東京，高度情報映像センター，2002，p.42-47.
3) 逸村裕．デジタル・ライブラリアン研究会．「情報化に対応した公共図書館職員の研修の在り方に関する調査」報告書．東京，デジタル・ライブラリアン研究会，2003,p.61-70,80-89.
4) 秋山晶則ほか．愛知県史 資料編 18．2003，1119p.
5) 塩村耕．近世前期文学の研究：伝記・書誌・出版．東京，若草書房,2004,397p.
6) 長尾伸一．トマス・リード：実在論・幾何学・ユートピア．名古屋，名古屋大学出版会,2004,303p.
7) 山内一信．伊藤圭介の医学と医療．生誕二百年記念・伊藤圭介の生涯とその業績．名古屋市東山植物園，2003,p.128-131.
8) 溝口常俊．日本近世・近代の畑作地域史研究．名古屋，名古屋大学出版会,2002,440p.
9) Masatoshi，Yoshikawa．et al． “XML Databases”．Nontraditional Database Systems． The Information Processing Society of Japan and Taylor & Francis, 2002.（ISBN 0-415-30206-4）
10) Shunsuke，Uemura；Masatoshi，Yoshikawa；Toshiyuki，Amagasa．et al．“Heijo -- A Video Database System for Retrieving Semantically Coherent Video Information”． Nontraditional Database Systems． The Information Processing Society of Japan and Taylor & Francis，，2002.（ISBN 0-415-30206-4）
11) Marcela， Genero ； Fabio， Grandi ； Willem-Jan van den Heuvel ； John， Krogstie,；Kalle ， Lyytinen；Heinrich，C. Mayr；Jim， Nelson；Antoni，Olive； Mario， Piattini ； Geert， Poels ； John， Roddick ； Keng， Siau ； Masatoshi， Yoshikawa；Eric，S.K.Yu (Eds.). “Advanced Conceptual Modeling Techniques ER 2002 Workshops，ECDM，MobIMod，IWCMQ，and eCOMO，Tampere，Finland，October 7-11，2002 Revised Papers”．Springer-Verlag，October 2003， （Lecture Notes in Computer Science，2784）．（ISBN 3-540-20255-2）（編著）
12)鳥脇純一郎，平野靖，長谷川純一 ．“3 次元集中度：3 次元空間中の線集中パターンの定量化”．形の科学百科事典． 形の科学会編．東京，朝倉書店,2004,p.747-750.

【論文】

1) 伊藤義人．図書館の電子化と連携について．中部図書館学会誌．vol.45,2003,p.1-8.
2) 伊藤義人．法人化を見据えた図書館経営について．大学図書館研究 70 号別冊，2003,p.13-17.
3) Itoh, Y. Establishment of the consortia of electronic journals in Japan, IFLA Preconference. 2003, Munich, German, 12p.
4) 伊藤義人．アジア諸国における情報サービスの利用　第 4 回：日本　電子ジャーナルコンソーシアム形成と今後の問題点について「国立大学図書館協会電子ジャーナルタスクフォースの活動」．情報管理．vol.4, no.12, 2004,p.786-795.
5) 逸村裕，秋山晶則．名古屋大学学術情報コラボレーションシステム構想．人文科学とコンピュータシンポジウム論文集．no.13, 2002, p43-46.
6) 逸村裕．大学図書館職員の意識改革を．名古屋大学附属図書館研究年報．no.1, 2003, p.9-17.
7) 逸村裕．学術ナレッジ・ファクトリー構想．館燈．no.153, 2004, p.1-2.
8) 逸村裕．利用教育の重要性について問題提起．私立大学図書館協会東海地区協議会「館灯」．no.43, 2004, p.1-5.
9) 秋山晶則．旗本交代寄合高木家の治水役儀をめぐって.名古屋大学博物館報告．no.16, 2001,p.119-128.
10) 秋山晶則．近世における猿投神社の存在形態.愛知県史研究．no.5,2001,p.169-175.
11) 秋山晶則．古文書の整理と保存．東海地区図書館協議会誌．no.47, 2002, p.2-9.
12) 秋山晶則．木曽三川流域治水史再考．名古屋大学附属図書館研究年報．no.1, 2003, p.50-59.
13) 秋山晶則．寛保期における木曽三川流域調査．名古屋大学附属図書館研究年報．no.2, 2004, p.101-114.
14) 小田寛貴，秋山晶則．加速器質量分析法による「源頼朝袖判御教書」の 14C年代測定．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書ＸＶＩ，2005,p.198-205.
15) 杉山寛行．中西深斎『傷寒論辨正』訳注稿(1)．名古屋大学附属図書館研究年報.no.1,2003,p.19-27.
16) 杉山寛行．伊藤圭介と医学.錦窠図譜の世界.名古屋大学附属図書館,2003,p.44-45.
17) 塩村耕．西鶴と実録．江戸文学．no.29,2003,p.66-69.
18) 塩村耕．西鶴と伊勢の御師.東海近世,no.14,2004,p.85-91.
19) Zhang W, Yamauchi K, Mizuno S, Zhang R, Huang D. Analysis of cost and assessment of computerized patient record system in Japan based on questionnaire survey. Medical Informatics and the Internet in Medicine. vol.29, 2004, p.229-238.
20) 山田英雄，山内一信．医聖永田徳本－その医術の位置づけと P.A.パラケルススとの対比を中心として．日本医史学雑誌.vol.51,2005,p.272-273.
21) 溝口常俊．明治 17 年の地籍図・地籍帳からみた尾張の景観と開発.愛知県史研究．no.6,2002,p.47-64.
22) 溝口常俊．“明治期における尾張の土地評価体系：G.W.Skinner の中心周辺論再考”．

農村空間の研究（上）．石原潤編．東京，大明堂，2003，p.291-308.
23) 富田啓介，溝口常俊．愛知県半田市における溜池とその四囲の環境変化.1998-2002.愛知県史研究.no.8,2004,p.240-248.
24) 溝口常俊．カーストの壁．地理．no.49-6,2004,p.21-26.
25) 溝口常俊．木曽三川の治水．地図情報．vol.24,no.1,2004,p.22-26.
26) 溝口常俊．“近世日本の地誌と地域像：尾張藩撰地誌の世界”．記録と記憶の比較文化史．若尾祐司，羽賀祥二編．名古屋，名古屋大学出版会,2005,p.89-112.
27) 溝口常俊．“歴史家の郷土語り：地域論と県民性”．記録と記憶の比較文化史．若尾祐司，羽賀祥二編．名古屋，名古屋大学出版会,2005,p.358-387.
28) Tsunetoshi，Mizoguchi．“Spatial Differentiation in the Nobi Core: Villages and Towns in Owari, Central Japan, 1672-1822”．Journal of the School of Letters (JSL). vol.1,Nagoya University,2005,p.127-148.
29) 兵清弘，天笠俊之，吉川正俊，植村俊亮．“ウェアラブルコンピューティング環境における MPEG-7 出版を利用した映像検索システム”．日本データベース学会 Letters. vol.1, no.2, 2003, p. 28-31.
30) 江田毅晴，天笠俊之，吉川正俊，植村俊亮．“XML 木のための更新に強い節点ラベル付け手法”．日本データベース学会 Letters. vol. 1, no. 1, 2002, p. 35-38.
31) Fatiha，Sadat；Akira，Maeda；Masatoshi，Yoshikawa；Shunsuke，Uemura．“Exploiting and Combining Multiple Resources for Query Expansion”．IPSJ Transactions on Database, vol. 43, no. SIG9(TOD15),2002,p.39-54.
32) Junko, Tanoue；Masatoshi, Yoshikawa；Shunsuke, Uemura. “The GeneAround GO viewer”. Bioinformatics. vol. 18, no. 12, 2002,p.1705-1706.
33) Yasushi, Sakurai；Masatoshi, Yoshikawa；Shunsuke, Uemura；Haruhiko, Kojima. “Spatial Indexing of High-Dimensional Data Based on Relative Approximation”. The VLDB Journal. vol. 11, no. 2, 2002, p.93-108, DOI10.1007/s00778-002-0066-9.
34) Dao Dinh Kha；Masatoshi, Yoshikawa；Shunsuke, Uemura. “XML Content Update using Relative Region Coordinate”. IEICE Transactions on Information and Systems. vol. E87-D, no.3,2004.5, p. 771-779.
35) 的野晃整，天笠俊之，吉川正俊，植村俊亮．“接尾辞配列に基づいた RDF データのための索引手法”．情報処理学会論文誌:データベース．vol.45, no.SIG(TOD21), 2002.3,p. 50-62.
36) 鈴木優，波多野賢治，吉川正俊，植村俊亮．“検索結果を統合するための情報量の概念を考慮したスコア正規化手法”．情報処理学会論文誌：データベース．vol.45,no.SIG (TOD21),2002.3,p. 37-49.
37) 櫻井保志，吉川正俊．“ダイナミックタイムワーピングのための類似探索手法”．情報処理学会論文誌：データベース．vol.45,no.SIG(TOD21),2002.3,p. 23-36.
38) Dao Dinh Kha；Masatoshi，Yoshikawa；Shunsuke，Uemura．“A Structural Numbering Scheme for Processing Queries by Structure and Keyword on XML Data”．IEICE Transactions on Information Systems. vol. E87-D, no. 2,2004.2,p. 361-372.

39) 杉山一成，波多野賢治，吉川正俊，植村俊亮．“ハイパーリンクで結ばれた隣接ページの内容に基づく Web ページのための TF-IDF 法の改良”．電子情報通信学会論文誌．vol.J87-D-I，no.2，2004.2,p.113-125.
40) 羅勇，天笠俊之，吉川正俊，植村俊亮．“地理情報の詳細度を考慮した移動オブジェクト群への情報配信”．日本データベース学会 Letters．vol.2，no.1,2003.5，p.7-10.
41) Kazunari，Sugiyama；Kenji，Hatano；Masatoshi，Yoshikawa；Shunsuke，Uemura．“Improvement in TF-IDF scheme for Web Pages and its Retrieval Accuracy”．日本データベース学会 Letters．vol.2，no.1，2003.5,p.23-26.
42) 木村文則，前田亮，吉川正俊，植村俊亮．“Web ディレクトリの階層構造を利用した言語横断情報検索”． 日本データベース学会 Letters． vol.2,no.1，2003.5，p.71-74.
43) 波多野賢治，絹谷弘子，吉川正俊，植村俊亮．“キーワードを利用した XML 文書検索のための検索結果粒度決定法“.日本データベース学会 Letters． vol.2，no.1，2003.5,p.123-126.
44) 江田毅晴，櫻井保志，天笠俊之，吉川正俊，植村俊亮．“XML 木のための動的範囲ラベル付け手法”． 情報処理学会論文誌：データベース．vol.45，no.SIG7(TOD22)，2004.6,p.102-114.
45) 木村文則，前田亮，宮崎純，吉川正俊，植村俊亮．“Web ディレクトリを言語資源として利用した言語横断情報検索”． 情報処理学会論文誌：データベース． vol.45，no.SIG7(TOD22),2004.6,p.208-217.
46) 絹谷弘子，波多野賢治，吉川正俊，植村俊亮．“キーワードを利用した XML 文書検索”． 情報処理学会論文誌：データベース． vol.45,no.SIG7(TOD22),2004.6，p.255-273.
47) 的野晃整，天笠俊之，吉川正俊，植村俊亮．“経路式に基づく RDF データの関係データベースへの格納と検索”． 日本データベース学会 Letters．vol.3，no.1，2004.6,p.21-24.
48) Kazunari， Sugiyama；Kenji,Hatano；Masatoshi,Yoshikawa；ShunsukeUemura．“ Adaptive Web Search Considering User's Ephemeral andPersistent Preferences”． 日本データベース学会 Letters． vol.3，no.1,2004.6,p.49-52.
49) 鈴木 優，波多野 賢治，吉川 正俊，植村 俊亮，川越 恭二．“検索結果を統合するための関数選択手法”． 日本データベース学会 Letters． vol.3,no.2,2004.9,p.69-72.
50) 杉山 一成，波多野 賢治，吉川 正俊，植村 俊亮．“ユーザーからの負担なく構築したプロファイルに基づく適応的 Web 情報検索”． 電子情報通信学会論文誌．vol. J87-D-I，no. 11，2004.11,p. 975-990.
51) 的野 晃整，天笠 俊之，吉川 正俊，植村 俊亮．“経路式に基づく RDF データの関係データベースへの格納と検索”．電子情報通信学会論文誌．vol. J88-D-I，no. 3,2005.3，p. 590-603.
52) Shigeki,Matsubara；Takahisa Murase；Nobuo,Kawaguchi；Yasuyoshi,Inagaki．Stochastic Dependency Parsing of Spontaneous Japanese Spoken Language，Proceedings of 17th International Conference on Computational Linguistics，

vol. 1,2002,p. 640-645.
53) Shigeki,Matsubara ; Shinichi,Kimura ; Nobuo,Kawaguchi ; Yukiko,Yamaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki . Example-based Speech Intention Understanding and Its Application to In-Car Spoken Dialogue System . Proceedings of the 17th International Conference on Computational Linguistics. vol. 2,2002,p. 633-639.
54) 松原茂樹，河口信夫，外山勝彦，武田一哉． 音声対話コーパスの収集と利用． 人工知能学会誌. vol. 17, no.3,2002,p. 279-284.
55) Nobuo,Kawaguchi ; Kazuya,Takeda ; Shigeki,Matsubara ; Ikuya,Yokoo ; Taisuke,Ito ; Kiyoshi Tatara ; Tetsuya Shinde ; Fumitada,Itakura, CIAIR speech corpus for real world speech recognition, Proceedings of 5th Symposium on Natural Language Processing & Oriental COCOSDA Workshop 2002, p.288-295 .
56) Akira,Takagi ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki . A Corpus-based Analysis of Simultaneous Interpretation . Proceedings of 5th Symposium on Natural Language Processing & Oriental COCOSDA Worskshop 2002. p.167-174.
57) Yukiko,Yamaguchi ; Kazuaki,Ito ; Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Yasuyoshi,Inagaki. Design and Development Tool for Telephone-based Network Information System, Proceedings of the 6th World Multiconference on Systemics. Cybernetics and Informatics. vol. III,2002,p. 285-290 .
58) Shinichi,Kimura ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi ; Yukiko,Yamaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki . An Example-based Approach to Speech Intention Understanding. Proceedings of The 6th World Multiconference on Systemics. Cybernetics and Informatics. vol. IX,2002, p.348-353.
59) 加藤芳秀，松原茂樹，外山勝彦，稲垣康善． 確率文脈自由文法に基づく漸進的構文解析． 電気学会論文誌. vol.122-C, no. 12, 2002,p. 2109-2119.
60) Shigeki,Matsubara ; Akira,Takagi ; Nobuo,Kawaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki . Bilingual Spoken Language Corpus for Simultaneous Machine Interpretation Research. Proceedings of 3rd International Language Resources and Evaluation Conference. vol. I,2002,p. 153-159.
61) Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Kazuya,Takeda ; Fumitada,Itakura . Multi-Dimensional Data Acquisition for Integrated Acoustic Information Research. Proceedings of 3rd International Language Resources and Evaluation Conference. 2002,p.2043-2046.
62) 加藤芳秀，松原茂樹，外山勝彦，稲垣康善． 主辞情報付き文脈自由文法に基づく漸進的な依存構造解析． 電子情報通信学会論文誌. vol. J86-D-II, no.1,2003,p. 84-97.
63) Koichiro,Ryu ; Atsushi,Mizuno ; Shigeki,Matsubara ; Yasuyoshi,Inagaki . Incremental Japanese Spoken Language Generation in Simultaneous Machine Interpretation . Proceedings of Asian Symposium on Natural Language Processing to Overcome language Barriers. 2004,p. 91-95.
64) Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Itsuki,Kishida ; Yuki,Irie ;

Yukiko,Yamaguchi ; Kazuya,Takeda ; Fumitada,Itakura. Construction and Analysis of the Multi-Layered In-car Spoken Dialogue Corpus. Proceedings of Workshop on DSP in Mobile and Vehicular Systems . 2003.

65) Itsuki,Kishida ; Yuki,Irie ; Yukiko,Yamaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki. An Advanced Japanese Speech Corpus for In-car Spoken Dialogue Research. Proceedings of 8th European Conference on Speech Communication and Technology (Eurospeech-2003) (2003).

66) Hiroya,Murao ; Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Yukiko,Yamaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki. Example-based Spoken Dialogue System using WOZ System Log. Proceedings of 4th ACL SIGDIAL Workshop on Discourse and Dialogue, (SIGDIAL-2003), 2003,p. 140-148.

67)Yuki,Irie ; Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Itsuki,Kishida ; Yukiko,Yamaguchi ; Kazuya,Takeda ; Fumitada,Itakura ; Yasuyoshi,Inagaki . An Advanced Japanese Speech Corpus for In-car Spoken Dialogue Research . Proceedings of Oriental COCOSDA-2003, 2003,p. 209-216.

68) Koichiro,Ryu ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki . Bilingual Speech Dialogue Corpus for Simultaneous Machine Interpretation Research. Proceedings of Oriental COCOSDA-2003,2003,p. 217-224.

69) Makoto,Ohara ; Shigeki,Matsubara ; Yasuyoshi,Inagaki. Automatic Extraction of Translation Patterns from Bilingual Legal Corpus, Proceedings of IEEE International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering (NLPKE-2003),2003,p. 150-157.

70) Tomohiro,Ohno ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki . Spiral Construction of Syntactically Annotated Spoken Language Corpus Proceedings of IEEE International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering (NLPKE-2003),2003,p. 477-483.

71) Tomohiro,Ohno ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki ; Robust Dependencyoshi Fujimura ; Katsunobu Itou ; Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Fumitada,Itakura. Construction and Evaluation of a Large in-car Speech Corpus. IEICE Transactions on Information and Systems. vol. E88-D, no. 3, 2005,p. 553-561.

72) Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Kazuya,Takeda ; Fumitada,Itakura. CIAIR in-car Speech Corpus -Influence of Driving Status- IEICE Transactions on Information and Systems. vol. E88-D, no. 3,2005,p. 578-582.

73) Hiroya,Murao ; Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Yasuyoshi,Inagaki . Example-based Query Generation for Spontaneous Speech. IEICE Transactions on Information and Systems. vol. E87-D, No. 2, 2005,p.324-329.

74) Yoshihide,Kato ; Shigeki,Matsubara ; Katsuhiko,Toyama ; Yasuyoshi,Inagaki . Incremental Dependency Parsing Based on Headed Context Free Grammar. Systems and Computers in Japan. vol.36, no. 2,2005,p.84-97.

75) Yuki,Irie ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi ; Yukiko,Yamaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki. Design and Evaluation of Layered Intention Tag In-Car Speech Corpus, Proceedings of Oriental-COCOSDA-2004,2004.
76) Hitomi,Tohyama ; Shigeki,Matsubara ; Koichiro,Ryu ; Nobuo,Kawaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki. CIAIR Simultaneous Interpretation Corpus. Proceedings of Oriental-COCOSDA-2004,2004.
77) Tomohiro,Ohno ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki. Robust Dependency Parsing of Spontaneous Japanese Speech and Its Evaluation. Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing,2004.
78) Yuki,Irie ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi ; Yukiko,Yamaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki. Speech Intention Understanding based on Decision Tree Learning. Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing ,2004.
79) Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Yukiko,Yamaguchi ; Kazuya,Takeda ; Fumitada,Itakura. CIAIR In-Car Speech Database. Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing,2004.
80) Hiroya,Murao ; Nobuo,Kawaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Yukiko,Yamaguchi ; Yasuyoshi,Inagaki. Example-based Spoken Dialogue System with Online Example Augmentation, Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing,2004.
81) Keita Hayashi ; Yukiko,Yamaguchi ; Shigeki,Matsubara ; Nobuo,Kawaguchi. Speech Understanding, Dialogue Management and Response Generation in Corpus-Based Spoken Dialogue System. Proceedings of 8th International Conference on Spoken Language Processing,2004.
82) Yoshihide,Kato ; Shigeki,Matsubara ; Yasuyoshi,Inagaki.Stochastically Evaluating the Validity of Partial Parse Trees in Incremental Parsing. Proceedings of ACL-2004 Workshop on Incremental Parsing: Bringing Engineering and Cognition Together,2004,p. 18-25.
83) 梶田将司,平野靖,間瀬健二. uPortal による大学ポータルの構築.平成 14 年度文部科学省情報処理教育研究集会論文集. 2002,p.577-580.
84) 梶田将司,平野靖,間瀬健二. uPortal を用いた名古屋大学ポータルの構築.情報処理学会分散システム／インターネット運用技術シンポジウム 2003 論文集. 2003,p.7-12.

【その他著作】

1) 伊藤義人. 大学における図書館の位置づけ.金沢大学附属図書館報「こだま」.no.148, 2003,p.4-6.
2) 伊藤義人. 大学図書館経営における電子図書館機能の基盤整備について.国立国会図書館月報.no.504,2003, p.3.
3) 伊藤義人. 附属図書館長に再任されて.名古屋大学附属図書館報「館燈」. no.147,

2003,p.1-7.
4) 伊藤義人．学術情報の収集･発信の企画と運用.平成 15 年度大学図書館職員長期研修講義要綱.2003,p.77-80.
5) 伊藤義人．名古屋大学附属図書館研究年報の創刊にあたって.名古屋大学附属図書館研究年報.no.1, 2003,巻頭.
6) 伊藤義人．変革の時代における図書館経営戦略「存在感ある図書館を目指して」.第 19 回大学図書館研究集会資料.日本図書館協会大学図書館部会･国公私立大学図書館協力委員会.2003,p.7-20.
7) 伊藤義人．大学図書館の最近の状況と公共図書館との連携協力について.愛知図書館協会会報.2003,4p.
8) 伊藤義人．IFLA Preconference 2003 に参加して.名古屋大学附属図書館報「館燈」. no.149,2003,p.1-3.
9) 伊藤義人．学問の魅力，学生，生協への期待「研究科長･部局長へのインタビュー⑥」. かけはし.no.250,2003,p.14-27.
10) 伊藤義人．変革の時代における図書館経営戦略「存在感ある図書館を目指して」.第 19 回大学図書館研究集会記録．日本図書館協会大学図書館部会･国公私立大学図書館協力委員会．2003,p.9-25.
11) 伊藤義人．法人化後の附属図書館経営について:競争と連携.名古屋大学附属図書館報「館燈」. no.151, 2004,p.1-3.
12) 伊藤義人．学術情報の収集・発信の企画と運用．平成 16 年度大学図書館職員長期研修講義要綱．2004,p.66-71.
13) 伊藤義人．名古屋大学の情報戦略について． センターニュース．名古屋大学情報連携基盤センター．巻頭言．第 10 号,vol.4, no.1,2004,p.1-2.
14) 伊藤義人．平野眞一総長に聞く：図書館は知の宝庫．学術の基盤．名古屋大学附属図書館報「館燈」. no.154,2004,p.1-4.
15) 伊藤義人．基調報告（1）電子ジャーナルの円滑な導入と安定的な運営の実現に向けての取り組み:国立大学図書館協会電子ジャーナル･タスクフォースの活動．京都大学附属図書館報「静修」. vol.41, no.2/3 合併号,2004,p.2-8.
16) 伊藤義人．なごや平和公園の自然．なごや平和公園自然観察会．2005.1， p.105.
17) 逸村裕．デジタル時代の図書館．Libst Newsletter. no.1, 2002, p.3-6.
18) 逸村裕．情報リテラシー支援の取り組みについて．館燈．no.150, 2003. p.1-3.
19) 逸村裕・秋山晶則．伊藤圭介生誕 200 年記念展示会にむけて．Libst Newsletter. no.3, 2003. p.6-8.
20) 逸村裕．Nagoya University Knowledge Factory System. Libst Newsletter. no.5, 2004, p.4.
21) 秋山晶則．川とともに生きてきたⅡ（展示図録）.名古屋大学附属図書館．2003, 32p.
22) 秋山晶則．高木家文書調査報告（補遺 11）．名古屋大学附属図書館研究年報．no.1, 2003, p.34-64..
23) 秋山晶則．高木家文書調査報告（補遺 12）．名古屋大学附属図書館研究年報．no.2, 2004． p.71-76.

24) 秋山晶則．木曽三川流域における歴史情報資源の研究と活用．Libst Newsletter. no.4，2003．p.4-6.
25) 秋山晶則．伊藤圭介生誕 200 年記念展示会・講演会を終えて．館燈．no.150，2003．p.7-8.
26) 秋山晶則．近世後期における伊勢神宮の政治史的研究（科学研究費報告書）． 2003，36p.
27) 秋山晶則．2004 年秋季特別展にむけて．Libst Newsletter. no.5，2004．p.7.
28) 秋山晶則．「川とともに生きてきたⅢ」を終えて．館燈．no.154，2004,p.6-7.
29) 秋山晶則．川とともに生きてきたⅢ（展示図録）.名古屋大学附属図書館．2004,37p.
30) 秋山晶則．源頼朝袖判御教書の AMS14C 年代.日本前近代社会における下級官人の研究（科学研究費報告書）．2005,p.111-114.
31) 塩村耕．展示図録『こんな本があった！－岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展Ⅰ－』．2004，23p.
32) 塩村耕．みえの古典・好色五人女.中日新聞三重版．2003.6.10.
33) 塩村耕．みえの古典・地獄物語.中日新聞三重版．2003.10.7.
34) 塩村耕．岩瀬文庫で教えられたこと.中日新聞夕刊．2004.3.11.
35) 塩村耕．展示図録『こんな本があった！－岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展Ⅱ－』．2005,21p.
36) 塩村耕．古書三昧：岩瀬文庫悉皆調査奮戦記.あおぎり．no.2.名古屋大学文学部・文学研究科同窓会 NewsLetter．2005,p.8-9.
37) 塩村耕．岩瀬文庫.今、開かれる文庫の魅力(名古屋大学大学院文学研究科シンポジウム報告書)．2005.
38) 山内一信．圭介の決意．江戸から明治の自然科学を拓いた人．名古屋大学附属図書館,2001,p.6-10.
39) 遠藤正治，種田祐司，土井康弘，蒲生英博，山内一信，西田佐知子，逸村裕，塩村耕，秋山晶則，神谷　智．錦窠図譜の世界（展示図録）．名古屋大学附属図書館．2003,52p.
40) 溝口常俊．速水融著「近代移行期の人口と歴史」ミネルバ書房.人口学研究．no.31，2002,p.156-159.
41) 溝口常俊．島畑の幸.あじくりげ.東海しにせの会．2002,p.39-42.
42) 溝口常俊．甦る地域空間：尾張と美濃の近世・近代.Libst Newsletter.no.3,2003,p.3-6.
43) 溝口常俊．開発と援助:バングラデシュの 87 年洪水に遭遇して.人間・社会環境学構築ワークショップ報告書.名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学．2004，p.29-51.
44) 溝口常俊．木曽三川の治水史と高木家文書河川絵図.伊勢湾とその流入地域の環境データソースデータブック（2004 拡張版）.名古屋大学環境学研究科持続性学プロジェクト・地球環境フォーラム 21．2004,p.106-112.
45) 溝口常俊．江戸・明治期における地誌の図像化による創造的地域論.科学研究費報告書．2004,123p.
46) 溝口常俊．速水融『江戸農民の暮しと人生－歴史人口学入門－』麗澤大学出版会.

2002.人口学研究. no.32,2003,p.75-76.

47) 溝口常俊. 米家泰作『中・近世山村の景観と構造』校倉書房,2002.歴史地理学,no.214,2003,p.47-50.

48) 溝口常俊. 村落.人文地理.no.56-3,2004,p.262-264.

49) 溝口常俊. 大塚柳太郎編『ソロモン諸島－最後の熱帯林－』東京大学出版会、2004,人口学研究,no.34,2004,p.46-47.

50) 平野靖 . 入門 LDAP 認証(1) - 準備 -, 名古屋大学情報連携基盤センターニュース,no.10,2004,p.33-46.

【学会発表】

1) Hiroshi Itsumura ; Masanori Akiyama. The design plan for the Nagoya University information collaboration system. IPSJ symposium series vol.2002, no.13. p.43-46.(情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん）2002（PNC Annual Conference and Joint Meetings 2002- PNC/ECAI/IPSJ-SIGCH/EBTI. 2002.9.21.

2) 逸村裕, 秋山晶則, 石川寛, 河合正樹, 長屋隆幸, 船戸公子, 若松克尚. 電子図書館化を通じての伊藤圭介文庫世界の再構成. 第 51 回日本図書館情報学会研究大会. 2003.10.26.

3) 逸村裕, 秋山晶則, 石川寛, 河合正樹, 長屋隆幸, 船戸公子, 若松克尚. 近代科学黎明期における学術情報の共有化とその限界：伊藤圭介文庫資料を中心に. 2003 年度三田図書館・情報学会研究大会. 2003.11.8.

4) 種市淳子, 逸村裕. 短期大学生の情報探索行動の分析.三田図書館・情報学会研究大会. 2004.10.9.

5) 逸村裕. 大学図書館における情報専門職に関する調査：LIPER 大学調査班中間報告. 日本図書館情報学会研究大会.2004.11.6.(共同発表)

6) Hiroshi Itsumura ; Institutional repositories in Japanese national universities . historical and philosophical reflections. SPARC Meetings. Institutional Repositories : The Next Stage. November 18,2004. Washington, D.C. (共同発表)

7) 溝口常俊. 近世屋久島の家族と経済.歴史地理学会.和歌山市民会館,2002.5.25.

8) Tsunetoshi , Mizoguchi . Household and Economy in Yakushima Island, Southeast Japan, 1726. Social Science History Association Meeting at Saint Louis, USA, 2002.10.24-27.

9) Tsunetoshi , Mizoguchi . “ Historical Geography of Shifting Cultivation in Shirakawa-go, Central Japan ”. Social Science History Association 2003 at Baltimore. USA, 2003.11.13-17.

10) Tsunetoshi , Mizoguchi . “ Household and Economy in Yakushima Island, Southwest Edge of Japan, 1726 ”. International Conference of Historical Geographers 2003 at Auckland. New Zealand, 2003.12.9-13.

11) Tsunetoshi, Mizoguchi. “ Precious Topographies in Premodern Japan ”. Europe

Social Science History Association at Berlin, Germany, 2004.3.24-27.
12）Tsunetoshi, Mizoguchi. “Marriage and Labour Migration in Kai Province during the Tokugawa Era,” Social Sience History Association at Chicago. USA, 2004.11.19.
13）溝口常俊. 近世津山における町人の家族構成. 歴史地理学会. 松江, 2004.7.3
14）溝口常俊. 近世屋久島の複合家族と「婿問い婚」.比較家族史学会.京都大学,2004.10.23
15）溝口常俊. バングラデシュにおける壺作りカーストの生業と通婚.日本地理学会. 青山学院大学,2005.3.28
16）Toshiyuki,Amagasa；Masatoshi,Yoshikawa；Shunsuke,Uemura. “QRS: A Robust Numbering Scheme for XML Documents” (poster). 19th International Conference on Data Engineering(ICDE 2003). Bangalore,India, March 5-8, 2003.
17）Kenji,Hatano；Hiroko,Kinutani；Masahiro,Watanabe；Masatoshi,Yoshikawa；Shunsuke,Uemura. “An Appropriate Unit of Retrieval Results for XML Document Retrieval”. INEX 2002 Workshop,p.66-71, Wadern, Germany, December 2002.
18）Fatiha,Sadat；Masatoshi,Yoshikawa；Shunsuke,Uemura. “Cross-Language Information Retrieval Using Multiple Resources and Combinations for Query Expansion”. Second International Conference on Advances in Information Systems (ADVIS2002), Lecture Notes in Computer Science (LNCS), Springer-Verlag, vol. 2457, p.114-122, Izmir, Turkey, October 23-25, 2002.
19）Fatiha,Sadat；Masatoshi,Yoshikawa；Shunsuke,Uemura. ““Exploiting Thesauri and Hierarchical Categories in Cross-Language Information Retrieval”. 5th International Conference on Text, Speech and Dialogue (TSD2002), Lecture Notes in Computer Science (LNCS),Springer-Verlag, vol. 2448, p.139-146, Brno, Czech Republic,September 9-10, 2002.
20）Kazunari,Sugiyama；Kenji,Hatano；Masatoshi,Yoshikawa；Shunsuke,Uemura. “A Method of Improving Feature Vector for Web Pages Reflecting the Con tents of their Out-linked Pages”. 13th International Conference on Database and Expert Systems Applications (DEXA2002),Lecture Notes in Computer Science (LNCS), Springer-Verlag, vol. 2453,p. 891-901, Aix-en-Provence, France, September 2-6, 2002.
21）Takamasa , Ueda；Toshiyuki,Amagasa；Masatoshi,Yoshikawa；Shunsuke,Uemura. “A System for Retrieval and Digest Creation of Video Data Based on Geographic Objects”, 13th International Conference on Database and Expert Systems Applications (DEXA2002), Lecture Notes in Computer Science (LNCS), Springer-Verlag, vol. 2453, p. 768-778, Aix-en-Provence, France, September 2-6, 2002.
22）Kenji,Hatano；Hiroko,Kinutani；Masatoshi,Yoshikawa；Shunsuke,Uemura. “Information Retrieval System for XML Documents”. 13th International Conference on Database and Expert Systems Applications (DEXA2002), Lecture

Notes in Computer Science (LNCS),Springer-Verlag, Vol. 2453, p. 758-767, Aix-en-Provence, France, September 2-6, 2002.
23) Dao Dinh Kha ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. " Application of rUID in Processing XML Queries on Structure and Keyword ". 13th International Conference on Database and Expert Systems Applications (DEXA2002), Lecture Notes in Computer Science (LNCS), Springer-Verlag, Vol. 2453, p. 279-289, Aix-en-Provence, France, September 2-6, 2002.
24) Fatiha,Sadat ; Akira,Maeda ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. " A Combined Statistical Query Term Disambiguation in Cross-Language Information Retrieval ". The Third International Workshop on Natural Language and Information Systems (NLIS2002), in conjunction with the 13th International Conference on Database and Expert Systems Applications (DEXA2002), p. 251-255, Aix-en-Provence, France, September 2-3, 2002.
25) Junko Tanoue ; Noboru Matoba ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. " GeneAround: A Browsing System for Gene Annotation Using XML Technologies ". The Third International Conference on Web-Age Information Management (WAIM'02), regular paper, Lecture Notes in Computer Science (LNCS), Springer-Verlag, vol. 2419, pp. 236-246, Beijing, August 11 - 13, 2002.
26) Fatiha,Sadat ; Akira,Maeda ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. " "Statistical Query Disambiguation, Translation and Expansion in Cross-Language Information Retrieval ". In Proceedings of the LREC 2002 Workshop on Using Semantics for Information Retrieval and Filtering: State of the Art and Future Research, Las Palmas, Spain, May-June 2002.
27) Kenji,Hatano ; Hiroko,Kinutani ; Masahiro,Watanabe ; Yasuhiro Mori ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. " Keyword-based XML Fragment Retrieval: Experimental Evaluation based on INEX 2003 Relevance Assessments ". Proceedings of the 2nd Workshop of the Initiative for the Evaluation of XML Retrieval (INEX), March 2004.
28) Takeharu, Eda ; Yasushi, Sakurai ; Toshiyuki,Amagasa ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. " Dynamic Range Labeling for XML Trees, " International Workshop on Database Technologies for Handling XML information on the Web (dataX) in conjunction with 9th International Conference on Extending Database Technology (EDBT 2004),Heraklion – Crete, Greece, p. 61-75, March 14, 2004.
29) Akiyoshi Matono ; Toshiyuki,Amagasa ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. " An efficient pathway search using an indexing scheme for RDF ", (poster), 2nd NAIST Bio-COE International Symposium Molecular Network in Cellular Signal Transduction and Environment Responses, January 19 and 20, 2004.
30) Kazunari,Sugiyama ; Kenji,Hatano ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. " Extracting Information on Protein-Protein Interactions from Biological

Literature Based on Machine Learning Approaches" (poster),2nd NAIST Bio-COE International Symposium Molecular Network in Cellular Signal Transduction and Environment Responses, January 19 and 20,2004.
31) Kazunari,Sugiyama ; Kenji,Hatano ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. "Extracting Information on Protein-Protein Interactions from Biological Literature Based on Machine Learning Approaches", The 14th International Conference on Genome Informatics (GIW2003), Yokohama,Japan, p. 699-700, December 14-17, 2003.
32) Akiyoshi, Matono ; Toshiyuki,Amagasa ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. "An Efficient Pathway Search using an Indexing Scheme for RDF" (poster), The 14th International Conference on Genome Informatics (GIW2003), Yokohama, Japan, p.374-375, December 14-17,2003.
33) Akiyoshi, Matono ; Toshiyuki,Amagasa ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. "An Indexing Scheme for RDF and RDF Schema based on Suffix Arrays". First International Workshop on Semantic Web and Databases (SWDB) co-located with 29th International Conference on Very Large Data Bases (VLDB2003), p. 151-168, Berlin, Germany, September 7-8, 2003.
34) Fuminori,Kimura ; Akira,Maeda ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. "Cross- Language Information Retrieval using Web Directories". IEEE Pacific Rim Conference on Communications,Computers and Signal Processing (PACRIM '03), p.911-914, Victoria,B.C. Canada, August 28-30, 2003.
35) Yu , Suzuki ; Kenji,Hatano ; Masaki Takano ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. "An Information Filtering System for Portable Computers". IEEE Pacific Rim Conference on Communications, Computers and Signal Processing (PACRIM '03), p. 907-910, Victoria,B.C. Canada, August 28-30, 2003.
36) Youg,Luo ; Toshiyuki,Amagasa ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. "Broadcasting Geographic Information with Levels-of-Details to Moving Objects". IEEE Pacific Rim Conference on Communications,Computers and Signal Processing (PACRIM '03), p.891-894, Victoria,B.C. Canada, August 28-30, 2003.
37) Kazunari,Sugiyama ; Kenji,Hatano ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. "Refinement of TF-IDF Schemes for Web Pages using their Hyperlinked Neighboring Pages". The 14th Conference on Hypertext and Hypermedia (HT'03), p. 198-207, Nottingham, UK, August 26-30, 2003.
38) Fatiha, Sadat ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. "Enhancing Cross-language Information Retrieval by an Automatic Acquisition of Bilingual Terminology from Comparable Corpora" (poster), 26th Annual International ACM SIGIR Conference on Research and Development in Information Retrieval (SIGIR 2003), Toronto,Canada, July 28 - August 1, 2003.
39) Fatiha,Sadat ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. "Bilingual Terminology

Acquisition from Comparable Corpora and Phrasal Translation to Cross-Language Information Retrieval ” (Interactive Poster and Demonstration Session), 41st Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL 2003), p. 141-144,Sapporo, Japan, July 7-12, 2003.

40) Fatiha,Sadat ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. “ Learning Bilingual Translations from Comparable Corpora to Cross-Language Information Retrieval: Hybrid Statistics-based and Linguistics-based Approach ” . The 6th International Workshop on Information Retrieval with Asian Languages (IRAL2003) in conjunction with the 41st Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL 2003),p.57-64,Sapporo, Japan, July 7, 2003.

41) Fuminori,Kimura ; Akira,Maeda ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura . “ Cross-Language Information Retrieval Based on Category Matching Between Language Versions of a Web Directory ” (poster), The 6th International Workshop on Information Retrieval with Asian Languages (IRAL2003) in conjunction with the 41st Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL 2003), p.153-159,Sapporo, Japan, July 7, 2003.

42) Toshiyuki,Amagasa ; Kiyohiro,Hyo ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. “ A Scheme for Managing Metadata about Video Data recorded by Wearable Cameras, ” The 2nd CREST Workshop on Advanced Computing and Communicating Techniques for Wearable Information Playing, p. 50-56, Nara, Japan, May 23-24, 2003.

43) Youg,Luo ; Toshiyuki,Amagasa ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. “ Integrating Levels-of-Details into Geographic Information for Efficient Information Delivery , ” The 2nd CREST Workshop on Advanced Computing and Communicating Techniques for Wearable Information Playing, p. 23-29, Nara, Japan, May 23-24, 2003.

44) Kazunari,Sugiyama ; Kenji,Hatano ; Masatoshi,Yoshikawa ; ShunsukeUemura . “ User-Oriented Adaptive Web Information Retrieval based onImplicit Observations ” (short paper), The 6th Asia Pacific WebConference (APWeb'04), LNCS, vol. 3007, p. 636-643, Hangzhou, China,April 2004.

45) Kazunari,Sugiyama ; Kenji,Hatano ; Masatoshi,Yoshikawa. “ Adaptive Web Search Based on User Profile Constructed without AnyEffort from Users ” , The 13th International World Wide Web Conference(WWW2004), p. 675-684, New York, NY, USA, May 17-22, 2004.

46) Dao Dinh Kha ; Masatoshi,Yoshikawa. “ XML Query Processing usingSPIDER", Proceedings of the First Korea Japan Database Workshop,p. 108-114, Seoul, Korea, August 3-4, 2004.

47) Dao Dinh Kha ; Masatoshi,Yoshikawa. “ XML Query Processing usinga Schema-based Numbering Scheme ” , Second International XML DatabaseSymposium (XSym 2004), p. 21-34, Toronto, Canada, August 29-30 2004.

48) Vilas, Wuwongse ; Masatoshi,Yoshikawa. “ Towards A Language forMetadata

Schemas for Interoperability”, International Conference onDublin Core and Metadata Applications 2004 (DC 2004), Shanghai, China,October 11-14, 2004.
49) Fuminori,Kimura ; Akira,Maeda ; Jun,Miyazaki ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. “Cross-Language Information Retrieval using WebDirectories as a Linguistic Resource”, Asia Information Retrieval Symposium (AIRS2004), Beijing, Chana, October 18-20, 2004. (poster)
50) Kenji,Hatano ; Hiroko,Kinutani ; Toshiyuki,Amagasa ; Yasuhiro Mori ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura. “Analyzing the Properties of XML Fragments Decomposed from the INEX Document Collection”, INEX 2004 Workshop Pre-Proceedings (informal proceedings), p. 50-57, Schloss Dagstuhl, Germany, December 6-8, 2004.
51) Vilas , Wuwongse ; Masatoshi,Yoshikawa ; Toshiyuki,Amagasa, "Temporal Versioning of XML Documents", The 7th International Conference of Asian Digital Libraries (ICADL 2004), Lecture Notes in Computer Science, vol. 3334, p. 419-428, Shanghai, P. R. China, December 13-17, 2004.
52) Kei, Fujimoto ; Toshiyuki, Shimizu ; Dao Dinh Kha ; Masatoshi,Yoshikawa ; Toshiyuki,Amagasa. “Efficient Storage of XML Documents in Relational Databases”, The 7th International Conference of Asian Digital Libraries (ICADL 2004), Shanghai, P. R. China, December 13-17, 2004. (poster)
53) Akiyoshi, Matono ; Toshiyuki,Amagasa ; Masatoshi,Yoshikawa ; Shunsuke,Uemura, “A Path-based Relational RDF Database”, Proc. Of The Sixteenth Australasian Database Conference (ADC 2005), p. 95-103, Newcastle, Australia, January 31-February 3, 2005.
54) Y.Hirano ; J. Hasegawa ; J.Toriwaki . Recognition of boundary voxels of tumors in chest CT images for extraction of tumor regions, Proceedings of Computer Assisted Radiology and Surgery(CARS) 2004, p.1359.
55) I.Kishida ; T.Sugihara ; Y.Hirano ; K.Mase . A Study on Presentation Methods for Interactive Poster, The 11th International Display Workshops (IDW2004), p. 1507-1510.
56) K.Mori ; Y.Suenaga ; Y.Mekada ; Y.Hirano ; T.Kitasaka ; J.Hasegawa ; J.Toriwaki ; H. Natori . Development of Navigation-based CAD System as Intelligent CAD System, Proceedings of The First International Symposium on Intelligent Assistance in Diagnosis of Multi-Dimensional Medical Images, p.I-56-I-59.
57) 末永康仁，目加田慶人，森健策，平野靖，北坂孝幸，長谷川純一，鳥脇純一郎，名取博． 知的 CAD としてのナビゲーション診断システムの開発, Proceedings of The Second Symposium on Multi-Organ, Multi-Disease CAD, p.II-93-II-98.
58) 北坂孝幸，森健策，出口大輔，平野靖，末永康仁，目加田慶人，長谷川純一，鳥脇純一郎． 胸部領域におけるナビゲーション診断型 CAD システムの開発, Proceedings of The Second Symposium on Multi-Organ, Multi-Disease CAD, p.II-99-II-102.
59) 山城 貴久，平野靖，梶田将司，間瀬健二． 体験記録映像を用いたユーザー行動モ

デル作成の検討，第 3 回情報科学技術フォーラム(FIT2004)，p.525-526(K-057).
60）志村 将吾，平野靖，梶田将司，間瀬健二 ． 体験映像の日記インタフェース，第 3 回情報科学技術フォーラム(FIT2004)，p.527-528 (K-058).
61）大江展弘，平野靖，梶田将司，間瀬健二 ． 全方位画像を用いた会議記録・閲覧システム，第 3 回情報科学技術フォーラム(FIT2004)，p.557-558(K-072).
62）神山祐一，平野靖，梶田将司，間瀬健二，勝山貴美子，山内一信 ． 話題構造の可視化による医師-患者コミュニケーション支援手法，第 3 回情報科学技術フォーラム(FIT2004)，p.599-600(K-091).
63）豊住健一，北坂孝幸，森健策，末永康仁，平野靖，間瀬健二，高橋友一 ． オンライン手書き数式認識のための視覚の誘導場に基づく文字切り出し手法の予備的検討，平成 16 年度電気関係学会東海支部連合大会講演論文集，p．0-487.
64）森田洋介，平野靖，北坂孝幸，森健策，末永康仁，鳥脇純一郎，関順彦，江口研二 ． 3 次元胸部 X 線 CT 像における良性小結節自動認識のための角検出手法の提案，平成 16 年度日本エム・イー学会東海支部学術集会，p.15.
65）神山祐一，平野靖，梶田将司，間瀬建二，勝山貴美子，山内一信 ． 話題構造の可視化による医師：患者コミュニケーション支援手法，平成 16 年度日本エム・イー学会東海支部学術集会，p.30.
66）平野靖，Sidney，Fels ． 最適曲面当てはめによる濃淡画像からの境界面抽出，第 14 回コンピュータ支援画像診断学会大会・第 13 回日本コンピュータ外科学会大会合同論文集，p.331-332.
67）森田洋介，平野靖，北坂孝幸，森健策，末永康仁，鳥脇純一郎，関順彦，江口研二 ． 胸部 CT 像における良性小結節認識のための結節形状および血管接続位置に基づく特徴量開発，電子情報通信学会技術報告，MI2004-100，p.109-114.
68）志村 将吾，平野靖，梶田将司，間瀬健二 ． 体験映像への感情付与インタフェース，インタラクション 2005 論文集，p．59-60.
69）大江展弘，平野靖，梶田将司，間瀬健二 ． 全方位画像からのインタラクション認識を用いた会議記録の編集・閲覧システム，情報処理学会第 67 回全国大会，p．4_149-4_150.
70）加藤雄一，大江展弘，陳金姫，平野靖，梶田将司，間瀬健二 ． 音声情報を用いた会議における雰囲気把握支援方法の検討”，情報処理学会第 67 回全国大会，p．4_151-4_152.
71）西面 将樹，平野靖，梶田将司，間瀬健二 ． サイクリング体験記録における外界に対する関心事の抽出，情報処理学会第 67 回全国大会，p．4_267-4_268.
72）森田友幸，平野靖，角 康之，梶田将司，間瀬健二 ． インタラクション解釈のための発見的パターン抽出法，電子情報通信学会 2005 年総合大会講演論文集，p．241 (2005).
73）Mehrdad Panahpour Tehrani；Yasushi Hirano；Toshiaki Fujii；Kazuya,Takeda；Kenji Mase ． 3D Sound Wave Field Representation Based on Ray-Space Method，電子情報通信学会 2005 年総合大会講演論文集，p．300.
74）陳金姫，平野靖，梶田将司，間瀬健二 ． 講義の強調的キャプチャと自動構造化に

関する研究”． 電子情報通信学会 2005 年総合大会講演論文集，p．163．
75）笠野孝志，平野靖，梶田将司，間瀬健二 ． 演習支援システムにおける手書きアノテーションのための基礎検討．電子情報通信学会 2005 年総合大会講演論文集，p．165．

【講演等】
1）伊藤義人．電子図書館と電子ジャーナル：新しい挑戦．第 1 回 NII 国際シンポジウム．東京，招待講演．図書館の電子化と連携について．中部図書館学会，名古屋，2003．
2）伊藤義人．大学図書館の最近の状況と公共図書館との連携協力について．愛知図書館協会．名古屋，2003．
3）伊藤義人．学術情報の収集･発信の企画と運用．平成 15 年度大学図書館職員長期研修．文部科学省・筑波大学，東京，2003．
4）伊藤義人．大学図書館の現状と学会図書館（専門図書館）の連携について．土木学会．東京，2003．
5）伊藤義人．Establishment of the consortia of electronic journals in Japan．IFLA Preconference 2003． Bayerische StaatsBigliothek． Munich，German，2003．
6）伊藤義人．存在感ある図書館を目指して．変革の時代における図書館経営戦略．日本図書館協会大学部会研究集会．東京，2003，基調講演．
7）伊藤義人．存在感ある図書館を目指して．変革の時代における大学図書館経営戦略．長崎大学，2003．
8）伊藤義人．学術情報の収集･発信の企画と運用．平成 16 年度大学図書館職員長期研修．独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター，2004．
9）伊藤義人．電子ジャーナルの円滑な導入と安定的な運営の実現に向けての取り組み：電子ジャーナルタスクフォースの活動．学術情報･電子ジャーナルシンポジウム．京都大学，2004，基調講演．
10）伊藤義人．図書館と情報：学びの森．名古屋大学附属学校，2004．
11）伊藤義人．国立大学図書館協会における電子ジャーナル･コンソシーアム．国立大学図書館協会総会．大阪大学，2004．
12）伊藤義人．電子ジャーナル･タスクフォースの活動，電子ジャーナルコンソーシアム形成と今後の学術情報流通の課題．大阪府立大学，2004．
13）逸村裕．図書館におけるインターネットを通じた情報サービス．東北地区大学図書館協議会合同研修会．2002.7.18．
14）逸村裕．これからの学術コミュニケーションと大学図書館の役割－国立大学図書館の視点から．2002 年度三田図書館・情報学会研究大会．2002.10.12．
15）逸村裕．海外の大学図書館の事例．2002 年度文部科学省大学図書館員講習会．2002.11.14.京都大学
16）逸村裕．海外の大学図書館の事例．2002 年度文部科学省大学図書館員講習会．2002.11.21.東京大学
17）逸村裕．電子図書館の運営．デジタル・ライブラリアン研究会．2003.1.11．
18）逸村裕．大学と地域社会－情報資源コラボレーションの可能性－．名古屋大学附属図書館特別展講演会． 2003.3.8．

19) 逸村裕. 電子図書の現状と可能性. 第 4 回名古屋大学附属図書館研究開発室懇談会. 2003.6.10.
20) 逸村裕. 大学改革と教育・研究そして eBook. 東京, 研究社. eBook セミナー. 2003.10.1.
21) 逸村裕. 海外の大学図書館の事例. 2003 年度文部科学省大学図書館員講習会. 2003.11.12. 大阪大学.
22) 逸村裕. 海外の大学図書館の事例. 2003 年度文部科学省大学図書館員講習会. 2003.11.19.東京大学.
23) 逸村裕. 教育改革と高等教育機関図書館のあり方. 平成 15 年度第 89 回全国図書館大会第 2 分科会基調講演. 2003.11.26.
24) 逸村裕. 図書館の情報発信-Library must become the facilitator of retrieval and dissemination. デジタル・ライブラリアン研究会. 2004.1.10.
25) 逸村裕. Nagoya University Knowledge Factory. Nagoya University Digital Library Workshop. 2004.3.8.
26) 逸村裕. オープンアクセスと学術情報. 第 10 回名古屋大学附属図書館研究開発室懇談会. 2004.9.6.
27) 逸村裕. 海外大学図書館の事例. 国立情報学研究所・京都大学附属図書館主催 2004 年度大学図書館講習会. 2004.11.11.
28) 逸村裕. 海外大学図書館の事例. 国立情報学研究所・東京大学附属図書館主催 2004 年度大学図書館講習会. 2004.11.18.
29) 逸村裕. 歴史資料の保存－デジタルアーカイブ化－. 文部科学省・愛知県教育委員会主催. 平成 16 年度東海北陸地区図書館地区別研修. 2004.11.18.
30) 秋山晶則. 旗本交代寄合高木家の領地支配をめぐって.岐阜県上石津町文化財協会.2001.4.
31) 秋山晶則. 木曽三川流域治水史再考.佐織町文化講演会.2001.6.
32) 秋山晶則. 高木家による地域支配の特質.旗本高木家入郷四百年記念事業特別講演.岐阜県上石津町.2001.10.21.
33) 秋山晶則. 古文書の整理と保存.東海地区図書館協議会研修会.大同工業大学.2001.12.20.
34) 秋山晶則. 木曽三川流域治水史をめぐる諸問題. シンポジウム尾張の歴史と文化,名古屋,2002.3.2.
35) 秋山晶則. 新発見史料・北高木家文書について. 郷土の自然と歴史講演会.岐阜県上石津町,2002.10.19.
36) 秋山晶則. 真継家の伊勢奉幣参向をめぐって.真継家文書研究会.名古屋大学.2003.2.17.
37) 秋山晶則. 北高木家文書にみる木曽三川流域治水. 2003 年春季名古屋大学附属図書館特別展講演会. 2003.3.8.
38) 秋山晶則. 東高木家文書にみる木曽三川流域治水. 郷土の自然と歴史講演会,岐阜県上石津町,2003.12.7.
39) 秋山晶則. 木曽三川流域治水史をめぐる諸問題. 第 14 回海部津島の郷土の歴史を

考える講演会.弥富町総合社会教育センター.2004.3.6.

40) 秋山晶則．東高木家文書からみた「宝暦治水」．名古屋大学附属図書館 2004 年秋季特別展講演会． 2004.10.30.

41) 秋山晶則．特別展史料解説．名古屋大学附属図書館 2004 年秋季特別展（古文書講座）2004.11.6.

42) 秋山晶則．災害と地域社会の対応．自然再生のための地域環境史創成プロジェクト研究会.名古屋大学.2004.12.16.

43) 秋山晶則．史料のデジタル化をめぐって．愛知県博物館協会研修会．2005.3.3.

44) 杉山寛行．中国人のものの考え方と中国医学.第６回漢方医学と気のセミナー（株式会社ツムラ主催）.2003.1.25.

45) 杉山寛行．伊藤圭介と医学.伊藤圭介生誕 200 年記念特別展講演会.2003.10.18.

46) 杉山寛行．青木博士と名物学.名古屋大学附属図書館研究開発室第 5 回懇談会.2003.12.1.

47) 杉山寛行．名古屋大学博物館所蔵「栄衛中経図」について：江戸時代の血管図とその思想.名古屋大学博物館第 36 回特別講演会．2004.11.12.

48) 塩村耕．岩瀬文庫の新発見資料より.西尾文化協会歴史部会主催「第 32 回市民歴史講演会」．2003.8.31.

49) 塩村耕．芭蕉と西鶴の手紙を読む.岐阜県図書館文化講座．2003.10.10-17.

50) 塩村耕．西鶴・芭蕉・丈艸、三人の隠逸.名古屋経済大学人文科学研究会主催「内藤丈艸没後三○○年記念シンポジウム・講演会．2003.11.8.

51) 塩村耕．岩瀬文庫について.説話文学会．2003.12.7.

52) 塩村耕．岩瀬文庫について.愛知県立大学あいち国文の会.2004.2.18.

53) 塩村耕．岩瀬文庫の価値と将来像について.西尾市管理者研修会．2004.2.19.

54) 塩村耕．今年度の資料調査からわかったこと.岩瀬文庫特別講座．2004.2.21.

55) 塩村耕．岩瀬文庫.名古屋大学文学研究科公開シンポジウム「今、開かれる文庫の魅力」．2004.3.13.

56) 塩村耕．西鶴の素顔とその人間観.日本福祉大学名古屋キャンパス主催「第１７回人間講座」．2004.5.22.

57) 塩村耕．高校時代をどう過ごすか.名古屋市立菊里高校「総合的な学習の時間・探求」.酒井朗(工学研究科)・戸田山和久(情報科学研究科)・渡邊誠一郎(環境学研究科)とともにパネルディスカッション．2004.6.18.

58) 塩村耕．西鶴は天才である　附、古い文献を読むということ.愛知県国語教育研究会高等学校部会.名瀬地区国語教育研究会総会,2004.6.23.

59) 塩村耕．岩瀬文庫について.東海北陸地区図書館地区別研修(文部科学省・愛知県教育委員会主催)．2004.11.17.

60) 塩村耕．今年度の資料調査からわかったこと.岩瀬文庫特別講座．2005.3.5.

61) 溝口常俊．G.W.スキナーの中国における中心・周辺論について.東アジアの都市システム研究会.国際日本文化研究所.2002.10.5.

62) 溝口常俊．甦る地域空間－尾張と美濃の近世・近代.名古屋大学附属図書館講演会．2002.3.8.

63) 溝口常俊．甦る地域空間－簡易 GIS ソフト MANDARA の紹介.歴史的空間情報の解析・解釈法の研究研究会.国際日本文化研究所．2003.2.26.

64) 溝口常俊．三河地域史をいかに語るか.豊橋中日文化センター．2003.3.13.

65) 溝口常俊．越境する猿.名古屋大学公開講座．2003.9.26

66) 溝口常俊．インドの定期市とカーストに関する教材研究.地理教育委員会.岡山大学．2003.10.13.

67) 溝口常俊．開発と援助－バングラデシュ 1987 年の洪水に遭遇して.名古屋大学環境学研究科社会環境学専攻主催シンポジウム．2003.12.6.

68) 溝口常俊．インド・バングラデシュにおける市とカースト.地理学特別講演.奈良大学．2004.1.13.

69) 溝口常俊．カースト社会の悲劇－バラモン女性 20 歳の火葬.名古屋大学附属図書館研究開発室懇談会.中央図書館 5F 多目的室．2004.11.29

70) 溝口常俊．近世隠岐における地誌分析.GIS 国際シンポジウム.国際日本文化研究センター.2005.2.　7

71) 溝口常俊．「自然再生と地域環境史」自然再生国際シンポジウム.名古屋大学.2005.2.28.

72) 溝口常俊．江戸期なごやアトラスと尾張名所図会の世界.名古屋観光コンベンションビューロー第 2 回観光施設部会講演会.トヨタテクノミュージアム産業技術記念館.2005.3.4.

73) 吉川正俊．XML とデータベース.情報処理学会北陸支部設立 10 周年記念シンポジウム基調講演．2002.10.25.

74) 村田 真氏・吉川 正俊．XML 基礎講座～言語理論とデータベース.日本ソフトウェア科学会大学基礎講座．2003.9.25-26.

75) 吉川正俊．XML データベース（招待講演）．日本ソフトウェア科学会第 7 回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ(PPL2005)論文集．p．216-217, 2005.3.11.

76) Shigeki,Matsubara , Bilingual Spoken Language Corpus for Simultaneous Machine Interpretation Research (機械翻訳研究のための多言語コーパスの構築と分析). 言語資源と評価に関する国際会議（第 3 回）． Las Palmas, Spain, 2003.5.30.

77) Shigeki,Matsubara , An Example-based Approach to Speech Intention Understanding (事例に基づく話し言葉理解手法), システム・人工知能・情報学に関する世界会議（第 6 回）． Florida, U.S.A, 2003.7.16.

78) Shigeki,Matsubara, Stochastic Dependency Parsing of Spontaneous Japanese Spoken Language (自然な話し言葉のロバスト処理技術). 計算言語学に関する国際会議（第 19 回）． Taipei, Taiwan, 2003.8.29.

79) Shigeki,Matsubara. Asian Research in Machine Translation and the Challenge of Statutory Translation, Proceedings of Int. Symposium on the Future of Legal Information: Strategies and Technologies for International Communication ,2003.

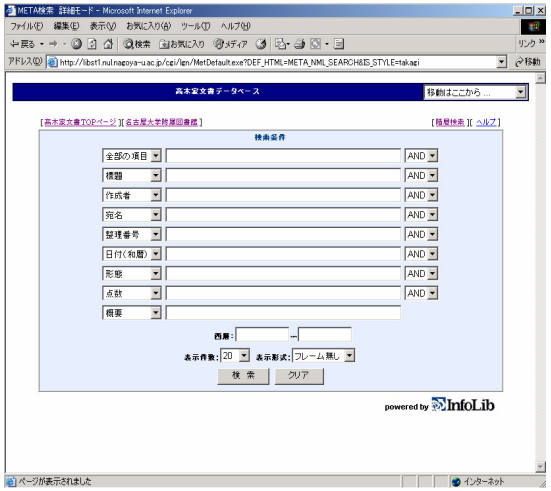
参考資料：研究開発の軌跡2002-04+

高木家文書システムから
エコ・コレクションDB横断（統合）検索まで

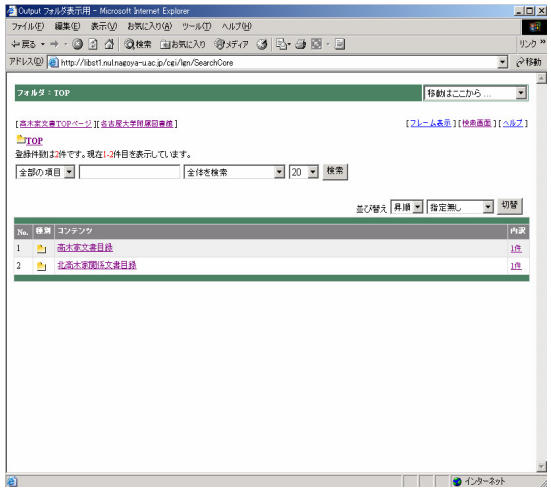
2005年９月

附属図書館研究開発室

2002年度：電子図書館初年度（高木家文書インターネット公開）

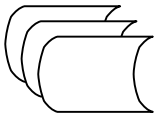


キーワードによる検索



家別（階層）による検索

名古屋大学電子図書館システム

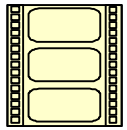


XMLデータ

テキストデータ作成

電子化

高木家文書（全五巻）
・高木家文書巻三（１４，１１６点）
・北高木家文書（４３０点）



マイクロフィルム（画像）

撮影

高木家文書（全五巻）
・高木家文書巻三（１４，１１６点）
・北高木家文書（４３０点）

2003～4年度：電子図書館コンテンツの充実(多彩な検索手法の導入-エココレクションへ)

高木家文書システム
総合画面

キーワード検索

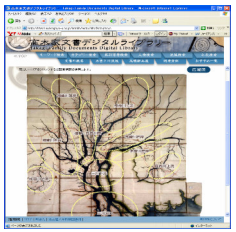
人物検索

高木家文書の概要

関連資料

カテゴリー検索

地域検索



木曽三川流域

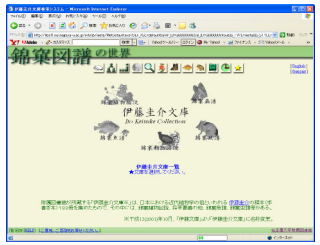
おすすめ一覧

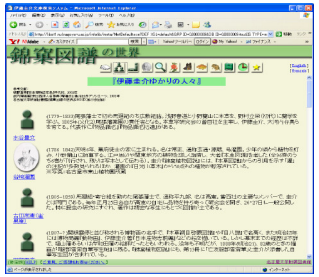
家別階層検索

年代索検

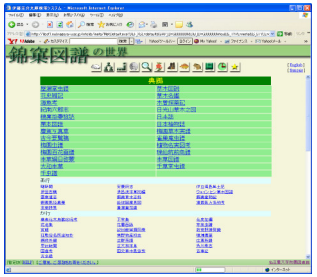
高精細画像

伊藤圭介文庫

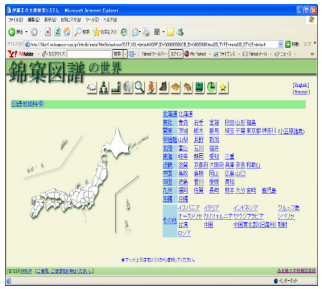




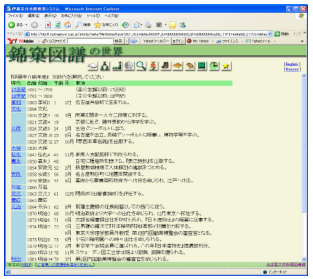
人物検索



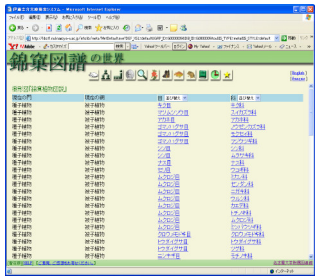
典拠検索



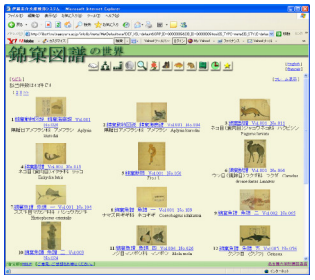
地域検索



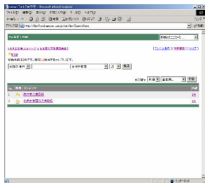
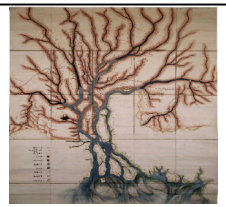
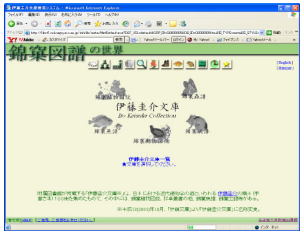
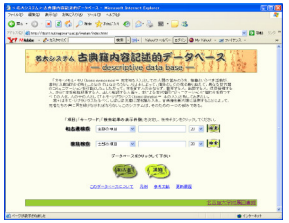
年代検索



種別検索

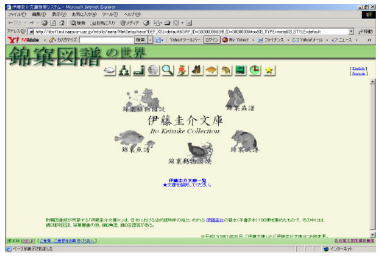


おすすめ検索

	高木家文書	伊藤圭介文庫	古典籍・その他
2002年度	高木家文書三巻･北高木家文書の電子化（XML作成） ＋ 文書画像の公開(JPEG) キーワードによる検索 家別（階層）による検索 ＋ 目録情報･画像閲覧 		
2003年度	高木家文書三巻･北高木家文書 ＋ 一巻･五巻の電子化（XML作成） ＋ 文書画像の公開(JPEG)  キーワードによる検索 家別（階層）による検索 ＋ 目録情報･画像閲覧 ＋ 高精細画像の公開 掲示板機能搭載	伊藤圭介文庫の電子化 （XML作成） ホームページの整備 様々な形式での検索 ＋ 目録情報･画像閲覧 	古典籍DB 登録･公開 ＋ 目録情報（検索） 
2004年度	高木家文書三巻･北高木家文書 一巻･五巻 ＋ 二巻･四巻･東高木家文書 の電子化（XML作成） ＋ 文書画像の公開(JPEG) ホームページの整備 キーワードによる検索 家別（階層）による検索 ＋ 様々な形式での検索 ＋ 目録情報･画像閲覧 ＋ 高精細画像の公開 GIS機能実験環境整備 ＋ データベース統合 （同一データベース内で 複数のデータ構造を実現） ＋ 漢字統合インデックスの組込	伊藤圭介文庫の「内容」 追加･整備	エコ･コレクション ホームページの整備 ＋ ハードウェア増強
	登録目録数：58,665件	登録目録数：17,389件	登録目録数：2,382件

2005年度：エココレクション拡張(統合検索＋新規コンテンツ登録・公開機能の充実)

高木家文書

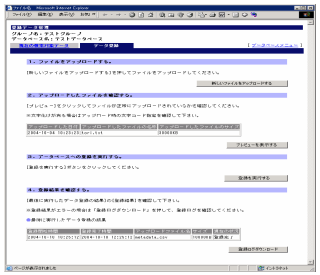


伊藤圭介文庫

XML　CSV

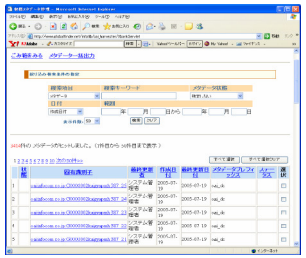
XML　CSV

内部処理にて変換実施

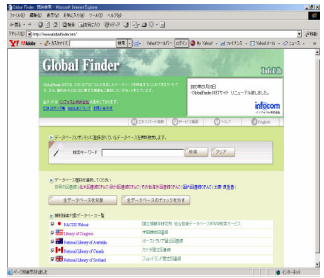


データベース統合

横断検索(統合検索)



OAI-PMH機能によるリポジトリ構築へ



Z39.50(SRW)による横断検索へ

その他コンテンツ
（新規コンテンツ）

CSVデータ
＋
画像URL情報

Ⅳ 改　善　の　歩　み（平成 12～16 年度）

年　度	管理運営（組織，管理委・運営，施設・設備，資料整備）	サービス，利用環境，図書館活動
平成 12 年度 （2000）	組織 ・ 附属図書館情報管理課（図書受入掛→資料管理掛）と情報システム課（目録情報掛→図書情報掛）の一部を再編，図書の発注・目録業務を統合（4 月） ・ 医療技術短期大学部の廃止に伴い，同図書掛を保健学情報掛とし医学部分館に統合（4 月） ・ 附属図書館調査研究室を廃止（平成 13 年 3 月）（→研究開発室） 管理･運営 ・ 国立大学図書館協議会に電子ジャーナル・タスクフォース設置（伊藤館長主査） 自己評価 ・ 平成 4 年度，平成 7 年度に続き，3 回目の自己評価を実施 施設・設備 ・ ２階に無線 LAN 設置，持込み PC を接続できる PC コーナー開設（５月） ・ 展示室（旧ファカルティ・ラウンジ）を開室（12 月） 資料の整備 ・ 電子ジャーナルの導入（平成 13 年 1 月，4,000 タイトル） ・ Web 対応データベース「雑誌記事索引」の導入 ・ 名古屋大学教官著作の収集整備（11 月） 目録の電子化（遡及入力）　約８万冊 資料の電子化 ・ 伊藤圭介文庫及び学内紀要の画像データベース化（科学研究費補助金研究成果公開促進費）	ガイダンス ・ 全文・電子ジャーナル説明会を実施（2 回，68 名参加） 利用環境 ・ 中央図書館の開館時間を９時から 8 時 45 分に早め，延長（11 月） ・ 中央図書館教官著作コーナー設置 展示会・講演会 ・ 「川とともに生きてきた　―高木家文書に見る木曽三川の歴史・環境・技術―」・同講演会開催（平成 13 年 3 月）
平成 13 年度 （2001）	組織・自己評価 ・ 附属図書館研究開発室（学内共通基盤施設）を設置，専任教官 2 名（4 月） ・ 第 3 回附属図書館自己点検評価報告書刊行（11 月）	利用環境 ・ 電子ジャーナル・アクセスサービスを開始（６月） ・ 中央図書館の夜間開館を 20 時から 22 時までに延長（９月） ・ コイン式複写機設置（平成 14 年 1 月）

平成 13 年度 （2001）	ホームページ上で利用者アンケート実施 ・　附属図書館第１回外部評価を実施（12 月）・報告書刊行（2 月） 資料の整備 ・　電子ジャーナル約６千タイトルに増加 ・　Web of Science を導入 ・　蔵書整備アドバイザーによる学習用図書の整備支援の開始 目録の電子化（遡及入力）　約 11 万冊	展示会・講演会 ・　常設展示開始（６月） ・　伊藤圭介没後 100 年記念シンポジウム開催（９月）
平成 14 年度 （2002）	組織 ・　研究開発室兼任教員を含め 11 名体制に強化（4 月） LIBST Newsletter（研究開発室）発刊 ・　情報連携基盤センターの創設に伴い，情報システム課システム管理掛を同センター学術電子情報掛に組織変更（４月） ・　工学部で図書系職員を中央図書室に集め，業務を集中化 施設・設備 ・　文系部局の大規模改修工事開始 ・　中央図書館 5 階に高木家文書室整備 資料の整備 ・　電子ジャーナル約７千タイトル超えに増加 ・　Web of Science バックファイルを増強 ・　蔵書整備アドバイザーによる学習用図書の整備支援の開始 目録の電子化（遡及入力）　約 13 万冊	サービス ・　休日開館での貸出サービスを開始（４月） ・　他大学等の利用者について，紹介状持参の条件を廃止（７月） ・　学外者への貸出サービスを開始（10 月） ・　グローバル ILL サービス開始 利用環境 ・　夏季期間（８月）の土日開館を試行 ・　ホームページリニューアル（10 月） 展示会・講演会 ・　企画展示「古書は語る」・同ギャラリートーク開催（10 月） ・　春季特別展「川とともに生きてきたⅡ」・同講演会開催（平成 15 年 3 月）
平成 15 年度 （2003）	組織 ・　研究開発室，兼任教官１名増やし 12 名体制に増強 ・　名古屋大学電子図書館国際ワークショップ開催（平成 16 年 3 月） 管理･運営 ・　「和漢古典籍に関する知識と技術の継承プロジェクトグループ」の活動に対し，国立大学図書館協議会賞受賞（７月） ・　附属図書館中期目標・中期計画策定（8 月） ・　「館長と話そう」（図書館長と学生利用者との懇談会）開催（10 月） ・　東海地区公共図書館・大学図書館館長懇談会開催（平成 16 年１月）・連	利用環境 ・　４階演習室に情報メディア教育センターの PC サテライトラボを開設（４月） ・　夏季期間（８月）の平日夜間開館を開始（22 時まで） ・　海外衛星放送「世界の窓」で CNNｊ，放送大学授業視聴開始（８月） ・　３階に留学生コーナー（栄ライオンズクラブ寄贈）開設（10 月） ・　地階に私費用複写機設置（12 月） ・　蔵書点検期間の休館を廃止し，開館（平成 16 年２月） 展示会・講演会

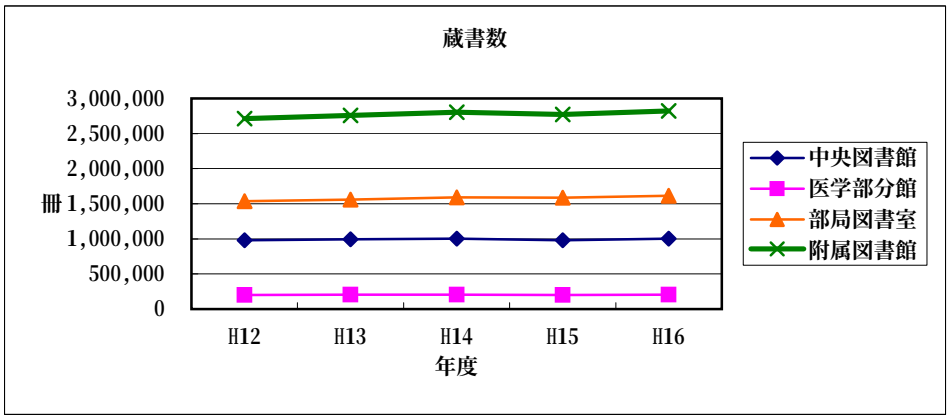
平成15年度 (2003)	携協力検討部会設置 資料の整備 ・ 電子ジャーナル約８千タイトル超えに増加 ・ Japan Knowledge，聞蔵DNA for Librariesを導入 目録の電子化（遡及入力） 約12万冊 ・ <名大システム>古典籍内容記述的データベースのＩＤ認証による限定公開（12月 一般公開は2005年4月1日） ・ 高木家文書デジタルライブラリー公開 ・ 図書館職員の海外研修６名４ヵ国へ（11～12月）	・ 伊藤圭介生誕 200 年記念展示会・講演会「錦窠図譜の世界」開催（10月） ・ 春季特別展「和歌の書物」・同ギャラリートーク開催（平成16年３月）
平成16年度 (2004)	管理・運営 ・ 平成16年度の国立大学法人化に伴い，利用規程等を改正（4月） ・ 平成16年度附属図書館年度計画策定（6月） ・ 「館長と話そう2004」（図書館長と学生利用者との懇談会）開催（９月） ・ 附属図書館友の会発足（10月） ・ 東海地区図書館協議会を設立（11 月）し，東海四県下の公共図書館と大学図書館との連携協力を強化 ・ 平成 17 年度附属図書館年度計画及び平成 16 年度事業実績報告書作成（平成17年3月） 資料の整備 ・ 電子ジャーナル12,000タイトル以上に増強 ・ e-book(NetLibrary 3,800 タイトル，Gale Virtual Reference Libraryの一部)を導入 目録の電子化（遡及入力） 約10万冊 資料の電子化 ・ 「エコ（環境共生）コレクション・データベース」（科学研究費補助金）の公開（平成17年3月）	利用環境 ・ 情報公開法に対応し，図書館の利用資格に「一般の者」を加え，閲覧利用などの手続きを簡素化（4月） ・ 図書館業務電算機システムの更新（平成17年1月） ・ 図書自動貸出機を導入（平成17年1月） ・ 情報連携基盤センターシステムの更新に伴い、２階 PC コーナーに端末17台設置（平成17年3月） ・ 全館的に照明設備，階段壁紙・ホールカーペット更新（平成17年3月） ・ 情報への道しるべ（パスファインダー）公開（平成17年3月） 展示会・講演会 ・ 秋季特別展「川とともに生きてきたⅢ」 ・ 春季特別展「地球環境史を考える」 ・ 附属図書館研究開発室ワークショップ開催

Ⅰ　基礎データ・定量的評価指標

1 資源
1.1 蔵書数
1.1(1) 利用対象者当たりの蔵書冊数

基礎データ1：蔵書数　（冊）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	978,928	995,658	1,003,680	981,726	1,001,130	H15:法人化前の大量廃棄
医学部分館	201,018	203,191	205,616	202,199	205,425	
部局図書室	1,534,852	1,558,851	1,592,417	1,586,072	1,614,419	
附属図書館	2,714,798	2,757,700	2,801,713	2,769,997	2,820,974	



※法人化前の平成１５年度に全学的に不明図書を中心に大量に除籍した。

基礎データ2：利用対象者数
基礎データ2.1：学生数　（人）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	16,579	16,684	16,593	16,590	16,537	大学ﾌﾟﾛﾌｨｰﾙから
医学部分館	2,200	2,407	2,425	2,448	2,479	
部局図書室	14,379	14,277	14,168	14,142	14,058	
附属図書館	16,579	16,684	16,593	16,590	16,537	

基礎データ2.2：教職員数　（人）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	3,464	3,450	3,421	3,421	3,534	大学ﾌﾟﾛﾌｨｰﾙから
医学部分館	1,284	1,273	1,260	1,245	1,365	
部局図書室	2,180	2,177	2,161	2,176	2,169	
附属図書館	3,464	3,450	3,421	3,421	3,534	

基礎データ2.3：全利用対象者数＝学生数(基2.1)＋教職員数(基2.2)　（人）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	20,043	20,134	20,014	20,011	20,071	大学ﾌﾟﾛﾌｨｰﾙから
医学部分館	3,484	3,680	3,685	3,693	3,844	
部局図書室	16,559	16,454	16,329	16,318	16,227	
附属図書館	20,043	20,134	20,014	20,011	20,071	

評価指標1：利用対象者当たりの蔵書冊数 ＜図書館蔵書の規模を示す指標＞

学生当たりの蔵書数＝蔵書数(基1)／学生数(基2.1)　（冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	59.05	59.68	60.49	59.18	60.54	
医学部分館	91.37	84.42	84.79	82.60	82.87	
部局図書室	106.74	109.19	112.40	112.15	114.84	
附属図書館	163.75	165.29	168.85	166.97	170.59	

教職員当たりの蔵書数＝蔵書数(基1)／教職員数(基2.2)　（冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	282.60	288.60	293.39	286.97	283.29	
医学部分館	156.56	159.62	163.19	162.41	150.49	
部局図書室	704.06	716.05	736.89	728.89	744.31	
附属図書館	783.72	799.33	818.97	809.70	798.24	

全利用対象者当たりの蔵書数＝蔵書数(基1)／全利用対象者数(基2.3)　（冊：小数点第2位）

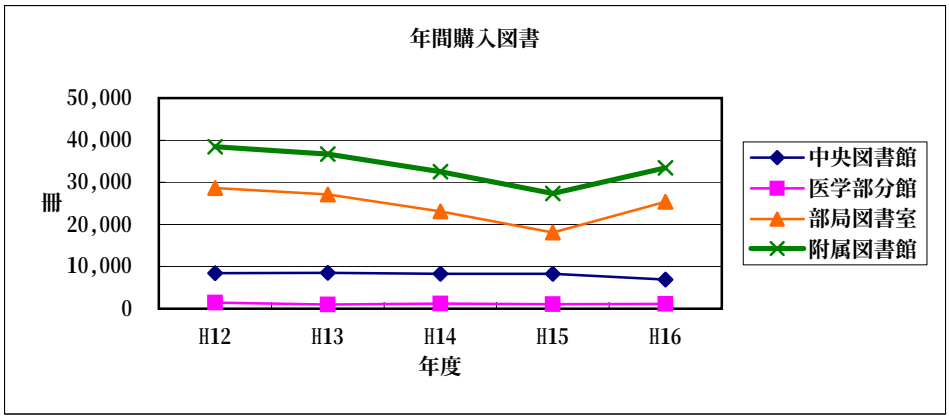
	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	48.84	49.45	50.15	49.06	49.88	
医学部分館	57.70	55.21	55.80	54.75	53.44	
部局図書室	92.69	94.74	97.52	97.20	99.49	
附属図書館	135.45	136.97	139.99	138.42	140.55	

1.2 収集活動

1.2(1) 利用対象者当たりの年間購入図書及び購読雑誌数

基礎データ3：年間購入図書　（冊）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	8,417	8,540	8,262	8,246	6,931	H15:法人化前で購入控え
医学部分館	1,432	1,023	1,184	1,069	1,149	
部局図書室	28,628	27,108	23,087	18,060	25,385	
附属図書館	38,477	36,671	32,533	27,375	33,465	



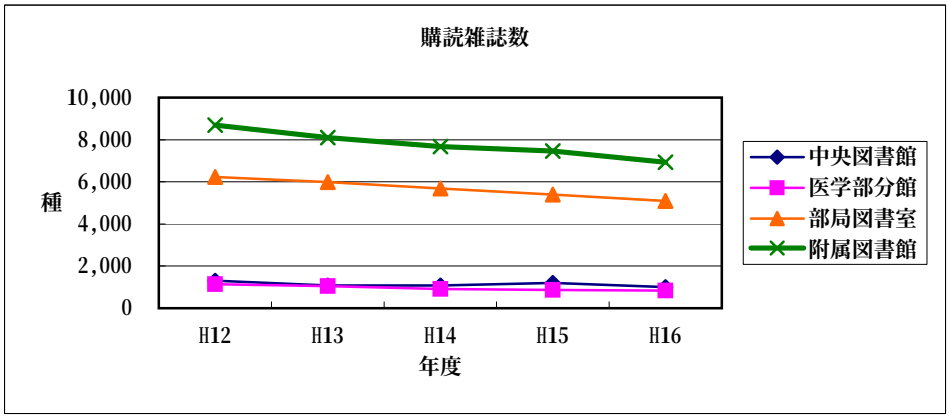
※平成１５年度に部局図書室を中心に大幅に購入図書が減少しているのは、法人化を控え予算面の不安定感から購入を控えたためか？

基礎データ3.1：年間購入図書（うち学生用）　　（冊）

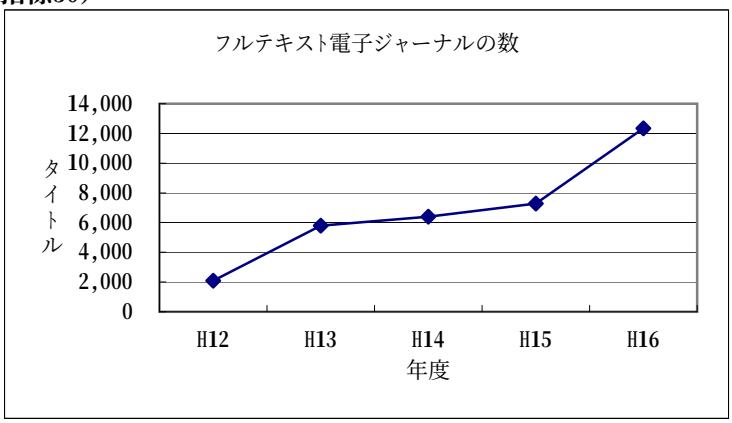
	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	5,246	5,791	4,922	5,619	4,718	
医学部分館	—	—	—	—	—	
部局図書室	—	—	—	—	—	
附属図書館	—	—	—	—	—	

基礎データ4：購読雑誌数　　（種）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	1,309	1,072	1,080	1,194	1,003	減少傾向が顕著
医学部分館	1,142	1,048	916	866	829	理由:重複調整等
部局図書室	6,237	5,982	5,677	5,402	5,092	
附属図書館	8,688	8,102	7,673	7,462	6,924	



※確実に減少しているのがわかる。
（参考：評価指標30）



評価指標2：利用対象者当たりの年間購入図書　＜図書館の新規購入資料の規模を示す指標＞

学生当たりの年間購入図書＝年間購入図書(基3)／学生数(基2.1)　　（冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.51	0.51	0.50	0.50	0.42	
医学部分館	0.65	0.43	0.49	0.44	0.46	
部局図書室	1.99	1.90	1.63	1.28	1.81	
附属図書館	2.32	2.20	1.96	1.65	2.02	

教職員当たりの年間購入図書＝年間購入図書(基3)／教職員数(基2.2)　（冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	2.43	2.48	2.42	2.41	1.96	
医学部分館	1.12	0.80	0.94	0.86	0.84	
部局図書室	13.13	12.45	10.68	8.30	11.70	
附属図書館	11.11	10.63	9.51	8.00	9.47	

全利用対象者当たりの年間購入図書＝年間購入図書(基3)／全利用対象者数(基2.　（冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.42	0.42	0.41	0.41	0.35	H15:法人化前で購入控え
医学部分館	0.41	0.28	0.32	0.29	0.30	
部局図書室	1.73	1.65	1.41	1.11	1.56	
附属図書館	1.92	1.82	1.63	1.37	1.67	

評価指標2.1：利用対象者当たりの年間購入図書(うち学生用)　＜図書館の新規購入資料の規模を示す指標＞

学生当たりの学生用図書＝年間購入図書(うち学生用)(基3.1)／学生数(基2.1)　（冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.32	0.35	0.30	0.34	0.29	
医学部分館	―	―	―	―	―	
部局図書室	―	―	―	―	―	
附属図書館	―	―	―	―	―	

評価指標3：利用対象者当たりの購読雑誌数　＜図書館の新規購入資料の規模を示す指標＞

学生当たりの購読雑誌数＝購読雑誌数(基4)／学生数(基2.1)　（種：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.08	0.06	0.07	0.07	0.06	
医学部分館	0.52	0.44	0.38	0.35	0.33	
部局図書室	0.43	0.42	0.40	0.38	0.36	
附属図書館	0.52	0.49	0.46	0.45	0.42	

教職員当たりの購読雑誌数＝購読雑誌数(基4)／教職員数(基2.2)　（種：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.38	0.31	0.32	0.35	0.28	
医学部分館	0.89	0.82	0.73	0.70	0.61	
部局図書室	2.86	2.75	2.63	2.48	2.35	
附属図書館	2.51	2.35	2.24	2.18	1.96	

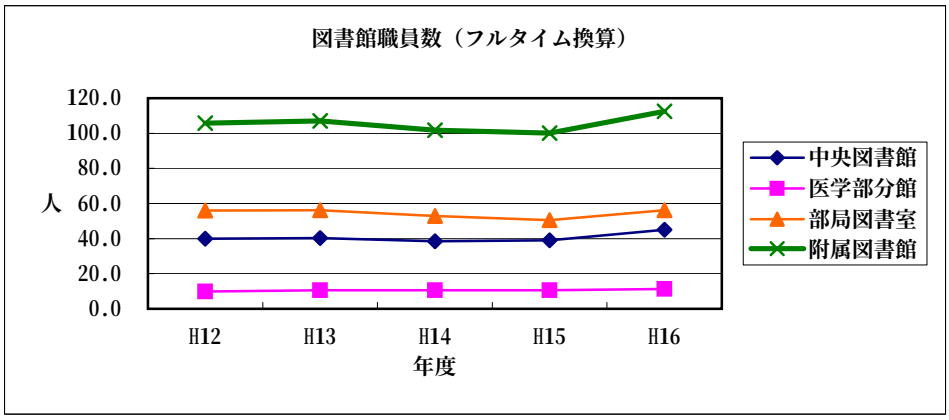
全利用対象者当たりの購読雑誌数＝購読雑誌数(基4)／全利用対象者数(基2.3)　（種：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.07	0.05	0.05	0.06	0.05	減少傾向が顕著
医学部分館	0.33	0.28	0.25	0.23	0.22	理由:重複調整等
部局図書室	0.38	0.36	0.35	0.33	0.31	
附属図書館	0.43	0.40	0.38	0.37	0.34	

2 管理運営
2.1 職員
2.1(1) 図書館職員当たりの利用対象者数

基礎データ5：図書館職員数（フルタイム換算）　（人：小数点第1位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	40.0	40.3	38.4	39.1	45.1	H12-H15は職員数減少
医学部分館	9.9	10.6	10.6	10.6	11.3	H16は法人化により非常
部局図書室	55.9	56.2	52.8	50.5	56.2	勤職員の枠が広がる
附属図書館	105.8	107.1	101.8	100.2	112.6	



※平成１６年度に職員数が増加しているのは、パートタイム職員の枠が広がったためである。

評価指標4：図書館職員当たりの利用対象者数 ＜職員規模の妥当性を示す指標＞

図書館職員当たりの学生数＝学生数(基2.1)／図書館職員数(基5)　（人：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	414.48	414.00	432.11	424.30	366.67	
医学部分館	222.22	227.08	228.77	230.94	219.38	
部局図書室	257.23	254.04	268.33	280.04	250.14	
附属図書館	156.70	155.78	163.00	165.57	146.87	

図書館職員当たりの教職員数＝教職員数(基2.2)／図書館職員数(基5)　（人：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	86.60	85.61	89.09	87.49	78.36	
医学部分館	129.70	120.09	118.87	117.45	120.80	
部局図書室	39.00	38.74	40.93	43.09	38.59	
附属図書館	32.74	32.21	33.61	34.14	31.39	

図書館職員当たりの全利用対象者数＝全利用対象者数(基2.3)／図書館職員数(基　（人：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	501.08	499.60	521.20	511.79	445.03	H12-H15は職員数減少
医学部分館	351.92	347.17	347.64	348.40	340.18	H16は法人化により非常
部局図書室	296.23	292.78	309.26	323.13	288.74	勤職員の枠が広がる
附属図書館	189.44	187.99	196.60	199.71	178.25	

2.1(2) 図書館職員当たりの蔵書数・図書受入冊数・雑誌受入数

基礎データ6：図書受入冊数 （冊）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	14,305	15,330	22,882	25,558	20,608	
医学部分館	5,107	3,970	3,920	3,983	4,549	
部局図書室	37,586	42,605	37,471	31,456	31,198	
附属図書館	56,998	61,905	64,273	60,997	56,355	

基礎データ7：雑誌受入数 （種）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	4,597	4,450	4,525	2,982	2,908	H16:増加
医学部分館	1,919	1,846	1,741	1,754	1,707	参照：購読数(基4)は減少
部局図書室	10,567	10,334	10,095	9,905	11,302	
附属図書館	17,083	16,630	16,361	14,641	15,917	

評価指標5：図書館職員当たりの蔵書数 ＜職員規模の妥当性を示す指標＞

図書館職員当たりの蔵書数＝蔵書数(基1)／図書館職員数(基5) （冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	24,473.20	24,706.15	26,137.50	25,108.08	22,198.00	H16:職員枠拡大
医学部分館	20,304.85	19,168.96	19,397.74	19,075.38	18,179.20	
部局図書室	27,457.10	27,737.56	30,159.41	31,407.37	28,726.32	
附属図書館	25,659.72	25,748.83	27,521.74	27,644.68	25,053.06	

評価指標6：図書館職員当たりの図書受入冊数 ＜職員規模の妥当性を示す指標＞

図書館職員当たりの図書受入冊数＝図書受入冊数(基6)／図書館職員数(基5) （冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	357.63	380.40	595.89	653.66	456.94	H16:職員枠拡大
医学部分館	515.86	374.53	369.81	375.75	402.57	
部局図書室	672.38	758.10	709.68	622.89	555.12	
附属図書館	538.73	578.01	631.37	608.75	500.49	

評価指標7：図書館職員当たりの年間の雑誌受入数 ＜職員規模の妥当性を示す指標＞

図書館職員当たりの年間の雑誌受入数＝年間の雑誌受入数(基7)／図書館職員数(（種：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	114.93	110.42	117.84	76.27	64.48	H16:職員枠拡大
医学部分館	193.84	174.15	164.25	165.47	151.06	
部局図書室	189.03	183.88	191.19	196.14	201.10	
附属図書館	161.47	155.28	160.72	146.12	141.36	

2.1(3) 図書館職員の職務内容別内訳

基礎データ8：図書館職員の職務内容別内訳

基礎データ8.1：管理職

（人：小数点第1位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	人数は固定
医学部分館	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	
部局図書室	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
附属図書館	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	

基礎データ8.2：総務系

（人：小数点第1位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	6.6	6.6	6.6	6.6	7.0	
医学部分館	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
部局図書室	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	
附属図書館	7.6	7.6	7.6	7.6	8.0	

基礎データ8.3：受入目録系

（人：小数点第1位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	11.3	11.3	10.3	11.0	15.1	H16:職員枠拡大により、
医学部分館	3.7	3.7	3.7	3.7	4.0	比率が増加
部局図書室	12.3	12.3	12.2	13.0	15.0	
附属図書館	27.3	27.3	26.2	27.7	34.1	

基礎データ8.4：サービス系

（人：小数点第1位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	13.1	13.4	14.5	14.5	16.0	H16の職員枠拡大は部局
医学部分館	4.2	4.9	4.9	4.9	5.3	のサービス系が中心
部局図書室	8.2	8.2	6.9	5.8	13.5	
附属図書館	25.5	26.5	26.3	25.2	34.8	

基礎データ8.5：システム系

（人：小数点第1位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	
医学部分館	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
部局図書室	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
附属図書館	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	

基礎データ8.6：業務全般　　（人：小数点第1位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	部局図書室は比率が非常に高い
医学部分館	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	
部局図書室	34.4	34.7	32.7	30.7	26.7	
附属図書館	35.4	35.7	33.7	31.7	27.7	

評価指標8：図書館職員の職務内容別内訳　＜図書館の人的資源の配置を示す指標＞

管理職＝管理職数(基8.1)／図書館職員数(基5)×100　　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	17.50	17.37	18.23	17.90	15.52	人数は固定
医学部分館	10.10	9.43	9.43	9.43	8.85	
部局図書室	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
附属図書館	7.56	7.47	7.86	7.98	7.10	

総務系＝総務系数(基8.2)／図書館職員数(基5)×100　　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	16.50	16.38	17.19	16.88	15.52	
医学部分館	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
部局図書室	1.79	1.78	1.89	1.98	1.78	
附属図書館	7.18	7.10	7.47	7.58	7.10	

受入目録系＝受入目録系数(基8.3)／図書館職員数(基5)×100　　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	28.25	28.04	26.82	28.13	33.48	H16:職員枠拡大により、比率が増加
医学部分館	37.37	34.91	34.91	34.91	35.40	
部局図書室	22.00	21.89	23.11	25.74	26.69	
附属図書館	25.80	25.49	25.74	27.64	30.28	

サービス系＝サービス系数(基8.4)／図書館職員数(基5)×100　　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	32.75	33.25	37.76	37.08	35.48	H16の職員枠拡大は部局のサービス系が中心
医学部分館	42.42	46.23	46.23	46.23	46.90	
部局図書室	14.67	14.59	13.07	11.49	24.02	
附属図書館	24.10	24.74	25.83	25.15	30.91	

システム系＝システム系数(基8.5)／図書館職員数(基5)×100　　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	5.00	4.96	0.00	0.00	0.00	
医学部分館	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
部局図書室	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
附属図書館	1.89	1.87	0.00	0.00	0.00	

業務全般＝業務全般数(基8.6)／図書館職員数(基5)×100　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	部局図書室は比率が非常に高い
医学部分館	10.10	9.43	9.43	9.43	8.85	
部局図書室	61.54	61.74	61.93	60.79	47.51	
附属図書館	33.46	33.33	33.10	31.64	24.60	

2.2 施設設備

2.2(1) 利用対象者当たりの図書館面積・閲覧座席数

基礎データ9：施設設備

基礎データ9.1：図書館面積　（㎡）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	15,577	15,577	15,577	15,577	15,577	
医学部分館	2,324	2,324	2,788	2,788	2,788	
部局図書室	9,978	9,796	9,790	9,635	9,343	
附属図書館	27,879	27,697	28,155	28,000	27,708	

基礎データ9.2：閲覧座席数　（席）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	1,002	1,002	1,002	1,002	1,002	
医学部分館	160	160	265	265	265	H14-:対象拡大
部局図書室	605	583	580	595	574	
附属図書館	1,767	1,745	1,847	1,862	1,841	

評価指標9：利用対象者当たりの図書館面積＜図書館施設、設備の妥当性を示す指標）

学生当たり図書館面積＝図書館面積(基9.1)／学生数(基2.1)　（㎡：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.94	0.93	0.94	0.94	0.94	
医学部分館	1.06	0.97	1.15	1.14	1.12	
部局図書室	0.69	0.69	0.69	0.68	0.66	
附属図書館	1.68	1.66	1.70	1.69	1.68	

教職員当たり図書館面積＝図書館面積(基9.1)／教職員数(基2.2)　（㎡：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	4.50	4.52	4.55	4.55	4.41	
医学部分館	1.81	1.83	2.21	2.24	2.04	
部局図書室	4.58	4.50	4.53	4.43	4.31	
附属図書館	8.05	8.03	8.23	8.18	7.84	

全利用対象者当たり図書館面積＝図書館面積(基9.1)／全利用対象者数(基2.3)　（㎡：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.78	0.77	0.78	0.78	0.78	
医学部分館	0.67	0.63	0.76	0.75	0.73	
部局図書室	0.60	0.60	0.60	0.59	0.58	
附属図書館	1.39	1.38	1.41	1.40	1.38	

評価指標10：利用対象者当たりの閲覧座席数 ＜図書館施設、設備の妥当性を示す指標）

学生当たり閲覧座席数＝閲覧座席数(基9.2)／学生数(基2.1)　（席：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	
医学部分館	0.07	0.07	0.11	0.11	0.11	
部局図書室	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	
附属図書館	0.11	0.10	0.11	0.11	0.11	

教職員当たり閲覧座席数＝閲覧座席数(基9.2)／教職員数(基2.2)　（席：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.29	0.29	0.29	0.29	0.28	
医学部分館	0.12	0.13	0.21	0.21	0.19	
部局図書室	0.28	0.27	0.27	0.27	0.26	
附属図書館	0.51	0.51	0.54	0.54	0.52	

全利用対象者当たり閲覧座席数＝閲覧座席数(基9.2)／全利用対象者数(基2.3)　（席：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	
医学部分館	0.05	0.04	0.07	0.07	0.07	
部局図書室	0.04	0.04	0.04	0.04	0.04	
附属図書館	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	

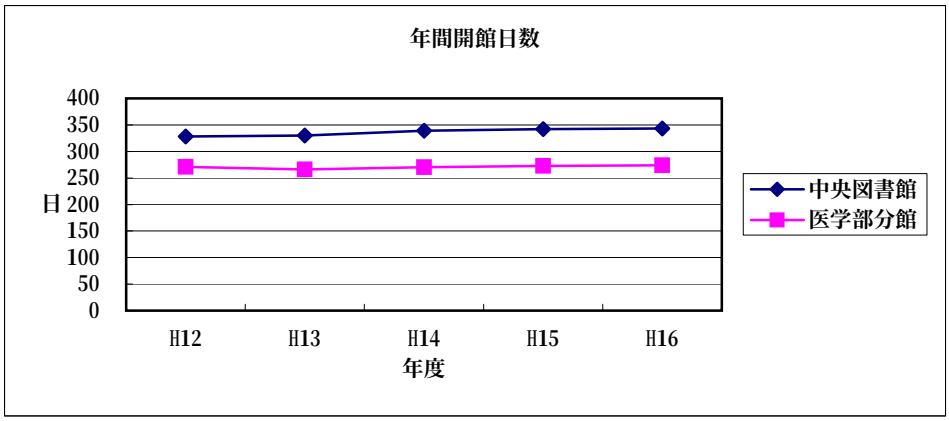
2.3 開館状況　＊保健学情報資料室は除く

2.3(1) 開館状況

評価指標11：開館状況 ＜図書館利用の利便性を示す指標＞

年間開館日数　（日）

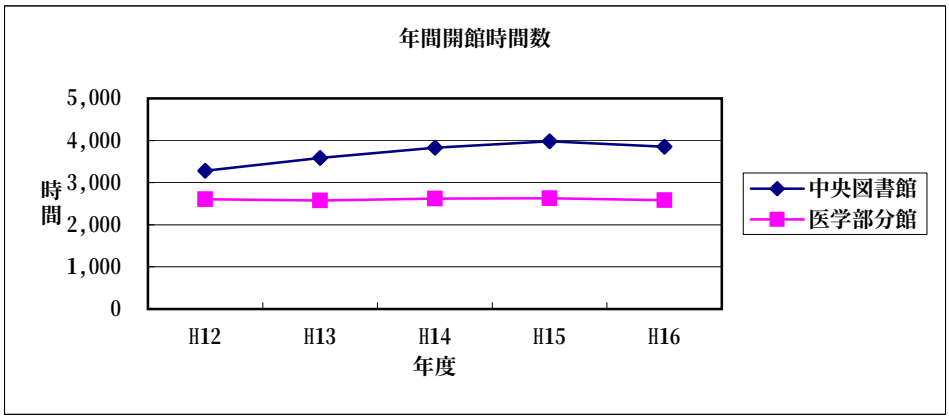
	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	328	330	339	342	343	
医学部分館	271	266	270	273	274	無人開館あり H13:改修



※中央図書館は増加している。医学部分館は横ばいではあるが、別途無人開館を考慮する必要がある。
平成１３年度の医学部分館の開館日数の減少は改修工事のためである。

年間開館時間数　　（時間）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	3,283	3,590	3,832	3,981	3,851	増加傾向 H16:台風による休館
医学部分館	2,608	2,574	2,621	2,629	2,582	無人開館あり H13:改修



※中央図書館はかなり増加している。平成１６年度の減少は台風による閉館のため。

2.3(2) 休日・時間外の開館状況

基礎データ10：休日・時間外の開館状況
基礎データ10.1：休日開館日数　　（日）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	103	103	111	109	114	
医学部分館	40	34	39	41	41	無人開館あり H13:改修

基礎データ10.2：休日開館時間数　　（時間）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	824	850	916	899	941	
医学部分館	160	136	156	164	164	無人開館あり H13:改修

基礎データ10.3：時間外開館時間数　　（時間）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	1,013	1,222	1,448	1,556	1,447	
医学部分館	763	718	765	773	773	無人開館あり H13:改修

評価指標12：休日・時間外の開館状況
＜図書館利用の利便性を示す指標。社会人学生や地域市民等への利便性を計る＞

休日開館日数の全開館日数に対する割合＝休日開館日数(基10.1)／年間開館日数(指11)×100
（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	31.40	31.21	32.74	31.87	33.24	
医学部分館	14.76	12.78	14.44	15.02	14.96	

休日開館時間数の全開館時間数に対する割合＝休日開館時間数(基10.2)／年間開館時間数(指11)×100

（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	25.10	23.68	23.90	22.58	24.44	
医学部分館	6.13	5.28	5.95	6.24	6.35	

時間外開館時間数の全開館時間数に対する割合＝時間外開館時間数(基10.3)／年間開館時間数(指11)×100

（%：小数点第2位）

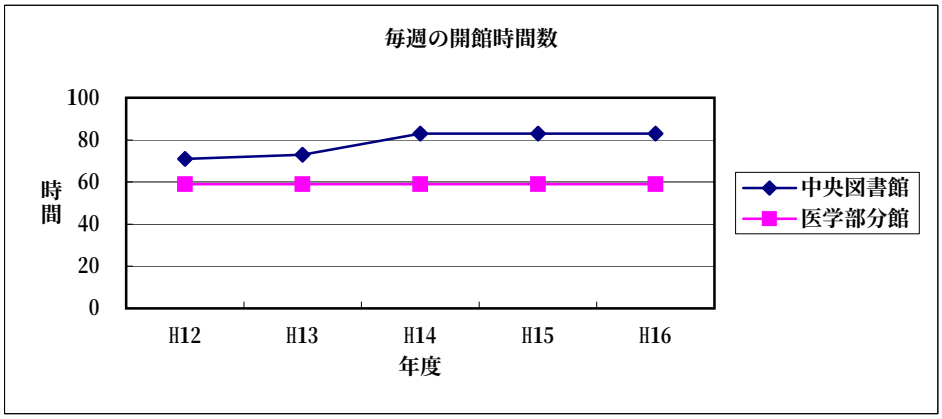
	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	30.86	34.04	37.79	39.09	37.57	
医学部分館	29.26	27.89	29.19	29.40	29.94	

2.3(3) 毎週の開館時間数

評価指標13：毎週の開館時間数
＜図書館利用の利便性を示す開館時間の国際的な比較のための指標＞

毎週の開館時間数　（時間）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	71	73	83	83	83	
医学部分館	59	59	59	59	59	無人開館あり



3 サービス

3.1 図書館アクセス

3.1(1) 利用対象者の平均来館数

基礎データ11：延べ入館者数
基礎データ11.1：学生の延べ入館者数　（人）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	601,644	616,260	636,330	672,688	622,631	H15:ピーク
医学部分館	—	—	—	—	—	

基礎データ11.2：教職員の延べ入館者数　（人）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	23,017	21,515	20,264	23,589	19,933	
医学部分館	―	―	―	―	―	

基礎データ11.3：全利用対象者の延べ入館者数　（人）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	624,661	637,775	656,594	696,277	642,564	H15:ピーク
医学部分館	―	―	192,088	198,927	175,913	

評価指標14：利用対象者の平均来館率　＜図書館利用の浸透度・定着度を示す指標＞

学生の平均来館数＝学生の延べ入館者数(基11.1)／学生数(基2.1)　（回：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	36.29	36.94	38.35	40.55	37.65	H15:ピーク
医学部分館	―	―	―	―	―	

教職員の平均来館数＝教職員の延べ入館者数(基11.2)／教職員数(基2.2)　（回：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	6.64	6.24	5.92	6.90	5.64	
医学部分館	―	―	―	―	―	

全利用対象者の平均来館数＝全利用対象者の延べ入館者数(基11.3)／全利用対象者数(基2.3)
（回：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	31.17	31.68	32.81	34.79	32.01	H15:ピーク
医学部分館	―	―	52.13	53.87	45.76	

3.1(2) 学外者へのサービス実績と全体のサービスに占める割合

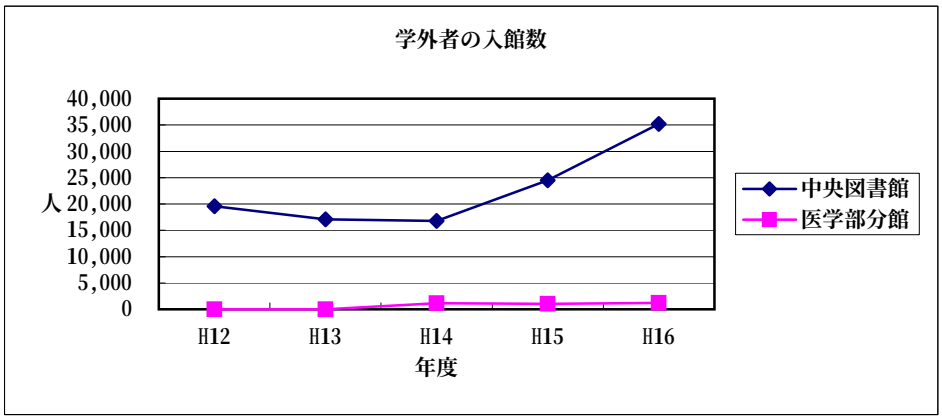
評価指標15：学外者へのサービス実績と全体のサービスに占める割合
＜地域社会、一般市民への貢献度を示す指標＞

基礎データ12：全体の入館数＝全利用対象者の延べ入館者数(基11.3)＋学外者の入館数(指15.1.1)
（人）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	644,230	654,886	673,362	720,783	677,783	H15:ピーク
医学部分館	173,873	164,694	193,255	199,981	177,145	
部局図書室	―	―	―	―	―	
附属図書館	―	―	―	―	―	

評価指標15.1.1：学外者の入館数　（人）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	19,569	17,111	16,768	24,506	35,219	H15-:急増
医学部分館	—	—	1,167	1,054	1,232	
部局図書室	—	—	—	—	—	
附属図書館	—	—	—	—	—	



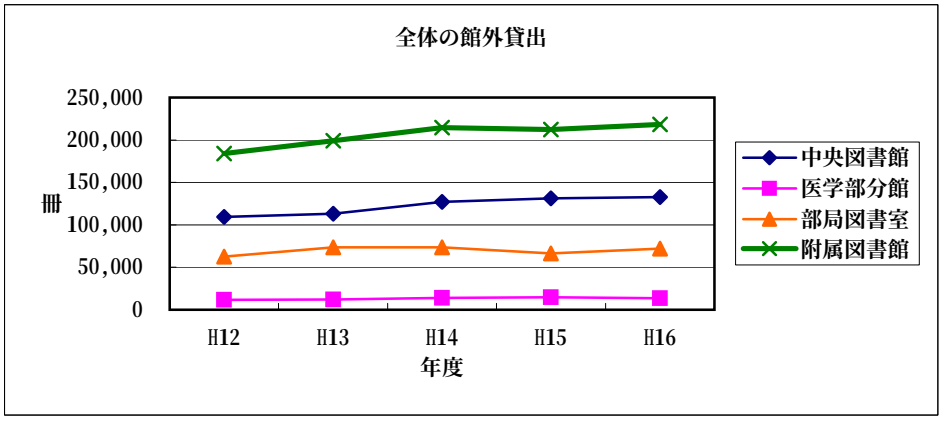
評価指標15.1.2：学外者の入館割合＝学外者の入館数(指15.1.1)／全体の入館数(基12)×100

（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	3.04	2.61	2.49	3.40	5.20	H15-:急増
医学部分館	—	—	0.60	0.53	0.70	
部局図書室	—	—	—	—	—	
附属図書館	—	—	—	—	—	

基礎データ13：全体の館外貸出　（冊）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	109,519	113,101	127,182	131,224	132,814	増加傾向
医学部分館	11,665	12,247	14,038	14,625	13,559	H15:ピーク
部局図書室	62,760	73,586	73,402	66,414	71,966	
附属図書館	183,944	198,934	214,622	212,263	218,339	



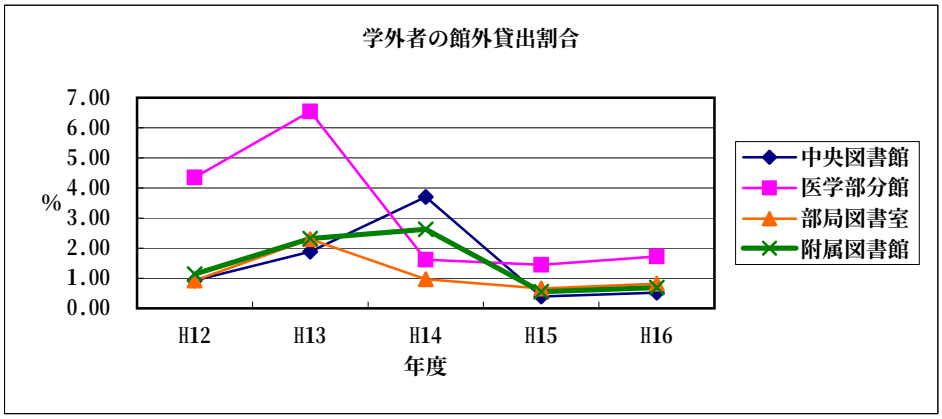
評価指標15.2.1：学外者の館外貸出 （冊）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	1,011	2,133	4,711	519	689	H15-:研究用図書に限定
医学部分館	508	801	227	211	234	
部局図書室	581	1,690	710	437	592	誤差大
附属図書館	2,100	4,624	5,648	1,167	1,515	

評価指標15.2.2：学外者の館外貸出割合＝学外者の館外貸出(指15.2.1)／全体の館外貸出(基13)×100

（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.92	1.89	3.70	0.40	0.52	
医学部分館	4.35	6.54	1.62	1.44	1.73	比率が高い
部局図書室	0.93	2.30	0.97	0.66	0.82	
附属図書館	1.14	2.32	2.63	0.55	0.69	



※平成１５年度から中央図書館は貸出対象を研究用図書に限定した。

基礎データ14：全体の参考調査 （件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	4,555	3,974	3,357	5,723	4,574	
医学部分館	5,346	5,646	5,499	5,683	5,414	
部局図書室	15,239	12,155	15,062	14,118	15,483	
附属図書館	25,140	21,775	23,918	25,524	25,471	

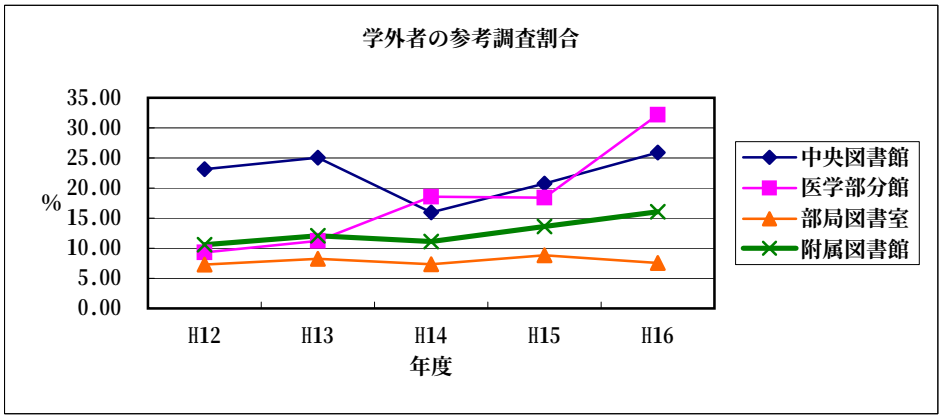
評価指標15.3.1：学外者の参考調査 （件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	1,055	995	535	1,186	1,186	
医学部分館	498	633	1,020	1,046	1,741	
部局図書室	1,112	1,003	1,104	1,248	1,170	
附属図書館	2,665	2,631	2,659	3,480	4,097	

評価指標15.3.2：学外者の参考調査割合＝学外者の参考調査(指15.3.1)／全体の参考調査(基14)×100

（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	23.16	25.04	15.94	20.72	25.93	学外者の比率が特に高い
医学部分館	9.32	11.21	18.55	18.41	32.16	
部局図書室	7.30	8.25	7.33	8.84	7.56	
附属図書館	10.60	12.08	11.12	13.63	16.08	



3.2 貸出

3.2(1) 利用対象者の平均貸出冊数

基礎データ15：年間の個人貸出総冊数

基礎データ15.1：年間の学生個人貸出総冊数

（冊）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	102,505	104,845	116,257	120,389	122,386	増加傾向
医学部分館	9,083	9,788	12,021	12,919	11,986	H15:ピーク
部局図書室	52,264	59,407	58,722	52,616	60,368	
附属図書館	163,852	174,040	187,000	185,924	194,740	

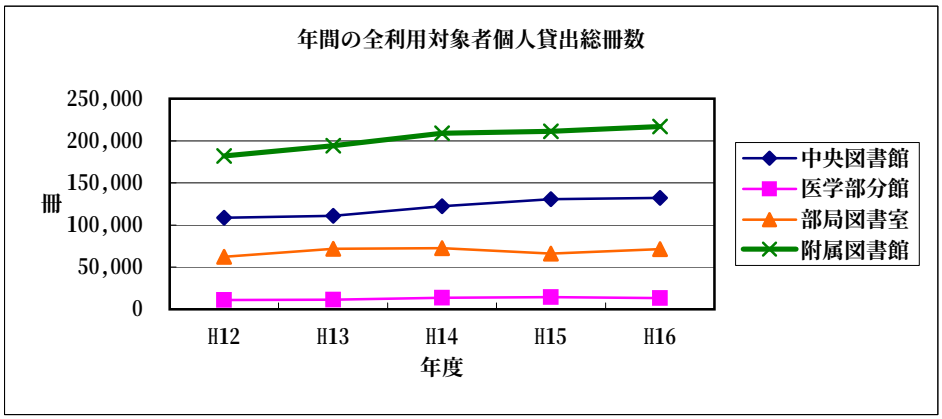
基礎データ15.2：年間の教職員個人貸出総冊数

（冊）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	6,003	6,123	6,214	10,316	9,739	増加傾向
医学部分館	2,074	1,658	1,790	1,495	1,339	減少傾向
部局図書室	9,915	12,489	13,970	13,361	11,006	
附属図書館	17,992	20,270	21,974	25,172	22,084	H15:ピーク

基礎データ15.3：年間の全利用対象者個人貸出総冊数　（冊）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	108,508	110,968	122,471	130,705	132,125	増加傾向
医学部分館	11,157	11,446	13,811	14,414	13,325	
部局図書室	62,179	71,896	72,692	65,977	71,374	
附属図書館	181,844	194,310	208,974	211,096	216,824	増加傾向



※利用対象者の平均貸出冊数も含め増加傾向にある。

評価指標16：利用対象者の平均貸出冊数　＜図書館貸出サービスの浸透度・定着度を示す指標＞

学生の平均貸出冊数＝年間の学生個人貸出総冊数(基15.1)／学生数(基2.1)　（冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	6.18	6.28	7.01	7.26	7.40	増加傾向
医学部分館	4.13	4.07	4.96	5.28	4.84	
部局図書室	3.63	4.16	4.14	3.72	4.29	
附属図書館	9.88	10.43	11.27	11.21	11.78	増加傾向

教職員の平均貸出冊数＝年間の教職員個人貸出総冊数(基15.2)／教職員数(基2.2)　（冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	1.73	1.77	1.82	3.02	2.76	増加傾向
医学部分館	1.62	1.30	1.42	1.20	0.98	減少傾向
部局図書室	4.55	5.74	6.46	6.14	5.07	
附属図書館	5.19	5.88	6.42	7.36	6.25	

全利用対象者の平均貸出冊数＝年間の全利用対象者個人貸出総冊数(基15.3)／全利用対象者数(基2.3)
（冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	5.41	5.51	6.12	6.53	6.58	増加傾向
医学部分館	3.20	3.11	3.75	3.90	3.47	
部局図書室	3.75	4.37	4.45	4.04	4.40	
附属図書館	9.07	9.65	10.44	10.55	10.80	増加傾向

3.3 参考調査

3.3(1) 利用対象者の平均参考調査件数

基礎データ16：年間参考調査件数

基礎データ16.1：学生の年間参考調査件数 （件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	2,849	2,208	2,078	3,491	2,619	
医学部分館	1,956	1,673	2,099	2,714	1,570	
部局図書室	9,849	8,119	10,644	10,024	12,047	
附属図書館	14,654	12,000	14,821	16,229	16,236	

基礎データ16.2：教職員の年間参考調査件数 （件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	651	771	744	1,046	769	
医学部分館	2,892	3,340	2,380	1,923	2,103	
部局図書室	4,278	3,033	3,314	2,846	2,266	
附属図書館	7,821	7,144	6,438	5,815	5,138	減少傾向

基礎データ16.3：全利用対象者の年間参考調査件数 （件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	3,500	2,979	2,822	4,537	3,388	
医学部分館	4,848	5,013	4,479	4,637	3,673	
部局図書室	14,127	11,152	13,958	12,870	14,313	
附属図書館	22,475	19,144	21,259	22,044	21,374	

評価指標17：利用対象者の平均参考調査件数 ＜参考調査サービスの浸透度・定着度を示す指標＞

学生の平均参考調査件数＝学生の年間参考調査件数(基16.1)／学生数(基2.1) （件：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.17	0.13	0.13	0.21	0.16	
医学部分館	0.89	0.70	0.87	1.11	0.63	
部局図書室	0.68	0.57	0.75	0.71	0.86	
附属図書館	0.88	0.72	0.89	0.98	0.98	

教職員の平均参考調査件数＝教職員の年間参考調査件数(基16.2)／教職員数(基2.2) （冊：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.19	0.22	0.22	0.31	0.22	学生＜教職員
医学部分館	2.25	2.62	1.89	1.54	1.54	
部局図書室	1.96	1.39	1.53	1.31	1.04	
附属図書館	2.26	2.07	1.88	1.70	1.45	

全利用対象者の平均参考調査件数＝全利用対象者の年間参考調査件数(基16.3)／全利用対象者数(基2.3)

（件：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.17	0.15	0.14	0.23	0.17	
医学部分館	1.39	1.36	1.22	1.26	0.96	
部局図書室	0.85	0.68	0.85	0.79	0.88	
附属図書館	1.12	0.95	1.06	1.10	1.06	

3.4 ILL（学外図書館間の文献複写及び現物貸借）

3.4(1) 利用対象者の平均ILL依頼件数

基礎データ：年間ILLサービス利用件数

基礎データ17.1：学生の年間ILLサービス利用件数

（件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	423	424	411	502	432	
医学部分館	3,140	2,933	2,545	1,602	1,564	減少傾向
部局図書室	—	—	—	—	—	
附属図書館	—	—	—	—	—	

基礎データ17.2：教職員の年間ILLサービス利用件数

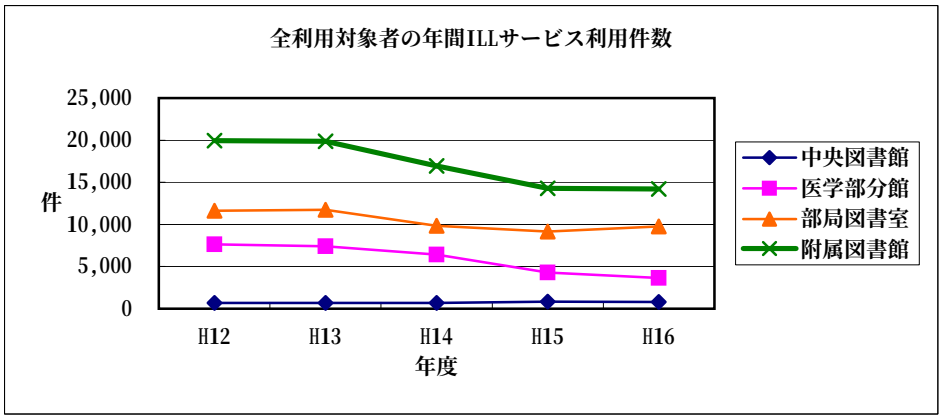
（件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	270	266	260	330	350	増加傾向
医学部分館	4,503	4,491	3,882	2,696	2,068	減少傾向
部局図書室	—	—	—	—	—	
附属図書館	—	—	—	—	—	

基礎データ17.3：全利用対象者の年間ILLサービス利用件数

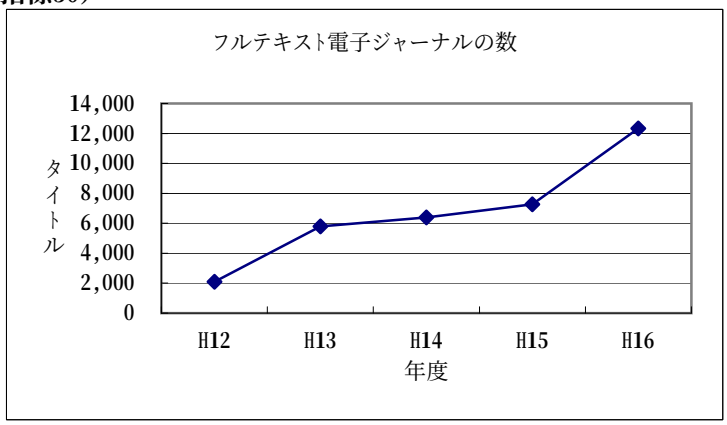
（件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	693	690	671	832	782	
医学部分館	7,643	7,424	6,427	4,298	3,632	減少傾向
部局図書室	11,619	11,752	9,845	9,167	9,781	
附属図書館	19,955	19,866	16,943	14,297	14,195	減少傾向



※明らかに減少傾向にあるが、これは電子ジャーナルの普及のためと考えられる。

（参考：評価指標30）



評価指標18：利用対象者の平均ILL依頼件数 ＜ILLサービスの浸透度・定着度を示す指標＞

学生の平均ILLサービス利用件数＝学生の年間ILLサービス利用件数(基17.1)／学生数(基2.1)

（件：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.03	0.03	0.02	0.03	0.03	
医学部分館	1.43	1.22	1.05	0.65	0.63	
部局図書室	—	—	—	—	—	
附属図書館	—	—	—	—	—	

教職員の平均ILLサービス利用件数＝教職員の年間ILLサービス利用件数(基17.2)／教職員数(基2.2)

（件：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.08	0.08	0.08	0.10	0.10	学生＜教職員
医学部分館	3.51	3.53	3.08	2.17	1.52	
部局図書室	—	—	—	—	—	
附属図書館	—	—	—	—	—	

全利用対象者の平均ILLサービス利用件数＝全利用対象者の年間ILLサービス利用件数(基17.3)／
全利用対象者数(基2.3)

（件：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.03	0.03	0.03	0.04	0.04	
医学部分館	2.19	2.02	1.74	1.16	0.94	
部局図書室	0.70	0.71	0.60	0.56	0.60	
附属図書館	1.00	0.99	0.85	0.71	0.71	

3.4(2) ILL受付件数と依頼件数の割合

基礎データ18：ILL受付件数と依頼件数
基礎データ18.1.1：現物貸借受付件数

（件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	1,247	1,329	1,237	1,270	811	H16:かなり減少
医学部分館	41	31	29	25	56	
部局図書室	960	1,105	1,028	1,012	1,208	
附属図書館	2,248	2,465	2,294	2,307	2,075	H16:かなり減少

基礎データ18.1.2：現物貸借依頼件数

（件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	75	93	96	148	299	H15-:かなり増加
医学部分館	32	45	28	63	97	
部局図書室	1,669	2,064	1,629	1,551	1,731	
附属図書館	1,776	2,202	1,753	1,762	2,127	

基礎データ18.2.1：文献複写受付件数

（件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	12,410	11,985	11,525	11,204	8,513	減少傾向
医学部分館	18,565	11,392	13,573	11,328	9,259	
部局図書室	8,169	7,117	5,654	5,101	6,161	
附属図書館	39,144	30,494	30,752	27,633	23,933	

基礎データ18.2.2：文献複写依頼件数

（件）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	618	597	575	684	483	減少傾向
医学部分館	7,611	7,379	6,399	4,235	3,535	
部局図書室	9,950	9,688	8,216	7,616	8,050	
附属図書館	18,179	17,664	15,190	12,535	12,068	

評価指標19：ILL受付件数と依頼件数の割合　＜ILLサービスにおける対外的な貢献度を示す指標＞

現物貸借（依頼数／受付数）＝現物貸借依頼件数(基18.1.2)／現物貸借受付件数(基18.1.1)

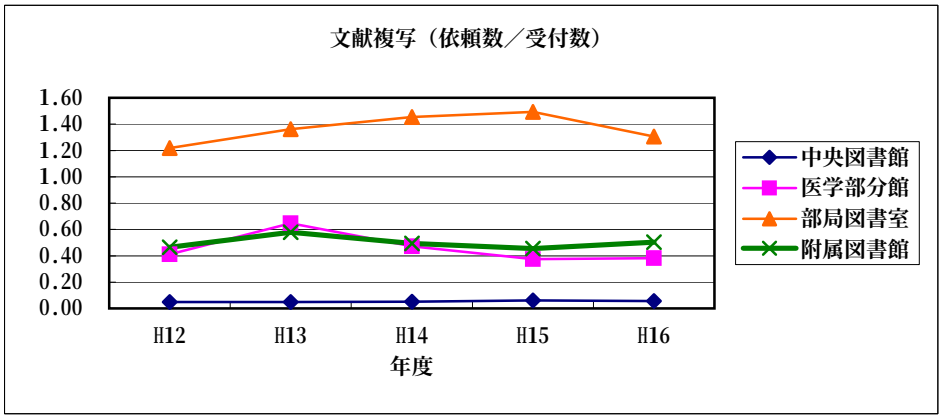
（：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.06	0.07	0.08	0.12	0.37	部局は依頼の方が大
医学部分館	0.78	1.45	0.97	2.52	1.73	
部局図書室	1.74	1.87	1.58	1.53	1.43	
附属図書館	0.79	0.89	0.76	0.76	1.03	

文献複写（依頼数／受付数）＝文献複写依頼件数(基18.2.2)／文献複写受付件数(基18.2.1)

（：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.05	0.05	0.05	0.06	0.06	現物貸借と同じ傾向
医学部分館	0.41	0.65	0.47	0.37	0.38	
部局図書室	1.22	1.36	1.45	1.49	1.31	
附属図書館	0.46	0.58	0.49	0.45	0.50	



※大学全体としては受付数の方が多いが、部局図書室は文献複写の依頼数が受付数を上回っている。

4 経費

4.1 全般

4.1(1) 大学総経費に占める図書館総経費の割合

基礎データ19：大学総経費

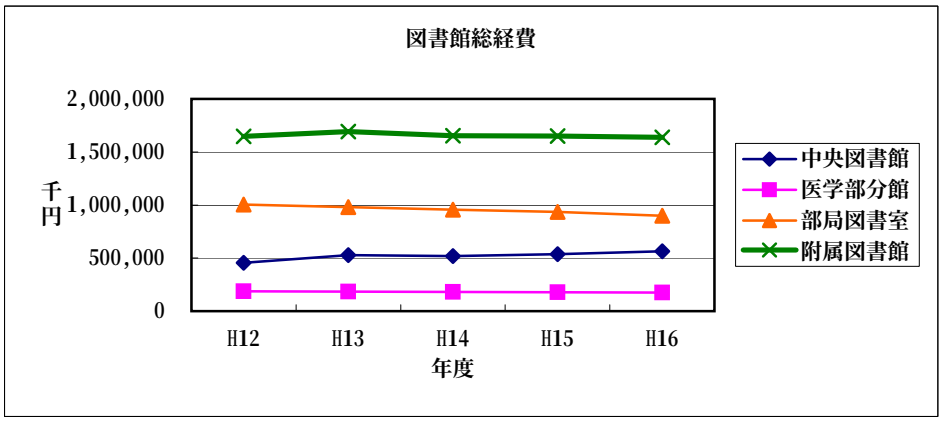
（千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
	70,253,673	72,046,843	78,202,844	83,790,863	76,199,000	ﾌﾟﾛﾌｨｰﾙから。H16:法人会計

基礎データ20：図書館総経費

（千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	454,262	528,546	517,380	535,601	562,912	増加傾向
医学部分館	188,069	182,857	179,863	179,208	176,111	減少傾向
部局図書室	1,005,885	979,972	956,635	936,647	898,953	減少傾向
附属図書館	1,648,216	1,691,375	1,653,878	1,651,456	1,637,976	減少傾向



※中央図書館のみが増加傾向にあるのは間接経費の増加によるもの。

評価指標20：大学総経費に占める図書館総経費の割合 ＜図書館財政規模の適正さを示す指標＞

大学総経費に占める図書館総経費の割合＝図書館総経費(基20)／大学総経費(基19)×100

（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.65	0.73	0.66	0.64	0.74	H16:国立大学法人会計職員給与含む
医学部分館	0.27	0.25	0.23	0.21	0.23	
部局図書室	1.43	1.36	1.22	1.12	1.18	
附属図書館	2.35	2.35	2.11	1.97	2.15	

4.1(2) 利用対象者当たりの図書館経費

評価指標21：利用対象者当たりの図書館経費 ＜図書館財政規模の適正さを示す指標＞

学生当たりの図書館経費＝図書館総経費(基20)／学生数(基2.1)　（円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	27,400	31,680	31,181	32,285	34,040	中央館以外は減少傾向
医学部分館	85,486	75,969	74,170	73,206	71,041	
部局図書室	69,955	68,640	67,521	66,232	63,946	
附属図書館	99,416	101,377	99,673	99,545	99,049	

教職員当たりの図書館経費＝図書館総経費(基20)／教職員数(基2.2)　（円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	131,138	153,202	151,236	156,563	159,285	中央館以外は減少傾向
医学部分館	146,471	143,643	142,748	143,942	129,019	
部局図書室	461,415	450,148	442,682	430,444	414,455	
附属図書館	475,813	490,254	483,449	482,741	463,491	

全利用対象者当たりの図書館経費＝図書館総経費(基20)／全利用対象者数(基2.3)

（円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	22,664	26,251	25,851	26,765	28,046	中央館以外は減少傾向
医学部分館	53,981	49,689	48,809	48,526	45,815	
部局図書室	60,746	59,558	58,585	57,400	55,399	
附属図書館	82,234	84,006	82,636	82,527	81,609	

4.2 図書館運営費

4.2(1) 図書館総経費に占める図書館運営費の割合

基礎データ21：図書館運営費　（千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	366,129	439,484	388,797	394,892	406,560	人件費（職員給与）を含む
医学部分館	77,648	80,446	70,458	66,902	68,001	
部局図書室	375,591	364,313	359,095	341,085	284,146	
附属図書館	819,368	884,243	818,350	802,879	758,707	

評価指標22：図書館総経費に占める図書館運営費の割合 ＜図書館経営分析のための指標＞

図書館総経費に占める図書館運営費の割合＝図書館運営費(基21)／図書館総経費(基20)×100

（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	80.60	83.15	75.15	73.73	72.22	中央館が高い
医学部分館	41.29	43.99	39.17	37.33	38.61	
部局図書室	37.34	37.18	37.54	36.42	31.61	
附属図書館	49.71	52.28	49.48	48.62	46.32	

4.2(2) 図書館総経費に占める人件費の割合

基礎データ21.1：図書館人件費
基礎データ21.1.1：職員給与

（千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	186,972	182,067	164,750	157,476	172,509	
医学部分館	56,646	58,135	50,258	42,758	47,084	
部局図書室	265,916	276,985	256,321	246,239	223,980	
附属図書館	509,534	517,187	471,329	446,473	443,573	

基礎データ21.1.2：賃金・謝金

（千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	68,674	73,259	65,445	69,138	73,400	
医学部分館	8,520	10,559	11,128	10,924	10,667	
部局図書室	48,471	41,085	47,860	57,033	36,053	
附属図書館	125,665	124,903	124,433	137,095	120,120	

評価指標22.1：図書館総経費に占める人件費の割合 ＜図書館経営分析のための指標＞

職員給与の割合＝職員給与(基21.1.1)／図書館総経費(基20)×100

（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	41.16	34.45	31.84	29.40	30.65	人件費の比率高い
医学部分館	30.12	31.79	27.94	23.86	26.74	
部局図書室	26.44	28.26	26.79	26.29	24.92	
附属図書館	30.91	30.58	28.50	27.04	27.08	

賃金・謝金の割合＝賃金・謝金(基21.1.2)／図書館総経費(基20)×100

（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	15.12	13.86	12.65	12.91	13.04	中央館高い
医学部分館	4.53	5.77	6.19	6.10	6.06	
部局図書室	4.82	4.19	5.00	6.09	4.01	
附属図書館	7.62	7.38	7.52	8.30	7.33	

4.2(3) 図書館総経費に占める外部委託費の割合

基礎データ21.2：外部委託費 （千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	―	―	―	―	44,764	
医学部分館	―	―	―	―	0	
部局図書室	―	―	―	―	7,346	
附属図書館	―	―	―	―	52,110	

評価指標22.2：図書館総経費に占める外部委託費の割合 ＜図書館経営分析のための指標＞

外部委託費の割合＝外部委託費(基21.2)／図書館総経費(基20)×100 （%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	―	―	―	―	7.95	
医学部分館	―	―	―	―	0.00	
部局図書室	―	―	―	―	0.82	
附属図書館	―	―	―	―	3.18	

4.2(4) 図書館総経費に占める賃借料の割合

基礎データ21.3：賃貸料 （千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	29,172	31,179	31,149	32,573	7,044	
医学部分館	1,772	1,546	475	475	408	
部局図書室	10,052	7,967	7,332	7,084	588	
附属図書館	40,996	40,692	38,956	40,132	8,040	

評価指標22.3：図書館総経費に占める賃貸料の割合 ＜図書館経営分析のための指標＞

賃貸料の割合＝賃貸料(基21.3)／図書館総経費(基20)×100 （%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	6.42	5.90	6.02	6.08	1.25	
医学部分館	0.94	0.85	0.26	0.27	0.23	
部局図書室	1.00	0.81	0.77	0.76	0.07	
附属図書館	2.49	2.41	2.36	2.43	0.49	

4.2(5) 図書館総経費に占めるその他の運営費の割合

基礎データ21.4：その他の運営費 （千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	81,311	152,979	127,453	135,705	108,843	
医学部分館	10,710	10,206	8,597	12,745	9,842	
部局図書室	51,152	38,276	47,582	30,729	16,179	
附属図書館	143,173	201,461	183,632	179,179	134,864	

評価指標22.4：図書館総経費に占めるその他の運営費の割合 ＜図書館経営分析のための指標＞

その他の運営費の割合＝その他の運営費(基21.4)／図書館総経費(基20)×100　　（%：小数点第2位）

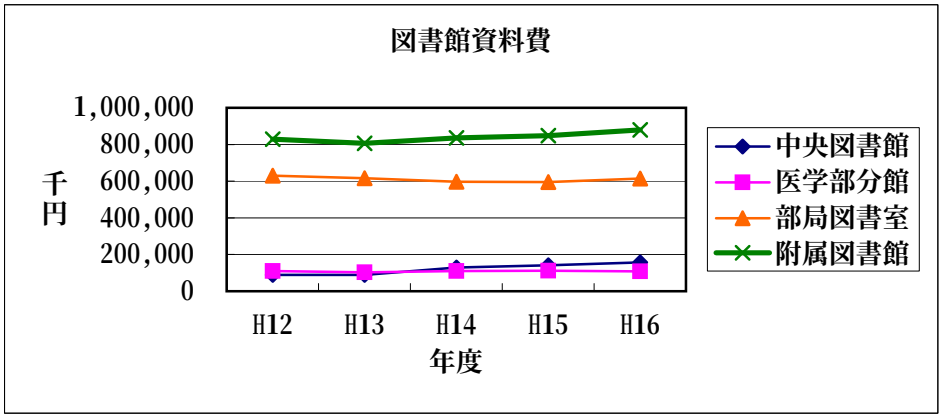
	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	17.90	28.94	24.63	25.34	19.34	一般物品(備品・消耗品)はここに含まれる
医学部分館	5.69	5.58	4.78	7.11	5.59	
部局図書室	5.09	3.91	4.97	3.28	1.80	
附属図書館	8.69	11.91	11.10	10.85	8.23	

4.3 図書館資料費

4.3(1) 図書館総経費に占める図書館資料費の割合

基礎データ22：図書館資料費　　（千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	88,133	89,062	128,583	140,709	156,352	増加傾向
医学部分館	110,421	102,411	109,405	112,306	108,110	
部局図書室	630,294	615,659	597,540	595,562	614,807	
附属図書館	828,848	807,132	835,528	848,577	879,269	



※増加は主に中央図書館によるもの。

評価指標23：図書館総経費に占める図書館資料費の割合 ＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

図書館資料費の割合＝図書館資料費(基22)／図書館総経費(基20)×100　　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	19.40	16.85	24.85	26.27	27.78	部局図書室で高い
医学部分館	58.71	56.01	60.83	62.67	61.39	
部局図書室	62.66	62.82	62.46	63.58	68.39	
附属図書館	50.29	47.72	50.52	51.38	53.68	

4.3(2) 図書館資料費に占める図書購入費の割合

基礎データ22.1：図書購入費　　（千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	45,195	52,898	41,444	53,368	38,193	減少傾向
医学部分館	16,815	15,281	13,273	11,871	11,707	
部局図書室	242,125	230,608	219,782	209,580	223,414	
附属図書館	304,135	298,787	274,499	274,819	273,314	

評価指標23.1：図書館資料費に占める図書購入費の割合　＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

図書購入費の割合＝図書購入費(基22.1)／図書館資料費(基22)×100　　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	51.28	59.39	32.23	37.93	24.43	減少傾向
医学部分館	15.23	14.92	12.13	10.57	10.83	
部局図書室	38.41	37.46	36.78	35.19	36.34	
附属図書館	36.69	37.02	32.85	32.39	31.08	

4.3(3) 図書館資料費に占める雑誌購入費の割合

基礎データ22.2：雑誌購入費　　（千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	27,613	26,898	81,718	81,900	30,749	
医学部分館	91,832	85,185	92,161	94,260	89,918	
部局図書室	370,452	359,004	350,483	372,301	351,338	
附属図書館	489,897	471,087	524,362	548,461	472,005	

評価指標23.2：図書館資料費に占める雑誌購入費の割合　＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

雑誌購入費の割合＝雑誌購入費(基22.2)／図書館資料費(基22)×100　　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	31.33	30.20	63.55	58.21	19.67	医分館は特に高い
医学部分館	83.17	83.18	84.24	83.93	83.17	H16の減少分の多くは
部局図書室	58.77	58.31	58.65	62.51	57.15	電子資料費に移行
附属図書館	59.11	58.37	62.76	64.63	53.68	

4.3(4) 図書館資料費に占める電子資料費の割合

基礎データ22.3：電子資料費　　（千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	—	—	—	—	83,997	H16から計上
医学部分館	—	—	—	—	2,687	それまでは他の資料費に分散
部局図書室	—	—	—	—	12,923	
附属図書館	—	—	—	—	99,607	

評価指標23.3：図書館資料費に占める電子資料費の割合　＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

電子資料費の割合＝電子資料費(基22.3)／図書館資料費(基22)×100　　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	—	—	—	—	53.72	
医学部分館	—	—	—	—	2.49	
部局図書室	—	—	—	—	2.10	
附属図書館	—	—	—	—	11.33	

4.3(5) 図書館資料費に占めるその他の資料費の割合

基礎データ22.4：その他の資料費 （千円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	15,325	9,266	5,421	5,441	3,413	
医学部分館	1,774	1,945	3,971	6,175	3,798	
部局図書室	17,717	26,047	27,275	13,681	27,132	
附属図書館	34,816	37,258	36,667	25,297	34,343	

評価指標23.4：図書館資料費に占めるその他の資料費の割合 ＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

その他の資料費の割合＝その他の資料費(基22.4)／図書館資料費(基22)×100 （%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	17.39	10.40	4.22	3.87	2.18	
医学部分館	1.61	1.90	3.63	5.50	3.51	
部局図書室	2.81	4.23	4.56	2.30	4.41	
附属図書館	4.20	4.62	4.39	2.98	3.91	

4.3(6) 利用対象者当たりの図書館資料費

評価指標24：利用対象者当たりの図書館資料費 ＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

学生当たりの図書館資料費＝図書館資料費(基22)／学生数(基2.1) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	5,316	5,338	7,749	8,482	9,455	
医学部分館	50,191	42,547	45,115	45,877	43,610	
部局図書室	43,834	43,122	42,175	42,113	43,734	
附属図書館	49,994	48,378	50,354	51,150	53,170	

教職員当たりの図書館資料費＝図書館資料費(基22)／教職員数(基2.2) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	25,443	25,815	37,586	41,131	44,242	
医学部分館	85,998	80,449	86,829	90,206	79,201	
部局図書室	289,126	282,802	276,511	273,696	283,452	
附属図書館	239,275	233,951	244,235	248,049	248,803	

全利用対象者当たりの図書館資料費＝図書館資料費(基22)／全利用対象者数(基2 （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	4,397	4,423	6,425	7,032	7,790	中央館で顕著な増加傾向
医学部分館	31,694	27,829	29,689	30,411	28,124	
部局図書室	38,064	37,417	36,594	36,497	37,888	
附属図書館	41,353	40,088	41,747	42,406	43,808	

4.3(7) 利用対象者当たりの図書購入費

評価指標24.1：利用対象者当たりの図書購入費 ＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

学生当たりの図書購入費＝図書購入費(基22.1)／学生数(基2.1) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	2,726	3,171	2,498	3,217	2,310	
医学部分館	7,643	6,349	5,473	4,849	4,722	
部局図書室	16,839	16,152	15,513	14,820	15,892	
附属図書館	18,345	17,909	16,543	16,565	16,527	

教職員当たりの図書購入費＝図書購入費(基22.1)／教職員数(基2.2) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	13,047	15,333	12,115	15,600	10,807	
医学部分館	13,096	12,004	10,534	9,535	8,577	
部局図書室	111,067	105,929	101,704	96,314	103,003	
附属図書館	87,799	86,605	80,239	80,333	77,338	

全利用対象者当たりの図書購入費＝図書購入費(基22.1)／全利用対象者数(基2.3 （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	2,255	2,627	2,071	2,667	1,903	減少傾向
医学部分館	4,826	4,152	3,602	3,214	3,046	
部局図書室	14,622	14,015	13,460	12,843	13,768	
附属図書館	15,174	14,840	13,715	13,733	13,617	

4.3(8) 利用対象者当たりの雑誌購入費

評価指標24.2：利用対象者当たりの雑誌購入費 ＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

学生当たりの雑誌購入費＝雑誌購入費(基22.2)／学生数(基2.1) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	1,666	1,612	4,925	4,937	1,859	
医学部分館	41,742	35,391	38,005	38,505	36,272	
部局図書室	25,763	25,146	24,738	26,326	24,992	
附属図書館	29,549	28,236	31,601	33,060	28,542	

教職員当たりの雑誌購入費＝雑誌購入費(基22.2)／教職員数(基2.2) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	7,971	7,797	23,887	23,940	8,701	
医学部分館	71,520	66,917	73,144	75,711	65,874	
部局図書室	169,932	164,908	162,186	171,094	161,982	
附属図書館	141,425	136,547	153,277	160,322	133,561	

全利用対象者当たりの雑誌購入費＝雑誌購入費(基22.2)／全利用対象者数(基2.3 （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	1,378	1,336	4,083	4,093	1,532	
医学部分館	26,358	23,148	25,010	25,524	23,392	
部局図書室	22,372	21,819	21,464	22,815	21,651	
附属図書館	24,442	23,398	26,200	27,408	23,517	

4.3(9) 利用対象者当たりの電子資料費

評価指標24.3：利用対象者当たりの電子資料費 ＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

学生当たりの電子資料費＝電子資料費(基22.3)／学生数(基2.1) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	―	―	―	―	5,079	
医学部分館	―	―	―	―	1,084	
部局図書室	―	―	―	―	919	
附属図書館	―	―	―	―	6,023	

教職員当たりの電子資料費＝電子資料費(基22.3)／教職員数(基2.2) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	―	―	―	―	23,768	
医学部分館	―	―	―	―	1,968	
部局図書室	―	―	―	―	5,958	
附属図書館	―	―	―	―	28,185	

全利用対象者当たりの電子資料費＝電子資料費(基22.3)／全利用対象者数(基2.3 （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	―	―	―	―	4,185	
医学部分館	―	―	―	―	699	
部局図書室	―	―	―	―	796	
附属図書館	―	―	―	―	4,963	

4.3(10) 利用対象者当たりのその他の資料費

評価指標24.4：利用対象者当たりのその他の資料費 ＜図書館資料構築に関わる基礎的な指標＞

学生当たりのその他の資料費＝その他の資料費(基22.4)／学生数(基2.1) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	924	555	327	328	206	
医学部分館	806	808	1,638	2,522	1,532	
部局図書室	1,232	1,824	1,925	967	1,930	
附属図書館	2,100	2,233	2,210	1,525	2,077	

教職員当たりのその他の資料費＝その他の資料費(基22.4)／教職員数(基2.2) （円）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	4,424	2,686	1,585	1,590	966	
医学部分館	1,382	1,528	3,152	4,960	2,782	
部局図書室	8,127	11,965	12,621	6,287	12,509	
附属図書館	10,051	10,799	10,718	7,395	9,718	

全利用対象者当たりのその他の資料費＝その他の資料費(基22.4)／全利用対象者数(基2.3)

(円)

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	765	460	271	272	170	
医学部分館	509	529	1,078	1,672	988	
部局図書室	1,070	1,583	1,670	838	1,672	
附属図書館	1,737	1,851	1,832	1,264	1,711	

5 図書館活動

5.1 教育支援活動

5.1(1) 図書館ガイダンス（開催回数、時間数、参加人数）

評価指標25：図書館ガイダンス（開催回数、時間数、参加人数）　＜図書館ガイダンスの実施状況を示す指標＞

図書館ガイダンス（希望者参加によるもの）　(回)(時間)(人)

中央図書館	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
開催回数	14	23	17	45	40	
時間数	17	30	24	53	38	
参加人数	127	213	550	827	745	

図書館ガイダンス（授業等単位のもの）　(回)(時間)(人)

中央図書館	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
開催回数	0	0	2	0	2	
時間数	0	0	2	0	2	
参加人数	0	0	11	0	23	

5.2 企画展示活動

5.2(1) 展示会・講演会等の開催とその参加人数

評価指標26：展示会・講演会等の開催とその参加人数　＜図書館の公開活動の実施状況を示す指標＞

展示会　(日)(人)

中央図書館	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
日数	10	0	25	21	36	H14から別に常設展示あり
参加人数	―	0	658	649	1,216	不明あり

講演会等　(日)(人)

中央図書館	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
日数	1	1	2	1	3	
参加人数	―	242	118	119	439	不明あり

5.3 広報活動

5.3(1) 図書館の広報及び出版活動

評価指標27：図書館の広報及び出版活動　＜図書館の広報、出版等の活動状況を示す指標＞

図書館の刊行物　(回)(部)

中央図書館	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
発行回数	4	4	4	4	4	その他、展示会等の冊子を
部数	6,400	6,400	6,500	6,800	7,050	その都度配布

II　電子図書館サービス関係評価指標

1 資源
1.1 ローカルなデジタル・コンテンツ

評価指標28：電子図書の数 ＜図書館の電子情報の利用可能規模を示す指標＞

1.1(1) 電子図書の数　（タイトル）

提供者（ベンダー）	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
McGraw-Hill	—	—	1	1	1	医学部内のみ閲覧可能
NetLibrary	—	—	—	—	296	
合　計	—	—	1	1	297	

評価指標29：図書館の電子的コレクションの規模 ＜図書館が電子化している資料の規模を示す指標＞

1.1(2) 図書館の電子的コレクションの規模　（件）

プロジェクト名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
伊藤圭介文庫（旧）	9,000	16,000	16,000	16,000	16,000	タイプ：視覚資料 サーバ名： www.nul.nagoya-u.ac.jp
伊藤圭介文庫（新）	—	—	—	16,000	16,000	タイプ：視覚資料 サーバ名： libst1.nul.nagoya-u.ac.jp
紀要情報照会	24	27	28	29	31	タイプ：テキスト サーバ名： www.nul.nagoya-u.ac.jp

※伊藤圭介文庫の件数は画像の枚数，紀要情報照会は紀要のタイトル数

※伊藤圭介文庫(新)は、平成15年より附属図書館研究開発室のサーバで公開されたもので、画像の枚数は変わらないが、検索が可能になるなど機能の面は改善されている。

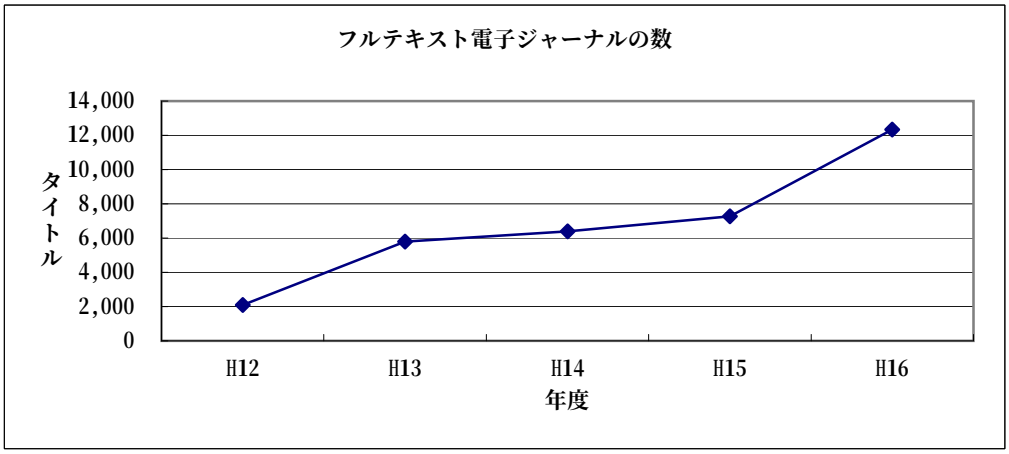
1.2 電子ジャーナル

評価指標30：電子ジャーナルの数 ＜図書館の電子情報の利用可能規模を示す指標＞

1.2(1) フルテキスト電子ジャーナルの数　（タイトル）

提供者（ベンダー）	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
ACS	—	12	12	11	30	
AIP	—	13	13	13	15	
APS	—	7	7	9	7	
BioOne	—	—	45	58	77	H14.4導入
Blackwell Synergy	—	435	598	600	641	H14.1導入
Cambridge UP	—	142	150	150	188	H14.1導入
Cell Press	—	—	—	8	9	
EBSCOhost	613	—	—	—	—	H12.1導入
EBSCOhost ASE	—	1,486	1,486	1,737	1,976	
Emerald	—	95	95	95	95	
FirstSearch ECO	386	386	518	520	529	H12.1導入
IEEE-ASPP	—	107	111	113	105	

J. of Geophysical Research	—	—	—	5	6	H15.4導入
JSTOR	—	233	233	399	474	H14.1導入
Kluwer	—	600	600	645	654	H14.1導入
LexisNexis Academic	—	—	—	—	3,509	H17.2導入
Lippincott Williams & Wilkins	—	—	—	—	100	H16.4導入
Mental Health Collection	—	—	—	10	10	H15.4導入
Nature	—	—	1	—	—	Nature本誌、H14.4導入
Nature Materials	—	—	—	1	—	H15.4導入
Nature PG	—	—	—	15	16	Nature本誌＋R/R誌、H15.10追加導入
Organic Letters	—	—	—	1	—	H15.4導入
Oxford UP	—	—	—	—	164	H17.1導入
PCI FullText	—	—	164	200	345	H14.4導入
ProQuest ABI/Inform Select	—	—	25	50	389	H14.4導入
ProQuest Computing	—	—	—	270	248	H15.4導入
ProQuest News Papers	—	—	5	5	5	H14.4導入
Science	—	—	1	1	1	H14.4導入
SD21	1,090	1,496	—	—	—	H11.9導入、H13はIDEALを含む
ScienceDirect	—	—	1,496	1,500	1,784	
SpringerLink	—	442	485	458	505	H14.1導入
UniBio Press	—	—	—	—	3	
Wiley InterScience EAL	—	346	346	402	455	H14.1導入
合　計	2,089	5,800	6,391	7,276	12,340	
備　考	H12.4時点	H14.1時点	H14.4時点	H15.12時点	H17.3時点	



※電子ジャーナルの数は、導入時期の関係で年度ごとに集計した時期が異なっているが、おおむね順調に増加している。

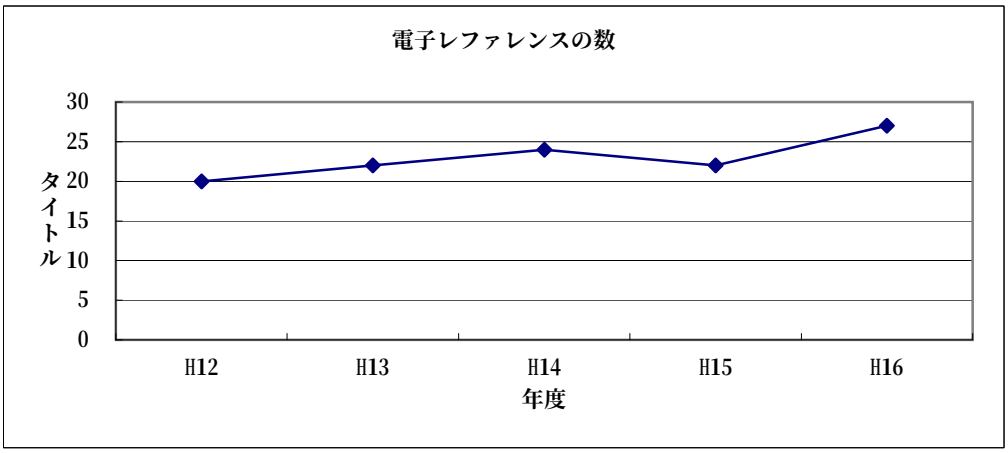
1.3 電子レファレンス

評価指標31：電子レファレンスの数 ＜図書館の電子情報の利用可能規模を示す指標＞

1.3(1) 電子レファレンスの数

（タイトル）

	提供者（ベンダー）	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	朝日新聞社	1	1	1	1	1	朝日新聞(CD-ROM)
	科学技術振興機構	2	2	2	2	2	JOIS,STN
	紀伊國屋書店	1	1	—	—	—	雑誌記事索引(CD-ROM)
	国立情報学研究所	1	1	1	1	1	NACSIS-IR
	日本経済新聞社	1	1	2	2	2	日経テレコン、日本経済新聞(CD-ROM)
	ICDD	1	1	1	1	1	PDF(CD-ROM)
	ISI	2	2	2	—	—	SCI,JCR(CD-ROM)
医学	医学中央雑誌刊行会	1	2	2	1	1	医中誌Web，医中誌(CD-ROM)
部局図書室	医学中央雑誌刊行会	—	—	—	—	1	医中誌Web
	AEA	—	—	1	1	1	EconLit
	AMS	1	1	1	1	1	MathSciNet
	Dialog	1	1	1	1	1	Dialog
	OECD	1	1	1	1	1	SourceOECD
	Springer	—	—	1	1	1	Zentralblatt Math
附属図書館	朝日新聞社	—	—	—	—	1	聞蔵DNA
	日外アソシエーツ	1	1	1	1	1	NICHIGAI/WEB
	ネットアドバンス社	—	—	—	—	1	JapanKnowledge
	Bowker	—	—	—	—	1	Global Books In Print
	ISI	—	1	1	1	1	Web of Knowledge
	LexisNexis	—	—	—	—	1	LexisNexis Academic
	OVID	6	6	6	7	7	Biological Abstracts，CINAHL，
合　計		20	22	24	22	27	



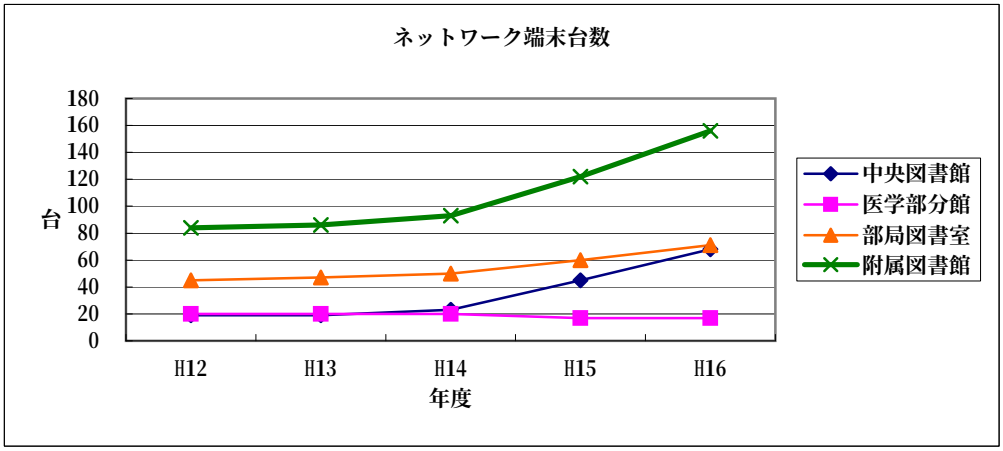
※電子レファレンスのタイトル数は微増に留まっている。しかし、数値には表れないが、提供形態がCD-ROMからWEB版に切り替わり学内のどこからでもアクセスが可能になるなど、利用面が改善されたものもある。

2 管理運営
2.1 図書館コンピュータ端末
2.1(1) 図書館コンピュータ端末台数

評価指標32.1：図書館コンピュータ端末台数
＜図書館設備の電子情報に対するインフラとしての機能を示す指標＞

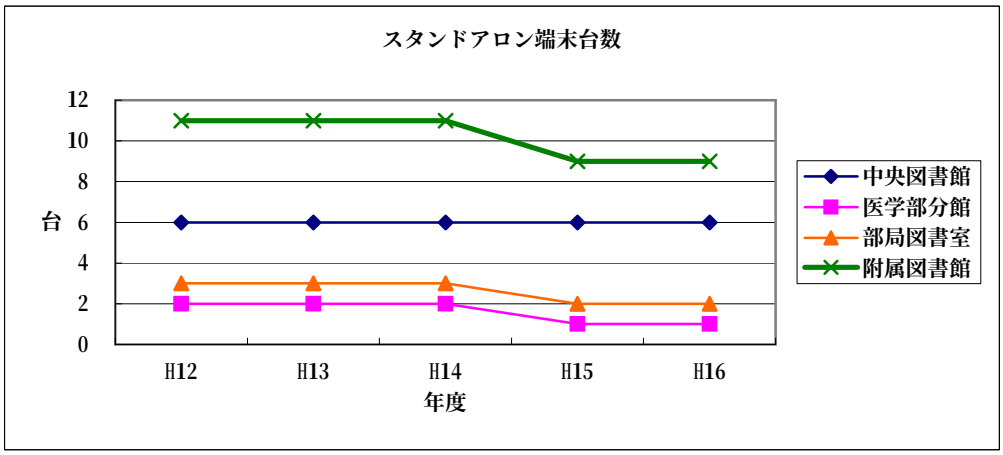
ネットワーク端末台数 （台）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	19	19	23	*1 45	*2 68	*1は、情報メディア教育センターの21台を含んだ数 *2は、*1及び情報連携基盤センターの17台を含んだ数
医学部分館	20	20	20	17	17	
部局図書室	45	47	50	60	71	
附属図書館	84	86	93	122	156	



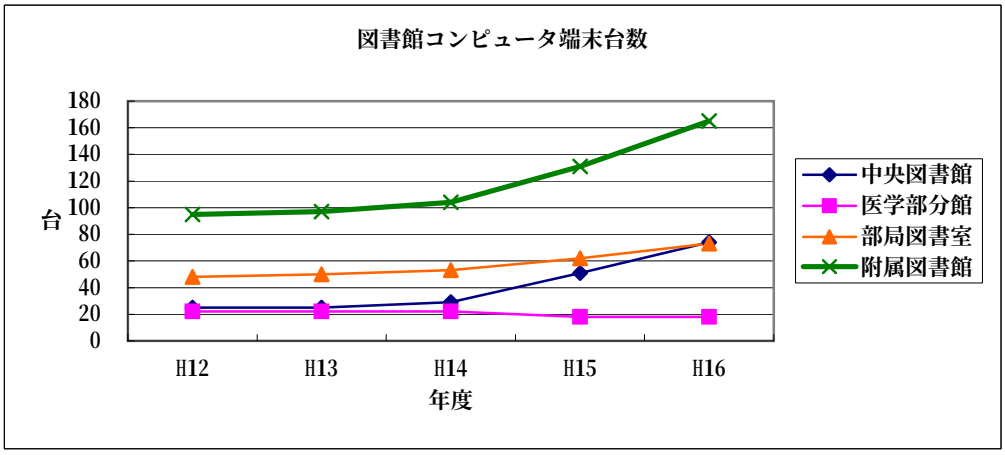
スタンドアロン端末台数 （台）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	6	6	6	6	6	
医学部分館	2	2	2	1	1	
部局図書室	3	3	3	2	2	
附属図書館	11	11	11	9	9	



図書館コンピュータ端末台数＝
　ネットワーク端末台数(指32.1)＋スタンドアロン端末台数(指32.1)　（台）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	25	25	29	51	74	
医学部分館	22	22	22	18	18	
部局図書室	48	50	53	62	73	
附属図書館	95	97	104	131	165	



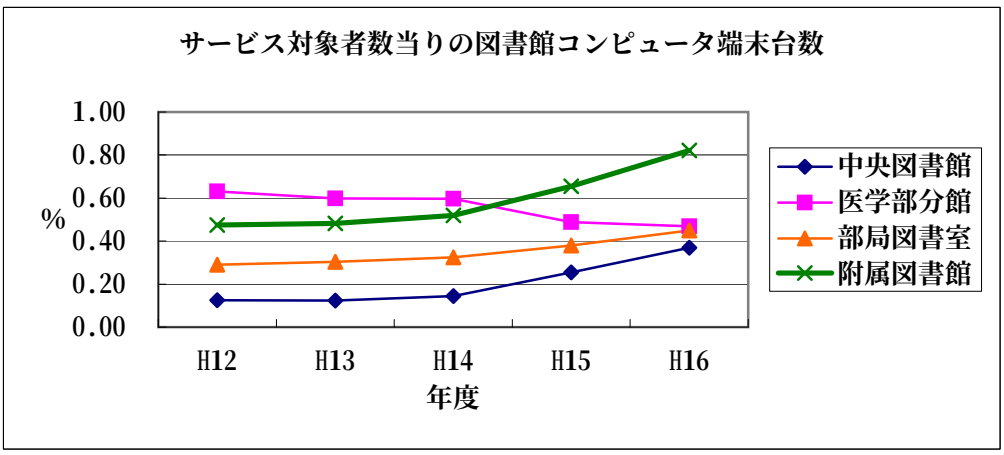
※中央図書館では平成14年度末に情報メディア教育センターのサテライトラボ設置（21台）、平成16年度に情報連携基盤センターの端末（17台）設置などがあり、部局図書室でも徐々にネットワーク端末の台数が増加している。これに対し、スタンドアロン端末はやや減少している。

2.1(2) サービス対象者数当りの図書館コンピュータ端末台数

評価指標32.2：サービス対象者数当りの図書館コンピュータ端末台数
　＜図書館設備の電子情報に対するインフラとしての機能を示す指標＞

サービス対象者数当りの図書館コンピュータ端末台数＝
　図書館コンピュータ端末台数(指32.1)／全利用対象者数(基2.3)×100　（%：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.12	0.12	0.14	0.25	0.37	
医学部分館	0.63	0.60	0.60	0.49	0.47	
部局図書室	0.29	0.30	0.32	0.38	0.45	
附属図書館	0.47	0.48	0.52	0.65	0.82	



※図書館コンピュータ端末台数は徐々に増加しているが、それでも端末台数は全利用対象者数の1%にも満たない。

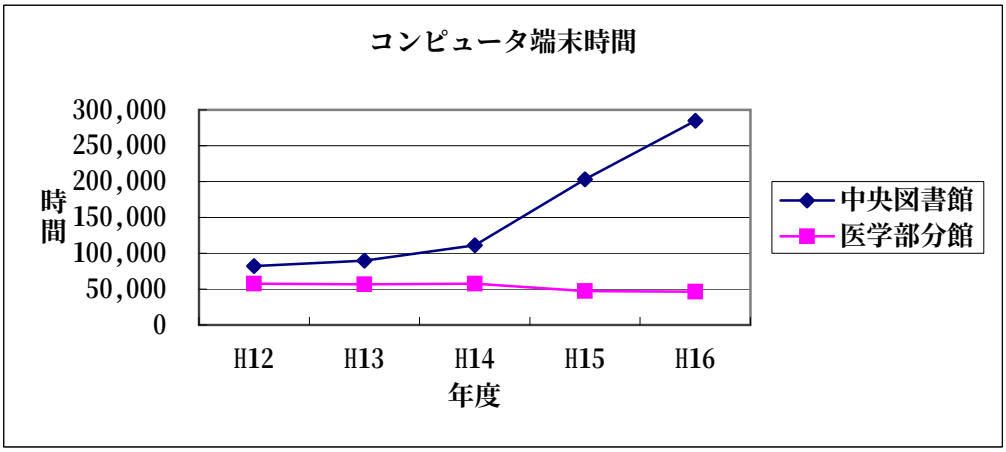
2.1(3) 利用者当りの利用可能な図書館コンピュータ端末時間

評価指標32.3：利用者当りの利用可能な図書館コンピュータ端末時間
＜潜在利用者の要求への適合性を示す指標＞

コンピュータ端末時間＝図書館コンピュータ端末台数(指32.1)×年間開館時間数(指11)

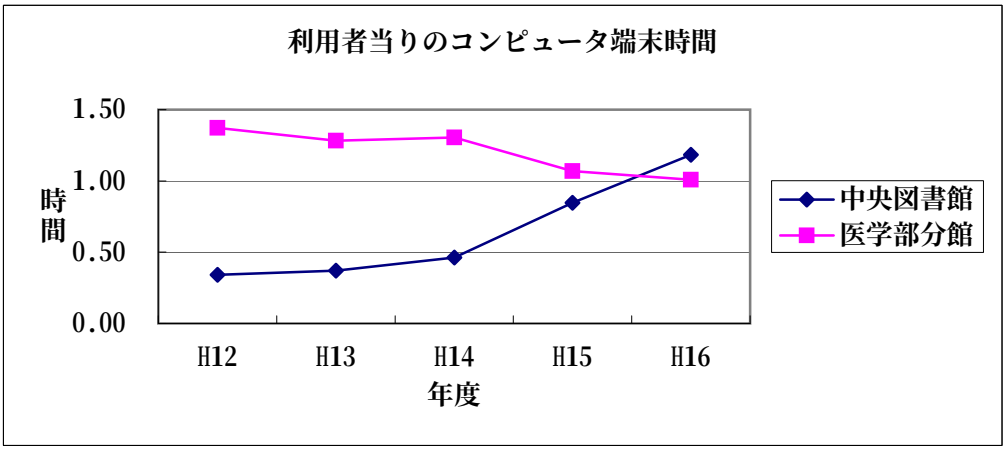
（時間）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	82,075	89,750	111,128	203,031	284,974	
医学部分館	57,376	56,628	57,662	47,322	46,476	



利用者当りの図書館コンピュータ端末時間(1ヶ月当り)＝
コンピュータ端末時間(指32.3)／全利用対象者数(基2.3)／12　（時間：小数点第2位）

	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	0.34	0.37	0.46	0.85	1.18	
医学部分館	1.37	1.28	1.30	1.07	1.01	



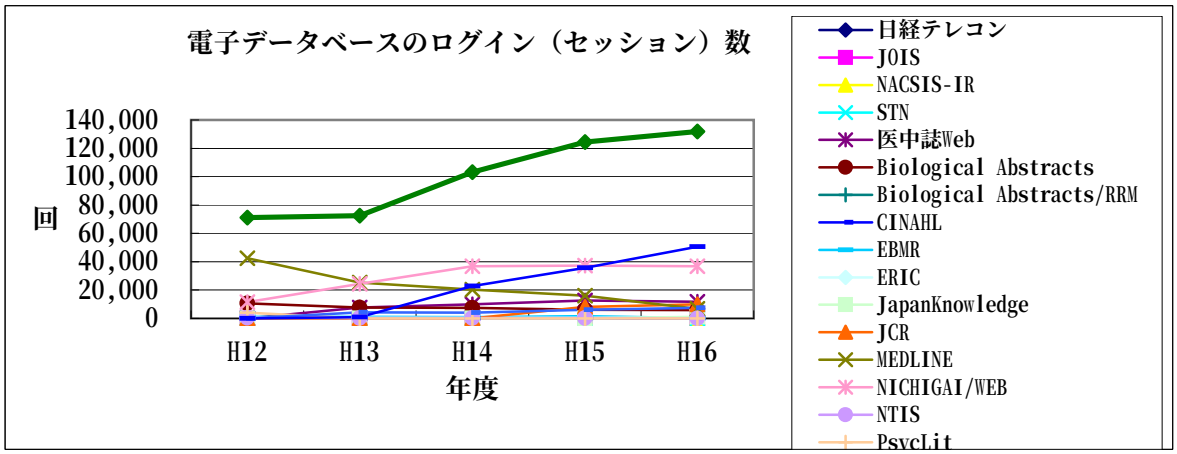
3．サービス

3.1 各種サービス利用度

評価指標33.1：電子データベースのログイン（セッション）数 ＜電子情報へのアクセスの拡大を示す指標＞

3.1(1) 電子データベースのログイン（セッション）数 （回）

	データベース名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
中央図書館	日経テレコン	4	2	5	3	6	
	JOIS	36	2	16	12	4	
	NACSIS-IR	11	114	5	0	0	
	STN	3	3	0	0	0	
医分館	医中誌Web	—	7,667	10,034	12,617	11,787	
附属図書館	Biological Abstracts	10,706	7,734	7,409	6,088	5,936	
	Biological Abstracts/RRM	—	—	—	379	67	
	CINAHL	—	—	—	44	214	
	EBMR	1,089	1,233	855	1,534	263	
	ERIC	673	545	528	563	711	
	JapanKnowledge	—	—	—	—	1,237	
	JCR	—	—	—	8,136	9,956	
	MEDLINE	42,342	25,235	20,314	15,955	6,754	
	NICHIGAI/WEB	11,626	24,493	36,742	37,233	36,860	
	NTIS	473	328	318	153	98	
	PsycLit	4,150	—	—	—	—	
	PsycINFO	—	4,194	4,170	6,105	7,471	
	Web of Science	—	862	22,824	35,656	50,535	
合　計		71,113	72,412	103,220	124,478	131,899	



※電子データベースのログイン数は全体としては増加している。ログイン数が減少しているものについては、MEDLINEに対するPubMedなど、競合するデータベースが無料で公開されていることが大きい。

3.1(2) 電子データベースのリジェクトセッション数と総試行回数に対する比率

評価指標33.2：電子データベースのリジェクトセッション数と総試行回数に対する比率
＜電子データベースのライセンス数の適合性を示す指標＞

リジェクトセッション数　　（回）

データベース名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
JapanKnowledge	—	—	—	—	287	

リジェクト比率＝リジェクトセッション数(指33.2)／
(電子データベースのログイン数(指33.1)＋リジェクトセッション数(指33.2))×100　　（%：小数点第1位）

データベース名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
JapanKnowledge	—	—	—	—	18.8	

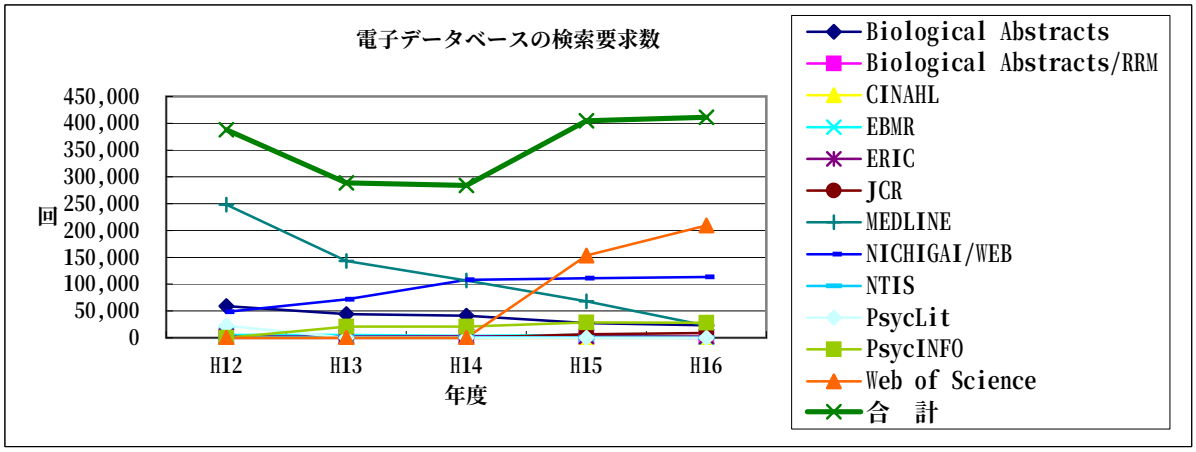
※一つのデータベースについてしか数値がないが、このJapanKnowledgeについていえば約5回に1回は接続がリジェクトされており、ライセンス数がやや少ない可能性がある。

3.1(3) 電子データベースの質問（検索）数と比率

評価指標33.3：電子データベースの質問（検索）数と比率
＜電子情報の利用の中で検索利用の程度を示す指標＞

電子データベースの検索要求数　　（回）

データベース名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
Biological Abstracts	58,949	44,043	41,379	27,454	23,473	
Biological Abstracts/RRM	—	—	—	853	178	
CINAHL	—	—	—	150	1,021	
EBMR	5,222	5,367	3,482	5,627	1,327	
ERIC	2,947	2,637	2,820	2,336	2,197	
JCR	—	—	—	6,287	8,867	
MEDLINE	248,238	143,078	106,558	67,775	22,966	
NICHIGAI/WEB	48,461	71,407	108,087	111,267	113,330	
NTIS	1,828	1,068	1,087	761	249	
PsycLit	22,521	—	—	—	—	
PsycINFO	—	21,187	20,839	28,701	28,192	
Web of Science	—	—	—	153,365	209,673	
合　計	388,166	288,787	284,252	404,576	411,473	

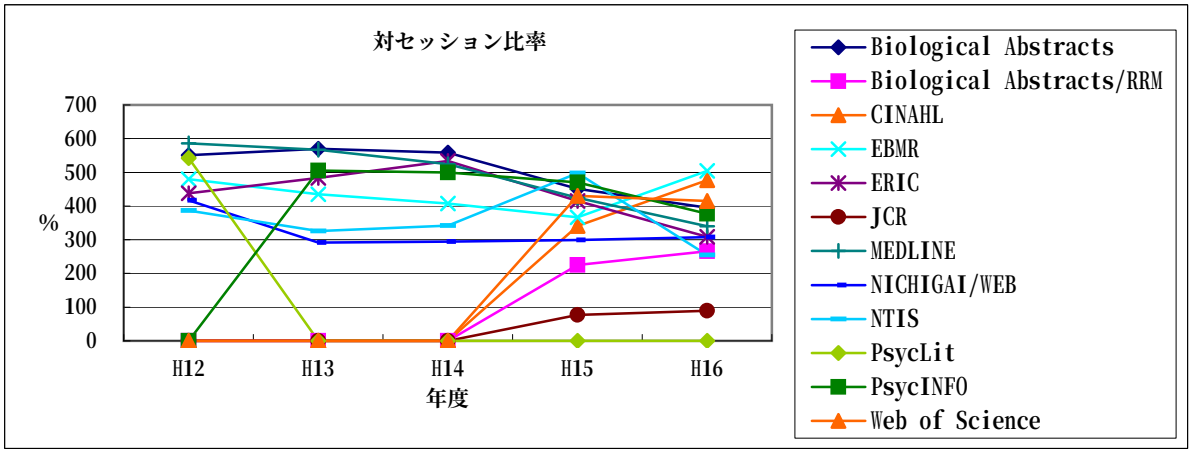


※検索要求数のうち、MEDLINEの減少については、競合するデータベース(PubMED)が無料で公開されていることが大きい。

対セッション比率＝電子データベースの検索要求数(指33.3)／電子データベースのログイン数(指33.1)×100

（%）

データベース名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
Biological Abstracts	551	569	558	451	395	
Biological Abstracts/RRM	—	—	—	225	266	
CINAHL	—	—	—	341	477	
EBMR	480	435	407	367	505	
ERIC	438	484	534	415	309	
JCR	—	—	—	77	89	
MEDLINE	586	567	525	425	340	
NICHIGAI/WEB	417	292	294	299	307	
NTIS	386	326	342	497	254	
PsycLit	543	—	—	—	—	
PsycINFO	—	505	500	470	377	
Web of Science	—	—	—	430	415	



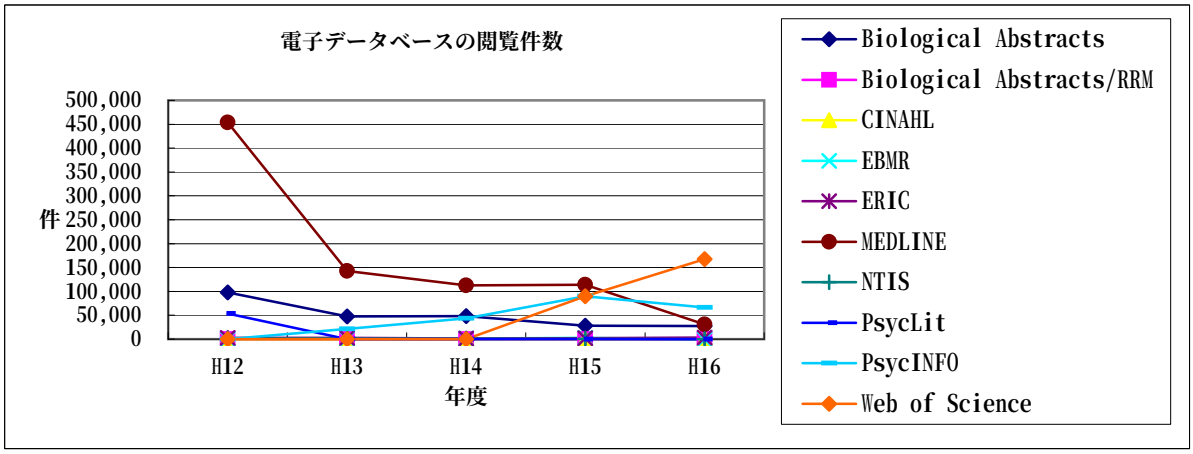
※対セッション比率は、平成12年以前から契約しているものは300%から600%の間でやや減少傾向のものが多く、平成15年以降契約したものは増加傾向を示すものが多い。

3.1(4) 電子データベースの要求アイテム（閲覧、ダウンロード、Eメール、印刷）数

評価指標33.4：電子データベースの要求アイテム（閲覧、ダウンロード、Eメール、印刷）数
＜電子情報の利用件数を示す指標＞

電子データベースの閲覧件数　（件）

データベース名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
Biological Abstracts	97,614	47,442	48,141	28,368	27,398	OVID
Biological Abstracts/RRM	—	—	—	265	16	OVID
CINAHL	—	—	—	176	521	OVID
EBMR	599	1,265	1,538	2,998	278	OVID
ERIC	2,366	2,637	1,443	1,880	3,483	OVID
MEDLINE	453,527	143,078	112,644	113,697	30,588	OVID
NTIS	1,267	1,068	380	543	113	OVID
PsycLit	53,472	—	—	—	—	OVID
PsycINFO	—	21,187	43,370	90,014	66,299	OVID
Web of Science	—	—	—	90,097	167,337	Web of Knowledge



※要求アイテム数については、一部のデータベースしかデータがない。このうち、MEDLINEの閲覧件数の減少については、競合するデータベース(PubMED)が無料で公開されていることが大きい。

電子データベースのダウンロード件数　（件）

データベース名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
Biological Abstracts	594	0	—	—	—	OVID
Biological Abstracts/RRM	—	—	—	—	—	OVID
CINAHL	—	—	—	—	—	OVID
EBMR	0	0	—	—	—	OVID
ERIC	4	0	—	—	—	OVID
MEDLINE	2,839	190	—	—	—	OVID
NTIS	0	0	—	—	—	OVID
PsycLit	0	—	—	—	—	OVID
PsycINFO	—	0	—	—	—	OVID
Web of Science	—	—	—	28,932	27,161	Web of Knowledge

電子データベースのEメール件数　（件）

データベース名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
Biological Abstracts	—	—	—	—	—	OVID
Biological Abstracts/RRM	—	—	—	—	—	OVID
CINAHL	—	—	—	—	—	OVID
EBMR	—	—	—	—	—	OVID
ERIC	—	—	—	—	—	OVID
MEDLINE	—	—	—	—	—	OVID
NTIS	—	—	—	—	—	OVID
PsycLit	—	—	—	—	—	OVID
PsycINFO	—	—	—	—	—	OVID
Web of Science	—	—	—	3,744	4,513	Web of Knowledge

電子データベースの印刷件数 （件）

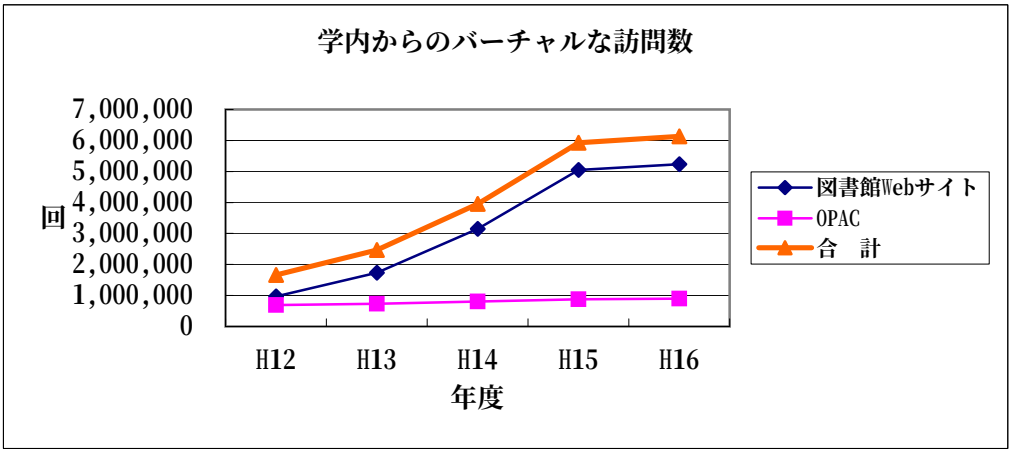
データベース名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
Biological Abstracts	2	0	—	—	—	OVID
Biological Abstracts/RRM	—	—	—	—	—	OVID
CINAHL	—	—	—	—	—	OVID
EBMR	0	0	—	—	—	OVID
ERIC	0	0	—	—	—	OVID
MEDLINE	2,893	0	2	—	—	OVID
NTIS	0	0	—	—	—	OVID
PsycLit	0	—	—	—	—	OVID
PsycINFO	—	0	—	—	—	OVID
Web of Science	—	—	—	12,949	37,283	Web of Knowledge

3.1(5) 図書館Webサイト及び目録へのバーチャルな訪問数

評価指標34：図書館Webサイト及び目録へのバーチャルな訪問数
＜電子図書館サービスへの利用者の関心度を示す指標＞

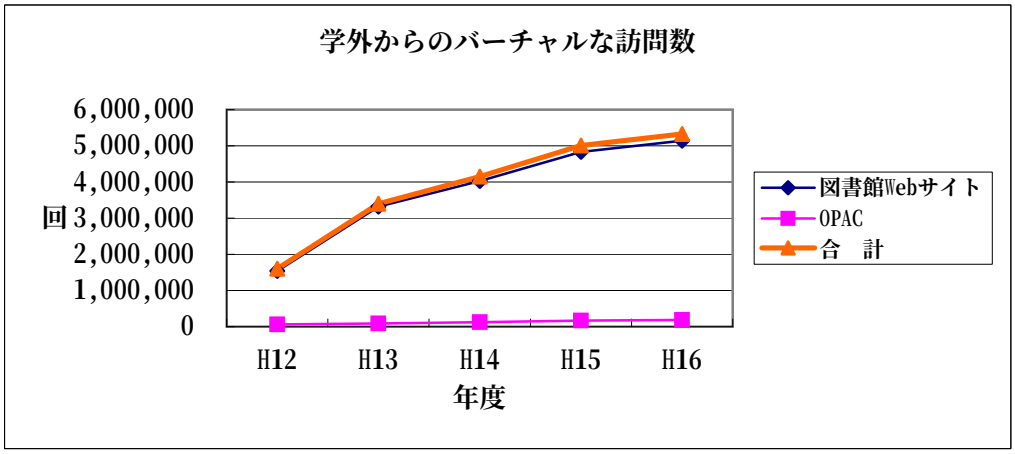
学内からのバーチャルな訪問数 （回）

サーバ	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
図書館Webサイト	967,667	1,738,528	3,151,295	5,043,915	5,237,016	
OPAC	691,552	730,046	800,349	878,873	898,593	
合　計	1,659,219	2,468,574	3,951,644	5,922,788	6,135,609	



学外からのバーチャルな訪問数 （回）

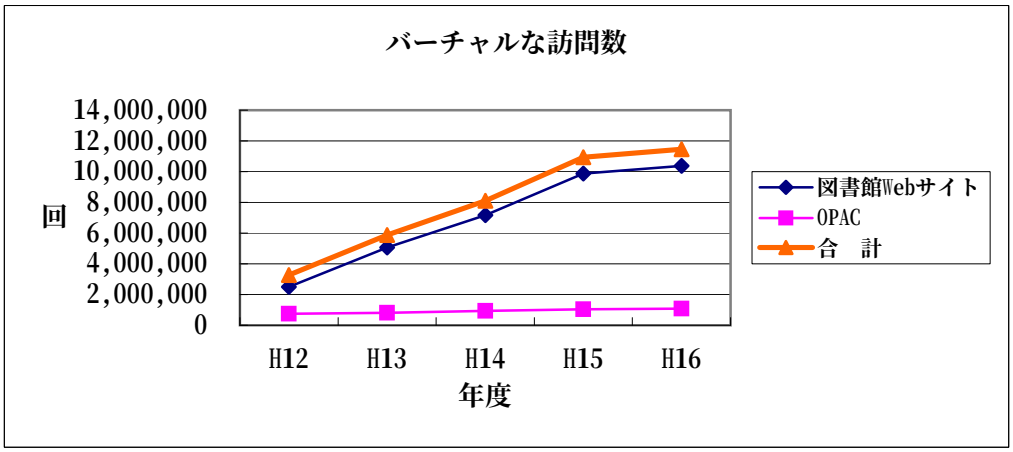
サーバ	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
図書館Webサイト	1,536,805	3,315,659	4,023,771	4,834,784	5,141,879	
OPAC	64,902	86,889	127,410	170,301	186,025	
合　計	1,601,707	3,402,548	4,151,181	5,005,085	5,327,904	



バーチャルな訪問数＝学内からのバーチャルな訪問数(指34)＋学外からのバーチャルな訪問数(指34)

（回）

サーバ	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
図書館Webサイト	2,504,472	5,054,187	7,175,066	9,878,699	10,378,895	
OPAC	756,454	816,935	927,759	1,049,174	1,084,618	
合　計	3,260,926	5,871,122	8,102,825	10,927,873	11,463,513	



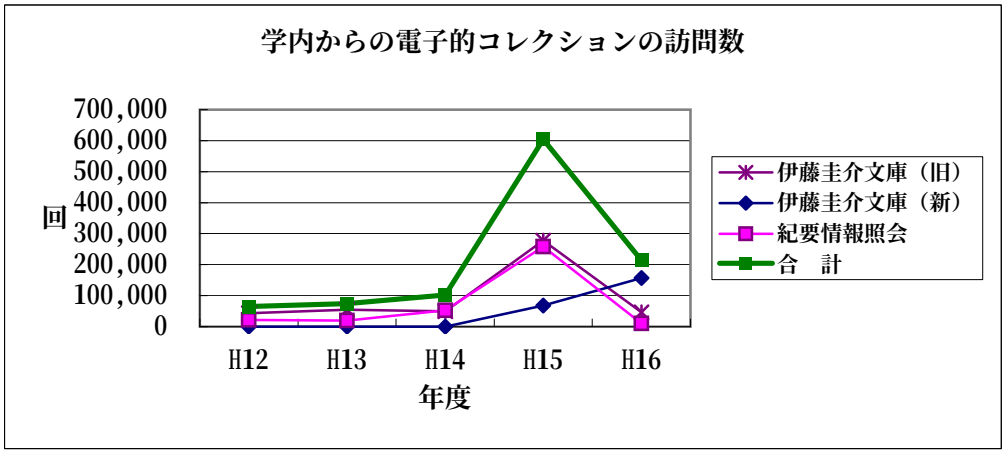
※バーチャルな訪問数の増加は、図書館Webサイトにおいて著しい。また、OPACの利用はもっぱら学内からであることがわかる。

3.1(6) 図書館の電子的コレクションの利用

評価指標35：図書館の電子的コレクションの利用　＜電子的コレクションの利用を示す指標＞

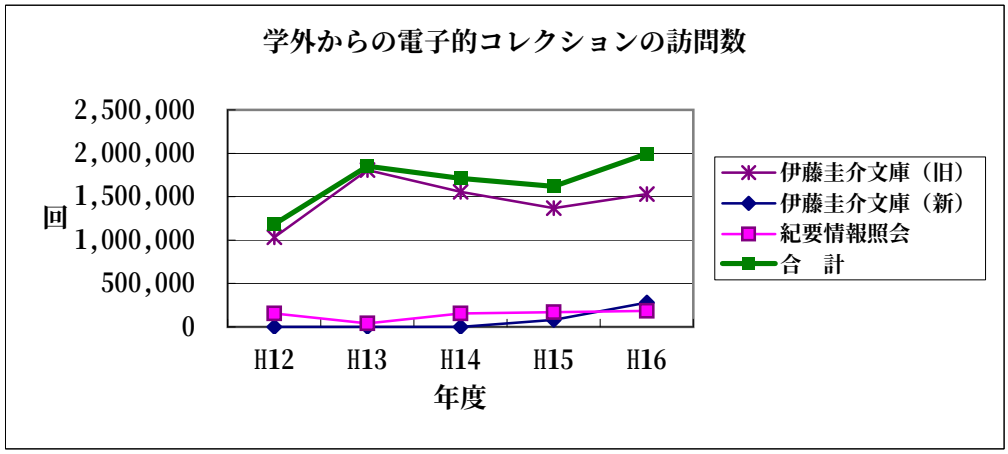
学内からの電子的コレクションの訪問数　（回）

プロジェクト名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
伊藤圭介文庫（旧）	43,879	54,537	49,960	278,118	46,484	サーバ名：www.nul.nagoya-u.ac.jp
伊藤圭介文庫（新）	—	—	—	67,969	156,483	サーバ名：libst1.nul.nagoya-u.ac.jp
紀要情報照会	21,470	19,687	52,334	257,814	10,667	サーバ名：www.nul.nagoya-u.ac.jp
合　計	65,349	74,224	102,294	603,901	213,634	



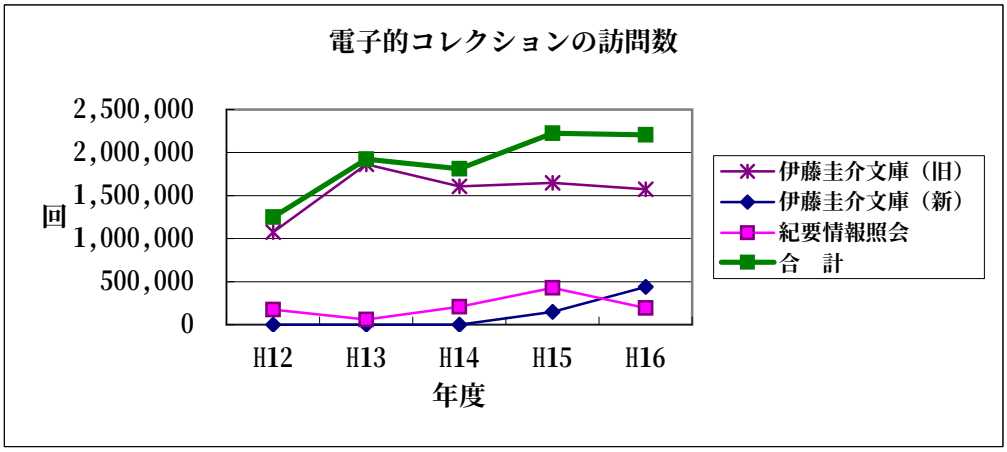
学外からの電子的コレクションの訪問数　（回）

プロジェクト名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
伊藤圭介文庫（旧）	1,031,260	1,808,487	1,555,333	1,369,327	1,528,422	サーバ名：www.nul.nagoya-u.ac.jp
伊藤圭介文庫（新）	—	—	—	81,545	281,455	サーバ名：libst1.nul.nagoya-u.ac.jp
紀要情報照会	153,213	41,624	155,885	168,774	184,388	サーバ名：www.nul.nagoya-u.ac.jp
合　計	1,184,473	1,850,111	1,711,218	1,619,646	1,994,265	



電子的コレクションの訪問数＝学内からの電子的コレクションの訪問数(指35)＋
学外からの電子的コレクションの訪問数(指35)　（回）

プロジェクト名	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
伊藤圭介文庫（旧）	1,075,139	1,863,024	1,605,293	1,647,445	1,574,906	サーバ名：www.nul.nagoya-u.ac.jp
伊藤圭介文庫（新）	—	—	—	149,514	437,938	サーバ名：libst1.nul.nagoya-u.ac.jp
紀要情報照会	174,683	61,311	208,219	426,588	195,055	サーバ名：www.nul.nagoya-u.ac.jp
合　計	1,249,822	1,924,335	1,813,512	2,223,547	2,207,899	



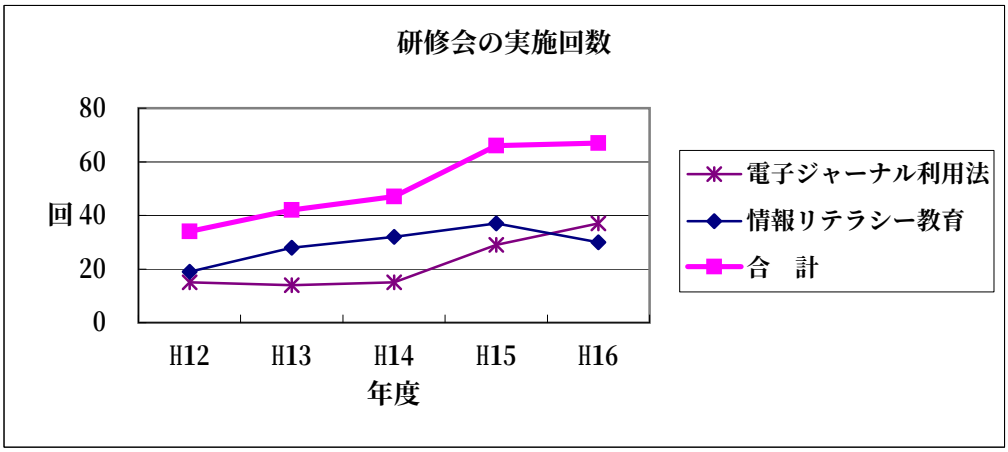
※伊藤圭介文庫（旧）は学外からのアクセスが突出しているが、実際には検索ロボットによるアクセスが大多数を占めていると思われる（処理の関係上、検索ロボットによるアクセス回数は除外していない）。

3.1(7) 電子サービスに関する研修会の実施回数と出席者数（比率）

評価指標36.1：電子サービスに関する研修会の実施回数と出席者数（比率）
＜電子的な図書館サービスに関する利用者獲得の達成度を示す指標＞

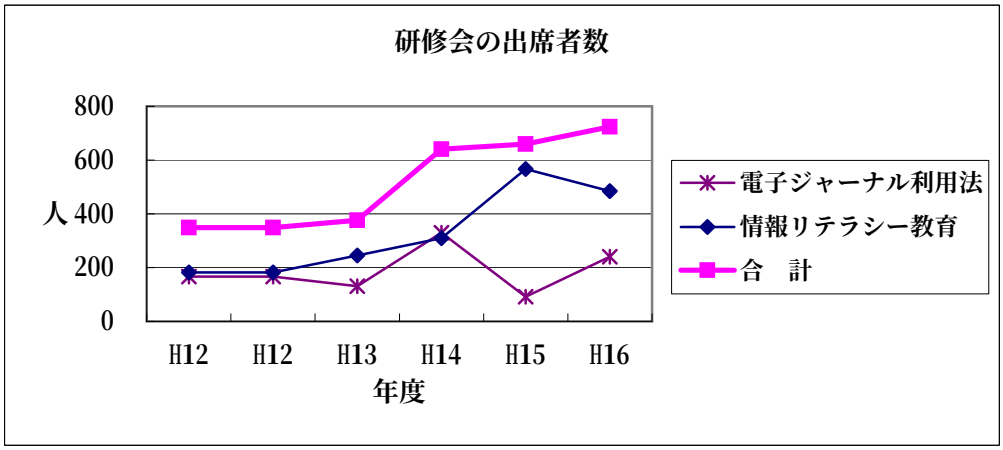
研修会の実施回数　（回）

研修会種別	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
電子ジャーナル利用法	15	14	15	29	37	
情報リテラシー教育	19	28	32	37	30	
合　計	34	42	47	66	67	



研修会の出席者数　　（人）

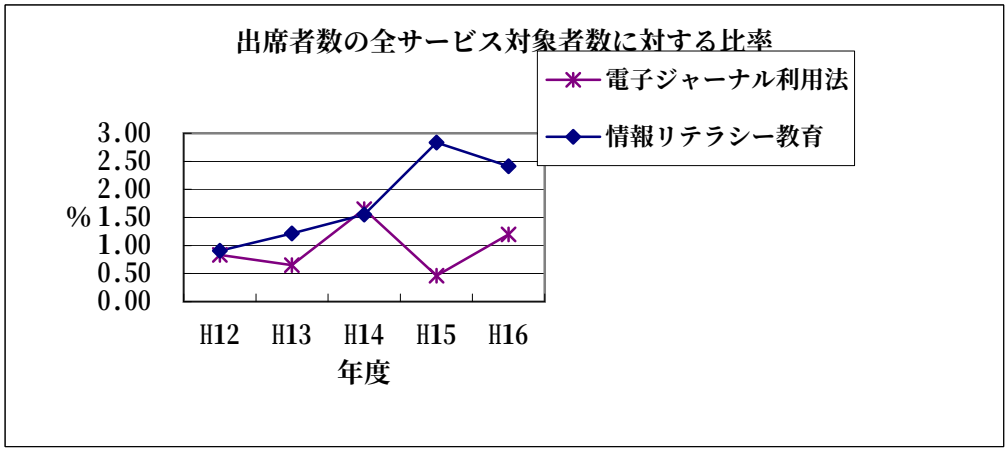
研修会種別	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
電子ジャーナル利用法	167	131	330	92	240	
情報リテラシー教育	182	245	310	567	484	
合　計	349	376	640	659	724	



出席者数の全サービス対象者数に対する比率＝研修会の出席者数(指36.1)／全利用対象者数(基2.3)×100

（%：小数点第2位）

研修会種別	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
電子ジャーナル利用法	0.83	0.65	1.65	0.46	1.20	
情報リテラシー教育	0.91	1.22	1.55	2.83	2.41	



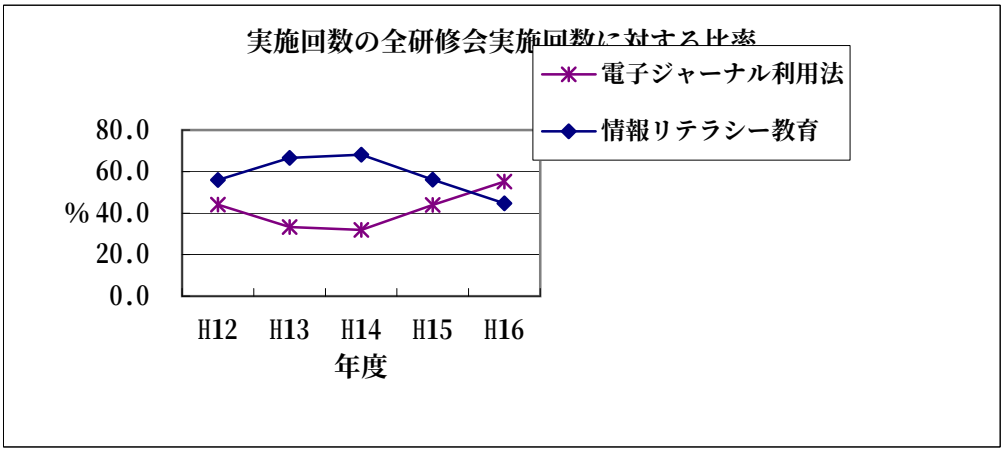
※研修会の実施回数、出席者数はともに増加しているが、全サービス対象者数に対する比率は1～3%にとどまっている。

3.1(8) 電子サービスに関する研修会のサービス対象者当りの実施回数（比率）

評価指標36.2：電子サービスに関する研修会のサービス対象者当りの実施回数（比率）
＜電子的な図書館サービスに関する利用者獲得の達成度を示す指標＞

実施回数の全研修会実施回数に対する比率＝研修会の実施回数(指36.1)／研修会の全実施回数(指36.1)×100
（%：小数点第1位）

研修会種別	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
電子ジャーナル利用法	44.1	33.3	31.9	43.9	55.2	
情報リテラシー教育	55.9	66.7	68.1	56.1	44.8	



4 経費
4.1 資料購入費

評価指標37：電子図書のコスト ＜電子図書に対する支出を示す指標＞

4.1(1) 電子図書のコスト　（円）

提供者（ベンダー）	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
McGraw-Hill	—	—	326,853	308,385	308,385	Harrison's Online
NetLibrary	—	—	—	—	4,800,000	Alternative agricultureほか295件買取価格
合 計	—	—	326,853	308,385	5,108,385	

※評価指標28にもあるように、電子図書は平成16年に本格的に導入を開始したため、コスト算出にまでは至っていない。

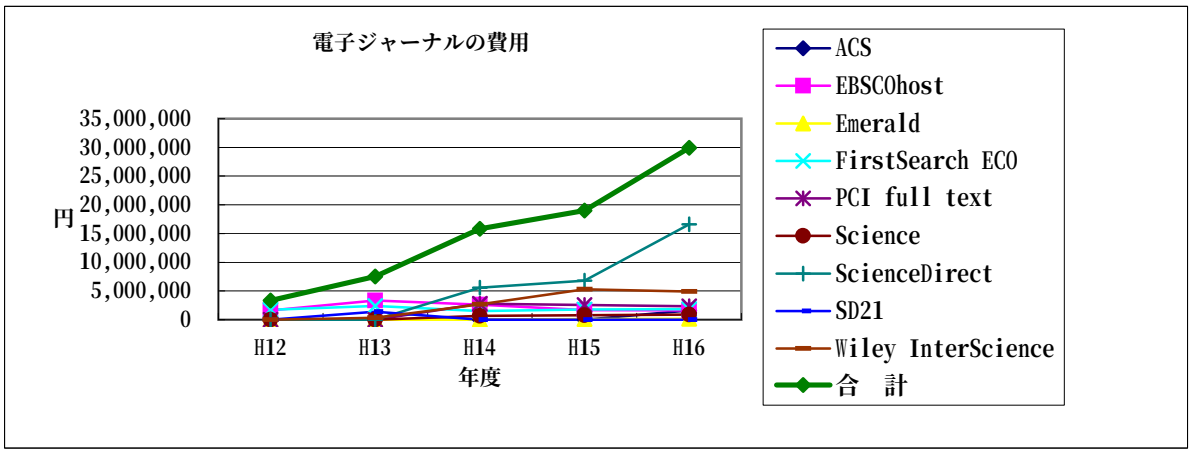
4.2 電子ジャーナル等経費

4.2(1) フルテキスト電子ジャーナルのコスト

評価指標38：フルテキスト電子ジャーナルのコスト
＜電子ジャーナルに対する支出と、冊子から電子形態への移行を示す指標＞

電子ジャーナルの費用 （円）

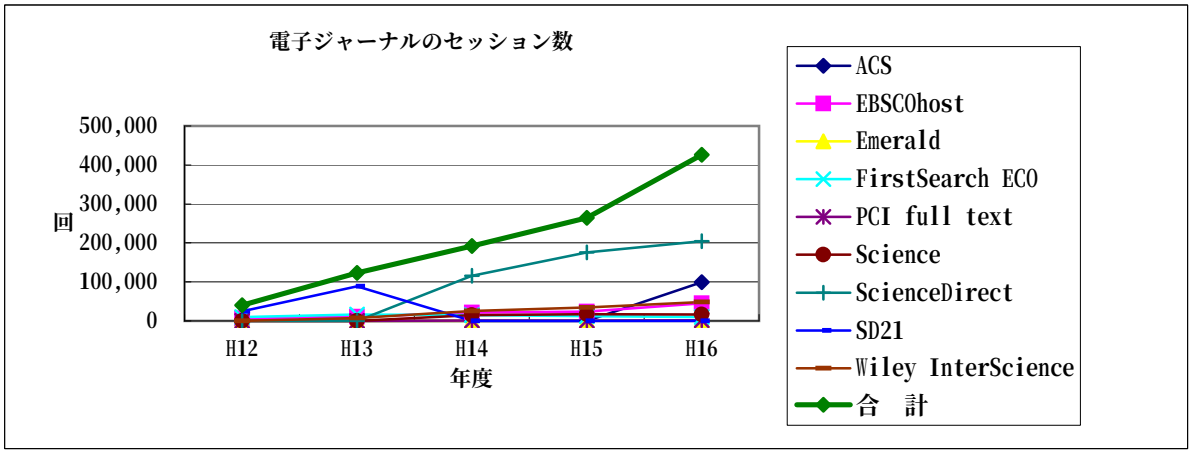
提供者（ベンダー）	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
ACS	—	—	—	—	1,590,475	
EBSCOhost	1,620,000	3,360,000	2,625,000	1,671,600	1,601,250	
Emerald	—	—	—	122,000	148,500	
FirstSearch ECO	1,740,000	2,407,750	1,504,095	1,760,810	1,858,325	
PCI full text	—	—	2,772,000	2,572,500	2,362,500	
Science	—	—	668,000	780,570	866,250	
ScienceDirect	—	—	5,600,000	6,795,340	16,601,522	
SD21	0	1,400,000	—	—	—	
Wiley InterScience	—	343,000	2,681,750	5,306,075	4,891,725	
合　計	3,360,000	7,510,750	15,850,845	19,008,895	29,920,547	



※電子ジャーナルの費用は、冊子体の雑誌と一括で契約しているものがあるため、わかる範囲でしか算出されていないが、評価指標30にあるように、電子ジャーナルのタイトル数の増加に伴い費用も増加している。特に、ScienceDirectの増加が著しい。

電子ジャーナルのセッション数 （回）

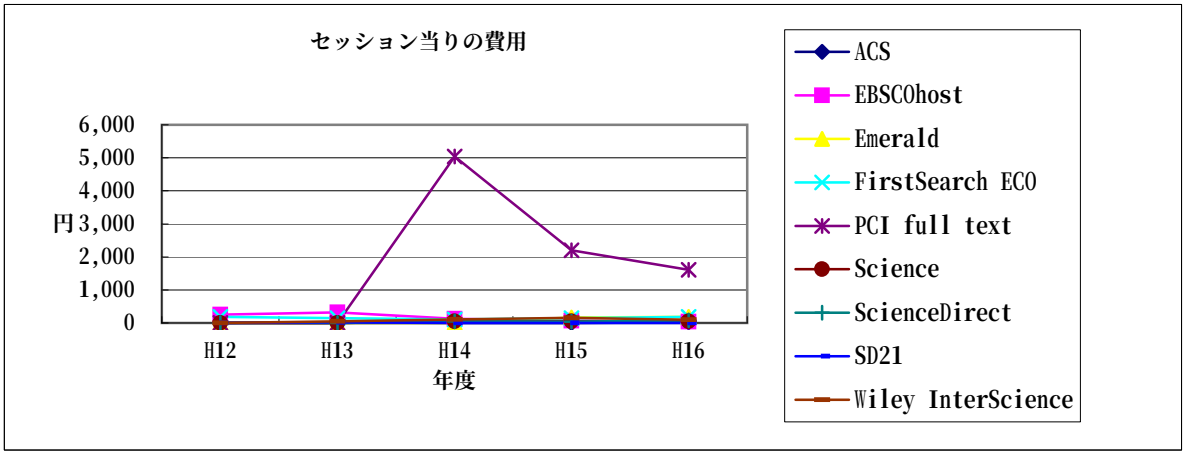
提供者（ベンダー）	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
ACS	—	—	—	—	99,325	
EBSCOhost	6,343	10,349	21,587	23,585	44,781	
Emerald	—	—	—	746	803	
FirstSearch ECO	9,517	16,789	14,442	11,950	9,956	
PCI full text	—	—	550	1,169	1,469	
Science	—	—	14,727	17,022	16,746	
ScienceDirect	—	—	115,738	175,573	204,517	
SD21	24,548	88,760	—	—	—	
Wiley InterScience	—	7,217	25,192	34,630	48,687	
合　計	40,408	123,115	192,236	264,675	426,284	



セッション当りの費用＝電子ジャーナルの費用(指38)／電子ジャーナルのセッション数(指38)

（円：小数点第1位）

提供者（ベンダー）	H12	H13	H14	H15	H16	備　考
ACS	—	—	—	—	16.0	
EBSCOhost	255.4	324.7	121.6	70.9	35.8	
Emerald	—	—	—	163.5	184.9	
FirstSearch ECO	182.8	143.4	104.1	147.3	186.7	
PCI full text	—	—	5,040.0	2,200.6	1,608.2	
Science	—	—	45.4	45.9	51.7	
ScienceDirect	—	—	48.4	38.7	81.2	
SD21	0.0	15.8	—	—	—	
Wiley InterScience	—	47.5	106.5	153.2	100.5	



※セッション当りの費用はPCI full textが飛びぬけて大きいが、これはPCI full textが人文・社会系のバックナンバーを中心とした電子ジャーナルであり、利用頻度が他に比べて少ないためと思われる。

第３部　附属図書館利用者アンケート

1　附属図書館利用者アンケートの概要

1.1　目的と方法

このアンケート調査は、附属図書館利用者が、大学図書館に期待するサービスの水準と、実際に利用して感じたサービスの質とのギャップを調査し、附属図書館にとって今後何が必要かを把握することを目的としている。

方法としては、図書館のサービス品質調査として欧米で用いられている LibQUAL+に準じ、サービス品質の測定項目として、LibQUAL+、SERVQUAL、大学図書館における評価指標報告書（Version 0）等を参考にし、独自の項目を追加した。

具体的には、施設・設備について 13 項目、資料・情報について 11 項目、職員・サービスについて 17 項目、合計 41 項目について、理想とする大学図書館像と、中央図書館および所属する部局の図書館（室）を実際に利用して感じたサービスへの評価を、それぞれ 7 段階で選択してもらった。7 が高い評価、1 が低い評価である。

1.2　調査期間

調査期間は、平成 17 年 6 月 20 日（月）から 7 月 8 日（金）までである。

1.3　調査対象

附属図書館を利用した経験の有無に拘わらず、名古屋大学の教員と大学院生については全員、学部生については無作為に抽出した約 2 割（2,000 名）を対象とした。

1.4　調査方法

教員と大学院生については、電子メールと掲示による協力依頼文書を、各部局の長宛てに発送し、周知を依頼した。

学部生については、無作為抽出した約 2 割（2,000 名）の学部生の電子メールアドレス宛てに協力依頼文書を発送した。

中央図書館でも掲示、ホームページ掲載により案内した。

1.5　回答方法

附属図書館ホームページに「附属図書館利用者アンケート」のページを設けた。URL は調査対象者だけに知らせ、学外からのアクセスも可とした。

ホームページによる回答が不都合な回答者のため、紙による回答票を中央図書館、各部局図書室に用意した。

ホームページ、紙による回答票とも、日本語と英語のものを作成した。

1.6　今回の調査の反省点、改善すべき点

1.6.1　不達メール（Returned mail）があったこと

学部生については、利用目的を明確にした上で、図書館利用者マスターから無作為に抽出し、6 月 20 日に、スクリプトにより中央図書館から電子メールで協力依頼文書を送信した。送信時間は 1 時間

30 分程度かかった。

なお、利用者マスターにある電子メールアドレスが使用されていないため、20 件ほどの不達メールがあった。現状では、利用者マスターにある電子メールアドレスを実際の利用に合わせて更新する手段がないため、全学 ID の検討を待つ必要がある。

1.6.2 グループメールやメーリングリストが無い部局があったこと

教員と大学院生については、電子メールや掲示による周知を各部局に依頼したが、部局によっては、教員や大学院生全員を対象としたメールアドレスがなく、十分な案内ができなかったところもある。

グループメールやメーリングリストについては、所属する部局の考え方もあるため、全学 ID の普及後は、図書館が全学 ID を抽出して対象者に送付することが考えられる。

1.6.3 留学生だけの分析ができなかったこと

大学院生と学部生からの回答には、英語による回答もあったが、英語による回答者が留学生であるとは断定できないこと、また逆に、留学生の中には、日本語により回答をした人がいる可能性があることから、留学生だけの分析は行わなかった。

今回、英語のホームページによる回答が 20 名と少なかったが、留学生、あるいは外国人教員を対象とした利用者アンケートを個別に実施することも考えられる。

1.6.4 事務職員、技術職員等から回答があったこと

事務・技術職員等からの回答もあったが、当初から、調査対象を教員、大学院生、学部生と考えていたことと、分析するに十分な回答数がなかったこと、また、事務・技術職員等として回答のあった中には、医学部の医員、コメディカル、事務職員、技術職員など多様な職種の人が含まれ、事務・技術職員等として区別する根拠が明確でないため分析対象としなかった。

ただし、十分な回答数があれば分析するという余地も残していたため、利用者アンケート内に、対象外であるという点を明記しなかったことは改善すべきことである。

1.6.5 来館者への呼びかけにより集計結果に偏りが生じた可能性があること

掲示による案内、あるいは来館者への呼びかけによる案内は、中央図書館だけでなく、部局図書室でも行われた可能性があるが、呼びかけをすることにより図書館を利用している人からの回答が増え、集計結果に偏りが生じた可能性がある。

今回の調査では、図書館を利用しているかどうかに関わらない調査であるため、広報については慎重に実施する必要があった。

1.6.6 調査項目が多すぎたこと

LibQUAL+の手法に準じた構成としたため、同じ調査項目（要素）について、理想とする大学図書館像と、中央図書館および所属する部局の図書館（室）を実際に利用してみて感じたサービスへの評価の合計 3 回、回答することになった。

ギャップ調査という調査方法そのものへの不慣れもあると考えられるが、自由記述では、項目数が多すぎるという意見が複数あった。

2　基本調査

2.1　調査対象者数と回答数、回答率

（調査対象者の総数は平成 17 年 5 月 1 日現在）

利用者区分	調査対象者数	回答数	内数			回答率
			英語による回答	紙による回答	学外のコンピュータからの回答	
教員	1,774 名全員	131 名	0	24 名	17 名	7.4%
大学院生	6,332 名全員	455 名	18 名	32 名	67 名	7.2%
学部生	無作為抽出した 2,000 名（総数 10,165 名）	213 名	2 名	11 名	27 名	10.7%
合計	10,106 名	799 名	20 名	67 名	111 名	7.9%

2.2　回答者所属別・利用者区分別内訳

有効回答数＝799

利用者区分 / 所属学部・研究科等	教員	大学院生	学部生	総計
文学部・文学研究科	10	27	24	61
教育学部・教育発達科学研究科	8	27	15	50
法学部・法学研究科	11	62	25	98
経済学部・経済学研究科	1	0	10	11
情報文化学部	-	-	10	10
理学部・理学研究科	8	13	19	40
医学部・医学系研究科	26	47	15	88
工学部・工学研究科	18	186	78	282
農学部・生命農学研究科	15	19	17	51
国際開発研究科	3	22	-	25
国際言語文化研究科	2	9	-	11
情報科学研究科	6	7	-	13
多元数理科学研究科	1	0	-	1
環境学研究科	7	31	-	38
人間情報学研究科	-	4	-	4
附置研究所・センター	15	1	-	16
総計	131	455	213	799

附置研究所・センターとは、環境医学研究所、太陽地球環境研究所、エコトピア科学研究所、地球水循環研究センター等の附置研究所、全国共同利用施設、学内共同教育研究施設等である。

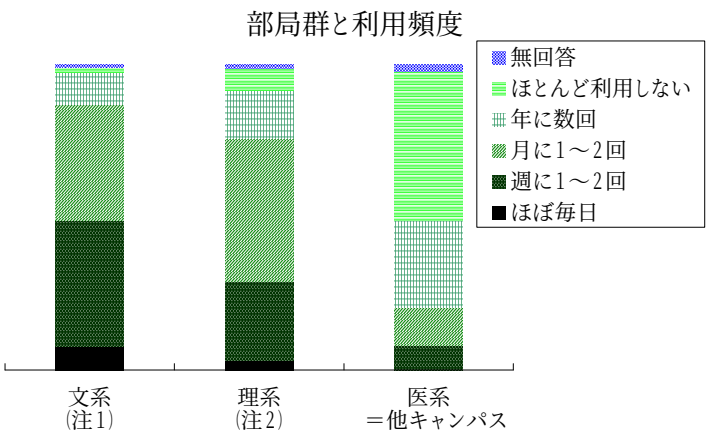
2.3　中央図書館の利用頻度

(1)　中央図書館との地理的な遠近が回答結果としてそのまま現れ、中央図書館に近い文系部局の利用頻度が高くなっている。

(2)　しかし、利用頻度を分析するためには、次のようないくつかの背景を考える必要がある。

1)　中央図書館に近い東山キャンパスの西地区には工学部の一部がある。工学部では中央図書館に学術雑誌の最新号を展示しているため、雑誌の利用があると考えられる。

2)　また、理系の外国雑誌を中心としてインターネットにより利用できる資料が増えたこと、附属図書館のホームページ上から ILL の申し込みができること等、図書館に出向かなくても必要な資料の入手が可能となってきた。



注1：以下の8部局を示す。

文学部・文学研究科、教育学部・教育発達科学研究科、法学部・法学研究科、経済学部・経済学研究科、情報文化学部、国際開発研究科、国際言語文化研究科、人間情報学研究科

注2：以下の4部局を示す。

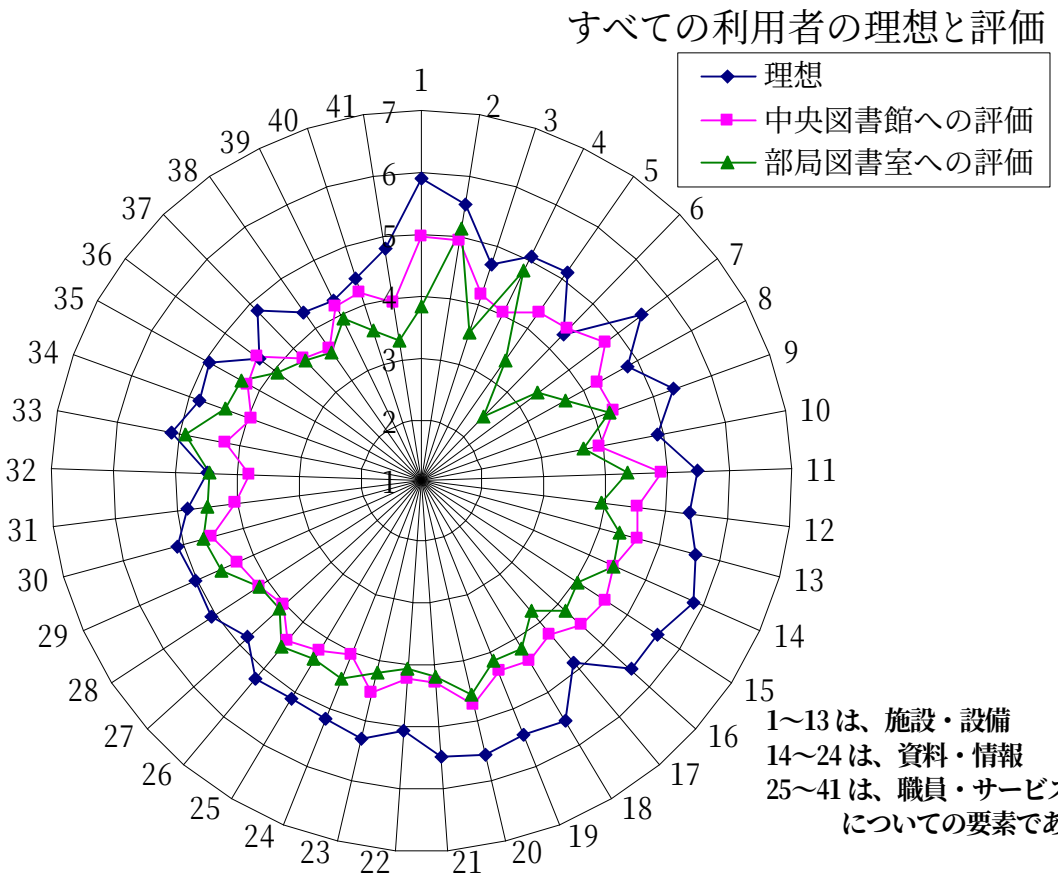
理学部・理学研究科、工学部・工学研究科、農学部・生命農学研究科、多元数理科学研究科

3　図書館の品質調査

3.1　全体

3.1.1　すべての利用者の理想と評価

有効回答数＝737～797



1～13は、施設・設備
14～24は、資料・情報
25～41は、職員・サービス
についての要素である。

(1)　回答のあったすべての利用者の期待の程度（理想）と中央図書館への評価、部局図書室への評価をまとめた。

(2)　大学図書館に期待する項目の中で、期待する程度が高い項目の 10 位までを挙げると、下のとおりとなる。（太字は特に期待する程度の高い項目である。）

数値化できる外形的な項目が多いが、13)、20)など、一般的に求められる図書館像にも高い期待がある。また、職員・サービスについての項目は全くない。

項目		期待の程度
1　施設・設備について	1) **開館日・開館時間は適切で，利用しやすい。**	**5.89**
	2) 図書館はキャンパスの中の便利な場所にある。	5.53
	7) 十分な蔵書スペースがある。	5.49
	11) OPAC（蔵書検索）やデータベースを検索する情報機器は十分に用意されている。	5.48
	13) 図書館では，静かに研究・学習ができる。	5.59
2　資料・情報について	14) **専門図書が十分備えられている。**	**5.82**
	15) 学習用図書が十分備えられている。	5.58
	16) 参考図書が十分備えられている。	5.56
	18) 雑誌（電子ジャーナルを含む）は必要なタイトルが揃っている。	5.55
	20) 必要な図書館資料を自力で見つけられる。	5.58

小数点以下第 3 位を四捨五入した。

(3)　下の表は、(2)とは反対に、大学図書館に期待する項目の中で、期待する程度が低かった項目の 10 位までである。（太字は特に期待する程度の低い項目である。）

職員・サービスについての項目に集中し、特に 36)、38)、39)など、最近、名古屋大学だけでなく全国の大学図書館が力を入れ取り組んでいる利用者支援に関する項目への期待が低くなっている点は、まだサービス内容が未成熟であり、十分な認知度を得ていないからと考えられる。

項目		期待の程度
1　施設・設備について	3) 建物・設備が魅力的である。	4.70
	6) グループで研究・学習できるスペースがある。	4.32
3　職員・サービスについて	27) いつどこでサービスを受けられるかが適切に周知されている。	4.81
	32) 職員はすすんで援助・手助けしてくれる。	4.47
	34) 職員は利用者のニーズを理解している。	4.82
	36) **図書館案内（ホームページも含む），パンフレット等が十分揃っている。**	**4.30**
	38) **授業を支援するプログラムを用意している。**	**4.30**
	39) **必要に応じてガイダンスや利用説明会が受けられる。**	**4.26**
	40) 学外者・地域社会にもサービスを提供している。	4.43
	41) 障害者に配慮している。	4.80

(4)　中央図書館は学習図書館機能、研究図書館機能、保存図書館機能等を持つが、部局図書室が持つ機能は様々であり、また歴史的背景、資料構成、職員構成等も各図書室によって異なる。

従って、単純に中央図書館と部局図書室とを比較することや、部局図書室を一括して評価することに意義があるとは考え難いが、評価によって、中央図書館と部局図書室との役割分担が明らかになった点もある。

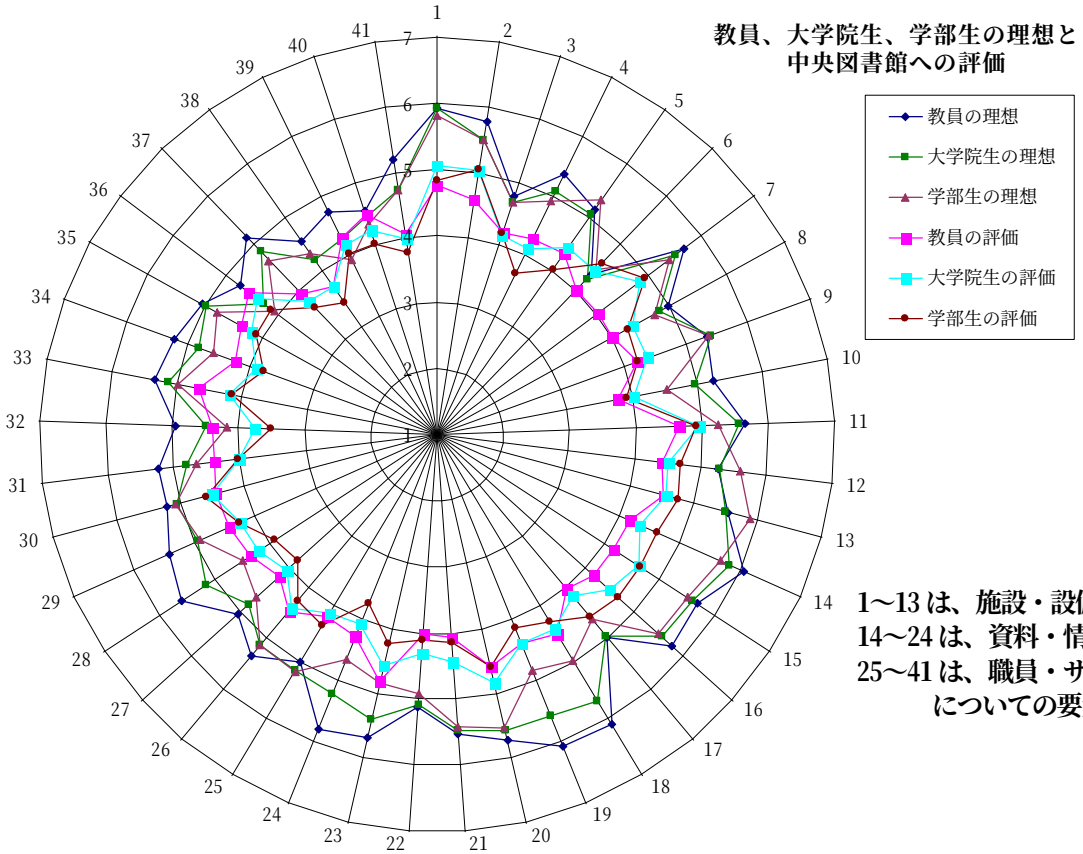
例えば、評価が 0.5 以上開いた項目を比較すると次のとおりである。(太字は特に評価の差の大きい項目である。)

これを見ると施設・設備については、中央図書館の評価が高く、職員・サービスについては、部局図書室の方が評価の高い項目があり、また資料・情報についてはあまり大きな評価の隔たりは無いことがわかる。中央図書館は全学の多様な利用者を受け入れるために開館日・開館時間を拡大し、また施設面での充実を図ってきた。一方、部局図書室では、部局の教育・研究により密着したサービスを展開してきた。このことが評価の違いとなって表れたようである。

項目		理想	評価		
			中央図書館	比較	部局図書室
1　施設・設備について	**1) 開館日・開館時間は適切で，利用しやすい。**	5.89	**4.95**	**＞**	**3.83**
	3) 建物・設備が魅力的である。	4.70	4.16	＞	3.55
	4) 館内は安全である。	5.07	4.03	＜	4.80
	5) 座席数は十分である。	5.13	4.31	＞	3.35
	6) グループで研究・学習できるスペースがある。	4.32	**4.42**	**＞**	**2.45**
	7) 十分な蔵書スペースがある。	5.49	**4.73**	**＞**	**3.36**
	8) 計画的にスペースの利用が考えられている。	4.83	4.29	＞	3.66
	11) OPAC（蔵書検索）やデータベースを検索する情報機器は十分に用意されている。	5.48	4.89	＞	4.35
	12) 図書館は快適で，居心地がよい。	5.37	4.54	＞	3.96
2　資料・情報について	15) 学習用図書が十分備えられている。	5.58	4.57	＞	4.03
3　職員・サービスについて	32) 職員はすすんで援助・手助けしてくれる。	4.47	3.78	＜	4.44
	33) 職員の対応は丁寧・親切である。	5.12	4.24	＜	4.91
	40) 学外者・地域社会にもサービスを提供している。	4.43	4.21	＞	3.58
	41) 障害者に配慮している。	4.80	3.93	＞	3.31

3.1.2　教員、大学院生、学部生の理想と、中央図書館への評価

有効回答数＝737～797



1～13 は、施設・設備
14～24 は、資料・情報
25～41 は、職員・サービス
についての要素である。

(1)　全体として見ると、理想については、教員、大学院生、学部生の順に理想は次第に低く（小さく）なっている。

(2)　評価の項目は、「施設・設備」、「資料・情報」、「職員・サービス」に大別されるが、項目ごとの平均値（7 段階評価）は、次のとおりである。

		施設・設備	資料・情報	職員・サービス
教員	理想	5.30	**5.68**	**5.07**
	ギャップ	1.00	**1.38**	**0.76**
	評価	4.30	4.30	4.31
大学院生	理想	5.19	**5.44**	**4.78**
	ギャップ	**0.66**	**1.00**	0.67
	評価	4.53	4.44	4.11
学部生	理想	**5.18**	5.13	**4.63**
	ギャップ	0.71	**0.77**	**0.63**
	評価	4.47	4.36	4.00

小数点以下第 3 位を四捨五入した。

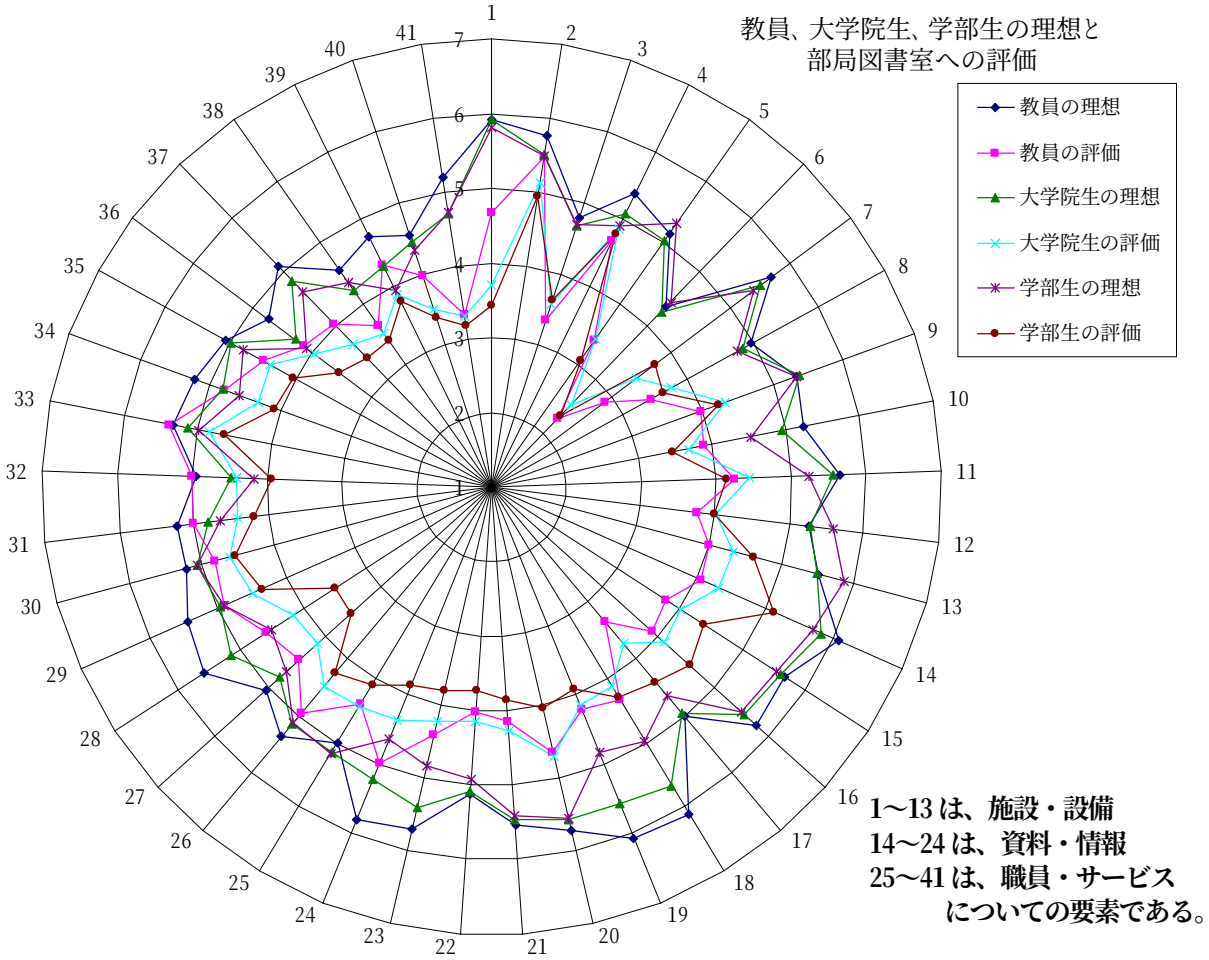
上の表を見ると、教員、大学院生では「資料・情報」に対する期待が高く、学部生では「施設・設備」に対する期待が高い。

「資料・情報」に対する期待が高いため、実際に感じた評価は必ずしも低いとは言えないが、ギャップが大きくなっている。

「職員・サービス」に対する期待は、教員、大学院生、学部生のすべてで、他の項目よりも期待が低くなっているが、実際に感じた評価とのギャップはいずれも小さい。

3.1.3　教員、大学院生、学部生の理想と、所属する部局図書室への評価

有効回答数＝739～797



(1)　部局図書室は、歴史的背景、図書室の役割、資料構成、職員構成等、様々であり、集計することの意義はあまりないが、部局図書室では実現が難しい「5　座席数は十分である」、「6　グループで研究・学習できるスペースがある」、「7　十分な蔵書スペースがある」等について、実際に感じた評価が極端に低くなっていることが分かる。

(2)　評価の項目は、「施設・設備」、「資料・情報」、「職員・サービス」に大別されるが、項目ごとの平均値（7 段階評価）は、次のとおりである。

		施設・設備	資料・情報	職員・サービス
教員	理想	5.30	**5.68**	**5.07**
	ギャップ	1.44	1.51	**0.55**
	評価	3.86	4.17	**4.52**
大学院生	理想	5.19	**5.44**	**4.78**
	ギャップ	1.25	1.24	**0.61**
	評価	3.94	**4.20**	4.17
学部生	理想	**5.18**	5.13	**4.63**
	ギャップ	1.31	0.93	**0.73**
	評価	3.87	**4.20**	3.90

小数点以下第3位を四捨五入した。

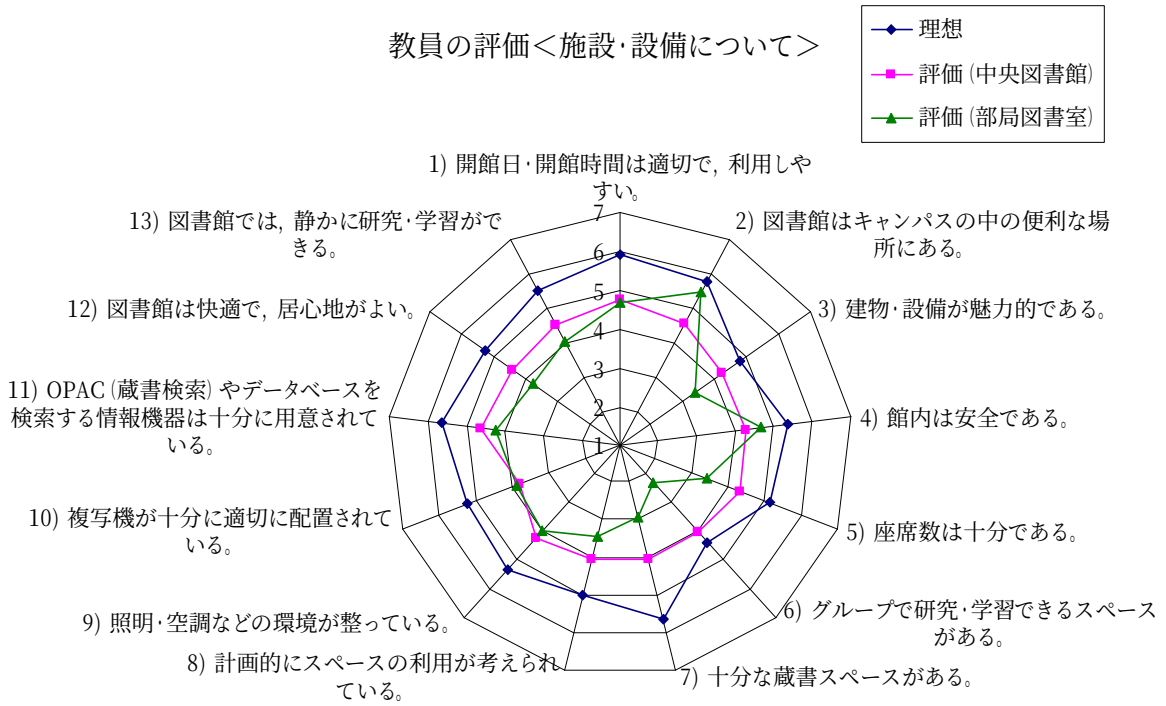
上の表を見ると、実際に感じた評価では、教員は「職員・サービス」に高い評価を付け、大学院生、学部生は「資料・情報」を評価している。

「職員・サービス」の項目は、中央図書館と同じく、期待は、他の項目よりも低いが、実際に感じた評価とのギャップはいずれも小さい。

3.2 施設・設備について

3.2.1 教員の評価

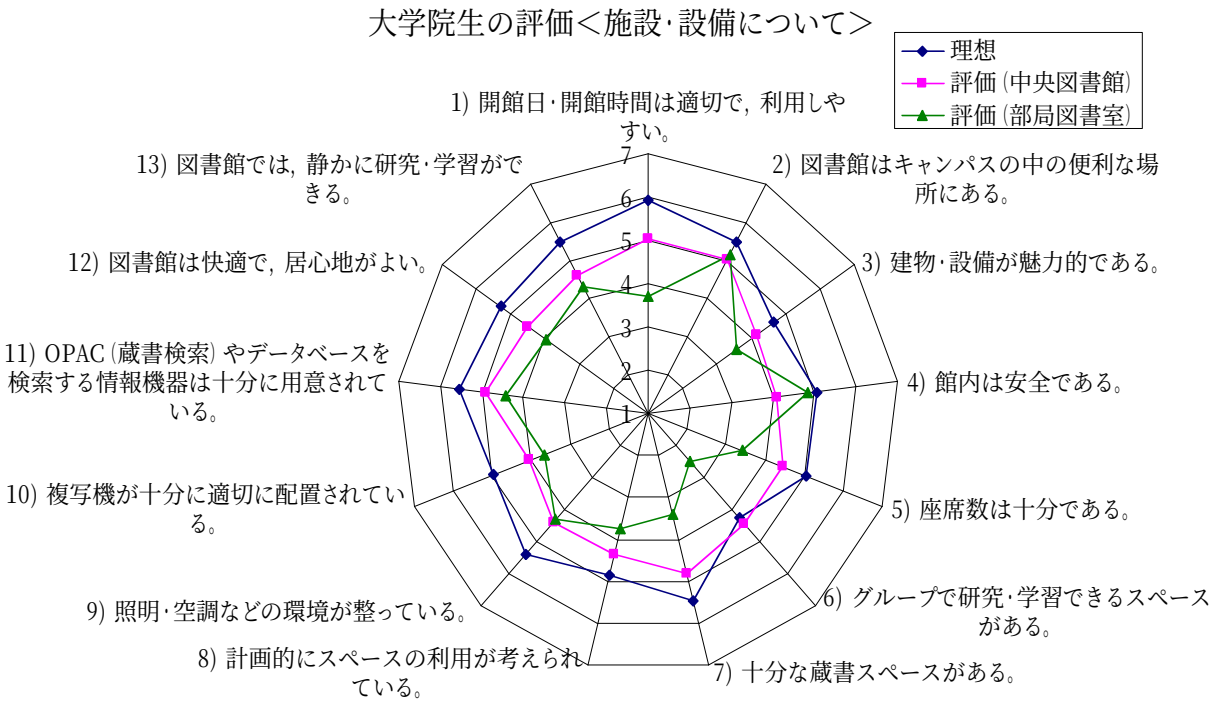
有効回答数＝115～130



「2) 図書館はキャンパスの中の便利な場所にある。」ことについて、利用者が所属する部局図書室に対する評価が、中央図書館に対する評価よりも高いは当然であるが、「4) 館内は安全である。」ことについて、中央図書館より部局図書室の方が評価が高い点については、ある程度限られた利用者を対象とする部局図書室と、学内の全構成員だけでなく地域社会にも図書館を公開している中央図書館との条件の違いが大きいが、中央図書館として、今後もさらに努力して安全で快適な図書館を目指す必要がある。

3.2.2 大学院生の評価

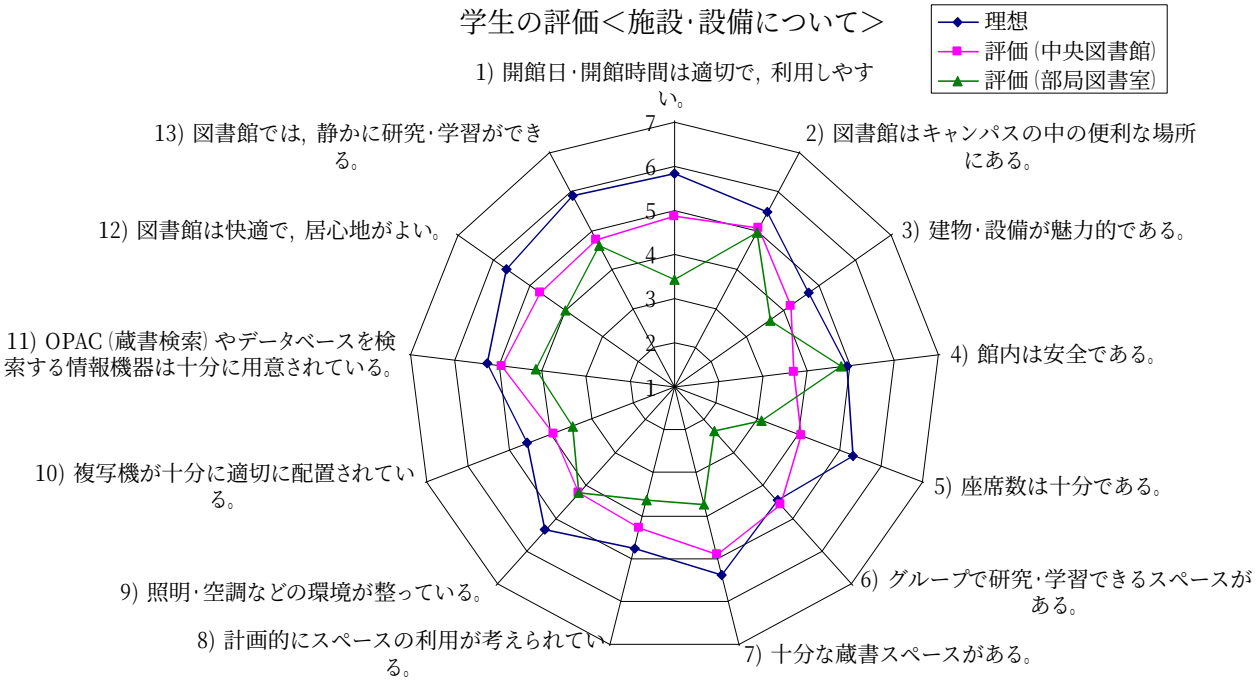
有効回答数＝427～455



「6) グループで研究・学習できるスペースがある」では、理想と実際に感じた評価が逆転している。大学院生が所属する部局の図書室ではスペースとして持ち難いグループ学習室、グループ研究室、共同研究室が中央図書館にはあるため、逆転したと考えられる。

3.2.3　学部生の評価

有効回答数＝188～213

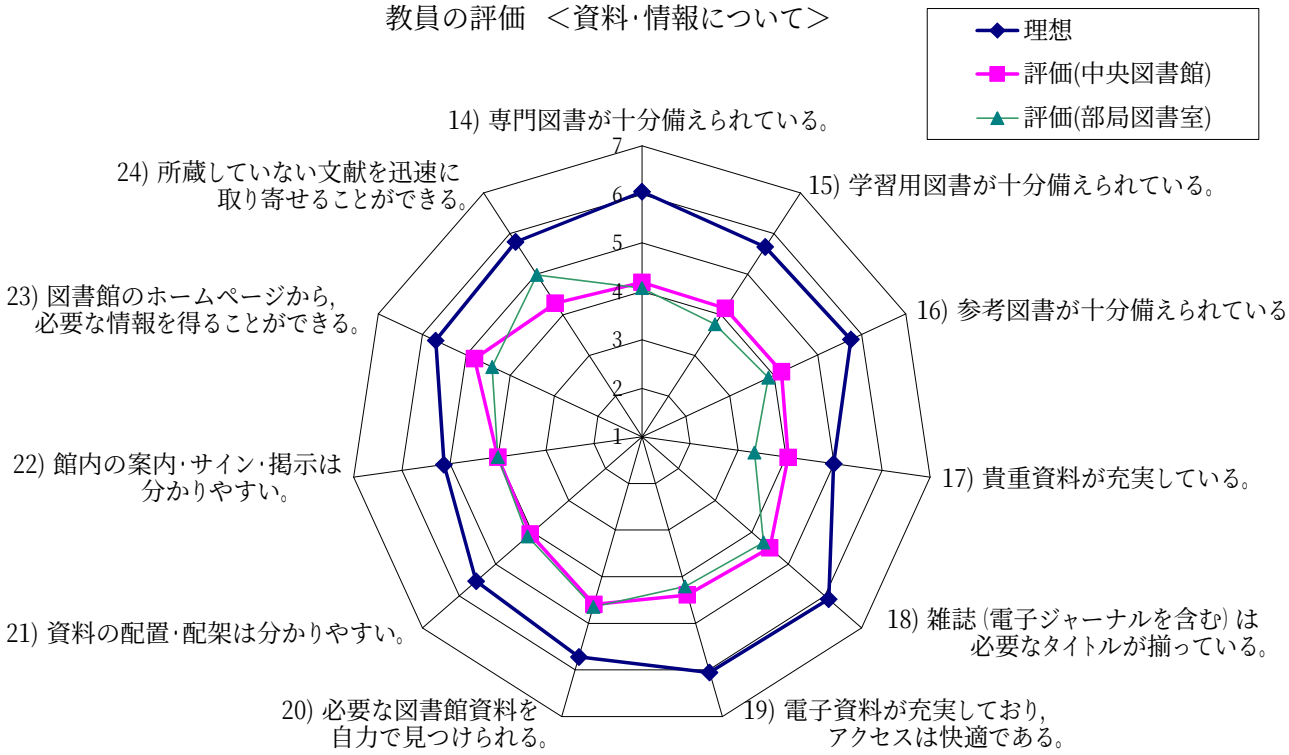


「6)　グループで研究・学習できるスペースがある」では、大学院生と同様に、理想と実際に感じた評価が逆転している。理由としては同じく、学部生が所属する部局の図書室ではスペースとして持ち難いグループ学習室、グループ研究室、共同研究室が中央図書館にはあるためと考えられる。

3.3　資料・情報について

3.3.1　教員の評価

有効回答数 ＝ 75～129

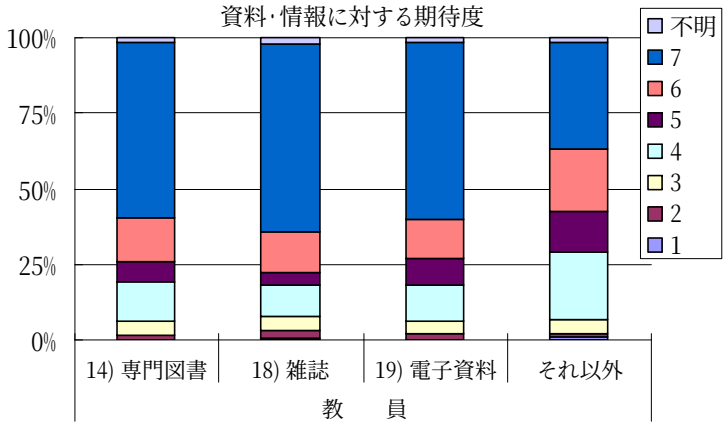


教員の資料・情報についての理想と評価は、上のグラフのとおりである。

教員が理想とする大学図書館像は、グラフ上やや縦長の楕円形をなしており、一方中央図書館への評価を見ると、23 と 17 の膨らみを除けば、似たような縦長楕円となっている。

左横の配置項目である資料の配架状況や館内サイン整備への期待値が比較的低いのは、長く大学図書館を利用し続けてそこがよく知った場所となっており、意識的に求めることが少ないためであろう。右側の凹みとして表れているが、貴重図書充実への期待が明らかに低いのは、自分自身の利用を念頭に置いた回答のためと思われる。

相対的に高い評価を受けたのは図書館ホームページの項目であり、この点についてはよく教員の期待に応えていると考えてよいのではないだろうか。



各回答を平均値ではなく実数で詳細に見てみると、専門図書・雑誌・電子資料については、最も高い期待値７をつけた人が、他の期待値を回答した人に比べて圧倒的に多く過半数を超えている。同じような傾向は、度合いは低くなるものの大学院生にも見ることが

でき、専門分野資料こそ大学図書館の要というのが、研究者にとっての大学図書館像といえるだろう。

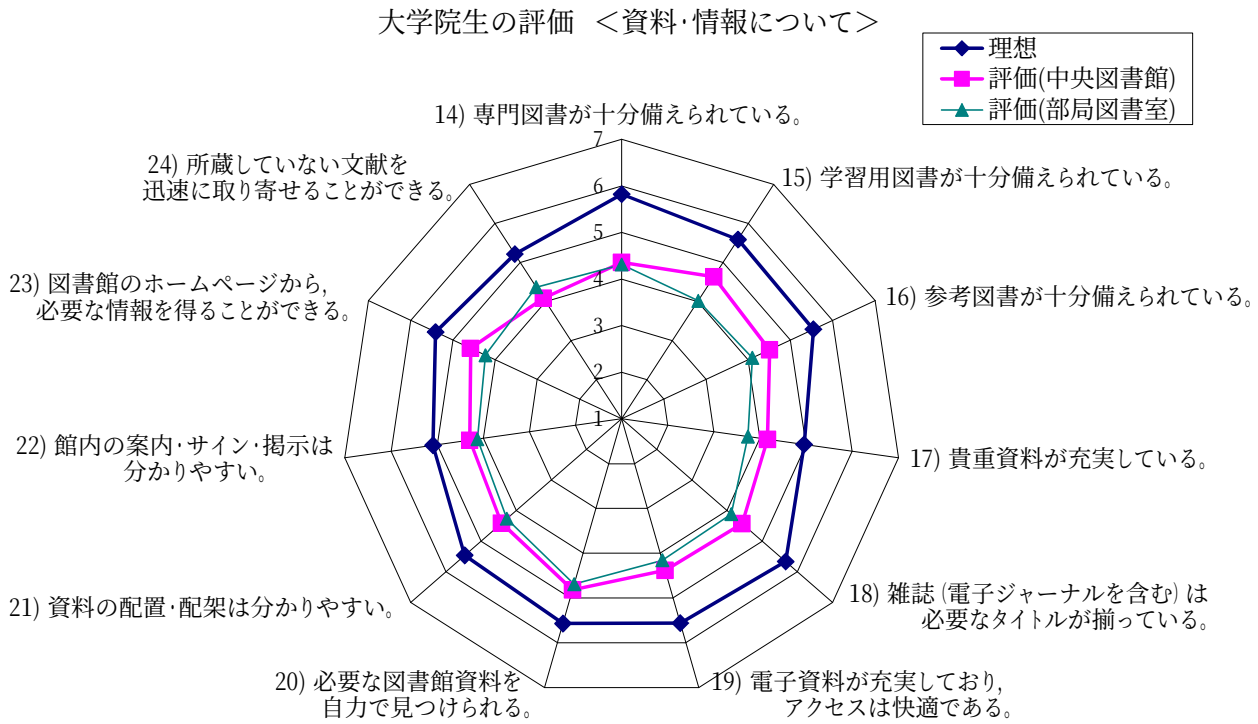
教員が理想とする図書館への期待値と現実の中央図書館への評価の隔たりはおおむね 1～1.5 ポイントだが、専門図書充実への評価は 2 ポイント近くも低い。最高値をつける実数が多いほど評価との隔たりが大きくなりやすいというこの調査の特性はあるが、利用者にとって望ましい図書館に近づけるための指標とすべき結果であろう。

ところで部局図書室への評価については、利用者が想定して回答した図書室がさまざまなので、平均値から安易な判断を行うことはできない。部局図書室と比較して中央館への評価では、貴重資料充実への評価の高さと文献の取り寄せへの評価の低さが目立つが、これは双方が分担している役割に対応しており問題とはならない。むしろ附属図書館全体としては、うまく機能している証拠とみなすべきであろう。

なお評価の回答実数を見ると、わからないや無回答の数が、全項目にわたって中央館では部局の倍以上となっており、教員の中央館利用の低さを示していると考えられる。

3.3.2　大学院生の評価

有効回答数 ＝ 281～455



大学院生の資料・情報についての理想と評価は、下のグラフのとおりで、いずれも縦長楕円形ではあるが、教員のそれよりも滑らかな形状をなしている。また若干、右上から左下の軸で傾きが感じられる。

理想とする図書館への期待値と現実の中央図書館への評価の隔たりは、教員に比べてやや狭く、おおむね１ポイントとなっている。専門図書の充実についての評価が目立って低く、逆に比較的相対評価が高いのは、学習用図書の充実と自力で必要な資料を見つけられるという項目である。

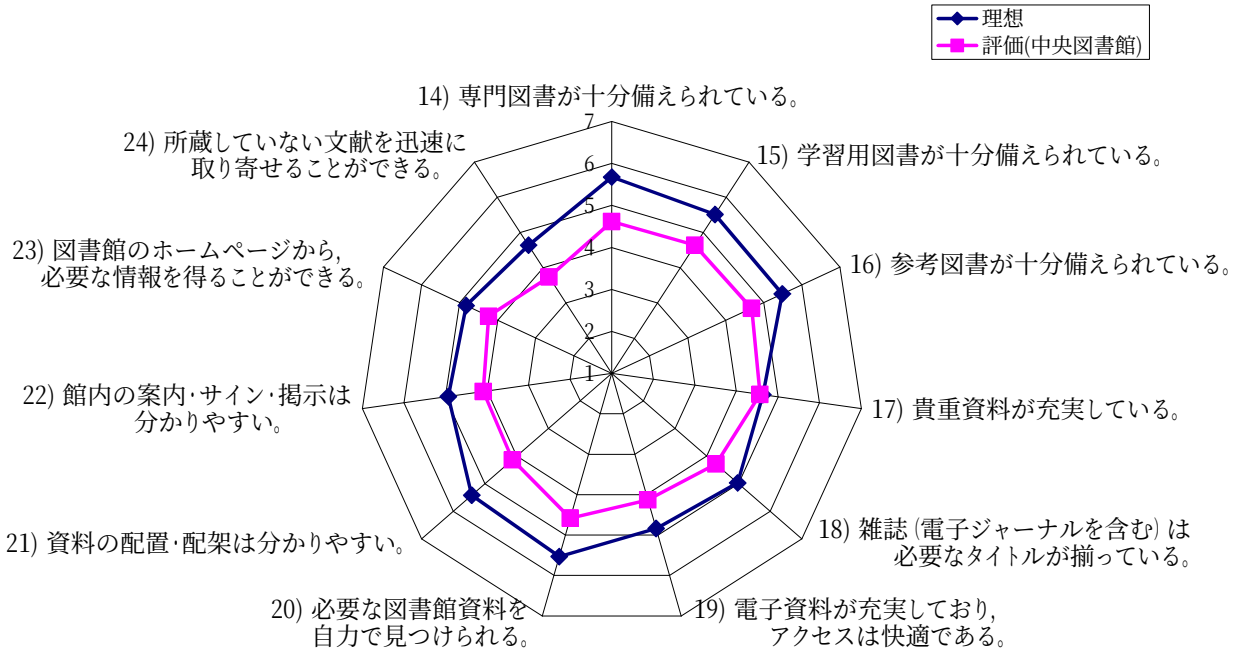
部局図書室への評価と比較して中央館への評価を見てみると、学習用や参考図書の充実という項目で若干中央館が高いだけで、あまり差が見られない。教員では文献取り寄せに対して部局図書室に評価の高さが目立ったが、大学院生ではサービスをまだ利用していない者がかなり多いとみていいようである。

先の自力で見つけられるという点も、大学図書館を決まった使い方だけで利用している反映ととらえることも可能である。理想と評価のギャップという利用者の意識的な期待に応えるすべを考えることも重要だが、彼らの想起しない利用法を提示する、いわば需要の掘り起こしについても考えていく必要があるだろう。

3.3.3　学部生の評価

有効回答数 ＝ 50～213

学部生の評価　＜資料･情報について＞



学部生の資料・情報についての理想と評価の回答結果は、上のグラフのとおりである。部局図書室に対する評価は、全項目で有効回答が半数を下回っていたので、グラフには加えていない。

学部生による理想の大学図書館像は、教員・大学院生のそれと比べて、明らかに右上から左下への軸で傾いている。これは、雑誌や電子資料充実への期待、また文献取り寄せやホームページへの期待がはっきりと低いということであり、扁平率の高さは、それだけ求めるものがはっきりしているということである。このことは評価の値をみても明らかで、先に上げたような項目はわからないという回答が顕著に多くなっており、学部生の大学図書館利用の幅が、決して広くはないことを示している。ただしこれはあくまで現状の反映であって、「図書・館」以外の図書館機能の需要が本当にないといえるのかどうかは、慎重に判断しなければならない。

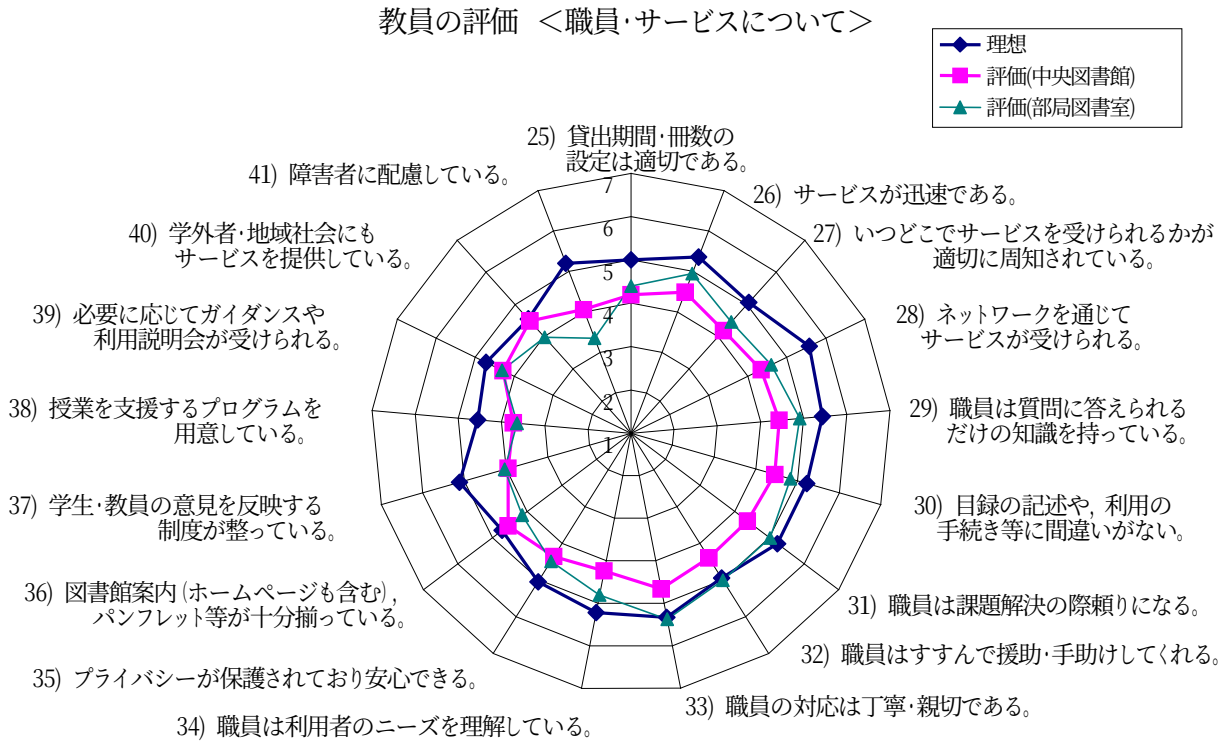
期待と評価との隔たりは３つの利用者区分の中でもっとも狭く､ほとんどが１ポイントを切っている。その中で資料配置のわかりやすさは目立って低い評価（隔たりが大きい）となっているが、この点の改善には追っての原因調査が必要となろう。

大まかに言って大学図書館に求める姿は、教員と大学院生は比較的似通っているが、学部生は違ったものとなっている。このことから大学図書館の主たる利用者として、やはりこれら２つのグループに分けて考える必要のあることがわかる。

3.4　職員・サービスについて

3.4.1　教員の評価

有効回答数 ＝ 69～129



教員の職員・サービスについての理想と評価の回答は、上のグラフのとおりである。

ただし中央図書館に対する評価すべてで、有効回答が 7 割を切るかようやく 7 割となっていることを踏まえておく必要がある。また、期待する大学図書館像という面において、前の二つの区分、とくに資料・情報に比べると、はっきり期待値が低くなっているということも押さえておくのが重要だろう。この点では利用者区分に関わりなく、0.5 から 0.7 ポイントも低くなっている。ただし、これはあくまで意識的な期待のレベルでの話であることはいうまでもない。

期待値のグラフは、やや右方向に膨らんだ楕円という体だが、項目ごとのバラツキがそこそこにある。これに対して評価のほうは、全体的にバラツキが小さくなっている。

期待値が低いのは授業支援プログラムと学外者対応で、後者は自分自身の利用を前提にして回答した結果であろうが、前者のほうは具体的なイメージが浮かびにくいせいか、別の組織が行うべきだという判断のせいなのか、ここでは判断できない。

期待値が高い項目の中で評価値が低いのは、ネットワークを通じたサービスを受けられるというものである。現在名古屋大学附属図書館では、この分野のサービスを刻々と拡大しているが、期待値がこの項目群最大の項目でもあり、まだまだ教員のニーズを満たすにはものたりないという印象なのであろう。

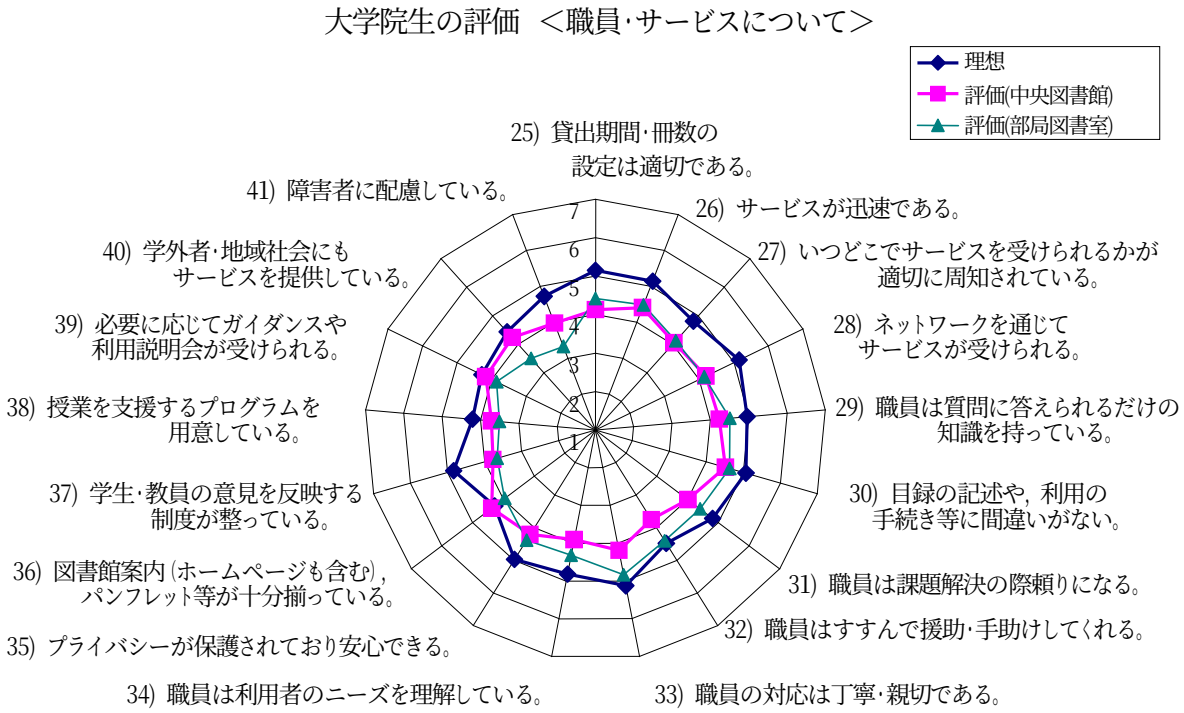
学生・教員の意見を反映する制度が整っているという項目も、期待値そのものはとくに高くないが，理想と評価のギャップでは大きな値を示しており、注目する必要がある。

先の項でも述べたとおり、部局図書室についての評価は、各自が想定する図書室がバラバラなので、軽々に分析を行うことはできない。この項目群では各項目の数値そのものよりも、中央図書館に比べると無効回答が少なかった点に注目すべきだろう。利用頻度や管理・運営での関わりの深さが、具体的な

評価を支えているものと思われ、グラフの右側から下側にかけて、中央図書館より高いポイントになってところもそれを反映しているのかもしれない。印象評価には親しみの反映という面があるからで、対応する人間が固定化しているケースが比較的多い部局図書室と、当番制で対応する中央図書館の組織的な違いを考慮に入れる必要がある。

3.4.2　大学院生の評価

有効回答数 ＝ 277～452



大学院生の職員・サービスに対する理想と評価は、上図のとおりである。

大学図書館の理想像については、教員のそれに比べると左右への膨らみが薄く、左上方向がはっきり欠けているが、項目間のつながりでは比較的滑らかな図形となっている。教員の項で触れたとおり、大学院生にあっても職員・サービスに対する望みは、他の２項目に比べると低い値にとどまっている。

職員の積極的な援助とともに、図書館案内の充実やガイダンスへの期待値も低いところは、あとで述べる学部生とも共通しており、教員に比べてサービスに対して受身の姿勢の利用者たちであるといってよいだろう。

評価については、中央図書館と部局図書室の無効回答数にほとんど差がないことが、他の利用者区分に比べて一番の特徴に挙げられる。どちらの図書館（室）も現在使っているか、あるいはこれまでに使ってきているということの表れであろう。

中央図書館への評価を全体的に見ると、評価の値には期待値ほど項目間のバラツキがなく、教員の評価像とよく似ている。

期待値が高いにも関わらず評価値が低いのは、学生・教員の意見を反映する制度が整っているという項目である。意見を収集する仕組み自体が十分でないということに対しては、何らかの制度作りで応えていくしかないだろうが、先に見たように受身の姿勢が強いということを考慮すると、希望がかなえら

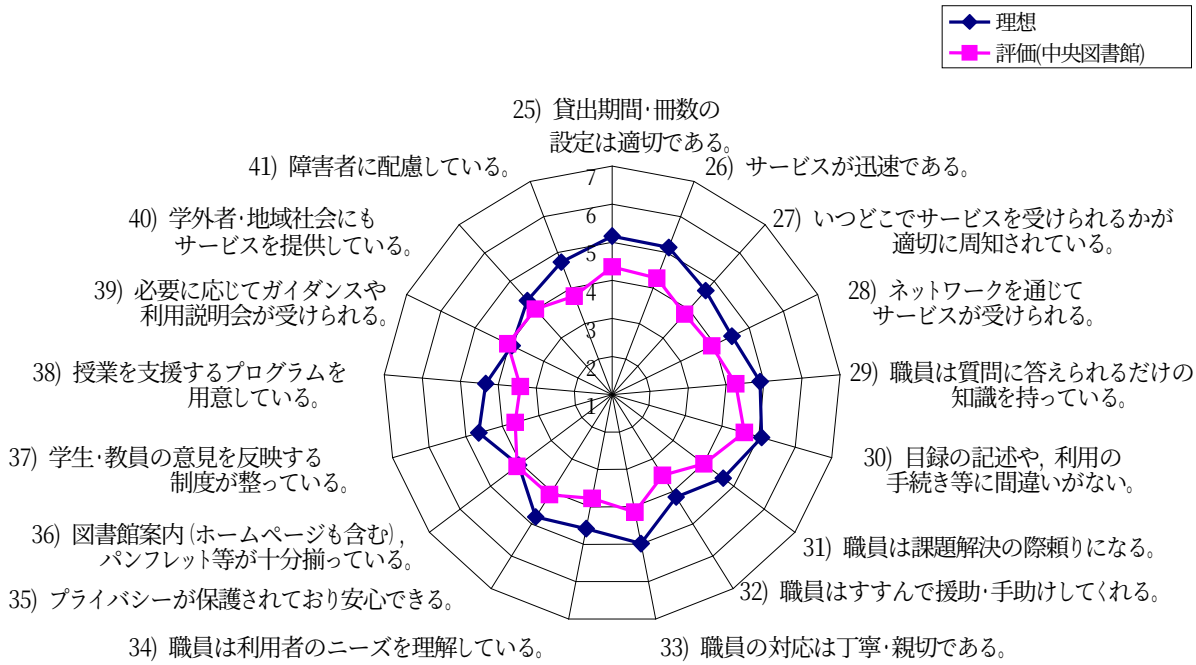
れない場合の説明の充実もまた、意見を反映する制度のうちとして取り組む必要があるだろう。

中央図書館と部局図書室との評価の違いが大きいのは、期待値の高い項目の中では、職員の対応に関する項目である。この点については、さきに教員のところで見たのと同様の親しみ要因があろうし、プライバシー保護や利用者ニーズの把握も含め、利用者の絶対数の違いというのも、印象評価としては影響があるのではないかと考えられる。

3.4.3. 学部生の評価

有効回答数 ＝ 65～212

学部生の評価（中央図書館）職員・サービスについて



学部生の職員・サービスに対する理想と評価は、上のグラフのとおりである。部局図書室への評価は、無効回答がすべての項目で５割を越えているため、表示していない。

大学図書館の理想像に関しては、全体には縦長の楕円系をなしているが、項目間のバラツキが大きい。大学院生の項で触れたように、職員の積極的な援助とともに、図書館案内の充実やガイダンスへの期待値が低いのだが、具体的なサービスの周知への期待値もまた低くなっているのが大学院生との違いである。こうしたサービス享受に対する受身の姿勢が、身分状況に関わるものなのか、世代的な要因が強いのかは、ここでは不明である。

教員・大学院生では期待が高い、ネットワークを介したサービスに対する期待値がはっきり低くなっているのは、必要度という次元での表明とも考えられるが、あるいは学内での居場所や生活環境によるものなのかもしれない。

期待値が高い項目の中で評価が低い値となっているのは、ここでもやはり学生・教員の意見を反映する制度となっており、この指摘は真摯に受け止める必要があるだろう。

4　利用者アンケート(日本語版ホームページ)

名古屋大学附属図書館
Nagoya University Library

附属図書館
利用者アンケート

English version

実施期間：6月20日（月）から7月8日（金）まで
アンケートの結果は，「附属図書館自己評価報告書」で公表する予定です。

このアンケートは，図書館を利用されるみなさんが，大学図書館に期待するサービスの水準と，実際に利用してみて感じたサービスの質とのギャップを調査し，利用者サービスをより良いものにするために実施するものです。
そのため（2）と（5）で同じ質問が繰り返されますが，すべてにご回答ください。

（1）あなたご自身について，該当する利用者区分・学年（学生の方のみ）・所属を，クリックして選択してください。

a）利用者区分

○教員　○事務・技術職員等　○大学院生　○学部生　○学外者

b）学年（学生の方のみお答えください）　◉（学生ではない）

学部生

○1年　○2年　○3年　○4年　○5年　○6年　○研究生・聴講生

大学院生

○M1　○M2　○M3
○D1　○D2　○D3　○D4　○研究生・聴講生

c）所属学部・研究科等

○文学部・文学研究科
○教育学部・教育発達科学研究科
○法学部・法学研究科
○経済学部・経済学研究科
○情報文化学部
○理学部・理学研究科
○医学部・医学系研究科
○工学部・工学研究科
○その他→
○農学部・生命農学研究科
○国際開発研究科
○国際言語文化研究科
○情報科学研究科
○多元数理科学研究科
○環境学研究科
○人間情報学研究科
○附置研究所・センター
（○学外者）

（2）あなたが理想とする大学図書館像を伺います。下記1～3に区分けした要素を比較し，大学図書館に期待する程度が高い要素ほど高得点になるよう，7段階の数字のうち該当する数字をクリックしてお答えください。

1　施設・設備について	期待の程度 低い　　ふつう　　高い
1) 開館日・開館時間は適切で，利用しやすい。	1 2 3 4 5 6 7
2) 図書館はキャンパスの中の便利な場所にある。	1 2 3 4 5 6 7
3) 建物・設備が魅力的である。	1 2 3 4 5 6 7
4) 館内は安全である。	1 2 3 4 5 6 7
5) 座席数は十分である。	1 2 3 4 5 6 7
6) グループで研究・学習できるスペースがある。	1 2 3 4 5 6 7
7) 十分な蔵書スペースがある。	1 2 3 4 5 6 7
8) 計画的にスペースの利用が考えられている。	1 2 3 4 5 6 7
9) 照明・空調などの環境が整っている。	1 2 3 4 5 6 7
10) 複写機が十分に適切に配置されている。	1 2 3 4 5 6 7
11) OPAC（蔵書検索）やデータベースを検索する情報機器は十分に用意されている。	1 2 3 4 5 6 7
12) 図書館は快適で，居心地がよい。	1 2 3 4 5 6 7
13) 図書館では，静かに研究・学習ができる。	1 2 3 4 5 6 7
2　資料・情報について	期待の程度 低い　　ふつう　　高い
14) 専門図書が十分備えられている。	1 2 3 4 5 6 7
15) 学習用図書が十分備えられている。	1 2 3 4 5 6 7
16) 参考図書が十分備えられている。	1 2 3 4 5 6 7
17) 貴重資料が充実している。	1 2 3 4 5 6 7
18) 雑誌（電子ジャーナルを含む）は必要なタイトルが揃っている。	1 2 3 4 5 6 7
19) 電子資料が充実しており，アクセスは快適である。	1 2 3 4 5 6 7
20) 必要な図書館資料を自力で見つけられる。	1 2 3 4 5 6 7
21) 資料の配置・配架は分かりやすい。	1 2 3 4 5 6 7
22) 館内の案内・サイン・掲示は分かりやすい。	1 2 3 4 5 6 7

22) 館内の案内・サイン・掲示は分かりやすい。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
23) 図書館のホームページから，必要な情報を得ることができる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
24) 所蔵していない文献を迅速に取り寄せることができる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
3 職員・サービスについて	期待の程度 低い　ふつう　高い
25) 貸出期間・冊数の設定は適切である。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
26) サービスが迅速である。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
27) いつどこでサービスを受けられるかが適切に周知されている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
28) ネットワークを通じてサービスが受けられる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
29) 職員は質問に答えられるだけの知識を持っている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
30) 目録の記述や，利用の手続き等に間違いがない。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
31) 職員は課題解決の際頼りになる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
32) 職員はすすんで援助・手助けしてくれる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
33) 職員の対応は丁寧・親切である。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
34) 職員は利用者のニーズを理解している。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
35) プライバシーが保護されており安心できる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
36) 図書館案内（ホームページも含む），パンフレット等が十分揃っている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
37) 学生・教員の意見を反映する制度が整っている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
38) 授業を支援するプログラムを用意している。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
39) 必要に応じてガイダンスや利用説明会が受けられる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
40) 学外者・地域社会にもサービスを提供している。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7
41) 障害者に配慮している。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7

次の質問からは，名古屋大学附属図書館が，実際に提供しているサービスについてお尋ねします。

（3）あなたが中央図書館を利用する頻度をお答えください。

a) 中央図書館の利用頻度

○ ほぼ毎日　○ 週に1～2回　○ 月に1～2回　○ 年に数回　○ ほとんど利用しない

（4）あなたが所属する部局の図書館(室)を利用する頻度をお答えください。

a）まず，あなたが所属する部局の図書館（室）を1つ選んでください。

- ○ 文学部・文学研究科図書室
- ○ 教育学部・教育発達科学研究科図書室
- ○ 法学部・法学研究科図書室
- ○ 経済学部・経済学研究科図書室
- ○ 国際経済動態研究センター資料室
- ○ 情報・言語合同図書室
- ○ 理学部・理学研究科物理学図書室
- ○ 理学部・理学研究科化学図書室
- ○ 理学部・理学研究科生命理学図書室
- ○ 医学部分館
- ○ 医学部分館保健学情報資料室
- ○ 工学部・工学研究科図書室
- ○ 大学院生命農学研究科・農学部図書室
- ○ 国際開発研究科情報資料室
- ○ 多元数理科学研究科・数理学科図書室
- ○ 附置研究所・センター図書室

→

b）その図書館（室）の利用頻度

○ ほぼ毎日　○ 週に1～2回　○ 月に1～2回　○ 年に数回　○ ほとんど利用しない

（5）実際に利用してみて，感じたサービスへの評価

各要素ごとに実感で評価してください。受けたサービスの質が高いものが高得点になるよう7段階で評価し，あなたの実感に相当する数字をクリックしてください。わからない場合はN/Aをクリックしてください。

1 施設・設備について	中央図書館のサービスへの評価は 低い 1	2	3	ふつう 4	5	6	高い 7	わからない N/A	所属する部局図書室のサービスへの評価は 低い 1	2	3	ふつう 4	5	6	高い 7	わからない N/A
1) 開館日・開館時間は適切で，利用しやすい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2) 図書館はキャンパスの中の便利な場所にある。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3) 建物・設備が魅力的である。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4) 館内は安全である。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5) 座席数は十分である。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6) グループで研究・学習できるスペースがある。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7) 十分な蔵書スペースがある。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8) 計画的にスペースの利用が考えられている。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9) 照明・空調などの環境が整っている。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10) 複写機が十分に適切に配置されている。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11) OPAC（蔵書検索）やデータベースを検索する情報機器は十分に用意されている。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12) 図書館は快適で，居心地がよい。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13) 図書館では，静かに研究・学習ができる。	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

2 資料・情報について	中央図書館のサービスへの評価は 低い ふつう 高い	わからない	所属する部局図書室のサービスへの評価は 低い ふつう 高い	わからない
14) 専門図書が十分備えられている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
15) 学習用図書が十分備えられている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
16) 参考図書が十分備えられている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
17) 貴重資料が充実している。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
18) 雑誌(電子ジャーナルを含む)は必要なタイトルが揃っている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
19) 電子資料が充実しており，アクセスは快適である。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
20) 必要な図書館資料を自力で見つけられる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
21) 資料の配置・配架は分かりやすい。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
22) 館内の案内・サイン・掲示は分かりやすい。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
23) 図書館のホームページから，必要な情報を得ることができる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
24) 所蔵していない文献を迅速に取り寄せることができる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A

3 職員・サービスについて	中央図書館のサービスへの評価は 低い ふつう 高い	わからない	所属する部局図書室のサービスへの評価は 低い ふつう 高い	わからない
25) 貸出期間・冊数の設定は適切である。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
26) サービスが迅速である。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
27) いつどこでサービスを受けられるかが適切に周知されている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
28) ネットワークを通じてサービスが受けられる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
29) 職員は質問に答えられるだけの知識を持っている。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
30) 目録の記述や，利用の手続き等に間違いがない。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
31) 職員は課題解決の際頼りになる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
32) 職員はすすんで援助・手助けしてくれる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
33) 職員の対応は丁寧・親切である。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
34) 職員は利用者のニーズを理解している。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A
35) プライバシーが保護されており安心できる。	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A	○ 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○ 5 ○ 6 ○ 7	○ N/A

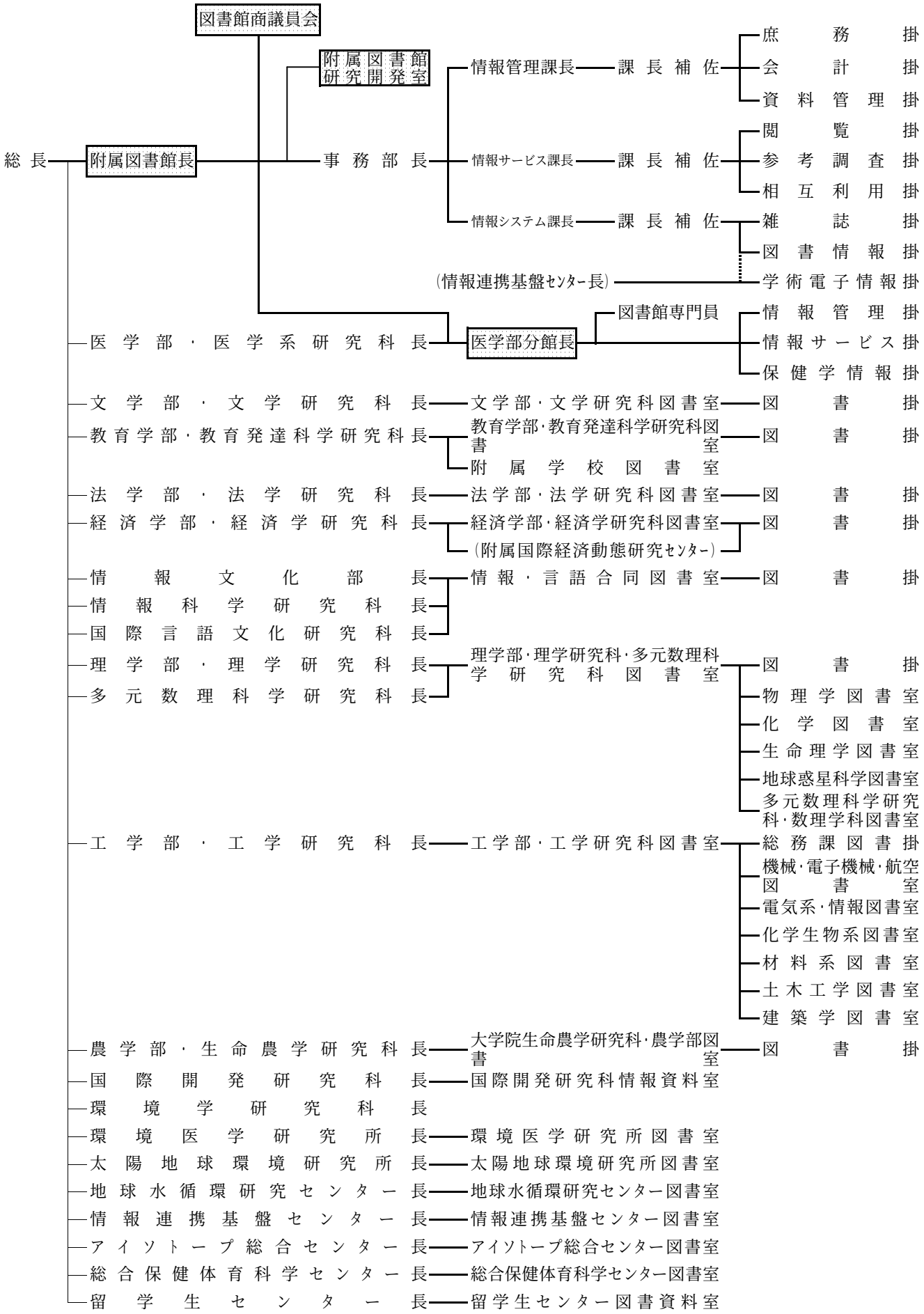
36) 図書館案内(ホームページも含む), パンフレット等が十分揃っている。	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A
37) 学生・教員の意見を反映する制度が整っている。	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A
38) 授業を支援するプログラムを用意している。	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A
39) 必要に応じてガイダンスや利用説明会が受けられる。	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A
40) 学外者・地域社会にもサービスを提供している。	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A
41) 障害者に配慮している。	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A	○ 1	○ 2	○ 3	○ 4	○ 5	○ 6	○ 7	○ N/A

(6)設問に含まれている・いないに関わらず, また肯定的・否定的に関わらず, 附属図書館のサービスについてお気付きの点があれば, 以下にご自由にお書きください。

すべて入力が終わったら → 確認画面へ

2005 ©名古屋大学附属図書館

1　図書館組織機構図（平成１７年４月１日現在）



2　附属図書館の諸委員会一覧（平成17年度）

	委　員　会　名	任務及び審議内容	委員の構成	委員会事務担当
1	商議員会	附属図書館の運営に係る事項審議	館長、分館長、部局選出商議員	情報管理課（庶務掛）
2	図書館システム検討委員会	附属図書館システムに係る事項審議	商議員会で選考された委員	情報管理課（庶務掛）
3	中央図書館蔵書整備委員会	中央図書館の蔵書整備に係る事項	商議員会で選考された委員	情報管理課（資料管理掛）
4	電子図書館推進委員会	電子図書館の推進に係る事項審議	商議員会で選考された委員、その他専門委員	情報システム課
5	附属図書館自己評価実施委員会	自己評価及び外部評価の実施	館長、分館長、商議員代表、事務部代表	情報管理課
6	商議員会連絡会	商議員会の審議事項等の打ち合せ	館長、分館長、三委員会正副委員長	情報管理課（庶務掛）
7	東洋学文献コーナー小委員会	コーナーの整備、資料選定	商議員会で選考された委員	情報サービス課（課長補佐）
8	地方史文献コーナー小委員会	コーナーの整備、資料選定	商議員会で選考された委員	情報サービス課（課長補佐）
9	官報･議会資料･法判例コーナー小委員会	コーナーの整備、資料選定	商議員会で選考された委員	情報サービス課（課長補佐）
10	教職教育研究図書コーナー小委員会	コーナーの整備、資料選定	商議員会で選考された委員	情報サービス課（課長補佐）
11	外国文学セクション小委員会	セクションの整備、運用方針等の検討	商議員会で選考された委員	情報サービス課（課長補佐）
12	蔵書整備委員会文系小委員会	人文社会科学系特別図書の選定	蔵書整備委員長、文系の蔵書整備委員	情報管理課（資料管理掛）
13	蔵書整備委員会自然系雑誌選定委員会	中央図書館自然系外国雑誌の選定	蔵書整備委員長、理系の蔵書整備委員	情報管理課（資料管理掛）
14	和漢古典籍整理専門委員会	和漢古典籍の整理に関する事項	文学研究科の大学教員、館長が必要と認めた者	情報システム課
15	図書館業務会議	図書館業務に係る諸事項の協議	館長、事務部長、課長ほか	情報管理課
16	図書館拡大業務会議	業務に係る諸事項の検討･連絡、学術情報事務会議打合せ	館長、事務部の掛長以上の職員	情報管理課
17	学術情報事務会議	全学の図書館業務に係る審議･連絡	館長、事務部課長、全学図書室掛長及び担当職員	情報管理課
18	業務システム検討委員会	図書館業務用電算機システムに関する事項審議	情報システム課長、中央館の関係掛長	情報システム課
19	目録電子化事業委員会	図書資料の目録電子に係る事項	情報システム課長、中央館及び部局の関係職員	情報システム課
20	附属図書館WWW情報委員会	WWW情報の発信に係る事項	情報サービス課長、中央館各課および部局職員	情報サービス課（参考調査掛）
21	館燈編集委員会	広報誌の企画編集	情報サービス課長、中央館各課および部局職員	情報サービス課（課長補佐）
22	中央図書館学習用図書資料整備WG	継続図書、雑誌、継続参考図書等の整備検討	情報管理課長補佐、中央館関係掛長	情報管理課（資料管理掛）
23	電子ジャーナル連絡会	電子ジャーナル･アクセスサービスの維持、管理	情報システム課及び部局関係職員	情報システム課（雑誌掛）
24	展示会等実行委員会	展示会等の実施計画に係る事項	館長、事務部、関係職員	
25	図書事務専門委員会	事務改善合理化委員会の下部専門委員会	部課長、及び他部局の課長･事務長	情報管理課
26	図書事務改善WG	図書事務の改善合理化を検討する専門委員会の下部WG	情報管理課長、中央館及び部局の関係職員	情報管理課

3　附属図書館の中期目標・中期計画

平成１５年８月
名古屋大学附属図書館

附属図書館のミッションとヴィジョン

ミッション：１．附属図書館は，「名古屋大学学術憲章」に基づく名古屋大学の教育研究活動が必要とする学術情報の利用提供を担う中心機関として機能し，その活動の支援を行う。
２．急速に進む学術情報の電子化に対応する学術情報基盤としてハイブリッド図書館化を推進すると共に，名古屋大学の教育研究成果の発信機関として機能し，教育研究活動の支援を行う。
３．高度に情報化された２１世紀社会と緊密な交流を持ち，文化の継承と社会への貢献の役割を果たすため，広く自由に開かれた学術情報の利用提供を行う。
４．学術情報の国際的な受信・発信を推進すると共に，その利用提供の中心的機関として機能し，広く世界の学術活動に奉仕する。

ヴィジョン：附属図書館は，名古屋大学の今後２０年を見渡す教育研究の長期ヴィジョンを実現するため，学術情報の利用提供と発信を担う強力な支援機関としての機能を果たすことを目指す。

中　期　目　標	中　期　計　画
Ⅰ　中期目標の期間及び教育研究上の基本組織 １　中期目標の期間 平成１６年４月～平成２２年３月 ２　教育研究上の基本組織	
Ⅱ　大学の教育研究等の質の向上に関する目標 １　教育に関する目標 附属図書館は、名古屋大学における学部および大学院での教育目標の達成を支援する。 （１）教育内容等に関する目標 １）学内教育機関との連携 附属図書館と学内教育機関との連携を強化し、学部および大学院教育の充実に寄与する。 （２）教育の実施体制等に関する目標 １）教育支援体制・設備の充実	Ⅰ　大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置 １　教育に関する目標を達成するための措置 （１）教育内容等に関する目標を達成するための措置 １）情報メディア教育センターや博物館・大学史資料室等との連携を強化する。 ２）学内の教育プログラムと連携し学部教育を支援する。 ３）大学院の教育活動を支援するためのサービスを強化する。 （２）教育の実施体制等に関する目標を達成するための措置 １）教育・学習用図書館資料を整備・充実する。

学部および大学院での教育・学習を支援するために、図書および学習環境の整備・充実とサービスの向上を図る。	２）中央図書館の「蔵書整備アドバイザー制度」を充実する。 ３）利用者案内機能の充実を図る。 ４）社会人学生や専門大学院に積極的に対応する。 ５）電子機能を備えた学習設備の充実を図る。 ６）教育・学習の支援の一環として情報リテラシー教育の支援等図書館独自の活動を行う。
２　研究に関する目標 附属図書館は、ハイブリッド図書館システムの構築により、名古屋大学における創造的研究活動への支援と研究成果発信において学内の中心的役割を果たす。	２　研究に関する目標を達成するための措置
（１）研究の水準および研究の成果等に関する目標 １）研究者の人材確保 附属図書館研究開発室は、図書館情報学・書誌学・文献資料学分野で顕著な業績をあげている研究者と連携し、その研究成果を名古屋大学に還元する。	（１）研究の水準および研究の成果等に関する目標を達成するための措置 １）附属図書館研究開発室の組織と人材の充実を図る。 ２）情報連携基盤センター等学内の学術情報関連部局と連携し研究を進める。
２）附属図書館研究開発室の研究目標 附属図書館研究開発室は、ハイブリッド図書館を実現するための技術とシステム化の開発研究を行う。	１）附属図書館研究開発室は学術情報関連部局と連携し、ハイブリッド図書館の開発研究を進める。
（２）研究実施体制等の整備に関する目標 １）研究開発室の研究組織体制の充実 附属図書館研究開発室の専任教官員定員を確保し、兼任教官員等とともに組織基盤の確立を図る。	（２）研究実施体制等の整備に関する目標を達成するための措置 １）専任教官員定員数２名以上を確保する。 ２）全学の部局と協力して、ハイブリッド図書館の開発研究のための兼任教官員配置を整備する。
２）研究支援体制の充実 学術情報資料の体系的かつ特色ある収集と、高度情報化社会に対応するサービス提供の充実により研究支援体制の確立を図る。	１）各部局と連携しつつ、研究用図書館・資料を整備・充実する。 ２）電子ジャーナル等の電子コンテンツを収集・整備し、提供する。 ３）特色あるコレクションを構築し、学内外の文献センターの役割をはたす。 ４）貴重図書の適切な整理・保存を図る。 ５）雑誌の集中管理を促進する。 ６）図書館機能の電子化による図書館サービスの向上を図る。
３）研究成果の発信 附属図書館は、学内研究成果の発信拠点として、国際コミュニティおよび地域社会に貢献する。	１）大学が生産する研究成果の収集に努めるとともに、インターネットを活用し学内外へ発信する。 ２）図書館収集資料を介した教育・研究情報の発信を進める。
４）図書館資料の共有 図書館資料の選択的集中化および適正配置により、全学共同利用を促進する。	１）図書館資料の選択的集中化の基準を設定する。 ２）中央図書館、医学部分館、部局図書室、新営予定の「先端学術情報メディア施設」（仮称）、西館を含め図書館資料の再配置を検討する。
５）貴重書の整理・保存・研究	１）古文書、古典籍の充実・整理を進めるとともに、そのデータベース化について研究開発す

貴重な古文書や古典籍の充実・整理・保存・研究を推進する。	る。
６）学術資料の相互利用サービスの充実 研究支援活動としての外部図書館等の資料の利用を容易にし、研究活動への利用を促進する。	１）国際的協力により電子配信等を国際的に推進し、サービスの高速化を図る。 ２）国内外の広範な資料の検索方法と情報を提供し、相互利用制度を通じた利用を確立する。
３　その他の目標 地域社会と結びついた多面的な図書館運営を通じて、地域の発展に貢献するとともに、附属図書館の更なる充実を図る。 国際的設備・機能を備えた図書館として、学内の国際化を支援し、同時に学術情報の国際的拠点となる。	３　その他の目標を達成するための措置
（１）社会との連携に関する目標 １）地域の文化・教育への貢献 附属図書館が所蔵する知的資産の公開や、多様な図書館サービスの提供および地域との交流により、地域の文化・教育に貢献するとともに地域住民の生涯学習活動を支援する。	（１）社会との連携に関する目標を達成するための措置 １）附属図書館が所蔵する貴重資料の展示会や講演会等の公開サービスを提供する。 ２）地域住民への利用者サービスの向上を図り、生涯学習活動を支援する。 ３）大学の研究成果に関する資料､情報を収集・提供し、研究成果を社会に還元する。 ４）図書館活動への支援、寄付等を地域住民等から得られる制度を検討し実施する。 ５）地域ボランティアを募り、地域住民の社会活動への参加を創出する。 ６）地域の特色ある古文書、資史料を受け入れ、整理、保存、公開を行う。
２）産官学パートナーシップの推進 地域の活性化と発展に貢献できる産官学のパートナーシップを促進する。	１）研究・教育情報発信コラボレーションシステムを構築する。
３）中部地区の基幹図書館としての役割 大学図書館館の協力組織における全国規模での役割を担うとともに、地域図書館との連携を図り、中部・東海地区の基幹的図書館としての役割を果たす。	１）国立大学図書館協議会、国公私立大学図書館協力委員会等において主導的な役割を果たす。 ２）中部地区・東海地区における館種を越えた連携を図るとともに、基幹的図書館として地域に貢献する。
（２）国際交流に関する目標 １）国際的設備・機能の充実 国際化に対応できる図書館設備・機能を充実させる。	（２）国際交流に関する目標を達成するための措置 １）国際化に対応した資料、各種ソフトウェアや情報機器類を整備する。 ２）国海外のテレビ番組、新聞等の提供サービスを拡大整備する。
２）国際連携 附属図書館は、国際的な連携を通して学術情報の広範な流通を図る。	１）AC21 参加海外大学図書館等との交流を促進し、国際的な学術情報流通に寄与する。 ２）国内の大学図書館関係団体と連携・協力し国際学術コミュニケーションに関わる各種事業に積極的に参画する。
３）留学生サービス拠点としての役割 附属図書館は、留学生および学内における国際的コミュニティへのサービス拠点としての役割を果たす。	１）附属中央図書館内に国際交流に対応できる場を設ける。 ２）留学生用図書館資料を充実する。

（３）学術情報基盤に関する目標 １）学術情報基盤の整備 附属図書館は学術情報流通の拠点として、情報関連部局と連携し、全学的な基盤整備を推進する。 ２）学術情報及び知的資産の集積 附属図書館は、学内関連部局との連携により、学術情報及び知的資産の集積、提供を図る。 ３）学術情報発信体制の整備 全学的な調整の下に学術情報及び知的資産を学外に発信する体制を整備する。	（３）学術情報基盤に関する目標を達成するための措置 １）学内における学術情報の創造・流通・発信を円滑かつ効率的に行うための調整・管理組織を整備する。 ２）附属図書館の業務電算機システムを更新し機能強化を図る。 １）ハイブリッド図書館化を推進し、利用者サービスの高度化を図る。 ２）電子ジャーナル等の電子コンテンツを収集・整備する。 １）名古屋大学が生産する研究成果を電子化し、学内外へ発信する。 ２）貴重図書など所蔵資料の電子化を推進する。 ３）所蔵資料の目録情報の電子化を推進する。
Ⅲ　業務運営の改善及び効率化に関する目標 附属図書館は、高度化されたサービスと効率的運営が遂行される組織・体制となる。 １　運営体制の改善に関する目標 １）附属図書館の運営体制と組織の見直し・再編 附属図書館は、商議員会で承認された「良く連絡調整された分散主義」から「集中化・一元化」への転換という基本方針にしたがって中央図書館、医学部分館及び部局図書室との連携を図るとと供に、管理運営体制の見直しと整備を進め、効果的な組織運営を目指して全学の附属図書館の組織再編を進める。 ２）戦略的な企画・評価の実施 企画・立案機能を強化し、先進的な図書館サービスを実現する。 ２　人事の適正化に関する目標 １）職員の確保と育成 専門職としての知識と技能を備えた図書館職員の確保と育成を図る。	Ⅱ　業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置 １　運営体制の改善に関する目標を達成するための措置 １）「附属図書館将来構想」に基づき、中央図書館、医学部分館及び部局図書室の充実を図るとともに適切な連携・統合を図り、附属図書館全体の管理運営体制の整備を図る。 ２）附属図書館の一体的運営を図り、組織の一元化と適切な職員配置を進める。 ３）図書館資料の選択的集中を図ると同時に中央図書館・医学部分館・部局図書室全体を見渡した適切な図書館資料配置を図る。 ４）中央図書館、医学部分館と連携した特徴ある部局図書室ないしはサテライト図書室のあり方を検討する。 ５）図書館業務システムの改善を図る。 ６）電子情報の合理的集中管理を図る。 ７）迅速、適格な意思決定を全学的な観点から行えるよう附属図書館長の職務を見直す。 １）企画・立案のための体制の強化と人材の養成を図る。 ２）第三者評価、利用者満足度調査等の評価活動を積極的に実施し、その結果を分析し、図書館サービスの向上を図る。 ３）戦略的な広報活動を多様なメディアを用いて行う。 ２　人事の適正化に関する目標を達成するための措置 １）図書館職員の適正配置と研修制度の充実を図る。 ２）他大学等との人事交流を促進し、多様な人材の確保と育成を図る。 ３）図書館職員の処遇におけるインセンティブの導入を図る。 ３　事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

3　事務等の効率化・合理化に関する目標 1）附属図書館の組織の再編 全学の状況を踏まえた附属図書館の組織再編を進める。	1）「附属図書館将来構想」に基づき、附属図書館組織の一元化と適切な職員配置を進める。 2）図書館業務の合理化・効率化を図る。
Ⅳ　財務内容の改善に関する目標 1　外部研究資金その他の自己収入の増加に関する目標 1）外部資金の積極的導入 科学研究費補助金、奨学寄付金等を積極的に導入し、資料収集等の資金の確保を図る。 2　経費の抑制に関する目標 1）効果的な資金運用 限られた資金を効率的に運用できるシステムを確立する。 3　資産の運用管理の改善に関する目標 基幹大学の図書館に相応しい十分な資料費・運営費の確保と効率的な運用を図る。 1）知的資産の有効な運用 研究および教育を通して得られた学内の知的資産を適切に管理運用する。	Ⅲ　財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置 1　外部研究資金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置 1）科学研究費補助金による研究の申請を積極的に行い、研究資金調達を行う。 2）奨学寄付金を積極的に募り資料購入等の資金を確保する。 2　経費の抑制に関する目標を達成するための措置 1）図書館予算の安定的な確保のための方策を検討し、適正に管理運用する。 2）図書館予算の適正管理・運用・執行のシステムを確立する。 3）全学共通的図書館資料購入費の効率的運用を図る。 4）定型的業務へのアウトソーシング導入を進め、経費等のスリム化や業務の効率化を図る。 3　資産の運用管理の改善に関する目標を達成するための措置 1）附属図書館は関係部局等とも連携し、学内の知的資産の管理および有効な運用を図る。
Ⅴ　自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標 1　評価の充実に関する目標 1）評価活動の実施と公開 図書館サービスと業務の点検・評価を行い、結果を公表するとともに、それに基づいた附属図書館の更なる充実を図る。 2　情報公開等の推進に関する目標 1）社会への説明責任 図書館の全般に関する適切な情報公開を行い、社会への説明責任を果たす。	Ⅳ　自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するための措置 1　評価の充実に関する目標を達成するための措置 1）自己点検、第三者評価等を適宜実施する。 2　情報公開等の推進に関する目標を達成するための措置 1）自己点検、第三者評価等の実施結果を分かりやすく公表する。 2）インターネットによる情報公開を促進するとともに、学外から容易にアクセス可能なシステムを構築し提供する。
Ⅵ　その他業務運営に関する重要目標 附属図書館は、高度に情報化された先進型図書館システムを構築し、国際水準の総合大学としての名古屋大学における情報基盤としての役割を果たす。また、高度情報化社会に対応した、ハイブリッド図書館としての機能と設備を備えた図書館施設の	Ⅴ　その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置

整備を進める。 １　施設設備の整備・活用等に関する目標 １）附属図書館の施設整備 　中央図書館の整備と「先端学術情報メディア施設」（仮称）、西館の新営、およびそれらと医学部分館、部局図書室の有機的結びつきを深め、学習・研究環境の整備・充実を図る。 ２）既存施設の有効活用 　既存の図書館施設を整備し、保存機能の強化、利用環境の改善を図る。	１　施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置 １）３部局複合施設「先端学術情報メディア施設」（仮称）および附属図書館「西館」新営の実現を図る。 ２）中央図書館、医学部分館および部局図書室の整備を行う。 １）保存図書館を整備する。 ２）古川資料館を整備し、保存機能を強化する。 ３）「先端学術情報メディア施設」（仮称）および「西館」新営に合わせ中央図書館のインテリジェント化を図るとともに、利用環境を整備する。 ４）図書館利用環境の整備（開架書庫の整備、閲覧座席数の増加、情報機器の充実）を図る。 ５）読書・学習・研究のために快適な雰囲気を提供するための環境整備を行う。
２　安全管理に関する目標 １）図書館利用者、教職員の安全確保 　図書館利用者､教職員等の災害や事故からの安全を確保する。	２　安全管理に関する目標を達成するための措置 １）大規模地震、台風、水害、や火災や事故などから利用者の安全を守る施設を構築する。 ２）非常時対応マニュアル等を整備し、避難訓練等を行って緊急時への対応を準備する。

４　名古屋大学附属図書館 関連重要文書一覧（平成１７年４月１日）

No.	文　　書　　名		U　　R　　L
1	附属図書館将来構想（第１次案）	平成10年度	http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/iinkai/siryo/110323.html
2	附属図書館将来構想（第２次案）	平成11年度	http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/iinkai/siryo/20000306.html
3	附属図書館中期目標・中期計画	2004-2009	http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/tyuki_mokuhyo16-21.pdf
4	附属図書館年度計画	平成16年度	http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/nendo_keikaku16.pdf
5	附属図書館自己点検評価報告書	平成13年3月	http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/iinkai/siryo/jiko.pdf
6	附属図書館外部評価説明資料	平成13年12月7日	http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/director/inside/011207.pdf
7	附属図書館外部評価報告書	平成14年2月	http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/gaibu.pdf
8	附属図書館概要	2004-2005	http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/gaiyo/gaiyo.pdf
9	大学図書館における評価指標報告書	Version 0	http://www.library.tohoku.ac.jp/houjin/indicator.html （「http://www.library.tohoku.ac.jp/houjin/」で，ユーザID「library」，パスワード「agency01」を入力→「図書館評価指標WGのページ」へ）
10	科学技術・学術審議会　研究計画・評価分科会　情報科学技術委員会　デジタル研究情報基盤ワーキング・グループ（審議のまとめ）	学術情報の流通基盤の充実について	http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm
11	学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善について	平成15年3月17日 文部科学省研究振興局情報課	http://www.soc.nii.ac.jp/anul/j/documents/mext/kaizen.pdf

平成 17 年度名古屋大学附属図書館外部評価報告書
自 己 点 検 評 価 報 告 書（平成 12 年度～16 年度）

平成 18 年 3 月 17 日発行

編集・発行　名古屋大学附属図書館
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
Tel ： 052-789-3667　　Fax ： 052-789-3693
ホームページ URL: http://www.nul.nagoya-u.ac.jp